朗と讀誦させ、諳誦するまでの愛を起させたいやうな氣もする。

◇尚、「奥の細道評釋」（大正拾年七月初版、大同館書店發行）の著者小林一郎氏は、次のやうに言つてゐる。

△陸奥守の秀衡は、一諾を千金よりも重んじて義經を隱まひ、頼朝の勢力に抗して少しも恐るゝ所はなかつた。翁の性質として秀衡及びその三男忠衡の義勇の行ひに感激し、二十餘里を遠しともせずして、わざ〳〵その遺趾を弔つたのは、さもあるべきことである。

△平生杜詩を愛誦して止まなかつた翁が、藤原氏三代榮華の趾を弔して、山河の勝は昔のまゝでありながら、城は空しき廢墟となり、勇士の功名も昔の夢となつたのを見て、「彼の國破れて」の名句を思ひ寄せて、この一段の妙文字を成し得たのは、その調はれあることである。字句の上に何等の修飾も加へてはないが、精神氣力充ち滿ちて、幾度誦するも飽くことがない。「夏草や」の一句また感慨無量、翁の集中屈指の佳句であらう。曾良のは、師の句に比べて著しく見劣りがするやうである。

◇編纂の用意の條に述べたやうに、俳文はすべて、淡雅、勁健、輕妙、簡潔等の諸要素を具へてゐるが、この文は、わけもそれらの要素を多分に含んでゐる。今そのおもな部分を左に述べよう。

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。

隱喩を用ひたところ、文にそれだけの強さがあらはれてゐる。

余もいづれの年よりか……杉風が別墅に移る。

この長いものがわづか二文になつて、緊迫した文章で、全くポーズをおく餘裕のないほど張りきつてゐる。心なき批評家ならば、破格だとか、文法上の誤謬があるとかいふであらうが、それはこの文にあらはれた芭蕉の精神に眼を閉ぢる人である。

十二日平泉と志し、……終に路踏みたがへて石卷といふ港に出づ。

このところ、普通の紀行文ならば、これの數倍にも詳細にうつすべきところを、わづか數語で敍べてゐる。

「人跡稀に、雉兎芻蕘の往きかふ路、そこともわかず。」といふが如き、その簡明勁健の筆致、見逃してはならぬ。

「黄金花咲く」とよみて奉りたる金華山……竈の煙立續きたり。

右の文の如きも、簡潔で雄健、しかも調子輕妙、流るゝが如くである。「黄金花咲く」の引用法も、省略法によつてくだ〳〵しくない。

やう〳〵貧しき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。

超俗と徹底との內容が、眞に形式に合して、千金の響きを傳へてゐる。「知らぬ道を迷ひゆく」といふより「知らぬ道迷ひゆく」といふ方が文をひきしまらせ、筆力の强さを示す。常に作句に苦心してやまなかつた芭蕉翁は、助辭の一つをも決して忽せにはしなかつた。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。

秀衡が墟は田野になりて、金雞山のみ形をのこす。

右は過去と現在、人事と自然との對照。隨つて殆ど對句法に近い。「一炊の夢」の如き句は、省略的引用法。邯鄲の夢、黄粱一炊の夢の故事を說く必要がある。

岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて、苔滑らかに……。

多くの道具を極めて見事に排列し、斐然として章をなしてゐる筆力の凡ならざるを看取せねばならぬ。

6　設　問

1　この文で、芭蕉は幾たび涙を流してゐるか。その涙は各、どういふ風に異なつた涙であるか。

2　この文にあらはれた芭蕉の人格について語れ。

3　また、俳諧的趣味では如何なる方面が最もよく表れてゐるか。

4　旅の心細さ、或は旅愁といふことの窺はれる語句をあげよ。

5　特に巧な言ひ方と思はれる箇處はどこか。（引用語は除く）

6　「炙すうる」の「すうる」を文語として活用せしめて見よ。

7　次の語句の意義を問ふ。

イ、光をさまれるものから。

ロ、三代の榮耀一炊の夢。

ハ、閑かさや岩にしみ入る蟬の聲。

7 釋義

出立

【月日は百代の過客にして】 月日は永久に休まず旅をつゞけてゐる旅人のやうなもので。

李白の春夜宴二桃李園一序に「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。而浮世若レ夢、爲レ歡幾何。古人秉レ燭夜遊、良有レ以也。」

【行きかふ年もまた旅人なり】 明けては暮れ、明けては暮れつゝ過ぎゆく年月も、またあけくれ歩みをつゞけてゐる旅人のやうなものである。

【舟の上に生涯をうかべ】 一生を舟の上で送るもの、即ち船夫などの生涯をいふ。

【馬の口とらへて老を迎ふるもの】 馬方などして一生を送る者をいふ。

【古人も多く旅に死せるあり】 このいはゆる古人は、殊に旅を好んだ旅行詩人、即ち日本でいへば西行・宗祇、支那では李白・杜甫などをいふのであらう。

【片雲の風にさそはれて】 片雲(ちぎれ雲)が風にさそはれて西に東に流れたゞようてゐるのを見て、おのづから、さうした定めない旅をすることに興味を感ずるに至つたことをいふ。

【漂泊の思】 ヘウハクのオモヒ。あちこち、あてどもなくさまよひ歩きたいものだといふのぞみ。

【海濱にさすらへ】 うみばたをさまよひあるき。

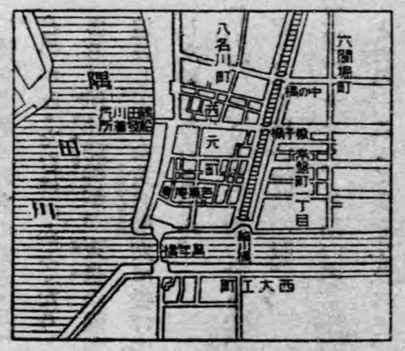
芭蕉は、前年二月伊賀の上野に歸郷し、三月吉野に遊び、高野山・和歌の浦に至り、四月須磨・明石に遊んだ。これまでの紀行を「吉野紀行」といふ。その後大阪・大津・岐阜にいつた。七月鳴海に遊び、名古屋にとゞまつた。八月名古屋出發、更科・姨捨山の月を賞て、善光寺に詣で、九月江戸に歸つた。この信州行の紀を「更科紀行」といふ。右の如く芭蕉は、七月以前には諸方の海濱に遊んでゐる。

「さすらふ」とは、よるべなくさまよふこと。さまよひあるくこと。流浪。漂泊。遊離。

源平盛衰記卷七、成親卿流罪の條に「知らぬ國、ならはぬ旅にさすらひつゝ。」

【去年の秋】 コゾのアキ。前年(元祿元年)の秋九月。この月、芭蕉は信州の旅から歸庵した。

【江上の破屋】 カウジャウのハヲク。大川のほとりの粗末な庵。こゝは隅田川のほとりなる江戸深川の芭蕉庵をさす。芭蕉が門人杉山杉風の別宅をゆづりうけたもの。今の東京市深川區萬年橋の東南、即ち西元町の西部あたりにあつたといふ。



芭蕉の甲子吟行に

「貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程。」

江戸名所圖會卷十八に「同じ橋(萬年橋)の北詰、松平遠州侯の庭中に在りて、古池の形今猶存せりといふ。」とある。

【蜘蛛の古巣を拂ひて】 久しぶりにもとの家なる芭蕉庵に歸つたこと。巧みな筆である。

【やゝ】 やう〳〵。

【春立てる霞の空に】 春になつて、霞の立つ頃に。

「立てる」は「春立てる」(春になつて)を「立てる霞」にかけたのである。

【白河の關】 昔福島縣西白河郡古關村大字旗宿の邊にあつた關。白河町の東南約三里。允恭天皇の頃陸奥の蝦夷に對する防禦として菊多剗(キクタノセキ)と共に設けられた軍事上の剗であつたが、承和二年(一四九五)に至り、奸僞の徒の陸奥國に逃入するを防ぎ、又俘囚の出入を取締らうとして通行人をも檢判勘過することとなつた。かくて、關として相當の効果を收めたが、律令政治の衰滅と共にその實を失ふに至つて、終に名のみを止むることとなつた。隨つて芭蕉の時代には全く荒廢してゐた。

【そゞろ神のものにつきて】 そゞろ神が、わが身にとつついて。

笠や杖などを見ても、そゞろ神がのりうつつてゐるやうに思はれるのである。

「そゞろ神」とは、何となく人の心を誘惑する神。

「ものにつく」とは、もののけに憑(ヨ)りつかれること。

「もののけ」とは、死靈・生靈などのたゝること。又そのたゝり。

【道祖神】　ダウソジン。路上の惡魔をはらうて旅する人を守護する神。みちのかみ・さへのかみ・くなどの神・ふなどのかみ・たむけのかみ・だうろくじんなど多くの異名がある。伊弉諾神が、黄泉の國から逃げかへりますとき、追及して來た黄泉醜女に投げつけたまうた杖から生れました神であるといふ。

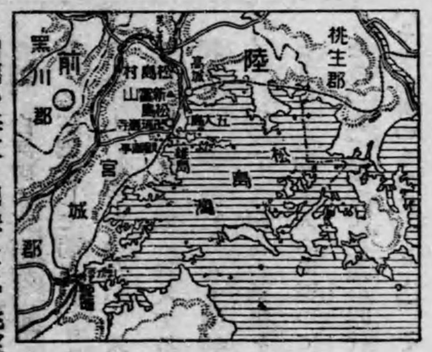
【股引】　モヽヒキ。兩の股まで、膚につけて、足を通して穿(ハ)く狹い筒狀の服。

【三里】　サンリ。灸點の名。膝頭の下の外側のやゝ凹んだところ。こゝに灸をすゑると、足が輕くなつて、歩行がらくになるといふ。

甲陽軍鑑卷十一、上に「すねの三里に灸をおろし申し候。」

【灸】　キウ。漢法の手術の一。もぐさを肌に點し、これに火をつけて灼(ヤ)き、その熱氣によつて病氣を治療すること。きうてん。やいと。

【松島】　宮城縣松島灣内に散在する大小百有餘の島々及び灣岸一帶の景勝地。古來日本三景の一としてその景致を誇つてゐる。島々の周緣はすべて斷崖で、水面に接するところに深い凹入があり、その甚だしいものは洞門石柱の奇觀を呈する。岩上には青松が茂り、岩石の色が碧瑠璃の海波と相映じて、眺望が限りなく廣い。中にも全景を一眸のうちに收め得る好位置として、富山・扇谷山・多門山・大鷹森及び新富山の五箇所が數へられる。これを松島の五大觀と稱する。



【心にかゝりて】　氣になつて。芭蕉は心の中で既に松島の月景色を想像してゐるのである。

【住める方】　今まで住みつゞけたところ、即ち芭蕉庵。

【杉風】　サンプウ。杉山氏。名は元雅。通稱鯉屋市兵衛。別號採茶庵・五雲亭・茶舍・蓑翁・蓑杖・鶴歩・一元等。江戸の魚問屋に生れた。生來聾であるため、芭蕉に就いて俳道を學び、蕉門十哲の一人となつて、芭蕉から東三十三箇國の俳諧奉行と呼ばれた。深川の芭蕉庵ははじめその別莊であつた。享保十七年(一三九二)歿。年八十二。一説に七十八、又八十三であつたともいふ。

【別墅】　ベッシ。しもやしき。別莊。別宅。こゝは杉風の別莊なる採茶庵をいふ。

晉書の謝安傳に「與三幼度一圍レ碁、賭二別墅一。」

【草の戸も住みかはる代ぞひなの家】　この句にはいろ〳〵の説があるが、左に荻原井泉水の句評を紹介する。これが妥當の見方であらうと思ふから。

「……さてそこに親しくはいつた人は、娘をもつてゐたと見え、時も丁度三月の節供に近いことなので、雛段をこしらへて、それが戸から覗くともなく見えたのであらう。それほど庵は狹くて、表も裏もないやうな草の庵なのである。かうした草の庵でも暫くは自分の栖かと思つてゐたのに、結局はそれも人に讓るやうな事になつた。人生は本當に旅だといふ氣持はこゝにもある。而して移つて來た人は自分のやうな世を捨てた侘人かといふに、さうではなくて、雛などを飾つてゐる。冬枯の野に春が來たやうな、さうした思ひがけぬ變化もやはり自然なのだといふ氣持もある。私はこの句の出來た動機をこゝに見たい。「住みかはる代ぞ」といふ强い言葉に人生に對する氣概がにじみ出てをり、その住みかはつたものは何かと思ふと「雛の家」だといふので、その明るく、輕く轉ぜられたる調子に、「自然に對する微笑がにじみ出てゐる。云々」

【表八句】　オモテハック。俳諧(連句)を書く懷紙の第一面

を表といふ。この第一面には、五十句以上の場合には、八句を記すのが例である。こゝは「草の戸を」の句をこの紀行の第一に吟じたので、あたかも連句の表八句の第一にあたるものであるから、かういつたのである。

【彌生も末の七日】　ヤヨヒもスエのナヌカ。東山天皇の元祿二年(一三四九)三月二十七日。

「彌生」は「イヤオヒ」の約。陰曆三月の稱。草木のいよいよ生ひ立つ月の義。

神武紀に「乙卯年春三月（ヤヨヒ）」。

古今集、春上に「やよひにうるふ月ありける年」。

「末」は下旬。中旬を「中」といふに對する語。

【曙の空】　アケボノのソラ。夜あけがたの空。

「曙」は、夜がほの〳〵と明けようとする時。しら〳〵あけ。しの〻め。

枕草子卷一に「春はあけぼの、やう〳〵白くなりゆく。」

【朧々として】　ロウ〳〵として。おぼろにかすんで。うすぼんやりとかすんで。ほんのりとして。

「朧々」は、又オボロ〳〵ともよむ。意味は同じ。

吳融の詩に「非レ明非レ暗朧々月。」

源平盛衰記卷二十八、仙童琵琶の條に「暮春三の夜を相待つ處に、朧々として片雲無く。」

言繼集に「見渡せばおぼろ〳〵とたちくるも消ゆるもわかぬ薄霧のそら」

【月は有明にて】　月はなほ夜ふけの空にのこつてゐて。

「有明」(アリアケ)とは、夜が明けても、なほ空にのこつてゐる月。陰曆十六日以後の月。殘月。

萬葉集卷十に「白露を玉になしたるなが月の有明のつくよ見れどあかぬかも」

【光をさまれるものから】　月の光は消えてはゐるが。

「をさまる」とは、消えてなくなること。

源氏物語の柏木の卷に「月は有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えて。」

「ものから」は、「ものながら」「ではあるけれども」の意。

【幽かに見えて】　うつすらと見えて。

「幽か」は、しかとみとめ難きほどなること。ほのか。ほ

んのり。

源氏物語の明石の卷に「鹽やく烟かすかにたなびきて」

【上野】　ウヘノ。今の東京市下谷區上野公園の地。丘陵をなし、不忍池を控へ、寛永寺の所在として、又花の名所として古より知られてゐた。芭蕉の句に、

花の雲鐘は上野か淺草か

【谷中】　ヤナカ。上野の岡から西北につゞいてゐる地。今の下谷區谷中町あたり。こゝにも感應寺(今日の天王寺)があつて、花木が多かつた。

【花の梢】　櫻の花の梢。單に花といへば櫻をさす。

【又いつかはと心細し】「またいつかは見ることを得ん」と心細し。」の略。

【睦まじきかぎり】　親しい間柄の人々は悉く。

【宵よりつどひて】　前夜よりあつまつて。

【千住】センヂュ。今の東京市足立區千住町。荒川（隅田川の上流）の岸にあつて、江戸の東北郊に當る。舊幕時代は奥州街道の宿場として繁榮してゐた。今もなほ蔬菜その他の市場として賑はつてゐる。

芭蕉の草庵は、隅田川のほとりにあつたから、舟で隅田川を千住まで溯つたのである。草庵から千住まで、舟行で約二里半。

【前途三千里の思】　ゆく旅の空の遼遠なことを思つて、心に不安を感ずることをいふ。

「前途」はゆくさき。ゆくて。前程。

大江朝綱の詩に「前途程遠、馳思於雁山之暮雲」

「三千里」とは、前途の極めて遠いことを數字であらはしたもの。

【幻の巷に】　マボロシのチマタに。幻のやうにはかない人生のわかれ路に。

幻は、眼前にあるやうに見えて、忽ち消えうせるもの。

【行く春や鳥啼き魚の目は涙】　荻原井泉水の評釋を左に掲げよう。

留別の句である。――「鳥」が誰、「魚」が誰と、はつきり喩へたのでもあるまいが、「鳥」は三千里の外まで飛んで行かうとする自分、「魚」はそれを送つてゐる門人に比したのであらう。「鳥啼き」であつて「鳥泣き」とは書いて

ないけれども、下に涙とあるから、啼きは泣きであることはわかる。別れを惜しんで、鳥も泣き、魚も涙ぐむ。留別の句としては、その感情が餘りにも感傷的に出すぎてゐる爲、そこに一種の誇張味さへついて來る。

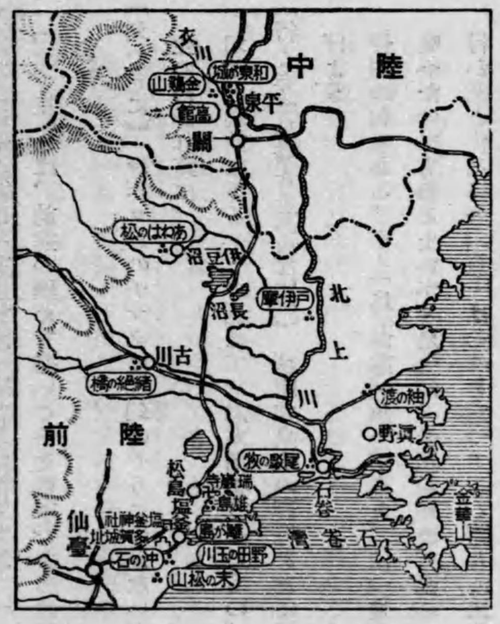
【矢立】　ヤタテ。墨壺に筆を入れる筒のついたもの。帶にさしこみなどして携帶用とする。

「矢立のはじめ」は、矢立をとり出して書いたその筆はじめ、こゝでは俳句のよみはじめの義。

【行く道なほ進まず】　名殘が惜しまれて、あとをふりかへりふりかへりあるくので、道が一向にはかどらないのである。簡單な句の中に、無限の味がある。

平泉

【平泉】　ヒライヅミ。岩手縣西磐井郡平泉村。北上川の右岸に位し、一關町を距る北方七粁二。鐵道東北線の一驛。今は一寒村に過ぎないが、その昔藤原清衡以下三代の榮華を誇つたところで、その盛時は京都に擬し、結構壯麗を極めたといふ。奥御館・伽藍御所・高館・柳館等の廢墟があり、金雞山麓には中尊寺（金堂・經藏）及び毛越寺の遺趾がある。



【十二日】　東山天皇の元祿二年五月十二日。

【姉歯の松】　アネハのマツ。陸前國（宮城縣）栗原郡澤邊村大字姉歯にあつた松。名高い歌枕。

伊勢物語に「栗原や姉歯の松の人ならば都のつとにいざといはましを」

觀跡聞考志には「古松乃千四十餘年前枯槁。其松五葉。後人緣而所レ植二新松一也。」とあり、十符の菅薦には

は「尋ねたれども今はなし。」とある。

【緒絶の橋】　ヲダエのハシ。昔陸前國（宮城縣）志田郡古川町にあつた小板橋。今も町の中にこの橋の名が殘つてゐるといふ。

左京大夫道雅の歌に「みちのくのをだえの橋やこれならむふみみまどはす」

大藪虎亮の「奥の細道新研究」に

あねはの松――これは矢のをだえの橋と共に、奥羽街道にあつて、松島から石卷にいく道にはない。即ち松島から平泉と志すならば、道を西北に取つて奥羽街道へ出て、平泉へ進めば、間もなく古川宿に緒絶の橋があり、更に進めば、澤邊宿に姉歯の松があるのである。「平泉と志し、あねはの松、をだえの橋など聞き傳へて」と書いてゐるから、芭蕉はやはり右の名所をこの方向だと知つてゐたのだが、道をまちがへて石卷へ出たのである。又「聞き傳へて」とあるから、芭蕉は實際その地を踏んだのではない。蕉門桃隣が元祿九年にものした奥羽旅行記「陸奥千鳥」には「行けば澤邊村、十五町南、川向ふにあねはの松あり、即ちこの邊栗原といふ。」といひ、又「緒絶橋、この古川の町中にあり。」といつてゐる。以て元祿時代に於ける右二名所の位置を知るべきである。

と說明してゐる。

【人跡稀に】　人のあしあとの極めて少いこと。通行人の極めて稀なことにいふ。

「人跡」は、人のあしあと。人の往來。ひとあし。

史記の秦始皇本紀に「人跡所レ至、無二不レ臣者。」

源平盛衰記、木曾謀叛の條に「長山遙に連なつて、禽獸猶希に、大河漲り下つて、人跡又幽なり。」

【雉兎芻蕘】　チトスウゼウ。「雉兎」は、雉兎を捕へるもの、即ち獵師。「芻蕘」は、牛馬の飼葉や薪。轉じてそれを採るもの、即ち牧夫・樵夫・草刈男の類。

孟子の梁惠王上に「文王之囿、方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉。」趙註に「芻蕘者取二芻薪一之賤也。雉兎獮人之取二雉兎一者。」

詩經の大雅「詢二于芻蕘一」の疏に「芻飼二牛馬一之草。」

說文に「蕘草薪也。」

【そこともわかず】　そこがどこともわからぬ義。はつきりとわからぬことにいふ。

【石卷】　イシノマキ。今の宮城縣（陸前國）石卷市。北上川の河口に位し、南に石卷港を擁してゐる。仙臺市の東

十三里。鐵道東北本線の小牛田（コゴタ）驛から石卷線を通じ、仙臺市からは宮城電鐵の便がある。東奥沿岸海運交通の要衝に當り、商業や水産業が盛である。古昔は伊寺水門（イシノミナト）と呼ばれ、仙臺領唯一の門港で、その繁盛は時に仙臺を壓するほどであつた。日和山公園長濱海岸をはじめとして、名所古蹟に富んでゐる。現時人口約三萬一千。

【黃金花咲く】　萬葉集卷十八、「賀二陸奥國出レ金詔書一歌一首并短歌三首」（大伴家持作）の最後の歌、「須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久。」

聖武天皇の天平二十一年、始めて陸奥より黃金を獻じた。天皇は大いに悅ばせたまひ、元を改めて天平感寶元年とし、その金を以て東大寺盧舍那佛裝飾の料に充てさせられた。

その時の宣命に「三寶乃奴止奉流天皇羅命盧舍那像大前仁奉賜都止奏久此大倭國者天地開闢以來爾黃金波人國獻用禮言波有禮毛斯地者無物止念都流仁聞看國中能東方陸奥國主從五位上百濟王敬福伊部內少田郡仁黃金在奏氏獻此禮聞食驚佐云々」とある。

一首の意は「わが天皇さまの大御代がいよ〳〵榮えさせたまふしるしに、あづまのみちのくやまに、黃金の花が咲いた。さて〳〵有りがたいことかな。」

【金華山】　キンクヮザン。陸中國（宮城縣）牡鹿半島の南東端近くにある島。石卷港から海路三三粁。東西四粁、南北五粁。全島花崗岩より成り、草木繁茂し、約四百頭の鹿がゐる。島の西部に縣社黃金山（コガネヤマ）神社がある。島の中央部に峙つ金華山は海拔四四五米で、頂に大海祇（オホワタツミ）神社の祠がある。太平洋を望んで眺望雄大、奇岩怪石の勝に富む。島の南東端鮑荒崎に燈臺がある。

志賀重昂の日本風景論に、本島について左のやうにのべてある。

西部海岸の一小片は變成的水成岩より成るも、他は悉く花崗岩より成る。古歌に「陸奥山に黃金花咲く」と詠み、島名を金華と喚び、島內に金山彥命・金山姬命を祀るなど、この島は黃金を產出するが如きも、實は然らず。唯花崗岩中に雲母の閃々たるを看て黃金を誤認せしものか。云々

吉田東伍の地名辭書に「金華山を黃金花咲く山といふに附會したるは、中世僧徒がこの島を開きて辯財天を祭りし以來の事か。云々。」

【廻船】　クヮイセン。「回船」とも書く。旅客や貨物を運送するに用ひる船。廻漕船。

【入江】　イリエ。海又は湖の岸へ入りこんだ部分。こゝは入海。灣。

古事記卷下に「くさか江の入江のはちす花ばちすみのさかり人ともしきろかも」

【人家地をあらそひて】　人家の櫛比してゐるさまをいふ。

【貧しき小家】　マドしきコヤ。たいそうみすぼらしいあばらや。

【袖の渡】　ソデのワタリ。陸前國（宮城縣）桃生郡橋浦村にあつたといふ船わたし。

新後拾遺集、戀、題不知、相模、の歌に「陸奥の袖の渡りの涙川心のうちにながれてぞすむ」

名跡志に「橋浦袖渡也。河畔有レ山、曰二衣袖嶺一。其山下水流稱二之涙川一。一說牡鹿郡住吉渡口也。今考レ之、牡鹿地、無二衣袖嶺一。想夫此地殆古名蹤歟。」

されど、本文では牡鹿郡の方があたつてゐる。尙次の「尾駮の牧」の條に註した「陸奥千鳥」の文を參看せよ。源重之家集に「阿武隈に霧たてといひし唐衣袖の渡に夜もふけにけり。」とあるによれば、地理が大いに異なつてゐる。

【尾駮の牧】　ヲブチのマキ。陸中國（岩手縣）南部領に尾駮といふ地名があるが、地理が合はぬ。石卷の東一里に牧山といふ地があつて、眞野に近いから、その邊に小藤の牧といふがあつたかといふ。

後撰集に「陸奥のをぶちの駒も野かふには荒れこそまされなつくものかは」

安永年中の紀行なる「陸奥千鳥」といふ書には「牧山の道、船渡し、このあたりを袖の渡、小ぶちのみ牧。眞野の萱原は牧山のうらにあり、石の卷より一里行きて牧山、云々」とある。

【眞野の萱原】　宮城縣（陸前國）牡鹿郡稻井村大字眞野の地。石卷の東北約六里にある。

玉葉集、夏、草野秋近、前中納言定家の歌に「露分けむ秋のあさけは遠からで都やいくか眞野の萱原」

【長沼】　陸前國（宮城縣）登米郡新田村の東南にあり、又新田沼ともいふ。東西一里十二町、南北七町許、佐沼町の西で、一丘を隔ててゐる。

大藪虎亮の「奥の細道の新研究」に

長沼――沼の名。これは石巻登米（戸伊摩）間にはない。登米から平泉へと志して今の佐沼町（登米から西へ三里半）を通過して進めば、左方に細長い沼が見える。これが長沼で、面積は四九七町歩ある。さて石巻から登米に向ふ途中には、廣淵沼（六六一町歩）を始として大小の沼澤が多いから、「心細き長沼に沿うて」と漠然と書いたものであらうとも思はれるが、なほ長沼は固有名詞でもある。登米を戸伊摩と書いたのも文字を忘れたので、發音どほり字を當てたものであらう。云々。

と見えてゐる。

【戸伊摩】　トイマ。陸前國（宮城縣）登米郡登米町。北上川の西岸。この邊は古への登米郷の内である。石巻から約八里、佐沼から東方三里半。平泉へ志すにしては、迂回の樣でもある。

【三代の榮耀】　サンダイのエイエウ。藤原氏の三代の榮耀をいふ。嘉保元年藤原清衡は豐田城より平泉に移つた。爾來平泉は清衡・基衡・秀衡三代の居館であつたが、四代泰衡に至つて、時に後鳥羽天皇の文治五年（一八四九）源頼朝に滅された。

【一炊の夢】　イッスヰのユメ。次の故事にもとづいて、極めてはかないたとへにいふ。

沈既濟の枕中記に、「唐の開元七年、道士呂翁、神仙の術を得たり。邯鄲に遊ぶ。道中の邸舍に息ひ、少年盧生を見る。短褐を衣て青駒に乘り、翁と言笑す。盧生その衣裳の敝れたるを顧みて、乃ち歎じて曰く、「大丈夫世に生れて諧はず、困すること是の如し。」と。翁曰く、「子談諧方に適してなほ其の困を歎ずるは何ぞや。」と。生曰く、「吾常に學に志す。自ら惟ふ、青紫拾ふべしと。今已に壯を過ぎて、なほ耕畝に勤む。困にあらずして何ぞ。言ひ訖りて目昏み、寐を思ふ。時に主人方に黍を蒸す。翁乃ち囊中の枕を探り、之に授けて曰く、「子吾が枕に枕せば、當に子をして榮適志の如くならしむべし。」と。その枕青磁にして、その兩端に竅あり。生首を俛してこれに就く。其の竅を見れば、漸く大に明らかなり。即ち身を舉げて入る。遂にその家に至る。數月にして清河の崔氏の女を娶る。女の容甚だ麗しくして、性資豪厚なり。明年進士に舉げられて登第す。調を釋きて渭南の尉に轉ず。俄に監察御史に遷り、起居舍人知制誥に轉ず。それより累遷して同中書門下平章事となる。同列復途翁と交結して不軌を圖ると誣ふ。制獄に下さる。中官これを保することをなして死を減じて驩州に投ず。數年にして帝寃を知りて復進めて中書令となし、燕國公に封ぜらる。五子を生む。孫十餘人あり。後、年八十を逾ゆるを以て病みて薨ず。盧生欠伸して寤むれば、その身方に邸舍に偃し、呂翁その傍に坐し、主人黍を蒸して未だ熟せざるを見る。生蹶然として興きて曰く、「豈それ夢寐なるか。」と。翁生に謂つて曰く、人生の適も亦是の如し。」と。生憮然として良久しうして謝して曰く、それ寵辱の道窮達の運、得喪の理、死生の情、悉くこれを知る。これ先生吾が欲を窒ぐ所以なり。敢へて教を受けざらんや。」と。稽首再拜して去る。

邯鄲の夢・盧生の夢・黄粱一炊の夢などいふは、皆これである。

【大門】　ダイモン。總がまへの門。外がまへの正門。總門。

【秀衡が墟】　ヒデヒラがアト。藤原氏三代の館の址。もと御所屋敷とも、平泉館（やかた）とも、又伽羅御所ともいつた。今平泉停車場の東北にその址が殘つてゐる。

「藤原秀衡」は陸奥出羽押領使藤原基衡の子。度量が大きくて、且沈毅であつた。嘉應二年（一八三〇）鎮守府將軍に拜せられ、養和元年（一八四一）陸奥守に任ぜられた。平宗盛は秀衡を懐柔し、その兵を借りて頼朝を伐たうとした。しかし秀衡はこれに應じなかつた。平家滅亡の後頼朝と交を修めた。はじめ源義經が金賣吉次に伴なはれて奥州に赴いたとき、秀衡は厚くこれを保護した。後義經が兄頼朝と仲違ひして再び奥州に赴いたときこれを衣川館に留めて優遇した。文治三年（一八四七）卒。

【金雞山のみ形を遺す】　平泉館の西方、高館の西南にあたれる假山。昔秀衡は、平泉の鎭護にとて山容を富士山に擬し、高さ數十丈に築き上げ、雌雄の黄金雞を作つて山上に埋めたといふ。山の名はこれに基づいたのであらう。作者の行脚した時代には、その形がまだ存してゐたやうだが、今は山らしいものはないといふことである。

回郷説には、秀衡が漆一萬杯に黄金二萬兩を混へてこゝに埋藏したといひ、「朝日さし夕日輝く木の下に漆萬盃こがねおくおく。」といふ歌を傳へてゐるけれども、もとより附會の説であらう。山下の東北に熊野神社・金峯山・花館の遺山がある。また山下の北面に破泉がある。この泉は清衡が盛夏の比、瓜を食はうとして、これを泛べたところだといふ。

【高館】　タカダテ。今の岩手縣陸中國西磐井郡平泉村字高館（平泉驛の北凡そ六町。一邑の中心にあたり、中尊寺の東、八町餘を隔ててゐる。）にあつた館舍。一に衣川館と稱し、俚俗には又判官館ともいふ。もと安倍頼時の築いた所だといふから、最古の遺跡にちがひない。源義經の古蹟として有名である。文治中、義經は、秀衡に依つ

て、こゝに居た。同五年閏四月、頼朝は泰衡に嚴命して、義經を討たせた。泰衡は亡父の遺言を忘れ、義經を高館に襲つた。義經は防戰力盡き、妻子を殺して自盡した。館は東西四百六十間餘、南北百三十間餘、高さ五十間。當時は北上川が東山の麓を流れたやうだが、今はこの館址の下を流れてゐる。

平泉より高館及び北上川を望む

地形は山上平坦の處が僅に十間より廿間に至り、東西南北は八十間許、高低三段になつてゐて、西北の高地に義經堂、東南に新山社がある。堂頭は樹木蔚々、堂後は斷崖絶壁、北上川は目の下を流れてゐる。當時東北に館門があり、一士邸があつて、市街に續いてゐたといひ傳へるが、今は殿宇の址もわからぬ。

正面社堂に詣る坂路は急でなく、下れば國道がある。この邊が當時の埠渠だといふ。山腹西に向つて馬場跡がある。新山社の東南麓を柳御所といふ。

辨慶の宅地の址は、高館の北にあるといふが、今は認め難い。同堂址は、中尊寺表坂の下にあつて、今は櫻川茶亭の庭内となる。其處の松を辨慶松といふ。樹下の一碑

色かへぬ松のあるじや武藏坊

の俳句は素信の吟である。また南畔の薄墨櫻は辨慶の手植といふが、今のはその枯れた跡に植ゑた木である。

鈴木宅跡は、高館下の櫻川の下流にあつて、傍に松樹一株、鈴木松といふ。即ち鈴木生害の處と傳へてゐる。龜井塚は高館の西北二町餘の處、龜井六郎望清の墳墓で、

塚上の松は龜井松といふ。鈴木松と共に後世植ゑたものである。龜井塚の西、增尾權頭兼房の墓標は、高さ三尺餘、幅一尺餘の石塔で、文字ははつきりわからぬ。

櫻川は昔の北上川の別稱。安倍頼時が數十萬の櫻を植ゑ、春時、水面に花を浮べたといふが、歳月の久しき、今は水路が變じて高館の西に及び、櫻川の名は、僅に高館・中尊寺の間に流れる廣さ三間許りの小流に冠せられるやうになつた。

【北上川】　陸中の北境なる御堂山及び北上山から出て、南流して盛岡市を過ぎ、陸前に入り、鹿又附近で二分し、一は東北に向つて追波灣に、一は南流して石卷灣に入る。（これは伊達政宗の開鑿に係るといふ）平泉附近では、秀衡時代には平泉の東方なる束稻山（タバシネ）の麓、即ち今の長部村附近を流れ、平泉の市街は、現今北上川の流域となつてゐる處にあつたといふ。

【南部】　ナンブ。今の岩手縣盛岡市附近から北部にかけていふ。蓋し、南部氏所領の謂である。南部氏の祖光行は文治五年源頼朝の奥州征伐に從つて功を立て、奥州糠部五郡の地に封ぜられて、今の青森縣三戸を居城とした。その後、その領土が廣められたり、狹められたりしたが、秀吉が奥州の封を定むるに及んで、殆ど奥州の北部一帶を南部領となすに至つた。

【衣川】　コロモガハ。平泉村の北を東流して北上川に會する川。長さ約四里。

康平年中安部頼時父子の據つた衣川柵は、衣川村字下衣川にある。（衣川を隔てて高館の北西）里俗並木屋敷といふ。

【和泉が城】　平泉のうち、秀衡の三男泉三郎忠衡の居つた城。戸河内の東北にある。もと琵琶柵といつた。觀聞志に「琵琶柵址、在二中尊寺西一、阻二于衣川一、貢任族兄成道之所レ據、而泉忠衡亦居。仍稱二泉城一。」

平泉志に「琵琶柵を泉が城と稱して泉三郎忠衡これに居れりと言傳へたり。諸書にこれを評して、東鑑の說に據れば疑なき能はずといへり。忠衡が義經に昵近せしを思ふに、始め平泉館の邊に居り、後こゝに移れるにや。」

【衣が關】　衣が關に新舊二つある。一は白島村（高館の北方）にあつた衣が關で、即ち平泉全盛時代に、南部方面に對する關門として設けた新關である。この關のことは

有名な永正の古關(大日本史料所載)にも見えてゐる。一は中尊寺の西北にあつた衣が關で、衣川の關ともいふ。安倍頼時時代のもの、卽ち舊關である。今もこの邊を關山といふのでもわかる。芭蕉のいふ衣が關は白鳥村にあつた新關であることは、「衣が關を隔てて南部口をさしかため」の一句でよくわかる。

【南部口】　南部方面から平泉へ入りこむ口。「南部」のことは前に出てゐる。

【さしかため】　警備して。警固して。

【夷】　エゾ。昔、奥羽から北海道にかけて住んでゐた人種。古くはえみしといひ、訛つてえぞといひ、蝦夷とも書く。

景行紀に「高夷之中有日高見國。其國人、……是總曰蝦夷」

【義臣】　忠義の臣。義經の部下なる辨慶・兼房等を指す。泰衡の部下ではない。泰衡は源頼朝に攻められて、仙臺方面から平泉に退却したが、平泉に入ることが出來なかつたので、城に放火して更に北に逃れた。

【すぐつて】　えらびぬいて。よりぬいて。

「すぐる」は、えらぶこと。よりぬくこと。

宇津保物語の吹上の卷に「えらびすぐりたる上手。」

【この城】　高館の城。

【功名一時の叢となる】　「武士等の功名も、唯一瞬に消えうせて、その屍には、今や夏草がむしてゐる。」との意。

「功名」(コウミヤウ、コウメイ)は、功を立て名を揚げること。

戰國策、齊に「成其道德而揚功名於後世者、堯・舜・禹・湯・周文王是也。」

【國破れて山河あり、城春にして草青みたり】　國は滅びても、山河は依然としてもとにかはらない。城は廢墟になつてゐるが、春の草は、それを知らずかほに青々と茂つてゐる。

こゝは義經の籠つてゐた高館の滅亡をさすのであるが、義經を滅した泰衡もやがて頼朝に滅されて、さすがに全盛を極めてゐた平泉藤氏も滅びたので、その事をも兼ねて、いつてゐると見てよい。なほこの語句は杜甫の春望の詩「國破山河在。城春而草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵萬金。」

白頭搔更短、渾欲不勝簪。」とあるによつたものであることは勿論である。

【笠打敷きて】　笠を尻にしいて。この一句によつて、芭蕉が夏草の中に、笠を尻に敷いて感慨にふけつてゐるさまが、まざ〳〵と目にうかぶ。

【夏草やつはものどもが夢のあと】　「夏草が青々としげつてゐるが、こゝは昔義經の忠臣辨慶兼房どもが功名の夢、それも一瞬、やがて草むす屍と朽ちはてた處である。」との意。義のため、功名のためといつても、要するに一睡の夢に過ぎない。時到り事變すれば、忽ち滅びてしまふ。然るに夏草は、人の世のはかなさをよそに青々と茂つてゐる。人生の夢のみじかく、自然の悠久なることが、十七字の上によみつくされてゐる。

【卯の花に兼房見ゆる白毛かな】　「こゝに咲いてゐる白い卯の花を見てゐると、その昔老軀をひつさげて奮戰苦闘した增尾權頭兼房の白髮姿が髣髴として目の前にうかぶとの意。

兼房の事について、義經記卷七、判官北國落の事の條に、さる程に二月二日、まだ夜深きに、今出川を出でんしたまふに、西の妻戸に人の音しけり。いかなるものなるらんと御覽ずれば、北の方の御乳人十郎權頭兼房、白き直垂に褐の袴着て、白巻まじりの番引觀し、頭巾うち着、「年より候とも、是非とも御供申し候はん。」とて參りたり。北の方、「妻子をば誰に預けおきて來るべき。」とのたまへば、「相傳の御主を妻子に思ひかへ參らすべきか。」と申もあへず涙に咽びけり。六十二になりけるまゝに、よき丈な山伏にてぞありける。

尙同書卷八、兼房が最後の事の條には、「義經が持佛堂に自害の後、兼房は鎧をぬぎすて、腹卷の上帶しめ、奮戰して炎の中に飛びこんで死んだ。」とある。

【曾良】　ソラ。通稱は河合宗五郎、後薙髮して宗悟と號した。信濃國諏訪の人。芭蕉に從つて俳諧を學び、その奥祕を極めた。翁の奥羽行脚に同行した唯一の人である。寶永六年(一三六九)歿。年六十一

【かねて耳驚かしたる二堂】　かねて聞いてその華麗に耳を驚かしてゐた經堂と光堂。

【開帳】　厨子のとばりを開いて祕佛等を拜ませること。

【經堂】　キヤウダウ。又、經藏とも、納經堂ともいふ。一切經を藏する堂。中尊寺の經堂は金色堂の西北にある。

天仁元年清衡の建立。もと二階建の堂であつたが、建武四年の火災に上層が燒失したのが、その殘基に修繕を加へた。これが今の經堂である。清衡・基衡の納めた經卷は、堂中の八棨にあつて、今國寶となつてゐる。

本尊は文珠。なほ附屬の像もある。みな毘首羯摩の作で彫刻精妙、鳥羽天皇の勅願によつて下し賜はつたものだといふ。

【三將】　藤原清衡・基衡及び秀衡。

【光堂】　ヒカリダウ。金色堂の本名。白山社の南にある。天仁二年藤原清衡の建立。三間四面、中の間七尺二寸、兩脇の間五尺五寸、柱の高さ一丈九寸、內外上下四面悉く麁布を掛け、黑漆でその地を厚くし、金箔を貼り、金色燦爛、光堂の名に背かぬ。

內部は鐵柱彫梁みな螺鈿珠玉を裝ひ、中檀の四隅には、七寶莊嚴丹青の柱を安置し、三檀中には藤原氏三代の棺を納めてある。中央が清衡、左が基衡、右が秀衡。秀衡の棺側に忠衡の首桶がある。

鎌倉將軍惟康親王は堂宇の廢壞を憂へ給ひ、正應元年執權北條貞時に命じて五間四面の套堂を建立させ給うた。以來時の國守が修補を加へたが、寛永初年、後水尾天皇は特に伊達政宗に勅して修復せしめられた。今は特別保護建造物となつてゐる。

本堂の傍に芭蕉の「五月雨の降り殘してや光堂」の句碑がある。その他、寶堂以下の數堂がある。

因に記す、經堂も、光堂も、もとは中尊寺內にあつた。中尊寺は建武四年野火に延燒して烏有となつたが、經藏（經堂とは記してないが同じものである）金色堂（これまた光堂とは記してない）の二字のみ、無事にたすかつたといふ。

【三代の棺】　清衡・基衡及び秀衡三代の遺骸を入れた棺。堂の中央一間四方を內陣とし、そこに佛壇がある。その內に清衡の棺を納れ、遺骸を藏し、その後方にあたる左右の間に、各〻佛壇があつて、左に基衡、右に秀衡の遺骸を藏してゐる。

【三尊】　中尊阿彌陀如來と脇士卽ち側立の觀世音菩薩（右）及び勢至菩薩（左）。

「阿彌陀佛」は西方極樂世界の敎主、梵音 Amita（無量の義。）は Amitabha（無量光）及び Amitayus（無量壽）の略。光明と壽命との無限の意義を含んでゐる。この佛ははじめ四十八願を立て、これに應ずる大行を修し、その願行に酬報して成道したので、これを報身佛とする。四十八願中に至心に信樂（シンゲウ）して往生せんと願ふものは乃至十念によつて必ず往生すべきを說く第十八願があり、この本願力によつて凡夫の救濟疑なしといふところに他力敎又は淨土敎は成立する。この佛を主とする經は無量壽經・觀無量壽經及び阿彌陀經の三つである。これを總稱して淨土三部經といふ。

「觀世音菩薩」は梵語 Avalokitesvara（阿縛盧枳低濕伐羅）の舊譯で、一に光世音ともいひ、新譯では觀自在といふ。淨土敎では勢至菩薩と共に彌陀の脇侍として慈悲の權化となし、法華經普門品では、この菩薩が三十三身を示現して普く苦惱の衆生を度脫することを說いてゐる。その淨土は南海の補陀落山であるといはれ、十方の國土に身を現じ、衆生がこの菩薩の名號を稱へれば直にその聲に應じて解脫を得しめるといふ。その行化の相形は多種多樣で、六道に配して六觀音となる。その他七觀音三十三觀音等の種類がある。

「勢至菩薩」は梵語 Mahasthanaprapta くはしくは大勢至といふ。「至」は至力の義。觀音と並んで、彌陀三尊の一として阿彌陀如來の右方に立ち、阿彌陀の智慧をあらはしたものだといふ。その像は寶冠の上に寶瓶を載せてゐる。胎藏界曼荼羅では觀音院中の一尊とする。

【七寶】　シッパウ。金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・玻璃・眞珠これを七寶といふ。但し經文によつて多少異同がある。

【珠の扉】　タマのトビラ。眞珠などをちりばめてこしらへた美しい扉。

「扉」は戶片（トヒラ）の義。開き戶の戶をいふ。

【黃金の柱】　コガネのハシラ。金箔をはつて美しく裝飾した柱。

【頹廢空虛のくさむら】　荒れはてて、何一つも殘つてゐないくさやぶ。

「頹廢」（タイハイ）は、くづれあれること。やぶれすたれること。

後漢書の翟酺傳に「大學辟雍……頃者頹廢、至爲園林芻牧之處。」

【四面新に圍む】　伏見天皇の正應元年（一九四三）鎌倉第七代の將軍惟康親王が北條貞時及び宣時に命じて光堂に保護を加へ、鞘堂（覆堂、套堂）を作らしめ給うたことは、前の「光堂」の條にのべておいた。

【甍を覆うて】　イラカをオホうて。

「甍」は屋根に葺いた棟瓦。又、瓦葺の屋根。

ほ」は秀でそびえた岩のことである。

【松柏年舊り】　松や柏が、多くの年月を經て、古色をおびてゐること。

「松柏」は、松と、かや。共に常磐木。

論語の子罕に「歳寒然後知二松柏之後レ凋也。」

荀子に「歳不レ寒無二以知二松柏一事不レ難無二以知二君子一。」

【岩上の院々】　岩の上に建てられてゐる多くの寺院。前の「立石寺」參照。

【佛閣】　ブッカク。寺の建物。寺院。佛堂。

白居易の詩に「行行都門外、佛閣正岩嶤。」

平家物語卷一、清水炎上に「佛閣・僧坊一宇も殘さず皆燒拂ふ。」

【佳景】　カケイ。好き景色。

黄庚の詩に「北山佳景勝二南山一。」

【寂寞】　セキバク。ひつそりとして、ものさびしいこと。寂寥。

楚辭に「山蕭條而無レ獸兮、野寂寞乎無レ人。」

【閑かさや岩にしみ入る蟬の聲】　あたり一面がしんとして物靜かなので、折柄鳴いた蟬の聲が、かたい〳〵岩にしみ入りさうに感ぜられた實景をそのまゝ句にしたもの。單に蟬の聲と岩とのみならば、暑い感しがするが、「しみ入る」の一語によつて、寂寞の感じをおこさせる。芭蕉佳作の一としてひろく喧傳されてゐる。

金澤

【金澤】　カナザハ。石川縣金澤市。倶利伽羅峠から西南方約五里。縣の中央に位し、犀川に跨る。前田氏百萬石の舊城地で、裏日本の代表的都市である。縣廳・第九師團司令部の外、醫大・四高・高工等の諸校があり、又本願寺別院・尾山神社等の社寺がある。市の中央なる兼六公園は日本三公園の一に數へられてゐる。絹織物・陶磁器・漆器その他の美術工藝品の産地として名高い。

【卯の花山】　富山縣礪波郡藪波村の南嶺で、越中から倶利伽羅越にかゝれば左方に見える山。その東麓に西野尻村があつて、そこに彌勒山安居寺といふ古刹がある。

奥細道、菅菰抄に「卯の花山は、くりから山のつゞきにて、砥波山の東に見え、源氏が峯とて木曾義仲の陣所跡あり。」

夫木抄に「日かげさす卯の花山の小忌衣たれぬきかけて神まつりけむ。」

【倶利伽羅が谷】　クリカラガタニ。石川（加賀）・富山（越中）兩縣の境にある倶利加羅峠の山中にある谷の名。峠は海拔二七七米に過ぎないけれども、古來此陸道の要衝とされてゐた。今鐵道北陸本線はトンネルによつて上下を通ずる。壽永二年（一八四三）木曾義仲が平維盛と戰ひ、火牛の計を以てこれを破つた古戰場である。

【中の五日】　十五日。

【何處】　カシ。姓名未詳。

猿蓑集卷二に「病後」と題して「からりふやかしらふらつく百合の花」、同卷六に「里は今夕飯時のあつさかな」の句がある。

なほ一笑の追善の時の句は、次の「追善」の條に見えてゐる。

【それが旅宿を共にす】　その人（大阪より通ふ商人何處）が、自分（芭蕉）と同宿したといふ意。「それ」は、こゝでは他稱の人代名詞として用ひられてゐる。

【一笑】　イッセウ。姓は小杉、名は新七、一笑はその俳號。家號は茶屋といつたらしい。加賀金澤の人。高瀨梅盛の門人。元祿元年（一六八八）歿。年三十六。

【この道にすける名のほの〳〵聞えて】　俳諧の道を好んでゐるといふひやうばんが、ちらほらと世に聞えて。

【早世】　サウセイ。早く世を去ること。はやじに。わかじに。夭死。夭折。

左傳の昭公三年の條に「早世隕レ命。」

東鑑卷十六、建久十年八月十九日の條に「幕下薨去之後、不レ歴二幾程一、姫君又早世。」

【追善】　ツキゼン。追薦とも書く。死者の爲に、追ひて善事を修する義。（「追薦」は、死者のために福を薦める義。死者の冥福を祈るため、忌日などに佛事供養を營むことをいふ。

本朝續文粹卷十二に「待賢門院奉レ爲二白河院一追善上」

「西の雲」（一笑追善の集）に、「行年三十六。元祿初辰霜月六日かかげたる沙草の塚に、身は先逝て消えぬ。聞く人哀れがりて泣

和名抄卷十に「蔓、釋名云、尾脊曰レ蔓(伊良加)。在レ上覆二蒙屋也。」

【千歳の記念】　チトセのカタミ。センザイのキネン。末長く世につたはるべき遺物。古い記念。

「千歳」は千載とも書く。(一)千年。(二)多くの年月。限りなき歳月。こゝは(二)の意。

淮南子に「鶴壽千歳、以極二其游一。」

袁宏の三國名臣序贊に「千歳一遇、賢智之嘉會、遇レ之不レ能レ無レ欣。」

【五月雨の降りのこしてや光堂】　「空かきくもつて降りくらす五月雨の中に立つて、ひとり燦然たる光堂は、さすがの五月雨もよけて降つてゐるやうにおもはれる。」といふほどの意。實際は外に覆堂があり、内に昔時の美觀はない。主觀的の句と見たらよからう。

立石寺

【山形領】　ヤマガタリャウ。山形藩。今の山形市地方。當時は堀田正矩の領分であつた。封祿は六萬石。

【立石寺】　リフシャクジ。又リッシャクジともいふ。山形縣東村山郡山寺村山寺にある名刹。寶珠山と稱し、俗に山寺といふ。山形市の東北方三里、尾花澤から羽州街道を南下すると八里、今の天童町に達し、そこから道を東南に折れて行くこと二里にしてこの寺に達する。「その間七里」とあるが、ちと短すぎるやうに思はれる。清和天皇の貞觀二年(一五二〇)、僧圓仁(慈覺大師)の開基に係る。天皇は特に貞觀寺の號を賜つた。降つて住持圓海のとき、最上義光がこれを中興した。德川時代には守護不入の靈地に加へ、俗に奥の高野といつた。古來延暦寺の別院として東北に於ける天台宗の巨刹である。奇岩怪石が縱横に起伏し、三奇巖・七瀑・四十八瀑が各所に散在し、堂宇がその間に隱見して、景色が頗るよい。

「陸奥千島」に、「寶珠山阿所川院立石寺、(所のものは山寺といふ)城下より三里、慈覺大師の開基。山の頂上より曲嶋の立石、碧落に登つて雲頭を踏む。險難百折の靈地、仍つて立石寺と名づけたまふ。對面石・文殊堂・藥師堂(毘沙門天・傳教大師)・金銅鰐口(これは守護義光朝臣寄進なり。(清和天皇御願・三王權現・常行念佛堂(この本尊彌彌陀)・御手洗(卽ち阿所川)・御枕石・眞似大師・御手掛石・無手佛、半途に十王・奥院(三十番神十羅刹女)・獄鉆木・骨堂・寶藏・胎内潛・十王堂・釋迦堂・卯の松・慈覺堂・經堂・五大堂・白山堂・地藏堂・不動堂・十八坊・天狗岩・タチヤ川云々。」とある。

【山寺】　ヤマデラ。山中にある寺院。野中にある寺を野寺といふに對する語。

拾遺集、哀傷に「山寺の入相の鐘のこゑごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」

【慈覺大師】　ジカクダイシ。名は圓仁。延暦寺第三世の座主。下野の人。十五歳出家して最澄に謁し、天台の教義を學んだ。承和五年(一四九八)入唐し、十四年歸朝した。後比叡山を以て天皇の本命道場とし、文殊樓院・法華三昧院・常行三昧院を建立して大師の遺業を完成した。齊衡元年擧げられて延暦寺の座主となつた。貞觀六年(一五二四)入寂。年七十一。顯揚大戒論・守護國界章・法華秀句・法華實相義記等の著作がある。

【開基】　カイキ。佛寺を創建すること。又、その人。開山。

【清閑の地】　きよらかにして、ものしづかな土地。「清閑」は又「清間」とも書く。

【尾花澤】　ヲハナザハ。今の山形縣北村山郡尾花澤町。附近農村の中心市場。兩羽街道の一驛で、鐵道奥羽本線大石田驛から尾花澤鐵道(一、六粁)を通ずる。越後の高田飛驛の高山と共に積雪の多い所として知られてゐる。

【取つてかへし】　あともどりして。最上川を下るため、尾花澤から西北に進むはずであるのに、立石寺へは、尾花澤から南方へ羽州街道に進まねばならぬので、「とつてかへし」といつたものらしい。

【麓の坊】　山すそにある僧坊。

「坊」とは、僧侶の居所、但しこゝは、參詣者などを宿泊せしめるために、寺院で特に設けた屋舍などをいふ。

【巖】　イハホ。大きな石。

萬葉集卷二十に「高山のいはほに生ふる菅の根のねもころ〳〵、ふりおく白雪」

「岩に巖を重ねて」と字を異にして書いたのは、「いはにいはほを重ねて」とよませて、語調を整へたのであらう。

「岩」も「巖」も同意で、石の大きいものをいふ。しかし嚴密にいへば、「ほ」は秀でてゐる意味であるから、「いは

ほ」は秀でそびえた岩のことである。

【松柏年舊り】　松や柏が、多くの年月を經て、古色をおびてゐること。

「松柏」は、松と、かや。共に常磐木。

論語の子罕に「歳寒然後知二松柏之後一凋也。」

荀子に「歳不レ寒無二以知二松柏一、事不レ難無二以知二君子一。」

【岩上の院々】　岩の上に建てられてゐる多くの寺院。前の「立石寺」參照。

【佛閣】　ブッカク。寺の建物。寺院。佛堂。

白居易の詩に「行行都門外、佛閣正岩嶤。」

平家物語卷一、清水炎上に「佛閣・僧坊一宇も殘さず皆燒拂ふ。」

【佳景】　カケイ。好き景色。

黄庚の詩に「北山佳景勝二南山一。」

【寂寞】　セキバク。ひつそりとして、ものさびしいこと。

寂寥。

楚辭に「山蕭條而無レ獸兮、野寂寞乎無レ人。」

【閑かさや岩にしみ入る蟬の聲】　あたり一面がしんとして物靜かなので、折柄鳴いた蟬の聲が、かたい〳〵岩にしみ入りさうに感ぜられた實景をそのまゝ句にしたもの。單に蟬の聲と岩とのみならば、暑い感しがするが、「しみ入る」の一語によつて、寂寞の感じをおこさせる。芭蕉佳作の一としてひろく喧傳されてゐる。

金澤

【金澤】　カナザハ。石川縣金澤市。倶利伽羅峠から西南方約五里。縣の中央に位し、犀川に跨る。前田氏百萬石の舊城地で、裏日本の代表的都市である。縣廳・第九師團司令部の外、醫大・四高・高工等の諸校があり、又本願寺別院・尾山神社等の社寺がある。市の中央なる兼六公園は日本三公園の一に數へられてゐる。絹織物・陶磁器・漆器その他の美術工藝品の産地として名高い。

【卯の花山】　富山縣礪波郡藪波村の南嶺で、越中から倶利伽羅越にかゝれば左方に見える山。その東麓に西野尻村があつて、そこに彌勒山安居寺といふ古刹がある。

奥細道、菅菰抄に「卯の花山は、くりから山のつゞきにて、砥波山の東に見え、源氏が峯とて木曾義仲の陣所跡あり。」

夫木抄に「日かげさす卯の花山の小忌衣たれぬきかけて神まつりけむ。」

【倶利伽羅が谷】　クリカラがタニ。石川（加賀）・富山（越中）兩縣の境にある倶利加羅峠の山中にある谷の名。峠は海拔二七七米に過ぎないけれども、古來此陸道の要衝とされてゐた。今鐵道北陸本線はトンネルによつて上下を通ずる。壽永二年（一八四三）木曾義仲が平維盛と戰ひ、火牛の計を以てこれを破つた古戰場である。

【中の五日】　十五日。

【何處】　カシヨ。姓名未詳。

猿蓑集卷二に「病後」と題して「からりふやかしらふらつく百合の花」、同卷六に「里は今夕飯時のあつさかな」の句がある。

なほ一笑の追善の時の句は、次の「追善」の條に見えてゐる。

【それが旅宿を共にす】　その人（大阪より通ふ商人何處）が、自分（芭蕉）と同宿したといふ意。「それ」は、こゝでは他稱の人代名詞として用ひられてゐる。

【一笑】　イッセウ。姓は小杉、名は新七、一笑はその俳號。家號は茶屋といつたらしい。加賀金澤の人。高瀨梅盛の門人。元祿元年（一三四八）歿。年三十六。

【この道にすける名のほの〳〵聞えて】　俳諧の道を好んでゐるといふひやうばんが、ちらほらと世に聞えて。

【早世】　サウセイ。早く世を去ること。はやじに。わかじに。夭死。夭折。

左傳の昭公三年の條に「早世隕レ命。」

東鑑卷十六、建久十年八月十九日の條に「幕下薨去之後、不レ歷二幾程一、姫君又早世。」

【追善】　ツキゼン。追薦とも書く。死者の爲に、追ひて善事を修する義。（「追薦」は、死者のために福を薦める義。死者の冥福を祈るため、忌日などに佛事供養を營むことをいふ。

本朝續文粹卷十二に「待賢門院奉レ爲二白河院一追善上」

「西の雲」（一笑追善の集）に、「行年三十六。元祿初辰霜月六日かかげたる沙草の塚に、身は先達て消えぬ。聞く人哀れがりて泣

きぬる。明けの秋、風羅の翁（芭蕉）行脚の座に訪ひ來ります。ぬしは去りにし冬世を早くすと語る。あはれ年月我を待ちしとなん。生きて世にいまさば、越の月を見ばやとは何思ひけんと泣く〳〵墓にまうで、追善の句をなし、回向の涙しぼりたまへり。遠近の人集ひ來り、席をならし。各悼二十餘句終りぬ。芭蕉のは、「塚も動け」の句　曾良のは「供して詣でけるに、やさしき竹の墓印とて、靡き添うたるもあはれまさりぬ。」と前書して、「玉とそふ墓のかざしや竹の露。」何處のは「常住の蓮もありや秋の風。」と見えてゐる。

【塚も動け我が泣く聲は秋の風】「これ一笑君よ、自分が君の死をいたんで泣く聲は、秋の風のやうに悲壯な響をおびてゐる。君　若し靈があるならば、塚をも動かして來て、我がとむらひのこの一句を聞き給へ。」といふほどの意。

8　過　釋

出　立

月日は永久に過ぎ去る旅人であつて、去つたり來たりする年も亦旅人である。同じ旅人の中でも、舟の上で一生を暮す船乗や馬の口取をして年を寄せる馬方などは、毎日旅にあつて、旅の空をわがすみかとしてゐる。昔の詩人たちのうちにも、旅の空で死んだものが多い。自分も、いつの年からか、風にたゞよふ雲を見ると、おのづとそれに心がひかれて、どうかあの雲のやうに方々をさまよひあるきたいものだといふ氣が起つてたまらなくなつた。

去年（元禄元年）は、春から夏にかけて諸方の海岸をぶらつき、秋になつて、やつと隅田川のほとりの芭蕉庵に歸り、蜘蛛の古巣を拂つて、久しぶりに我が庵に落ちついたが、その年もやうやう暮れて、霞の立つ春になつたところが、白川の關を越えて奥州へいつて見たいといふ心がおこつた。それ以來、そぞろ神（自分をそゝのかす神）が、いつも自分にとりついて、わが心をくるはし、道案内の神までも、しきりに旅をそゝのかすので、仕事が少しも手につかなくなつた。そこで、股引のやぶれを繕ひ、笠の緒をつけかへ、三里に灸をすゑて、せつせと旅の仕度をした。さうするうちに、松島の月の景色が先づ第一に心に浮んで來て、立つてもゐてもたまらなくなつた。そこで、いよ〳〵思ひきつて、住家を或人にゆづり、杉風の別荘（採茶庵）に引つ越したそ。して、次の一句をものした。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

これを第一句として、次々に餘の七句を書きつらね、表八句を書きそろへて、庵の柱にかけておいた。

三月二十七日、いよ〳〵門出することとなつた。折から夜あけの空はおぼろに白み、有明の月の光はもはや消えてしまつてゐたけれども、富士の山はなほかすかに見わたされ、上野や谷中の櫻の梢も、亦ほのかに見えてゐた。それにつけても、自分はいつまた江戸にかへつて、あの山を眺め、この花を見ることが出來るであらうかと思ふと、心細くて〳〵しかたがなかつた。親しい人は、皆前の晩から草庵にあつまつて、今朝のいでたちを舟に乘つて一緒に見送つてくれた。千住といふ處で舟からあがると、遙に旅立つ悲しい思ひが胸一ぱいになつて、幻のやうにはかない人の世の別れ路に、訣別の涙をはら〳〵流した。かくて、

ゆく春や鳥啼き魚の目は涙

の一句を旅　筆はじめに書きしるして、さて足をはこんだが、心がとかくあとにひかれて、道が一向にはかどらぬ。ふとふりかへつて見れば、見送りの人々は皆途中にたちならんで、こちらに目をつけてゐる。察するところ、わが後姿の見えるまではと、ねんごろに自分たちを見送つてくれてゐるのであらう。

平　泉

十二日平泉へと志し、姉歯の松、緒絶の橋などいふ歌の名所を聞きつたへながら行つたが、何分にも人通りが稀で、獵夫や草刈男や樵夫（きこり）などしか通らぬやうな道だから、すつかり見當がつかぬ。そして、とう〳〵道をふみちがへて、石卷といふ港に出てしまつた。昔大伴家持といふ歌人が、みちのくから黄金の出たことをことほぐのあまり、「すべろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く。」といふ歌をよんで、これを時の天皇（聖武天皇）に奉つたと傳へられてゐるその金華山が、遙かあなたの海上に見え、數百艘の運送船が入江に集まり、人家がこみあつて、竈の煙がたちつゞいてゐる。「思ひがけもなくこんなところへ來たことかな。」とつぶやきながら、どこかに宿を借らうとするけれども、一向にとめてくれる人がない。やつとのことで見すぼらしい家に一夜をあかして、あくる日は、又知らぬ道をまよひながら行つた。袖のわたりとか、尾駮の牧とか眞野の萱原とかいふやうな歌の名所を遠く見やりながら、長い堤をあるいて行つた。心細い氣のする長沼といふ沼に沿うて、戸伊摩といふところ　つき、そこに一泊して、その翌日、目ざす平泉に到着した。その間の道のりは、二十餘里もあるやうにおもはれる。

さて平泉へいつて見れば、奥州の藤原三代（清衡・基衡・秀衡）に於ける榮華のあとは一炊の夢のやうに消えうせて、當時の館

の正門にあつたといふ大門の跡は、一里も手前にのこつてゐる。秀衡の住んでゐたといふ伽羅の御所の墟は荒野原となつてしまつて、金雞山といふ岡ばかりが、今なほ昔の形をのこしてゐる。先づ第一に、その昔源義經が籠つてゐたといはれてゐる高館にのぼつて見ると、北上川が眼下に横たはつてゐる。この川は南部方面から流れてくる大河である。衣川は和泉三郎忠衡の立てこもつてゐた城をぐるりとりまいて、この高館の下で、北上川に落ち合つてゐる。秀衡の子泰衡の住んでゐた館のあとは衣が關を隔ててむかふにある。思ふに、彼等はこの館で南部方面の入口を警備して、蝦夷の侵入を防いだらしい。さても彼の義經は、辨慶愛房など忠義一途のけらいどもをえりぬいてこの高館に籠つたが、時利あらず、遂に泰衡に襲はれて無惨な最期を遂げ、その功名の夢は一瞬に消えはてて、その址は今茫々たる草やぶとなつてゐる。さて〳〵感慨に堪へぬことかな。そこで、自分は「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と唐の詩人杜甫の「春望」の詩を口ずさみながら、頭にかぶつてゐた笠を尻にしいて、時のたつのもすつかり忘れて、懐古の涙を流した。そのときによんだ句は、

夏草やつはものどもが夢のあと

曾良のは

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

をりから、かねて聞いてその美しさに驚歎してゐた中尊寺の經堂と金色堂とが開帳された。はいつて見れば、經堂には藤原氏の三將即ち清衡・基衡・秀衡の像が文殊の三將に象つて遺されてあり、光堂には、右三代の遺骸を中央と左右との三壇に納め、中央佛壇の上に阿彌陀三尊の像が安置してあつた。堂内に美しく飾りたてられてあつた七寶は散り失せ、珠をちりばめた扉は風に破れ、金箔をおした圓柱は霜や雪に朽ちて、そのまゝにしておけば、やがて草深い廢墟となつてしまふべきところを、成るべくさうさせまいとして、堂の四面を新にかこひ、上に蔽ひをして、風や雨を防いでゐる。かやうにして、この光堂は、古い記念物として、こゝしばらくの間は保存されることとなつた。こゝでよんだ句は、

五月雨の降りのこしてや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺がある。この寺は慈覺大師の創立されたもので、とりわけ清淨閑寂の靈地である。ちよつとおまゐりしたらどうかと人々がすゝめるので、尾花澤からあともどりして、こゝに立ち寄つた。その間の道のりは凡そ七里ばかりで

ある。

日がまだ暮れないので、麓の僧坊に宿を借りておいて、山上の寺にのぼつた。山は岩石が重なりあひ、松や柏の老木がそびえ、多くの年月を經た土や石が、滑らかな苔にとざされてゐる。仰ぎ見れば、岩の上に立つてゐる數々の佛堂の扉は嚴重にとざされてゐる。そしてあたりがひつそりとして、物音一つ聞えない。

かくて、自分たちは、岩壁をまはつたり、岩を這ひのぼつたりして本堂に參拜した。境内の山水はいかにも美しく、且ものしづかで、わが心のさわやかに澄んでゆくのが、しみ〴〵と感ぜられた。そこで、興にまかせて次の一句をよんだ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

金澤

卯の花山・倶利伽羅ヶ谷を越えて金澤についたのは七月の十五日であつた。こゝに大阪から通つて商ひをしてゐる何處（かしよ）といふものがゐて、自分と同じ宿にとまつてゐた。一笑といふものは、かねてから俳諧に執心してゐるといふ評判がちらほらきこえて、その名を知つてゐる人もあつたが、去年（元祿元年）の多わかじにをしたからとて、その兄が追善供養をいとなんだ。

そこで、自分も次の一句を捧げて、ねんごろにその靈を弔つた。

塚も動け我が泣く聲は秋の風

9　挿圖

出立　谷口蕉村筆

芭蕉が元祿二年三月二十七日奥の細道の旅に出でたち、千住といふところで船をあがり、いよ〳〵見送りの人々に別れて旅に上るときのさまを描いたもので、はるか向ふに見えるものは、いふまでもなく芭蕉と隨行の門人河合曾良とである。こなたで見送つてゐるのは、其角・嵐雪・杉風など、蕉門の弟子どもであらう。

右肩に書いてある文字は、紀行文の一節で、次の通り。

千し(ち)ゆといふ所にて船をあかれは
前送三千里のおもひ胸にふさかりて
幻のちまたに離別の泪をそゝく
行春や鳥啼魚の目は泪
これを矢立のはしめとして行道なを(ほ)
すゝます人々は途中に立ならひて後かけの
見ゆるまてはと見送るなるへし

筆者谷口蕪村の小傳は前課「青葉」の條に見えてゐるから、こゝには省く。

首途の芭蕉　小杉未醒筆

奥の細道に、「草まじきかぎりは、宵より集ひて舟に乘りて送る」とある場面を描いたもの。芭蕉と曾良とは、いよ〳〵上陸して、見送りの人々と袂を分ち、みちのくの旅にといでたつ。見送りの人々は、舟の中で名殘を惜しむ。當時の光景が、さながら目のあたり見るやうに感ぜられる。

芭蕉及び曾良の服裝は、谷口蕪村のそれとは多少ちがつてゐる。共に想像の筆だから、いづれを正しいともいひ難い。

筆者小杉未醒は帝展系の畫家で、その獨特の滋味のある畫風を以て知られてゐる。

三尊佛

金色堂（光堂）の中壇に安置されてゐる阿彌陀三尊の像。その左右兩側の像は二天（帝釋天と梵天）、その後方の像は六地藏（延命・寶處・寶手・持地、寶印・堅固意）のうちの若干像である。

「三尊佛」については、「釋義」の中の「三尊の佛」參看。

金色堂一に光堂

藤原清衡がその妻女と共に建立したもの。伏見天皇の正應元年（一九四八）、將軍惟康親王は北條貞時及び宣時に命じてそ〳〵の套堂を作らしめ給うた。なほ、釋義の中の「光堂」參看。

立石寺

山形縣東村山郡山寺村山寺にある立石寺の奥院の景。

右の方に見える建物は鐘樓、左の下方に見えるのは佛に手むける閼伽を汲む井戸であるなほ「釋義」中の「立石寺」參看。

二　賴山陽

1　解題

「今世名家文」中にのせてある「賴山陽」の評論である。殊にその詩才を稱し、その詩才を十分に發揮し得なかつたことを惜しんだ論である。

「今世名家文」は、明治二十四年民友社の發行で、當時の名家の文を一二篇づつ抄錄したもの。中に若干の漢文も交つてゐる。

2　作者

朝比奈知泉　アサヒナ　チセン。

政論家。號は碌堂、知泉はその名である。文久三年（一八六三）水戸に生れた。夙に帝國大學に入つて、政治理財の學を修め、秀才の譽があつたが、在學二年にして退學した。二十一年「東京新報」を發刊し、二十五年「東京日日新聞」の主筆となつた。明治二十七・八年戰役當時は、伊藤博文の顧問となつて、馬關に隨行した。最も議論文に長じ、每に精勁・雄大の特色を發揮した筆をものし、ひと頃は德富蘇峯・陸羯南と相並んで、三大新聞記者と稱せられた。三十八年「日日」の主筆を辭した。曾て歐洲を漫遊し、大陸の事情にも通じてゐた。昭和十四年歿。年七十八。

3　編纂の用意

本課は、史筆家として、勤王家として、又詩人として、書家として日本國民の大いなる誇とする賴山陽に對する朝比奈知泉翁の評論文である。その立論の雄大にして堂堂たる、その行文の遒勁にして流暢なる、流石に文壇當年の驍將たる翁の筆に恥ぢない。よろしく精讀心解せしめて、講讀の目的を十二分に達せしめたいものである。

4　要旨

凡そ文運の振興は、詩人の活動に待たねばならぬ。賴山陽が、我が國近世の文運を振興するに恰好なる時機に遇ひ、且、その任に堪ふべき十二分の詩人的天才を有しながら、その時とその天稟とを思ひのまゝに利用し、發揮することをなさなかつたのは、惜しんでも〳〵餘りある

ことであるといふのが、一篇の要旨である。この要旨を把捉せしめるのが卽ち本課の目的であるが、殊に源平以來、武門驕恣の跡を敍して勤王の士を感奮せしめた山陽、兵兒謠に、蒙古來に男兒の意氣を歌つた山陽の詩才と人物とについて考察せしめ、又その詩人山陽に對して熱烈なる同情と愛惜とを感じてゐる作者の力ある筆を十分に味はしめなければならぬ。

5 概說

第一節（七〇頁——七一頁二行）　賴山陽の一生を考へるに、總べてが詩である。性格・實行・著作、皆詩である。

第二節（七一頁三行——末行）　日本外史は一篇の敍事詩であるといふ。

第三節（七二頁）　同じく外史の敍事詩たる所以を論じた。

第四節（七三頁一行——七行）　論策・文章といふもの、亦詩詞のみと評す。

第五節（七三頁八行——七四頁末行）　更に詩そのものに關しては、山陽の自らの持論も彼が詩人たることを證してゐる。これにつけてもその天才を詩作に展ばさなかつたのは惜しいといふ。

第六節（七五頁——七七頁一行）　山陽の詩人とならなかつたのを惜しむ理由として、その天稟の詩才、その創見的卓識、その尊王愛國的熱情、その經營刻苦の氣力の四項を擧げて說いた。

第七節（七七頁二行——七八頁）　更に山陽が經濟實用を學問の本旨としてゐた常套的思想を遺憾とし、詩の人心を感發すること、到底史に比すべからざる所以を論じ、最後にその師父が山陽をして修史に志すに至らしめたことを歎惜して論を結んだ。

6 取扱上の注意

◆評論文として立論がいかにも雄大である。山陽に對する着眼も高い。そして行文が明快で、論旨も徹底してゐる。全篇の要旨、その各節についての要旨の如きも、一讀して會得することが出來る。かういふ課は、生徒自らをしてその大意やら論旨やらを把捉せしめる教材としても極めて恰好であると考へられる。

◆部分的に見れば多少の變化はあるが、大體が演繹的論法で、命題の後に證明的章句が來てゐる。かういふ點にも着眼せしめて、議論文をものする時の一用意とさせるやうにしたい。

◆內容からいつて、「要旨」にも述べたとほり、この文は要するに、山陽の專ら詩人とならざりしことを歎惜した論である。もし山陽の生前にかういふ論をするものがあつたらば、山陽は何といつたらう。

眞の批評はそれが對象を非難する場合であつてさへ、普通に否定的であるとせられてゐる非難の場合であつてさへ、それが眞の批評である限り、その對象を眞に生かして行く。缺點や弱點を指摘して誤らないとともに、必ずその性質や由來や意味を明らかにすることによつて、既にそこから一層廣い深い境地を指し示す。批評を受ける者に取つては弱みであるが、併し喜びでもある。たゞむやみに痛みを弄ばれ、蹂躙されることではなく、その痛みを慰する道が示されるからである。批評はこの場合一面否定であつて、直に肯定である。打つことであつて、同時に培ふことである。暗黑の指摘は卽ち明るみに向けることである。批評はこの意味でいつでも必ず光を示し、光に向ける。一つの指し示す力である、動かす力である。批評はいつでも力である、明るみへ誘ひ出す力である。眞の批評はどんな强烈な非難を含んでゐても、必ずその中に新鮮な朝の光を孕んでゐて、人に眞實と感謝と喜悅とを感じさせる。この力とこの光とを持たない批評は、眞の批評ではないのである。（大觀——片上伸）

かういふ「生かす批評」の說を讀むにつけても、編者は、山陽の生前に、この課のやうな評論を彼に聽かせてやりたかつたといふ氣がしてならないのである。

◆尙、原文には序說として先づ德川末期の文運の趨勢が歐洲第十七世紀末のそれと相似たるを說き、この期に一偉才が出現したならば、我が文學の黃金時代は必ずや三四十年前に來たであらうと斷じ、次に文運を振興するものは常に詩人である、その振興の任に當るべくして當り得なかつた人は實に賴山陽であると論じて、後にこの課の文に入つてゐる。作者の立論の堂々たる點は、實はその序說から讀んで來なければ十分には理會出來ないのである。

右の序說の部分は次の通りである。

賴山陽　　朝比奈知泉

德川氏の季年は、それ歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の

餘習已に脱して、文敎は嚮然として海隅に遍く、漢土の儒學詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は奬勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つら〳〵各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・ミルトン・シェクスピアの英文學に於ける、コルネイユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッシングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず。是を以てその勢力の及ぶところ局限せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、その才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたる爲に日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり、筆家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず。」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人とその才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽頼氏是なり。

7　設問

1　この論文の主旨を手短に言うて見よ。

2　評論文として、この文章から學ぶべきはどういふ點であると思ふか。（この文を讀んで、批評といふものはどうあるべきだと思ふか。）

3　この文に現れたところから、作者はどういふ人であると思はれるか。

4　作者の情熱のはずんでゐる所は、どういふ句法で知られるか。

5　生徒として直に山陽に學ぶべき點は如何。

6　次の語の意義を問ふ。

イ、詩は別才なり。

ロ、畛域を撤して諸生を待つ。

ハ、無韻の敍事詩。

ニ、創意の才は刻苦の力と相待つて後始めて絢爛の華彩を發すべし。

7　次の文字の書取。

俯仰低回。感慨淋漓。博引旁搜。造詣。新機軸。意匠慘澹。等々。

8　釋義

【頼山陽】ライサンヤウ。名は襄、字は子成、通稱は久（ヒサ）太郎。山陽はその號。別に三十六峯外史とも號した。彌太郎春水の長子。安永九年十二月大阪に生れた。資性孝悌にして聰明剛邁。幼より學を好み、博く經史に通曉し、詩文を善くし、書に巧に、卓見博識、自ら一家を成してゐた。父春水が廣島藩の儒員に召さるゝに當つて、江戸に留學し、尾藤二洲の塾に學んで、當時の碩儒に接した。弱冠京にあるの日は、その行動が往々豪放にわたり、一旦國を脱して父の怒に觸れ、終にその家に監禁された。仍つて一切の家累を絶ち、專ら讀書に耽つた。文化六年備後神邊の菅茶山に招かれて、その塾生を監督した。同八年私に塾を去つて大阪に遊び、ついで京都に卜居し、子弟を集めて學を授けた。初め新町・車屋町・二條等に住んだが、文政六年三本木に移居し、名づけて水西莊といつた。その子弟を訓ふるや、忠孝の道を明らかにし、君臣の分を正しうし、古來の學弊を一洗して士道の推勵に力めた。山陽はかくして世道人心を興起し、皇統の正閏を正し、尊皇卑覇を唱へ、以て天下の統一をはかつたが、當時幕府の權勢がなほ隆盛で、これを實地に發表することが出來なかつた。そこで刻苦勵精、志を著述に寓し、後人に傳へた。

山陽は又常に名勝古跡を探り、山河を跋渉する癖があつて、到るところ懷を詞藻に寄せた。

著書に日本外史・日本政記・通議・日本樂府・山陽文稿・山陽遺稿・山陽小品・山陽詩抄等がある。就中日本外史は全國の津々浦々に愛誦せられ、尊皇の精神を鼓舞して、明治維新の原動力となつた。

天保三年（三四九二）九月二十三日薨。年五十三。

明治二十四年十二月正四位を追贈せられ、昭和七年更に

從三位を追贈せられた。

【詩は別才なり】 詩は一種特別の才能で、誰でもが容易に上手になれるといふものではない。

陰浪詩話に「詩者別材也、非レ關レ書也。」

「詩」は文學の一種。主として情によつて成立ち、律語で書かれる。隨つて詩の特質のおもなものは律格であり、その內容は主觀的・主情的及び詠歎的である。

詩はその內容によつて抒情詩・敍事詩・劇詩に分れる。漢字で書かれたものは漢詩、散文で書かれたものは散文詩といふ。

詩に長じたものはこれを詩人といひ、詩の形式を論ずる學問はこれを詩學といふ。

詩は音樂と造形美術との中間にあるものとされてゐる。

【詩人は生る成るにあらず】 詩人は天才的のものである。勉强工夫したからとて、とても詩人にはなられぬ。

この語は、恐らく西洋語の飜譯であらう。

【東西一般の金言】 洋の東西を通じて一般に唱へられてゐる金言。

「金言」とは、龜鑑とすべき言語。貴重すべきことば。名言。格言。

白居易の寄二微之一書に「金言自消鑠。」

狂言、箕かづきに「聖賢の金言がある。」

【性格】 セイカク。その人特有の性質。もちまへ。たち。品格。品性。

李中の詩に「性格孤高、世所レ稀。」

【童蒙】 ドウサイ。子供の年頃。幼童時代。

【夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり】 山陽は十三歲の元正に、

「黃鳥喈喈曰載陽。辛盤進拜向二東方一。
霞觴應レ侍春風座。曾否回レ頭憶二故鄕一。」

の七言絕句を作つて、江戶の邸にある父に贈つた所が、柴野栗山はこれを見て驚歎し、「千秋子あり。」といつたといふ。江木鰐水の山陽先生行狀に、

「年甫十三、春水先生祗役在二江戶一。作レ詩寄レ之。柴野博士見レ之大加二歎賞一曰千秋（春水字）有レ子、不レ敎二之爲一二實材一乃欲レ使レ爲二詞人一乎。宜レ使二其讀レ史知二古今事一。而史自二通鑑綱目一始。」

「夙成」は、年若くして老成人の如く、才智のおとなびてゐること。「晩成」の對。

後漢書の袁術傳に「聞幼主明智聰敏、有二夙成之德一。」

なほ、山陽が十三歲の時の詩として、

十有三春秋、逝者已如レ水、天地無二始終一、
人生有二生死一、安得下類二古人一、千載列中青史上

といふのが、傳はつてゐる。

「柴野栗山」名は邦彥。通稱は彥輔。別號は古愚軒。當時尾藤二洲（良助）・古賀精里（彌助）と共に幕府の儒官として「寬政の三博士」・「寬政の三助」と稱せられた。栗山は朱子學を興してこれを正學とした功が最も大であるといはれる。文化四年（二四六七）卒。年七十四（或はいふ七十二）雜學類編・聖賢圖像考・養治概言・冠服考證等の著作がある。

明治四十四年六月從四位を追贈せられた。

【北馬南船】 諸方に旅行することをいふ。支那の地、北支那は水利に乏しいから馬背により、南支那は長江をはじめ水流が多いから船による。故にいふ。

【行李卸さざる所なく】 これは旅行中の手荷物、すなはち柳行李の類を處々で卸し、そこに滯留したことをいふのである。

「行李」は、もと使人の意に用ひた。次の例を見よ。

左傳の僖公三十年に「行李之往來。」

同襄公八年に「不レ使二一介行李告二于寡君一。」

【遊屐】 イウゲキ。木屐（木履）をはいて各地を遊歷すること。

「屐」は、木履。下駄。

【畛域を撤して諸生を待ち】 師たる威嚴を持せず、同輩として門弟に接するをいふ。

「畛」（シン）は、井田の間の陌、卽ち田圃の小路。故に畛域は界のこと。これを撤するとは、師と弟との界をとりはづしてしまふことである。

莊子に「泛々乎若二四方之無一窮、其無レ所二畛域一。」

山陽は醉餘に乘じ、時に戲にみづから外史を講じたことがある。その時、手拭をもつて鉢卷をなし、はたきをもつて采配となし、かつ說きかつ揮ひ、ほとんど講釋師のやうであつたといふ。これらもその一つであらう。

【禮貌を外にして王公に接す】 禮容を修めずして王公に接すること。

「禮貌」は禮儀を正し、容貌をとゝのへること。禮儀正しき容貌。

孟子の告子下に「禮貌未レ衰、言不レ行也則去レ之。」

日野大納言がかつて都下の諸儒者を招いた時、山陽も招かれたが、固辭して應ぜず、「野人禮にならはず、もし野服の出入を許し、賜與の際臣禮に類するなくば、敢へて命を奉ぜん。」といつたので、大納言はこれを許した。諸儒が聞いてその傲慢を議したので、山陽は書を作つて宴に赴くを辭した。その辭がます〳〵不遜であつた。大納言はいよ〳〵その不屈を愛し、その後は、ひとりこれを招いて宴を賜うたといふ。

【政記】　日本政記。十六卷。神武天皇より後陽成天皇まで百八世二千年間にわたる漢文の編年史で、山陽晩年の作。要所ごとに自己の議論を載せてある。

【外史】　日本外史。二十二卷。史記の世家を範に取つて、源平二氏より德川氏までの武家諸家のことを記した漢文の歷史。獨力拮据二十年にして始めて成り、これを家に藏してゐたが、松平定信（樂翁）がこれを聞き、禮を厚うして稿本を請ひ、はじめて世に公にしたといふ。

政記よりも人に知られ、永く天下に愛讀されてゐる。

【平凡】　ヘイボン。つねなみで、少しもすぐれたところのないこと。又そのもの。なみ〳〵。平々。平々凡々。

朱熹の齋居感興詩序に「顧以二思致平凡、筆力萎弱一、竟不レ能レ就。」

【事實】　眞實の事わけ。實際の事柄。

史記の莊周傳に「率皆虛語無二事實一。」

【誤謬】　ゴビウ。あやまり。まちがひ。

吳志の韋曜傳に「懼レ有二誤謬一、數々省讀、不レ覺點汚。」

【體裁】　テイサイ。又、タイサイ。ありさま。かたち。すがた。

鄭文源の詩に「上下漢唐一觀二體裁一。」

【偏失】　ヘンシツ。中正を失つて、缺點の多いこと。

【筆墨の靈妙活動】　筆がよくまはつてゐること。文章のたつしやなこと。

【天馬空を行く趣あり】　文章の變幻出沒、さながら天馬の羈絆すべからざる趣あるをいふ。

「天馬」は、天上界に棲む馬の義。大宛國より產する非常な駿馬をいふ。千里の馬。

史記の大宛に「名二大宛馬一曰二天馬一。」

源平盛衰記第三十五、高綱宇治川を渡る條に「畠山の鬼栗毛も天馬の駒とはやりしかども。」

【敍事】　ジ・ジ。事實を有りのまゝにのべしるすこと。又、その詩文。

【脈々の餘情】　顯れずして存し、絕えたるが如くにして絕えない情、即ち盡きせぬ餘情をいふ。

「脈々」は、絕えず感ぜられるさま。

溫庭筠の詩に「花情羞脈々、柳意恨纖々。」

「餘情」（ヨジャウ）は、なごりの風情。言外の情趣。餘韻。

何遜の詩に「琴上聽二餘情一。」

【嫋々の餘韻】　デウ〳〵のヨキン。細く、長く、絕えようとして絕えない餘音。

「嫋々」は、（一）風のそよぐさま。（二）長くしなやかなさま。（三）音響の長く曳いて絕えないさま。（四）趣味が長くあとまでのこるさま。こゝは（三）（四）の意。

「餘韻」は、殘るひゞき。餘音。殘るあぢはひ。餘情。

蘇軾の前赤壁賦に「餘韻嫋々、不レ絕如レ縷。」

【戰爭を敍すれば云々】　日本外史にある一の谷の戰・千劍破城の戰・湊川の戰・四條畷の戰、川中島の戰・嚴島の戰より征韓軍の活躍に關する記事などに至るまで、一として讀者をして汗を握らしめないものはない。

「汗を握る」とは、危急の場合を傍觀して精神をこらすことにいふ。

北條九代記卷二に「宿老たちは皆共に汗を握りて周章せり。」

【別離を敍すれば云々】　主として櫻井に於ける楠公父子の訣別をさす。

「別離」とは、別れること。はなれること。離別。

屈原の九歌に「悲莫レ悲二兮生別離一、樂莫レ樂二兮新相知一。」

【敍論】　ジ・ロン。本文の序言に代ふべき議論。序論。緒論。

こゝは日本外史の卷首にかゝげた論文をさす。

【俯仰低回】　フギャウテイクヮイ。うつむいたり、あをむいたり、ゆきつもどりつしたりして、感慨を催すこと。

「俯仰」は、又「俛仰」とも書く。うつむくとあをむくと。

菅家後草に「俯仰天神與二地祇一。」

「低回」は、又低徊とも、低徊とも書く。心に思ふところあつて、首を垂れめぐらして、ゆきつもどりつすること。

史記の孔子世家に「余低徊留レ之、不レ能レ去。」

【感慨淋漓】　カンガイリンリ。感慨の情が溢れてぽたりぽたりと滴り落ちんばかりなること。

「感慨」とは、物事に感じて慨くこと。

劉楨の詩に「秋日多二悲懷一、感慨以長歎。」

「淋漓」は、水又は血などのしたゝるさま。たら〳〵。ぽたぽた。

韓愈の詩に「赤龍拔レ鬚血淋漓。」

【一唱三歎】　イッシャウサンタン。「唱」は「倡」に同じ。「倡」は歌句を發すること。琴音一たび倡へ、三人これに和するをいふ。

禮記の樂記に「清廟之瑟、朱弦而疏越、一倡而三歎、有二遺音一者矣。」

但し、今は幾たびも歎賞する意に用ひてゐる。こゝもその意に用ひたのであらう。

【博引旁搜】　ハクインバウサウ。博く諸事を引き、あまねく事實をさぐること。

「博引旁證」といふも、略〻同意の語である。

【明證確說】　メイシ・ウカクセツ。明確な證據にもとづいて說き明かすこと。

【了悟】　レウゴ。さとること。がつてんすること。

吳澄の詩に「談邊了悟蟬蛻殼。區中局促鳥在レ籠。」

【靈動】　レイドウ。靈妙に活動すること。こゝは筆がよくまはつて、文章の巧妙を極めることにいふ。

【感激】　カンゲキ。深く感じ入つて奮激すること。感奮。

諸葛亮の出師表に「由レ是感激、終許二先帝一以二驅馳一。」

【正記】　こゝは日本外史の本筋の記事。

日本外史編次の大體は左の通である。

巻一　源氏前記　平氏
巻二　源氏正記　源氏上
巻三　源氏正記　源氏下
巻四　源氏後記　北條氏
巻五　新田氏前記　楠氏
巻六　新田氏正記　新田氏
巻七　足利氏正記　足利氏上
巻八　足利氏正記　足利氏中
巻九　足利氏正記　足利氏下
巻十　足利氏後記　後北條氏　上杉氏
第十一　足利氏後記　武田氏
巻十二　足利氏後記　毛利氏
第十三　德川氏前記　織田氏上
巻十四　德川氏前記　織田氏中
巻十五　德川氏前記　織田氏下
巻十六　德川氏前記　豐臣氏上
巻十七　德川氏前記　豐臣氏下
巻十八　德川氏正記　德川氏一
巻十九　德川氏正記　德川氏二
巻二十　德川氏正記　德川氏三
巻二十一　德川氏正記　德川氏四
巻二十二　德川氏正記　德川氏五

正記を立つる標準一定ならず云々」とは、恐らく新田氏を正記に立てながら、豐臣氏を正記に立てないで、德川氏の前記の中に加へたことなどをいふのであらう。

【標準】　ヘウジュン。「標」は木表、「準」は水準（ミヅモリ）の義。めじるし、めあて。まと。

孫綽の文に「信人倫之水鏡、道德之標準也。」

【前後の矛盾を來す】　あとさきにくひちがひが出來て、つじつまのあはぬこと。

「矛盾」（ムジュン）は、事の前後そろはぬこと。自家撞着すること。

韓非子に「楚人有下鬻二楯與レ矛者一譽レ之曰、吾楯之堅、莫二能陷一也。又譽二其矛一曰、吾矛之利、於レ物無レ不レ陷也。或曰、以二子之矛一陷二子之楯一何如。其人弗レ能レ應也。」

【半生】　一生の半ば。

半融の詩に「爲レ客囊無二季子金一、半生踪跡任二浮沈一。」

【精力】　心身の活動力。精神の能力。根氣。氣根。元氣。

漢書の匡衡傳に「尤精力過レ人。」

【無韻の敍事詩】　ムヰンのジ・ジシ。原文に「無韻の本事詩」とあるのを通俗に從つて改めた。

「無韻」とは、韻をふまないこと。又、その文、即ち散文をいふ。

「敍事詩」は英語 Epic の譯語。詩の一種、抒情詩及び劇詩の對。作者自身の感想を沒却して、主に現實又は假作の事件を客觀的に敍述する詩をいふ。ホメロスのイリアッド、ダンテの神曲の如きは、即ちこれである。

日本外史は外形は詩ではないが、精神は立派な詩である、即ち無韻の敘事詩ともいふべきものである。

【論策】時事又は時政を論ずる文章。時事問題などについて、その策略を論じた文章。

【民政・市糴・水利・邊防】ミンセイ・シテウ・スキリ・ヘンパウ。民政とは、國政・法政に對して、公共の安寧を維持し、國民の幸福を增進することを主要目的とする政務。

「市糴」とは、米の賣買。轉じては廣く商業をいふ。

「水利」とは、水を使用し利用して、水運を通じ、又は田畑に灌漑すること。

「邊防」とは、邊境の防備に力を用ひること。

「民政」以下は山陽が蘇軾(東坡)の論策に擬して作つた新策の十餘篇の題目である。晩年これを改訂したものが、即ち「通議」である。

【迂疎空濶】ウソクウクヮツ。まはりどほくうといこと。世情に通ぜぬこと。迂濶。

【比々】いづれも〳〵といふほどの意。

戰國策、秦に「犯二自刃一蹈二煨炭一斷二死於前一者、比々是也。」

【熱情】ネツジャウ。熱烈なる情。

【大聲放語】タイセイハウゴ。大きな聲で、かつてきまゝなことをしやべりちらすこと。

【精華】セイクヮ。(一)すぐれてはなやかなこと。又、そのもの。(二)きつすゐ。正味。

楚辭に「揚二精華一以炫耀兮。」

【寸鐵人を殺す】短くて警拔な語句の、人の急處を衝くたとへにいふ語。

鶴林玉露に「曾子之守約、寸鐵殺人者也。」

【小品】セウヒン。「小品文」の略。みじかい文章。

世說文學に「有二北來道人一、與二林公一相遇。于二瓦官寺一、共講二小品一。」

【本質】ホンシツ。本來の性質。固有の性質。本體。實質。

薛直衡の詩に「娥眉非二本質一、蟬鬢改二眞形一。」

【想像】サウザウ。おもひやること。おしはかること。あてずゐりやう。

心理學上では、經驗又は記憶を材料として、心の中に新しい觀念を作ること。

【雄健】ユウケン。たけくすこやかなること。雄大にして剛健なること。

朱熹の許侍郎詩卷の跋に「觀二其長篇大句一、固自雄健豪邁、磊落驚レ人。」

【典雅】テンガ。たゞしくみやびやかなること。たゞしく上品なること。

魏文帝の與二吳質一書に「辭義典雅、足レ傳二于後世一。」

【遒麗】シウレイ。つよくしてうるはしいこと。

南史の柳惔傳に「惔非二徒風韻清爽一、亦屬レ文遒麗。」

【輕妙】ケイメウ。輕くして巧なること。輕快にして妙味あること。あつさりとして面白いこと。

邊讓の章華賦に「美二繁手之輕妙一、兮、喜二新聲之彌隆一。」

【歌行】カカウ。行も亦詩の一。白樂天の琵琶行、山陽の大風行の類。

文體明辨に「步驟馳騁、疎而不レ滯者曰レ行。」

漢書の司馬相如傳の註に「師古曰、行謂レ引。古樂府長歌行・短歌行、此其義也。」

【樂府】ガフ。漢詩の一體。漢の武帝のとき樂府を設け、歌謠を制定してこれを音樂にのぼせたところから、後世、その格調に擬して作つた詩の稱となるに至つた。我が國では白樂天の作が最も行はれたから、直にその作の稱となるに至つた。

文體明辨、六に「按樂府者樂官肄習之樂意也。蓋自二鈞天九奏、葛天八闋一、樂之來尚矣。……今採二漢以下諸辭一、分爲二九品一而別レ之。」

李白にも、古樂府がある。それは古の調をまねて時事を諷詠したものである。

山陽にも、日本樂府一卷の作がある。

【史傳】歷史や傳記。

鄭方の傳に「慷慨有二志節一、博涉二史傳一。」

【余詠物を欲せず……】江木鰐水の作にかゝる山陽先生行狀に

「余不レ欲二詠物一。詠物不レ若二詠史一。史中有二無數好題目一、隨レ讀淺深皆可レ成二新詩一。舍レ之而曰二雁字鴛梭一、無レ爲也。」

「詠物」とは、鶯・梅・硯・筆・山・水など、何にてもあれ凡て品物を題として詠じた詩をいひ、「詠史」とは、史實を題として詠じた詩をいふ。

「江木鰐水」名は戩、字は晉戈、通稱は繁太郎。鰐水はその號。安藝の人。篠崎小竹・頼山陽に從つて專ら儒學を修め、擢でられて福山藩藝の教授となつた。明治十四年（二五四一）歿、年七十二。

【雁字鶯梭】　ガンジアウサ。詩文などの字句を飾ること。

「雁字」は、雁の列をなして飛び行くさまを字と見なしたのである。

蘇軾の詩に「據レ樓百尺横二滄海一、雁字一行書二絳霄一。」

朱熹の詩に「據レ鞍又向二岡頭一望、路日天風雁字斜。」

「鶯梭」は、鶯の枝間を飛ぶさまが機を織る梭（ヨサ）に似てゐるといふのである。

張養浩の詩に「柳岸鶯梭巧織レ藍。」

また「燕剪鶯梭」などの對語もある。

【持論】　ヂロン。かねてより主張する議論。固く主持する意見。

漢書の嚴助傳に「朔皐不レ根二持論一、上頗俳優畜レ之。」

【その戯に作れる今様】　左の今様歌は山陽の作と稱せられてゐる。（但し、山陽の作に非ずとの說も有力である）

花より明くるみ吉野の、　春の曙見渡せば、
もろこし人もこま人も、　大和心になりぬべし。

「今様」は、今様歌の略。謠物（ウタヒモノ）の一種。弘法大師の「いろは歌」を嚆矢とすると傳へ、平安朝から鎌倉時代に盛に行はれた。歌女・遊女・白拍子等が主にこれを歌ひ、公卿・僧侶にも及んだ。歌體は普通七五調四句。歌想は神・佛・愛情をはじめ種々雜多で、庶民の實生活の描寫にも及んでゐる。歌詞の例、

蒼き都に來て見れば、淺茅が原とぞなりにける。
月の光ばくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。
（德大寺實定）

春の彌生のあけぼのに、四方の山邊を見渡せば、
花盛りかも白雲の、かゝらぬ峯こそなかりけれ。
（慈鎭和尚）

【跌宕】　テッタウ。常規にかゝはらぬこと。豪放なること。蜀志の簡雍傳に「性簡傲跌宕。」

【飄逸】　ヘウイツ。飄然として身を世外におき、俗事にかかはらぬこと。うき世ばなれのしてゐること。

【不群の態】　フグンのオモムキ。群類にぬきんづるおもむき。多くのものにぬけ出てゐるやうす。

漢書の十三王傳に「夫惟大雅、卓爾不群。」

【嗜好】　シカウ。たしなみ。このみ。

韓愈の詩に「嗜好與レ俗殊二酸鹹一。」

【馳騁縱横】　シシウジュウワウ。たてよこ十文字にかけまはること。こゝは自由にその得意の筆を走らせることにたとへていふ。

「馳騁」は、はやあしに走ること。

宋史の郭從義傳に「善二擊毬一、嘗侍二太祖于便殿一。命擊レ之。從義易レ衣跨レ驢、馳二騁殿庭一、周旋擊拂、曲二盡其妙一。」

【奇想を天外に飛ばし】　めづらしいおもひつきを巧に文筆にうつし出すことのたとへ。

【拘泥】　コウデイ。かゝはりなづむこと。一つの事に執着して、變通の道を知らぬこと。

程史に「翦々拘泥、不レ得二即決一。」

【演義述作】　エンギジュツサク。事實を敷衍して、おもしろく述べ作ること。

演義三國志の潘岳の文に「靈壁川以止レ鬬、晉演レ義以獻レ說。」

論語の述而篇に「子曰、述而不レ作、信而好レ古。竊比二於我老彭一。」

禮記の樂記に「作者謂二之聖一、述者謂二之明一。明聖者述作之謂也。」

【造詣】　ザウケイ。深く學問の奥義を極めること。「造」も「詣」も共に「至る」といふ義。

晉書の陶潛傳に「未二嘗有一所二造詣一。」

【李北地】　名は夢陽、字は獻吉、北地はその號。別に崆洞とも號した。明代復古學の大家。詩は何景明と共に李何と並稱せられ、その氣魄の雄大な點に於て、明代第一と稱せられてゐる。

【嚴海珊】　ゲンカイサン。清代の大詩人。浙江、烏程の人。雍正二年進士に擢でられ、累官して雲南知事に進んだ。

乾隆の頃、詩名が大いに高くなつた。

【題詠】ダイエイ。題を設けて詩をつくり、又は歌をよむこと。

【潛心】心を一事にひそめること。心をひそめて考へること。

漢書の董仲舒傳に「仲舒下レ帷發レ憤、潛二心大業一、令二後學者有レ所二統壹一、爲二群儒首一。」

【好案】カウアン。よい考案。よい工夫。

【研精】研究を積んで精微に至ること。

後漢書の盧植傳に「學好二研精一、不レ守二章句一。」

孔安國の尙書序に「研精覃志、博考二經籍一。」

【心血を傾倒(ケイタウ)す】心血をかたむけつくすこと。精力のあらんかぎりを出すこと。

「心血」は、精神。精力。氣魄。

【詩賦】シフ。詩と賦。

「詩」のことは、前に記してある。

「賦」も亦詩の一體。韻語を用ひ、心に感じたまゝを敍するもの。

簡野道明の故事成語大辭典に左の如く解說してある。

「賦」はもと詩の一體にして、韻語を用ひ、直にその事を賦敍するものなり。されども司馬相如が上林・子虛の二賦、揚雄が甘泉賦、班固が兩都賦より張衡が兩京賦、左思が三都賦の如き、歷代の作家多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに至れり。文選に載すを見ても、その盛を推知すべし。藝文志にいふ、「不レ歌而論、謂二之賦一。登レ高而賦、可レ以爲二大夫一。言感レ物造レ端、材知深美、可二與圖レ事、故可二以爲二列大夫一也。」と。蓋し古昔周の盛時に當りては、諸侯卿大夫以下皆微言を以て相感じ、聘問歌詠の事、列國に行はれず、詩を學ぶの士は隱れて民間に在り、而して賢人志を失ふの賦由りて作るあり。楚の屈原忠を含み潔を履みて世に容れられず、耿介の志遣るところなく、之を辭に發し、竟に後世賦體の法門を開き、その弟子宋玉の徒、その遺響を嗣ぎて賦體全く成るに至れり。我が國に在りても、貞觀・延喜の盛時の如き、苟もゝ章を作る者は、皆賦を以て主要とせざるはなし。所謂駢儷體の文は蓋し亦賦より轉じ來れる者に似たり。後世淸の沈德潛が唐宋八家文を撰するに當り、賦を以て古詩の流となしてその撰本に采入せざりしは、頗る古義に合せりと雖も、これを古今に通觀するときは、稍ゝ偏執に失するの憾なき能はず。されども爾來八家の文世に盛行するに隨ひ、賦體の文は漸く衰微に歸するに至れり。

【儼然】ゲンゼン。「嚴然」と通じて用ひる。おごそかなさま。いかめしいさま。

論語の子張篇に「望レ之嚴然、卽レ之也溫。」

源平盛衰記卷四十、法輪寺の條に「尊相嚴然として異香芬馥せり。」

【風靡】フウビ。草木の風になびくやうに、なびきしたがふこと。

史記の淮陰侯傳に「燕從レ風而靡。」

史記の儒林傳に「天下之學士、靡然鄉レ風。」

【僻(ヘキ)して】かたよつて。偏して。

【固有の天才】生れながらその身にそなへてゐる才能。

「固有」とは、もとよりあること。自然に所有すること。

孟子の告子上に「仁義禮智、非二由レ外鑠一我也。我固二有之一也。」

「天才」とは、天性の才能。自然にそなはつてゐる才能。

北史の李德林傳に「識度天才、必至二公卿一。」

【萎縮】キシュク。なえちぢむこと。なえちぢませること。

【經濟の學】こゝは經世濟民の學、卽ち國を治め民を救ふことを研究する學問をいふ。

嚴維の詩に「還持二經濟學一、來問二道安師一。」

【功力】コウリ・ク。ほねをり。努力。ちから。

「功力」は、別にクリキとよみ、功德の力といふ意味に用ひることがある。

曾我物語卷十、禪師自害の條に「法華經讀誦の功力により……安樂世界に迎へ取り給へ。」

などは、後の例である。

【詩才敏妙】シサイビンメウ。詩を作る才能が極めてさといこと。

「敏妙」は、俊敏で精妙なこと。さとくしてたへなること。

【天稟】テンピン。天よりうけた性質。うまれつき。生得。天資。天性。

宋史の溫益傳に「從レ微至レ著、無二片善可レ紀。至二其狡猾傳含一、蓋天稟然。」

【新機軸】シンキヂク。新工夫。新考案。

「機軸」は、(一)機關の軸、車輛の心棒など。(二)地球の廻轉する中心となるべき軸。(三)くみたて。計畫。工夫。方法。(四)物事の活動によつておこる中心。こゝは(三)の

意。

【卓識】　タクシキ。他にすぐれた見識。高い見識。卓見。

【愛情の熱腸】　純愛に燃えてゐる肺や腸。熱烈な愛情。

【面に盎(アフ)れて背に浹(アマネ)し】　面にも背にもみちあふれてゐる。全身に充ちあふれてゐる。

孟子の盡心上に「其生レ心也、睟然見二於面一盎二於背一、施二於四體一、四體不レ言而喻。」

【表彰】　ヘウシャウ。あらはしてあきらかにすること。善行などを褒めあらはすこと。

後漢書の光武帝紀に「感二致神祇一、表二彰德信一。」

【山陽先生行狀】　サンヤウセンセイギャウジャウ。頼山陽一生の行事を記した書物。山陽の門人江木鰐水著。

【才子】　才智のすぐれた人。才能ある人。才人。才物。

左傳の文公十一年に「昔高陽氏有二才子八人一。」

潘岳の西征賦に「賈生洛陽之才子。」

【我を悉(ツク)さざる者なり】　わが人となりを十分に言ひつくしてゐない者である。

【刻苦】　コクク。たいそう心身を勞してつとめること。苦勞を積むこと。

宋史の孔文仲傳に「少刻苦問學、號二博洽一。」

【詩稿】　シカウ。詩の草稿。詩のしたがき。

【苦心經營】　クシンケイエイ。こゝは、心を苦しめ、工夫をこらして文章をつくることにいふ。

「經營」は、(一)繩ばりして營み造ること。構へ造ること。(二)工夫をこらして物事をいとなむこと。計畫。こゝは(二)の意。

詩經の小雅に「旅力方剛、經二營四方一。」

【一句も苟(イヤシク)もせざりし實迹を審かにし】　一句をもなほざりにしないで、その推敲添削に力を用ひた實際の形跡をくはしく知つて。

【古賀穀堂】　コガコクダウ。名は蒹。穀堂はその號。精里の子。佐賀藩の儒者。はじめ學を父に受けた。ついで父に隨つて江戸に出で、柴野栗山・尾藤二洲・中井竹山・頼春水等と交り、終にこれら名儒とその名を齊しうするに至つた。天保七年(一四九六)歿。年五十九。

【千言立成】　千言の詩文が立ちどころに成る義。詩文を作ることのたつしやで早いことにいふ。

【敏才】　(一)俊敏な才能。(二)さとき文才。こゝは(二)の意。

【文稿】　ブンカウ。文章の草稿。文章のしたがき。

【依然】　イゼン。もとのまゝなるさま。舊に依つてかはらぬさま。

南史の沈文季傳に「其郡依然猶有二故情一。」

【改刪】　カイサン。詩文などのよからぬところを改め、不用なところを刪(ケヅ)り去ること。詩文を訂正すること。刪正。添削。改竄。

【與し易し】　クミしヤスし。相手にし易い。恐れるに足らぬ。

【逸事】　イツジ。軼事とも書く。普く知られない人の事蹟。

史記の管晏傳に「至二其書一、世多有レ之、是以不レ論論二其軼事一。」

【意匠慘澹】　イシャウサンタン。事物を施爲するにあたつてさま〴〵と工夫をこらすこと。

杜甫の詩に「意匠慘澹經營中。」

【忍耐】　ニンタイ。たへしのぶこと。こらへること。耐忍。

がまん。

【坐に】　ソゾロニ。何といふわけもなく心のすゝむさまにいふ語。こゝは、おぼえず、知らず識らず、などの意。

【景慕】　ケイボ。あふぎしたふこと。仰慕。

梁の簡文帝の文に「矧彼前賢、寧忘二景慕一。」

【創意の才】　はじめて物事を考へ出す才能。

「創意」は、はじめて考へ出すこと。おもひつき。かんがへつき。もくろみ。

【絢爛の華彩】　きらびやかないろつや。りつぱな光。

「絢爛」(ケンラン)は、(一)「きら〴〵と光りかゞやくさま。(二)詩歌文章などのみごとに修飾されて立派なさま。こゝは(二)の意。

蘇武の與レ妊書に「凡文字、少小時、須令二氣象崢嶸、采色絢爛一。」

「華彩」(クヮサイ)は、はなやかないろつや。美しいあや。立派な光。

【儒者】　ジュシャ。儒學即ち支那の孔孟の學を講ずる人。

孟子の滕文公上に「儒者之道、古之人若レ保二赤子一。」

史記の汲黯傳に「天下方招二文學儒者一」

【經義に耽り】 經義の研究に深く心をいたすこと。

「經義」は、經書即ち四書五經などの意義。

漢書の張酺傳に「講二論經義一」

【章句訓詁の末を爭ふ】 文章の眞の精神を求めないで、徒に語句の細事を詮議すること。

「訓詁」(クンコ)は、字句のよみかたや、わけ。訓はよみ、詁は句意。

漢書の揚雄傳に「雄少而好レ學、不レ爲二章句訓詁一、通而已。」

後漢書の東平王蒼傳に「蒼上二光武受レ命中興頌一。帝以二其文典雅一、特使二校書郎賈逵爲二之訓詁一。」

【唯一本旨】 ユヰイツホンシ。たつた一つの本旨。二つとない根本の趣旨。

【常套を襲ふ】 ジャウタウをオソふ。普通陳腐なことを繼承すること。

「常套」は、つねのしわざ。きまつたかた。ありふれたしかた。

【才幹】 又材幹。(一)事を爲す才能のあること。又、その才能。(二)有爲の伎倆をそなへてゐること。又その伎倆。

史記の淮南王傳に「騎上二下山一、若レ蜚。材幹絶レ人。」

源平盛衰記卷四、白山神輿登山の條に「權中納言匡房は和漢の才幹世にゆるされ。」

【吏務】 官吏の職務。又、その職務を執ること。

【區々たる論策】 つまらぬ論策。

「區々」は、瑣細なさま。つまらぬこと。

史記の陸賈傳に「欲下以二區々之越一與二天子一抗衡爲中敵國上。」

太平記卷一、玄慧文談の條に「悲しむらくは、公のただ古人の糟粕をあまなつて、空しき一生を區々の中に誤ることを。」

「論策」の解は、前に出てゐる。

【輟め】 ヤめ。

【名聲】 メイセイ。ほまれ。評判。きこえ。

【一世を鼓舞す】 その時代の人心をはげますこと。

「鼓舞」とは、鼓をうつて舞はしめること、轉じて人の氣をふるひたゝせること。

易經の繫辭に「鼓レ之舞レ之以盡レ神。」

楊子に「鼓二舞萬物一者其唯風雷乎。鼓二舞萬民一者其唯號令乎。」

【維新中興の遠因】 明治維新皇室中興の間接の原因。

「明治維新」とは、慶應三年(一八六七)の大政變をいふ。慶應三年十月十四日、將軍德川慶喜は內外の形勢を察し、上表して大政奉還を奏請した。明治天皇は直にこれを嘉納したまひ、十二月九日王政復古の大令を發布せさせられた。こゝに於て德川幕府は十五代二百六十五年で倒れ、さきに源頼朝が武家政治をはじめてから六百八十四年で政令が再び朝廷から出ることとなつた。世にこれを明治維新、王政復古又は王政維新といふ。

「中興」とは、盛に興る運にあたること。一說に、一旦衰へたものを中ごろに至つて再び興す意だともいふ。

詩經の序に「任レ賢使レ能、周室中興焉。」

漢書の宣帝紀に「功光二祖宗一、業垂二後嗣一。可レ謂二中興伊尹德殷宗周宣一。」

【感發】 感激發憤させること。感奮せしめること。

【散文】 英語Proseの譯語。語の數、配列音の抑揚等に何等の制限もなく、表現の自由な文章即ち普通の文章をいふ。韻文・律文・詩歌等の對稱。

【敷衍】 フエン。のべひろめること。おしひろめること。又、意義をのべひろめて他におよぼすこと。

【靈妙】 レイメウ。不可思議にして、はかり知るべからざること。くすしくたへなること。

【史學】 歷史を研究する學問。

宋史の楊億傳に「長二于史學一。」

【小說】 セウセツ。文學の一種。作者の空想によつて事實を構成し、世態・人情・人物の性格等を文字を以て敍した散文體の物語をいふ。

【實錄】 ジツロク。有りのまゝの事實を書いた記錄。正實な記錄。

漢書の司馬遷傳の贊に「有二良吏之名一、其文直、其事該、不レ虛レ美、不レ隱レ惡、故謂二之實錄一。」

【不可思議物】 フカシギブツ。ふしぎなもの。えたいのわからぬもの。珍妙不思議のもの。

【名目】 ミャウモク。ものごとのとなへ。名稱。稱呼。

【完璧】 クヮンペキ。完全にして疵のなき璧。轉じて、指

摘すべき些少の缺點だもない完全な事物。

史記の藺相如傳の中に、「臣請完璧而還云々。」といふ語があるが、こゝにはあたらぬ。こゝはたゞ字の通りに解してよい。

【上乘】　ジャウジョウ。佛語で最上等の意。

傳燈錄に「禪有深淺階級悟我空偏眞之理而修者、是小乘禪、悟吾法空所顯眞理而修者、是大乘禪、若頓了悟自心本來清淨元無煩惱無漏智不自具足此心卽佛、依此而修者、是上乘禪。」

【純然】　ジュンゼン。純粹で、まじりけのないさま。純乎。

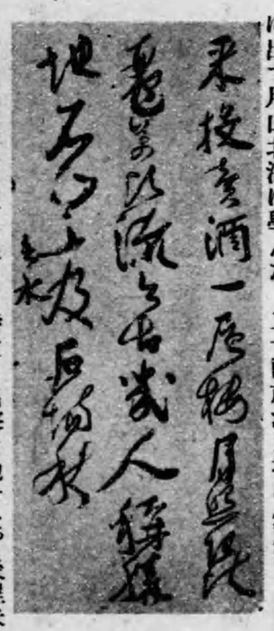
【實材】　經濟實用の事にたけたる材幹。又、その材幹ある人、卽ち實際の役に立つ人物。

【詞人】　詞藻に長じた人、卽ち詩賦文章に長じた人。「詩人」よりも意味がひろい。

【嘆賞】　「歎賞」に同じ。感心してほめはやすこと。嗟稱。感賞。

唐書の劉仁軌傳に「仁軌之辭、非臣所能、帝歎賞之。」

【春水】　シュンスヰ。賴氏。名は惟完、字は千秋・伯栗。通稱は彌太郎。春水はその號。別に霞崖・拙巢・和亭等の號がある。亨翁の子、山陽の父。廣島に生れ、大阪に出て片山北海に學んだ。二十四歳江戸堀に家塾を開き、又詩社混沌社を起して詩文に名聲を馳せた。後程朱學を修めて藩侯淺野重晟の嗣子齊賢の侍讀となり、勤續十一年の久しきに及んだ。その間幕命を受けて書を昌平黌御學問所に講じ、程朱の幽明を發揮して、一時を緊張せしめたといふ。世子が封を襲ぐに及んで、累進して侍臣に班し、俸三百石を給せられた。天性純篤、忠孝を以て自ら任じ、風格峻整、妻子眷屬といへども、未だ嘗てその惰容を見たことはなかつた。しかも人に接するに懇切を極めて、深くその心服を得たといふ。文化十三年（一四七六）二月十九日卒。年七十一。師友志・在津紀事・



東遊紀行・負劍錄・藤衣・竹原文集・春水遺稿等の著作がある。大正四年三月、從四位を追贈せられた。

【時流を脫せず】　當時の風潮から離れないこと。

「時流」（ジリウ）は、（一）當時の一般普通の輩。（二）當時の風潮。

南史の蔡廓傳に「年位並輕、而時流所推重。」

こゝは（二）の意と見てよからう。

【修史の業】　シウシのゲフ。歷史を編修する事業。

隋唐嘉話に、「不得修國史。」

【再四】　いくたびも。しば〳〵。たび〳〵。

普通に「再三再四」と熟して用ひる。

【嘆惜】　歎惜とも書く。なげきをしむこと。非常に惜しくおもふこと。

9　挿圖

賴山陽像

山陽晩年の像である。

賴山陽未定稿

眠驚船底響寒潮一　天草洋中夜繫橈
太白一星光似月　波間照見巨魚跳

山陽先生眞蹟西遊詩

「天草洋」は、長崎縣肥前國天草島の西方一帶の海。

「橈」は、音ダウ。舟のかい。又、さを。かぢ。

「太白」は、金星、卽ち明星（ミャウジャウ）。ことはあけの明星と見るがよい。

一首の意は、「はつと目がさめて見たら、船そこのあたりに多のつめたい潮のさゞめきが聞えた。それは、或夜橈（かい）をつないで天草洋上に假泊してゐたときの出來事であつた。ふと見わたせば、あけの明星は月のやうにかゞやいて、波間にをどる大きな魚の姿をはつきりと照らし出してゐた。

山陽先生眞蹟西遊詩は、全一册。賴山陽が九州に遊び、薩摩國阿久根（阿耨嶺）の河南源兵衛の家に逗留してゐたとき、旅行中に得た詩五十二首を書して與へたもの。明治十九年これを石版刷にして發行した。その詩はいづれも未定稿で、山陽詩抄に載せてあるものとは大いに異つてゐる。

賴山陽筆蹟　前の未定稿が推敲されて定稿となつたものである。

雲耶山耶呉耶越　水天髣髴青一髮　萬里泊舟天草洋　煙橫篷窓日漸沒　幣見大魚波間跳　太白當船明似月

この詩は、山陽詩抄に、「泊天草」と題して見えてゐる。「吳」・「越」（エツ）は、共に支那の古の國名。今の江蘇・浙江兩省の地方にあたる。

「水天髣髴」（スキテンハウフツ）は、水か空かの見わけのつかぬこと。

「篷窓」（ホウソウ）は、船のまど。「篷」はとま。船などのおほひとして用ひるもの。

「瞥見」（ベキケン）は、ちらりと一目見ること。

「太白」は金星、卽ち明星（ミヤウジヤウ。）、こゝは、宵の明星と見たい。

一首の意は、「ひとみを放つて、ひろ〳〵とした海上を眺め渡せば、空や水、水や空とも見わけのつかぬあたりに、かすかに髪一すぢほどの青いものが見える。あれはいつたい雲であらうか、山であらうか、それとも亦支那の吳の地方であらうか、越の地方であらうか。ともあれわれらは今しもこのはてしない天草の海洋に舟がかりしてゐるのである。とかくするほどに、夕けむりが舟の窓にになびき横たはつて、日もはや西山に入りかけた。この雄大な景に打たれてあちこちを見わたせば、大きな魚は波間にとびはねて夕方の寂寞をやぶり、よひの明星は月よりも明らかにわれらの船を照らして、實にいび知らぬ莊嚴ながめであつた。」

一二　水蓼

1　解題

竹柏漫筆に收められてゐる萩原廣道の文を採つた。

本課の教材に對して、同漫筆中の一篇「水蓼」のはじめに次のやうに記してある。

「源氏物語評釋」の著述に努力してゐた萩原廣道は、中風に罹つた爲に、その畢生の精神を注いだ事業も、「花の宴」の卷に止まつて、完結を見ることが出來なかつた。彼は病と窮迫とのうちに世を終へた。その著述は、稿の成るに隨つて出版するといふやうな境遇であつたので、草稿さへも殘らなかつたといふのは、まことに遺憾のきはみである。

この「源氏物語評釋」が未完の書ながら、源氏に關する最も秀れた評釋で、不朽の名著たることはいふまでもない。源氏の註釋といへば、誰しも季吟の「湖月抄」をいふが、これは全註ではあるが、創見がない。それは時代の早いにもよるが、主として彼の學風によるのである。それに對して、廣道の評釋は、その總論及び一卷ごとのはじめに加へた評論は、所謂眼光紙背に徹するといふべきものである。

萩原廣道

廣道は、一生を通じて、生活の上からは惠まれた人ではなかつた。文化十二年備前岡山に生れ、藩に仕へ、藤原濱雄といつたが、後故あつて浪人し、大阪に出て、萩原廣道といつて人々を教へ、文久三年に世を去つた。その若かつた頃は、上道郡龍口山の麓を毎日通つて仕へに出た。その頃の事を自ら書いたものに、彼が二十三歳の夏、天保八年に記した「水蓼」といふ文章がある。若くより窮乏の間にも中世の物語ぶみを好み讀んで、その文體に親しんで居つた多感の青年のおもかげが忍ばれるのみならず、その父とたゞ二人のわびずまひに、老いたる父をおもふ切情は、讀むものをして感泣せしめる。こゝにその全文を紹介しよう。

竹柏漫筆　チクハクマンピツ。

竹柏園主人佐々木信綱博士の漫筆「國歌君が代と正月元日讀歌」「長慶天皇御在位確認の史料に就いて」外六十餘篇と、そ

の夫人雪子刀自の隨筆「西片町より」の短文二百五十篇とを合せて公刊したもの。昭和三年六月、東京、實業之日本社發行。

2　作者

荻原廣道　ハギハラ　ヒロミチ。

德川時代の國學者。備前岡山の人。はじめ藩に仕へて藤原小平太濱雄といつたが、やがて浪人して荻原鹿藏と名のり、後また鹿左衛門と改め、葭沼、出石居、鹿鳴草舍、蒜園などと號した。幼時より國書を讀むことを好み、野々口隆正、前田夏繁等の指導を受けつゝ獨學を以て遂に一家を成した。浪人の後は大阪に住んだ。はじめは北野村に居り、伏見堀に移り、高麗橋に轉じ、次いで江戸堀、心齋橋に卜居し、更に北濱白子町に轉じて、文久三年(二五二三)十二月三日その邸に歿した。年四十九。

著書は、源氏物語評釋、本學提要、心の種、心の種拾遺、小夜時雨、遺文集覽、豆爾乎波略圖義解、手爾葉波係辭辨、萬葉集略解補遺、玉匣補遺、百首意見摘評、古言譯解等、無慮數十種に及ぶ。中でも、源氏物語評釋は北村季吟の湖月抄以來の研究を集大成し、特に總論二卷に於てその所見を披瀝し、最も出色ある好著として世に推されてゐる。又、嘉永二年蒜園散人の名で、曲亭馬琴作の開卷驚奇俠客傳の後をつぎ、その第五輯五卷を著して、往くところとして可ならざるなきその文才に一世を驚かした。

3　編纂の用意

本篇は德川時代に於ける國學者中の一異材荻原廣道のものした擬古文である。この種の文は、上級學校の入學試驗に應ずるものに取つては特に講讀の必要がある。わけてもこの文は、純正にして典雅、流暢にして平明、その盛るところの內容亦めでたく、寔に文想雙絕とも稱すべき佳篇である。若しそれ廣道が父に對して荻水の歡をつくすに至つた經路並に心境の變化に至つては、誰か强くその胸を打たれぬものがあらう。かゝる教材こそ讀本教材として最も理想的のものである。これ本篇をこゝに採擇した所以に外ならぬ。

4　要旨

水蓼は暑氣を拂ふに効驗があるといひ傳へられる草である。人の親の心は、すでに人並に成長した我が子の上を案じて、その仕事通ひの暑さの途中の用意にと、手づからこれを摘取つて子に與へる。子は父親の心盡しをさほどの事にも思はず、勿體なくも萎れさせた水蓼を、歸途にあやふくも袖の中に見出して、今更のやうに父親の慈愛に泣く。それにつけて、夙くから父の手一つに育てら

れた恩を思ひ、貧しい生計の中の父の苦を顧み、この父に何等報いようともせずして來たわれを反省して、始めて苦しい中から酒肴を調へて、父にまゐらせ、せめてもの孝を盡くすといふのである。水蓼はその孝心の醱酵素である。孝道への一念發起の契機を與へたものである。その點に着眼して、作者の心境轉向の狀を味讀せしめたい。

5　概說

第一節（七九頁——八〇頁三行）　天保八年夏の頃、仕へのために一里餘の道を他所に通つてゐた作者は、或日暑氣拂ひの藥として父が手づから取つてくれた水蓼を、何ばかりの事とも思はずながら受けて家を出かける。

第二節（八〇頁四行——八二頁）　その日の歸途、あまりの暑さに、今朝父から賜はつた水蓼のしをれたのを袖の中から見出して、今更のやうに父の心の有りがたさを思ひつゝこれを食ふ。そして尙も夙くから一人となつた父の我に對する慈愛をおもひ、家計の不如意から時には不平さへも言ひ、酒をたしなむ父を諫めなどした過去の自分の心根をくやしく思ふ。

第三節（八三頁——八五頁）　更に歸途を御野川まで來て、偶〻鱒の大漁を聞いて、それを土產に買ひ取り歸つて料理し、かつ、父に知られぬやうに、單衣を賣つて酒まで買ひ來り、これを父に進らせて、互に樂しく語らひながら盃を取交はし、夕食しつゝ、やがて轉び眠る父を蚊帳の中に抱き入れゝば、いさゝかはわが心もやはらぐといふのである。

6　取扱上の注意

◎この種の文は、作者の如何なる人であるかといふことが相當にわかつてゐなくては興を惹かない。先づ作者の傳に就いて、頭註以上に語られたいものである。

◎「親の心、子知らず。」といはれてゐるが、この文では、先づその事實が語られてゐる。「何ばかりの事とも思はざりしかど云々」といふ作者の態度は、後節への伏線としても、輕々に讀ましめてはならない。心ない人の子は、親の心づくしを「何ばかりの事とも」思はぬのみか、却つてそれを恨みにさへ思ふ。そして、それが眞にわかる

時は、すでに報ゆべき親はこの世にないといふやうなことが古來の例である。つまり、「子の心」といふものを、各自に反省させて見るのに、この一節の終は殊に恰好の材料となる。

◇「しをれてぞ出で來たる」といふ語は、父親から折角賜つた水蓼を、實は忘れてゐたといふことを表した言ひ方であることに注意させたい。「かくしなぶるまで忘れはてたる心こそは云々」と、後に自らも咎めてゐる。

◇「夏の日のあつきめぐみを水蓼の云々」の詠歌を中心として、作者が自らの心を描いてゐるのが、本文での味はひどころである。「親の心」に對して、「子の心」はどうあるのが世間の常であるか、また、どうあらねばならぬかといふことを、一般的に考察せしめたい。

7　設問

1　次の語句は如何なる意味か。

イ、はしたたきわたらひわさ。

ロ、忝しとも思ひたらず、なか〳〵老人のならひとさへに思ひあざむ。

ハ、心ゆかぬ折々は、いかでかうはなどうちもつぶやく。

ニ、魂きゆる心地して、ほれたるやうにてついゐたるを見そなはす。

2　夏の日のあつきめぐみ……の歌について、特に掛詞を説明せよ。

3　この文の作者の、父親に對する心の變化の著しく表現された點をあげよ。

4　水蓼は、この文の内容に取つて、どういふはたらきをしてゐるか。

8　釋義

【水蓼】　ミヅタデ　かはたで。やなぎたで。くれう。蓼科蓼屬の一年生草本。莖の高さ二三尺。分岐が少い。葉は廣披針狀、花序は穗狀で多少下垂し、初夏花を粗生する。本邦各地の水邊に產する。

【天保の八年】　テンパウのヤトセ。仁孝天皇の天保八年。（二四九七）

【はしたなきわたらひわさ】　つまらない世わたりのわざ。

「はしたなし」は、こゝでは、卑しい、淺ましい、つらいなどの意。

伊勢物語に「おもほえず、故郷にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。」

「わたらひ」は、世わたりのための生業、世わたり。なりはひ。すぎはひ。活計。

大和物語卷四に「年ごろわたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使ふ人なども德ある所にいきつゝ。」

【上つ道の郡】　カミツミチのコホリ　岡山縣上道（ジヤウタウ）郡。岡山市の東に隣接してゐる大郡。

【龍口山】　タツノクチヤマ。岡山縣上道郡高島村湯迫（ユハザマ）の東北にある小丘。上道郡の平地を下瞰してゐる。こゝに舊城塞がある。戰國の末、宇喜多直家が謀を以て龍口山城主撮所修理亮元常を擊殺したことが備前軍記に見えてゐる。

【まだき】　まだその時期に達せぬ時。こゝは「あさまだき」即ち早朝、未明をさしていふ。

伊勢物語に「夜もあけばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなを遣りつる」

拾遺集、春に「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに」

【歸さ】　カヘさ。「かへるさ」に同じ。かへるとき。かへりしな。

枕草子卷三に「祭のかへさ見るとて。」

後拾遺集、春上に「山櫻心のまゝにたづねきてかへさぞ道の程を知らるゝ」

【おとに聞く】　うはさに聞く。おとさたに聞く。

「おと」は音。たより。おとづれ。おとさた。風聞。

萬葉集卷五に「おとに聞き目にはいまだ見ずさよひめがひれふりしとふきみまつら山。」

【駿河の富士のねの云々】　萬葉集卷三、雜、高橋連蟲麿の詠（長歌）の反歌なる「富士のねに降りおける雪は六月の望に消ぬればその夜降りけり。」の意を取つて書き出でた

ものである。

一首の意は、「富士の嶺に降りつもつてゐる雪は、六月の十五日に消えると、その夜又降つて、千秋萬古、山のいたゞきに雪の絶えるときはない。

【六月】　ミナヅキ。陰暦の六月。「水無月」の義か。

【望】　モチ。陰暦で月の十五日の稱。「モチ」は「ミチ」の音轉で、月の滿ちる日、卽ち滿月の日を意味するといふ。

爲忠百首に「かぞふればもちに二日は足らねども光は空に滿てる月かな」

【道のほど】　道の距離。道の長さ。みちのり。道程。

【あしき氣(ケ)】　からだをそこなふ惡氣。毒氣。こゝは暑さの氣。あつけ。暑氣。

【驗】　シルシ。きゝめ。効驗。

【門邊】　カドベ。かどのほとり。かどわき。

謠曲、西王母に「百官・卿相・雲客……四方の門邊にむらがりて市をなし。」

【ほにいづ】　穗さきに實を結んで抽き出でること。又、人目につくやう、外にあらはれ出ること。

古今集、秋上に「今よりは植ゑてだに見じ花すゝき穗にいづる秋はわびしかりけり」

【よき程に摘みとらして】　いゝかげんの長さに摘み取つて。

【みけしきあしからむ】　御機嫌がわるいであらう。(父がわざわざ手づから摘み取つて、これをもつてゆけとてお授けになつた水蓼をうけとらぬとあつては)

「みけしき」は、御氣色。御機嫌。

伊勢物語に「おほやけのみけしき惡しかりけり。」

【さる面持もせで】　そのやうな(いやなやうな)顏もしないで。

面持(オモモチ)は、おもかげ。かほつき。顏色。

枕草子卷二に「所え、いみじきおももちして、事を行ひなどするよ。」

源氏物語の紅葉賀の卷に「同じ舞の足ぶみ、おももち、よに見ぬさまなり。」

【彼處のいとなみ】　かしこのしごと。自分のつとめさきの仕事をいふ。

【土さへさけて】　餘りの日照りに、大地さへひゞわれてゐることをいふ。

堀河百首、夏に「土さけて照る日も知らず消えもせぬ氷室は夏の外にやあるらむ」

【行手】　ユクテ。さして行く先方。行きむかふ方角。行くさきの道。

新勅撰集、春上に「玉ぼこの道のゆくての春風に誰が里知らぬ梅の香ぞする」

【道芝】　ミチシバ。道のほとりに生ずる芝草。又、單に芝のことをもいふ。

宇津保物語の俊蔭の卷に「葉末こそ秋をも知らめ根をふかみそのみちしばはいつか忘れむ。」

【しなえよられ】　しなびて、よぢれてゐること。

【田のも】「田面」。田のおもて。田のおも。たのむ。

夫木抄卷三十に「山もとの竹より奥に家居して田のもを通ふ道の一すぢ」

【すだく】　集ること。群がること。群集すること。

萬葉集卷十九に「大君は神にしませば水鳥のすだくみ沼を都となしつ。」

【隈々】　クマ〳〵。こゝかしこのすみ。すみ〳〵。

源氏物語の柏木の卷に「おもほし煩ひて、かゝるくまぐまをも尋ね給ふなりけり。」

【息づく】　長いいきをつくこと。ためいきをつくこと。

古事記卷中に「みほ鳥のかづきいきづき。」

【塘】　ツヽミ。「堤」と同意の語。水を圍み又は水に沿うて、その水のあふれぬふせぎに土を築いたもの。どて。

【たどりゆく】　路に迷うて尋ねてゆくこと。但しこゝは、おぼつかない足どりですゝみゆくことにいふ。

【手拭】　タノゴヒ。「テヌグヒ」の音轉。

和名抄卷十四に「手巾、太乃古比。」

靈異記下卷に「披(キ)敷布巾(太乃古比)。」

【とうでける】　「とりいでける」の約略。

【いたう】　「いたく」の音便。たいそう。はなはだ。

伊勢物語に「雨もいたう降りければ。」

【いとも畏かりけり】　まことにおそれ多いことであつた。

ほんたうにもつたいないことであつた。

「長し」とは、恐れ多いこと。もつたいないこと。
萬葉集巻十八に「かけまくもあやにかしこしすめろぎの神の大御代に。」

【人の親の心ほど世にもあはれに隈なく足らひたるものはあらじ】人の親の心ほど、その子に對して、まことにすみずみまでゆきとゞいて、少しの手落ちさへもないものはあるまい。

「人の親」は、人たるものの父母。鳥獸などの親と區別していふ。
後撰集、雜、藤原兼輔の歌に「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬるかな」

「世にも」は、世の中にとりわけて。殊の外に。世になく。
萬葉集巻十二に「あまをとめかづきとるたふ忘貝よにも忘れじいもが姿は」

「隈なし」は、かくれるところのないこと。ゆきとゞかぬ處のないこと。すみ〳〵までゆきわたること。

「足らひ」は「足り」の延音。十分なこと。不足のないこと。滿足なこと。

【たけだち】丈立。立つた身のたけ。丈の高い程合。
宇津保物語の初秋の巻に「たけだちよきほどに、姿のきよらなること、さらにならびなし。」

【はつかなる道の程】わづかなるみちのり。

「はつか」は、わづかに同じ。いさゝか。すこし。
古今集巻九に「はつがりのはつかに聲をきゝしより中ぞらにのみ物をおもふかな」

【夜光るらむ玉はものかは】世にこの上もなき寶と稱せられる夜光の珠なども物の數であらうか、物の數ではない。(反語)

「夜光の珠」は、古昔、支那で暗夜に光を放つといふ貴重な珠。
戰國策、楚に「遣二使車百乘一、獻二雞駭之犀一、夜光之璧一於秦王一。」
雪女五枚羽子板巻中に「卞和が三度足切られ、本意を磨く夜光の玉。」

【いかならむ寶位】いかなる尊貴な位。

「寶位」は天子の御位を申す語。但しこゝは尊い位といふほどの意と見るべきである。
易經、繫辭に「聖人之大寶曰レ位。何以守レ位。曰人。」
魏書、肅宗紀に「朕以二沖眇一纂二承寶位一。」
保元物語、新院御謀叛思召立の條に「萬乘の寶位を忝くす。」

【たぐふ】「比ふ」「類ふ」などの字をあてる。くらべること。ならべること。

【思ひたらず】「思ひてあらず」の約。

【なか〳〵】かへつて。けつく。
宇津保物語、樓上、下に「たゞいとおいらかにはづかしうきこえ給へば、なか〳〵のたまふべき事もなし。」

【思ひあさみて】思ひいやしめて。

「あさむ」は、賤しめること。嘲ること。
徒然草に「これを見る人あざけりあさみて、世のしれものかな。」

【かくしなぶるまで】このやうに(水蓼が)しをれてしまふまで。

【あさましなどはおろかにて】あさましいなどいつたくらゐでは、言ひ足らぬことで。

「あさまし」は、(一)淺はかなこと。思慮の深からぬこと。(二)意外のことに驚くこと。肝のつぶれること。(三)興のさめること。あきれかへること。けしからぬこと。(四)いやしいこと。きたないこと。さもしいこと。卑劣なこと。こゝは(三)の意。
竹取物語に「まことに蓬萊の木かとこそ思ひつれ、かくあさましきそらごとにてありければ。」

「おろか」は、「言ふもおろか」の略。言ふまでもないこと。
枕草子巻二に「月の頃は寢おきて見いだすもいとをかし。やみも亦をかし。有明はたいふもおろかなり。」

【我ながらいたういぶかしけれ】自分ながら、まことにふしぎてたまらぬ。(父のわざ〳〵摘み取つて、手づから授けられた水蓼を、手拭につゝんだまゝ、しなびてしまふまでうちやつておいたことが。)
「いぶかし」は、「訝」の字をあてる。疑はしいこと。不審なこと。

【はふれ落ちて】 はら〳〵と落ちて。
「はふる」とは、はら〳〵と散りみだれること。外に「あふれる」(溢)ことをもいふが、こゝは前の意と見るべきであらう。
【あまたたび】 數多度。いくたびとなく。たび〳〵。
古今集、羇旅に「夜をさむみおく初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたたびねぬ」
【ひたもの】 ひたすら。ひとむき。一途。
【夏の日のあつきめぐみを云々】 「おとうさまが夏の日のあつさの氣にかゝらぬやうにといふあつい思召でわざわざ摘み取つてお惠みくださつた水蓼の穂のことをすんでのことに忘れてしまふところであつたが、やつと思ひ出して、このやうにいたゞいて(たべて)、折角の御志を空しうせずにすんだ、まあ〳〵これでほつとした。」といふほどの意。
「あつき」は、夏の日の「暑き」に、厚き惠の「厚き」をかけた語。
「水蓼のほと〳〵」の「ほ」は、水蓼の「穂」をほと〳〵の「ほ」にいひかけたもの。
「ほと〳〵」は、今少しで。すんでのことに。ほとんど。
【さと】 「さつと」に同じ。(一)にはかに吹きくる風の音の形容。(二)急に。にはかに。こゝは(二)の意
【ほどばしり出づ】 たばしり出る。
「ほどばしる」は、「迸る」の字をあてる。飛び注ぐこと。飛び散ること。とびはしること。たばしること。
平治物語、三條殿發向の條に「灰燼地にほどばしりければ。」
【笠ゆりかたぶけて】 笠をゆすぶつて傾けて。
「ゆる」は、「搖る」の字をあてる。ふるひうごかすこと。ゆるがすこと。ゆさぶること。
蕪村句集に「酒十駄ゆりもて行くや夏木立」
【つら〳〵】 「熟」「倩」の字をあてる。念を入れて事をするさまにいふ語。つく〳〵。ねんごろに。よく〳〵。
徒然草に「つら〳〵思へば、ほまれを愛するは人の聞きをよろこぶなり。」
【來し方】 過ぎ來し方。既往。過去。

新古今集雜下に「こしかたをさながら夢になしつればさむるうつゝのなきぞかなしき」
【このひとところ】 「この一所」。この御一方。こゝでは父をさしていふ。
【そのほどの御慈愛】 その間(母を失つてから今日まで)の父上のおんいつくしみ。
「慈愛」(イツクシミ)は、かはいがること。大切にして育てること。うつくしみ、いつくしび、など、皆同意の語である。
謠曲、難波に「普きみ心のいつくしみ深うして、八島の外まで波もなく。」
【つゆ】 こゝは、少しも、更に、ちつとも、などの意。
枕草子巻三に「殿上人のつゆ知らで、よりきて物いふなどもあるを。」
【水し女】 ミヅシメ。水仕事をする女。臺所働きの女。はしため。下女。
【くだ〳〵しく苦しげなる家の内の事ども】 めんだうくさくて、苦しさうな、一家内の雜事ども。
「くだ〳〵し」とは、繁雜で厭はしいこと。めんだうくさいこと。しつこくわづらはしいこと。
源氏物語、夕顔の巻に「このほどのこと、くだ〳〵しければ、例の漏らしつ。」
【心ゆかぬ折】 氣にくはぬをり。心のすゝまぬとき。氣分のむしやくしやする折。
【いかでかうはなどうちつぶやき】 どうして、こんなに不整頓なのであらうなど、ぶつ〳〵と小言をいつて。
「つぶやく」は、「呟く」の字をあてる。ぶつ〳〵と小言などいふこと。くど〳〵いふこと。
源氏物語、須磨の巻に「たはぶれにてもあるまじき事なりといふを、入道いたくつぶやく。」
【性】 サガ。うまれつき。天性。性質。性分。
源氏物語、推本の巻に「いとくまなき御心のさがにて、おしはかりたまふにやあらむ。」
【こよなう】 「こよなく」の音便。この上もなく。殊の外に。格別に。別段に。
宇津保物語、藏開、中に「それは、年はわれにこよなく

このかみにてぞおはせし。」

【なま賢しげ】　なまじひにかしこぶるさま。小利口なさま。古今著聞集卷九に「なまさかしき事しいでてはあしかりなむ。」

【ひが〳〵しき心】　「僻々しき心」ねぢけまがつた心。源氏物語、末摘花の卷に「君のかくまめやかにのたまふに、きゝ入れざらむも、ひが〳〵しかるべし。」

【かきみだりて】　思ひ惑うて。わづらひなやんで。こゝの「みだり」は自動詞で、ら行四段に活用してゐる。それゆゑ、「みだれ」と同じ意味と見てよい。

【現し心】　ウツシゴコロ。うつしき心。常の心。正氣。正體。萬葉集卷十一に「ますらをのうつし心もわれはなし夜晝わかずこひしわたれば」

【のゝしり騒ぐ】　高聲にさわぐこと。「のゝしる」とは、やかましく言ひたてること。聲高く言ひさわぐこと。さわぎたつこと。竹取物語に「われこそ死なめとて、泣きのゝしること、いとたへがたげなり。」土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

【御野川】　ミノガハ。備前國朝日川(東大川)の支流。御津郡(御野・津高兩郡合併後の郡名)を流れて朝日川に注ぐ。

【堤】　ツヽミ。前の「塘」に同じ。その條參照。

【やすらひて】　休憩して。いこうて。やすんで。源氏物語、椎本の卷に「こゝにやすらはんの御心も深ければ、うちやすみたまひて。」

【鱒】　マス。鯉骨類の海產魚。喉鰾類に屬する。體は長さ二尺に達し、紡錘狀で側扁、鱗は細小、背部は濃青色に微褐色をおび、側線以下は銀白色をなす。體側には不正な黑斑が並列してゐる。北海道から東海道及び奧羽・北陸・山陰の海中に棲息し、五月より河川をのぼり、八九月頃急流の砂礫中に卵を產む。はらあか。

【多かなり】　「多かるなり」の約。

【珍らかなるもの】　めづらしいもの。

「珍らか」は、めづらしいさま。珍奇なさま。宇津保物語の樓上の卷上に「空のけしき……珍らかなる雲たちわたる。」

【待ちつけおはして】　待ちうけていらつしやつて。「待ちつく」とは、待つて、その人又はその時に遭ふこと。待受けること。枕草子卷二に「驗者もとむるに、……待ちどほに久しきを、からうじて待ちつけて。」

【勞れたらむを】　この「を」は感動の助詞と見るべきであらう。

【いかばかりわびしうおはしけむ】　どのやうに心さびしくどさつたであらうか。「わびし」は「侘し」の字をあてる。うらさびしいこと。ものさびしいこと。心さびしいこと。後撰集、冬に「霰ふるみ山の里のわびしきは來てたはやすく訪ふ人ぞなき」伊勢物語に「皆人ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。」

【胸つとふたがる】　胸がつつとふさがる。胸がつつとつまる。「つと」は、急に。何より先に。突然。つつと。ぐつと。宇津保物語の國讓の卷下に「宮きこしめして、女君をつとかきよせてのたまふやう。」「ふたがる」は、ふさがる。「塞」に同じ。源氏物語の桐壺の卷に「御胸のみつとふたがりて。」

【からうじてまぎらはしつゝ】　やつとのことでまぎらかしながら。「からうじて」は、からくしての音便。やつと。やう〳〵。やうやくのことで。から〳〵。わづかに。竹取物語に「火鼠のかは衣、からうじて人を出して求めて奉る。」

【鱠】　ナマス。細く薄く切つた魚肉を酢に和したもの。

【いかばかりうるはしき饗なりども】　どんなによい馳走であつても。「饗」(アヘ)は、饗應。馳走。神代記卷上に「貯(ヘ)之百机(ニ)而饗之(ミアヘタテマツル)。」

【さらぬやうにて】 それと心づかれぬやうにして。
【肆】 イチ。まち。市街。いちば。
【單衣】 ヒトヘギヌ。略してヒトヘ。裏のつかぬきもの。
ひとへもの。
和名抄巻十二に「單衣（比止閉岐沼）」とある。
齊明紀に單袷をヒトヘギヌと訓ませてある。
【しか〳〵】「云々」。かく〳〵。かやう〳〵。
落窪物語巻一に「このたびだに御かへりきこえたまへしか〳〵なむのたまひて。」
【いとさはに】 たいそうたくさんに。
「さはに」は、おほく。たくさんに。多數に。
古事記巻中に「おさかのおほむろやに人さはにき入りをり。」
萬葉集巻三に「いそのさき漕ぎたみゆけば近江のみやその湊にたづさはに鳴く。」
【めし給ひなむや】 おめしあがりになりませんか。
「めす」は、(一)呼び寄せること。(二)とりよせること。(三)食ふ・飲む・着る・乘るなど、人の所作事にいふ語。(四)受け入れること。(五)買ふこと。
こゝは(三)の意であること、申すまでもない。
【とく〳〵】 この下に「こゝに持ち來れ。」又は「われにすすめよ」などの語を補つて見よ。
【笑(エ)みまけたまひて】 笑ひ興じたまうて。
「笑みまく」とは、(一)思ひ設けて笑むこと。(二)笑みて待つこと。(三)たいさうゑつぼに入ること。(四)笑ひ興じること。こゝは(三)の意。
落窪物語巻一に「うれしくいみじと思ひて、口は耳もとまで笑みまけてゐたり。」
源氏物語の末摘花の巻に「かく世に珍しき御けはひのもり匂ひくるをば、なま女房などもゑみまけて。」
【おもほす事もなげにのたまふ】 何の心配ごともなささうにおほせられる。
「おもほす」は「おぼす」に同じ。「思ふ」の敬語。
「おもほす事」は御心に案じ煩ひ給ふ事柄。御心配ごと。
【常にしもかくてあらむよしもがな】「いつも〳〵このやうにして父上をお喜ばせ申す方法があればよいになあ。」

といふほどの意。
「よし」は、よすが、よるべ、たより、ゆかり、つて、てだて、手段、方法。
【さいつ年】「さきつ年」の音便。先年。
【惱ましうせさせ給ひたるけにや】 御病氣におかゝりなされたためであらうか。
「けにや」の「け」は、故・爲などの意。
竹取物語に「千たびばかり申したまふけにやあらむ、やう〳〵神なりやみぬ。」
貫之集に「……詠みて奉れる歌なり。そのけにや、馬の心地もやみにけり。」
【いたう〳〵づをれたまひて】 たいそうやつれおとろへなされて。「くづをる」とは、よわること、ひるむこと、やつれおとろへること。
【人なみ〳〵の貧しさ】 世間普通の貧しさ。
「人なみ〳〵」は、普通一般の人のなみ。世間なみ。尋常。
源氏物語の帚木の巻に「人なみ〳〵にもなり、少しおとなびんにそへて。」
枕草子巻三に「ねずもちの木、人なみ〳〵なるべきさまにもあらねど。」
【いかばかりもせむやうのありなむを】 何とでもしやうがあらうものを。どうとでもする方法があらうのに。
【魂(タマ)きゆる心地】 たましひが消えてしまふやうなこころもち。命が絶えさうな心もち。
【ほれたるやうにて】 ぼけたやうなさまをして。失心しやうなさまで。
「ほる」は、「恍」「惚」などの字をあてる。ぼんやりすること。うつとりすること。ぼけること。失心すること。
落窪物語巻一に、「いかなることと出で來むと思ひ歎きて、つら杖をつきて、ほれてゐたるを。」
源氏物語の若紫の巻に「つらう、いみじうおもほしほれて。」
【ついゐたるを】 つくぼうてゐたのを。うづくまつてゐたのを。
「ついゐる」とは、つくばふこと。かしこまること。うづくまること。

枕草子卷三に「たがぞと問ふに、ついゐて、なにがし殿のと言ひて行くはいとよし。」
宇津保物語、初秋に「仲正、賢の子についゐる。」

【見そなはして】 御覽になつて。
「見そなはす」は、「見る」の敬語。
古今和歌集の序に「今もみそなはし、後の世にも傳はれとて。」

【面持の常にしもあらざなるは】 かほいろがふだんのやうにないのは。
「面持」(オモモチ)は、かほいろ。
「常にしも」の「し」は、意味を強めるために添へた助詞。
「あらざなるは」は、「あらざるなるは」の「る」が省かれてゐるのである。

【心地やなやましき】 氣分でもわるいのではないか。
「心地」(コヽチ)は、こゝろもち、きぶん、きもち。
竹取物語に「翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。」

【すぐして】 すぐに。たゞちに。早速。すみやかに。

【今更】 イマサラ。今あらためて。今また更に。今となつて、こと新しく。
萬葉集卷十五に「遠き山せきも越えきぬいまさらにあふべきよしのなきがさぶしき。」

【やう〳〵にのどめて】 やつと心をおちつかせて。やつと心をしづめて。
「のどむ」は、おちつかせること。しづめること。
源氏物語の夕顏の卷に「心地もさわぎまどへど、思ひのどめて。」

【何くれのをかしき物語】 いろ〳〵さま〴〵のおもしろい物語。
「何くれ」は、何やかや。かれこれ。何のかの。いろ〳〵。さま〴〵。
源氏物語の帚木の卷に「よろづの御よそほひ、なにくれとめづらしきさまに調じ出で給ひつゝ。」
「をかし」は、おもしろいこと。よろこばしいこと。興のあること。趣味のあること。
枕草子卷一に「夏はつとめて……闇もなほ螢とびちが

ひたる、雨などの降るさへをかし。」

【夕食】 ユフゲ。夕の食事。ゆふめし。夕食(ユフシ・ク)。晩餐。
夫木抄卷十九に「千代までも民のけぶりや絶えざらむ鳥羽田のおものあさげゆふげに」

【ころぶしつゝ】 ころんでねながら。
「ころぶす」は、「轉臥」の字をあてる。ころびふすこと。
萬葉集卷二に「わが大君の立たせれば、玉藻の如くころぶせば。」

【熟睡】 ウマイ。ぐつすりと心よくねいること。じゆくすゐ。
萬葉集卷十二に「白たへの袂ゆたけく人のぬるうまいはねずやこひわたるらむ」

【そこら】 そのあたり。そのへん。そこいら。
狂言、貫鞍に「そこらあたりを尋ねますれど、居りませぬ。」

【つま戸】 「妻戸。」端戸(ハシド)の意。一に小脇戸ともいふ。板戸を兩開きにして、開くときは外の方へ開き、その戸を掛金でとめおき、閉ぢるときは內の掛金でしめおくもの。

【少しは心ものどまるやうにて】 この下に、「ありき」などの語を補つて見よ。
「少しは心もおちつくやうであつた。」といふほどの意。
「のどまる」は、のどかになる、ゆつたりとなる。しづまる。おちつく。
源氏物語の蜻蛉の卷に「心ものどまらず、目もくらき心地して。」

8 遷釋

天保八年といふ年の夏の頃、自分はつまらない世渡りの仕事のために、上道郡の龍口山のふもとに毎日通つてゐた。朝早くから起きて出かけて、歸るのは、いつも蒼過きる頃であつた。今日は昔に聞く駿河の富士の嶺の雪さへも消えるといふ六月の十五日だから、暑さは譬へようがないほどであるけれど、いつものやうに起きて、笠の紐を結びなどしてゐると、父君が仰せられるやう、「この暑い日にさらされて、一里に餘

る道中を歸つてくると、忽ち暑氣にあたつて、重い病氣になるかも知れん。この蓼といふ草は、その暑氣を拂ふものだと昔から人も言ひ、又、實際きゝめのあるものだから、これを持つて行きなさい。」とて、御自身で、門のほとりにある蓼の少し穗先に實を結んでぬき出てゐるものを、よいかげんの長さに摘み取つて、お渡し下さつた。自分は何ほどの事とも思はなかつたけれど、これを受けないと、父君の御機嫌がわるからうと思つたので、いやな顏もせずに受取つて、袖の中に入れて出て行つた。

先方での仕事をすませて歸りかけると、何しろ、この頃は、幾日も〳〵雨が降らず、土さへ裂けて照り續いてゐるので、行く道々の芝もなえられ、田の面にすだく蛙でさへこゝかしこの隅々に隱れてためいきをついてゐるほどだから、何とも言ひやうがないほど暑かつた。小川の塘をとぼ〳〵とあるいてゐる中、額の汗をふかうとして袖の手拭をとり出すと、そのとたんに、父君の下された蓼の穗のたいそうしをれてゐるのが、ばら〳〵と出て來た。思へばまことに勿體ないことであつた。人の親の心ほど、その子に對して、まことにすみずみまでも行きとゞいて、少しの手落さへもないものはあるまい。もはや成人して、身たけが人なみになつてゐる子のわづか一里ばかりの道中をさへ、深く御心におかけなされて、この蓼までも下された御志は、世になき寶といはれてゐる夜光の珠はいふまでもなく、どんな尊い位にもくらべることが出來ぬほど貴いものである。然るに、それを忝いともおもはず、却つて、老人のならひだとさへ思ひいやしめて、かやうにしなびるまで忘れてしまつてゐた不孝の心は、あさましいといつたくらゐでは言ひ足らない。自分は、どうしてまあこんな不孝をしでかしたらう、われながらふしぎでならぬと思ふと、涙がはら〳〵と落ちて、勿體なくて〳〵たまらぬやうな氣がした。そこで、そのしなびた水蓼を一つ〳〵引きのばして、幾たびとなくおしいたゞき、その半分ほどを、ひたすらにかみしめて食ひながら、

夏の日のあつきめぐみを水蓼のほと〳〵忘れはつべかりけり

とよみつゞけると、涙が更にさつとほとばしり出た。こんなに涙を出してゐては、途中で行き逢ふ人々が、ふしぎがるだらうと思つたので、笠をゆすぶつて、かたむけて、わが顏をかくしながら、なほつら〳〵とわが身の過ぎこし方を思ひつゞけてゆくと、七つといふ年の秋、母上がおなくなりなされてから後は、自分はこの一ところ（父君）のお陰にかくれて多くの年月を思ひのまゝに成人した。その間の御慈しみは、どれ程であつたらう。それなのに、少しもその鴻大無邊な御恩に報い奉らうとは思はず、女中の一人も使ふことの出來ぬほどの貧乏ぐらしであるので、面倒くさい一家の雜事を父君お一人におさせ申しながら、氣のむしやくしやする折々は、どうしてこんなに家の中が不整頓なのだらうなどと、ぶつ〳〵小言をいつて父君にあたりちらし、御性分としてこの上もなくお酒がおすきでいらつしやるのに、一獻をおすゝめ申すところか、なまじひに賢ぶつて、異見がましいことを申し上げたなど、すべて、どういふ不孝のしうちであつたらうなどと、いろ〳〵と後悔のあまり、心がかきみだれて、正氣を失ふかとさへおもはれた。

人がやかましくさわいでゐる聲にふと心づいて見れば、早くも御野川の堤に來てゐた。わたし舟を待つ間、木陰に休んであたりを見わたしてゐると、今年は鱒がかくべつに多いといつて、里人どもは、網をひきながらそれを捕つてゐた。いつもは見うけぬ珍しい魚だから、懷の錢を殘らずとり出して、中でも大きなのを買ひ取つて、藥に包んで歸つて來ると、父上は待ちうけていらつしやつて、「今日はたいそう早かつたね。暑いのに、ようまあ。さぞ勞れたらう。さあ一休みするがよい。」と、いつものやうに機嫌よく仰せられた。それにつけても、「この長い日を、たゞ一人、毎日自分の歸るのをお待ちうけになつてゐるのは、まあどんなにおつらい事だらうと思ふと、胸がつとふさがるのをやつとまぎらはしながら、あの魚を取出して、燒いたり鱠にもしたりしてさしあげようと思ふとき、どんなによい馳走があつても、酒がなくては。」といつもおつしやつてゐるのにと思ひ出したが、悲しや、その酒を買ふ錢がない。そこで心づかれぬやうにして、まちに出かけていつて、單衣を一枚賣つて少しの酒を買ひ取り、德利に入れて、さげて走り歸つて、「今日はかやう〳〵、御野川で漁夫が鱒をたいそう澤山とつてゐましたので、珍しく思ひまして買つて持ち歸り、酒さへ買つておきましたが、おめしあがりになりますか。」といふと、「それは珍しいことだ。はやうはやう。」と仰せられて、手許にお召しよせになり、「どんなにして、里人はこの鱒をとるかね。」などと、たいそうゑつぼに入らせられて、何の物おもひもなささうにおほせられるので、「かやう〳〵にしてとります。」などお話し申しながら、盃を取つておすゝめ申すうちにも、「どうか、いつも〳〵、このやうにして父君をお喜ばせ申す方法がありたいものだ。先年おわづらひになつたためであらうか、お年のわりあひには、た

いそうおやつれなされて、お弱くていらつしやるのに、こんなに貧乏して、お心のまゝにお樂しませ申し上げる方法さへ絶えてしまつたことは、まことに恐れ多く、悲しいことである。世間普通の貧乏ぐらゐなら、どうにでも方法があらうに、さはなくて、貧も貧、貧のどんぞこへおちこんでゐる一家の今の有樣こそ、悲しくくやしいきはみであるとおもふと、消えいるやうな心地がした。そこで何だか氣がぼけたやうになつて、そこにつくばんてゐると、父上はそれを御覽になつて、「かほいろがいつものやうにないが、氣分でもわるいのではないか。さあ一杯のんで、早くねなさい。」といつて、盃をくだされたので、今更のやうに、つと胸がふさがつて、涙がはら〳〵とおちてくるのを、やつとのことで心をおちつけて、何やかやとおもしろい物語などして、ひたすら父君をお慰め申し上げた。さうするうちに、夕暮が近くなつたところが、父君はたいそうお醉ひになつたと見えて、夕食をお召しあがりになりながら、ころりとねころんで、ぐつすりと寢ておしまひになつた。たいそうお弱くおなりなされたはいとお見うけ申すにつけても、何ともいひやうがないほどつらいおもひがした。そこで蚊帳をつつて、だきかかへて床の中にお入れ申し、あたりをかたづけてゐると、月の光が凉しげに澄みわたつて東のつま戸からさして來たので、少しは心のおちつくやうな氣がした。

9 挿圖

荻原廣道筆畫

立春　もろこしは猶冬ならし今ぞやゝ　わがひのもとに初日さすなる　廣道

「立春」は、春の節に入つた第一の日、大抵二月三四日頃。

「もろこし」は、古昔我が國で支那を呼んだ稱。

「ならし」は、「なるらし」の略。「にてあるらし」「であらう」などの意。

「やゝ」は、稍。次第に。やう〳〵。だん〳〵。そろ〳〵。

「初日」は、元日の朝日。

一首の大意は、

今やう〳〵我が大東の日本に初日影がさして來た。して見れば、西の方もろこし(支那)のあたりは、まだやはり冬の季節であるだらう。

一三　千里が竹

1 解題

近松門左衛門の傑作、時代物「國性爺合戰」第二段中の節錄である。

「國性爺合戰」は曾我會稽山・雪女五枚羽子板と共に近松の三傑作と稱せられるもので、正德五年十一月、彼が六十三歳の時の作である。これが興行は、三年越十七箇月續いて大入であつたといふ。明の亡命客鄭芝龍が、田川氏を娶つて生んだ鄭成功即ち和藤內を主人公とし、この父子が明國の恢復を謀らうとした事を戲曲化したもので、和藤內は明國の亂から逃れて日本に來た皇妹梅檀皇女をば、妻小睦に託し、父母途をかへて明へ赴くのであるが、本課はその船が彼の地に着いたところから始つてゐる。吳將軍甘輝は異母妹錦祥女の聟であるが、和藤內は彼の居る獅子城に達しようと欲し、途に逆臣李蹈天の虎狩の一隊に會する。和藤內は虎と格鬪してこれを威服せしめ、遂に一隊の將士を降して引率し、獅子城に赴かうとするのである。

近松門左衛門

2 作者

近松門左衛門　チカマツ　モンザエモン。

姓は杉森、名は信盛、平安堂・巢林子・不移山人などの號がある。承應二年の生れであるが、生地については諸說紛々、今も定說がない。就中長州萩の產で、肥前唐津の近松寺に遊學し、因つて近松と稱したといふ說と、京都に生れ、三井の近松寺にゐたとする說と最も廣く世に傳へられてゐる。初め京都堂上方に任官して從六位に敍せられたが、やがて致仕し、延寶五年廿五歳にして初めて近松門左衛門と稱し、都萬太夫座のために連年脚本を作り、既に狂言作者として名譽を馳せ、その作の今に傳はるもの十餘種に及んでゐる。又宇治加賀掾・井上播磨の爲に淨瑠璃を作つたが、元祿四年大阪に轉住し、爾來專ら竹本義太夫（筑後掾）の淨瑠璃作者となり、その作物は次第に老成圓熟の域に進み、元祿十六年初めて當時の事實を仕組んだ心中物「曾根崎心中」を出すに及んで、益々その戲曲的天才を發揮して、世間の大喝采を博するに至つた。その後、或は世話物に、或は時代物に、年々逸作の筆を絕たず、その作前後通じて百十數番の多きに上つた。その文學史上の地位については「我が國の沙翁」と推稱せられるのを以

ても知らるべく、その藝術の價値については、すでに世評の動かすべからざるものがあるので改めて贊するを要すまい。

享保九年(二三八四)十一月歿、年七十二。

3　編纂の用意

徳川時代の最も著名な劇作家大近松の作にかゝる「時代物」中、最も廣く當時に行はれ、今尚劇壇に持囃されてゐる「國性爺合戰」の中から「和藤内虎狩」の一節を採錄した。これ畢竟、その作を通してあらはるゝ日本精神と、その天馬空を行く底の快筆とに感歎せしめ、併せて劇文學の何ものたるかを知らしめたいとの企圖に外ならぬ。

4　要旨

自己の力を伸ばすことは愉快である。支配の欲望を滿たすことは會心事である。これは個人的に見ても、國家的に考へても、心ののび〳〵することである。史實に於ける和藤内父子の企圖は、この意味に於てどこまでも成就させてやりたかつた。近松はこの父子の企圖を藝術化して、天馬空を行くが如き想像力と、彼れが獨得の縱横自在な美化力・詩化力とを以て、思ふ存分に、和藤内の爲に、日本の爲に、萬丈の氣焰と壯絶快絶の勇猛心とを發揮させてくれたのである。「國性爺合戰」が三年越し十七箇月の大入叶といふ古今無類の大盛況を續けたのも眞に故あることである。本課ではその大傑作の一臠を味はせ、延いては文豪近松の文學史上に於ける地位及びその作品の價値などの一斑を知らしめ、近松の戲曲に關する大體の知識などをも收得させたい。

5　概說

第一段(八六頁——八七頁一一行)　神風の擁護によつて無事に海を渡つて、唐土の地についた老一官は、本國の形勢を妻子に語り、これから甘輝の城を指して行く手はずを打ち合せる

第二段(八七頁末行——九一頁七行)　父と別れた和藤内は、父の教に任せ、母を背負つて道を急いだが、遂に千里が竹に迷ひ込んで當惑した。をりから虎狩に卷き立てられた猛虎に出會ひ、劇しい格闘の末、遂に虎を打ち負かす。

第三段(九一頁八行——九五頁)　そこへあらはれたのは逆賊李蹈天の部下。和藤内は彼等を相手に奮戰して完全にこれを克服した。かくて降伏した支那兵を部下とし虎に乘つて獅子が城を指して行く。

6　取扱上の注意

◪「國性爺合戰」の梗概や、文學史上の評價や、實演當時の評判などを語り聞かせることは、本課を通讀させる前か、或は後かに必ずなさるべきである。殊に「船路の末も知らぬ火の」といふ冒頭の一句を說くには、少くとも、原文「もろこしぶね」の條の梗概を語り、都合によつては更にその前の「はまづたひ」の條なども話したいものである。

◪凡そ戲曲の興味は、漸層的に局面の展開して行く處に在るのであるから、一段を取扱ふにしても、前後の梗概を語ることは大切な仕事である。

◪この課だけで見ても、その和藤内の「いひぐさ」、「仕ぐさ」に、その虎の擧動に、更に兩者格闘の活劇に、近松の想像力の旺盛なことが感ぜられ、その舞臺面の敍景には、美化力・詩化力の非凡なことがうなづかれる。文章の流動の圓滑自在なこと、形容的修辭の剴切で奇拔なこと、讀者を魅せしめずにはおかない。

◪西鶴は聯想を以て勝り、或は聯想だけに止つてゐるが、近松は聯想力もあるが、想像力の旺盛なこと無類といつてもいゝ位である。かういふ風に想像力を働かせ、かういふ風に筆力を自在に働かせることは、いかに愉快なことであらう。芥川氏の「戲作三昧」の快味が、かういふ課を讀むと、またつく〳〵想像されるのである。

◪試みに修辭上から考察すると、本篇全體の調子は流れるが如く面白い。或は七五調に、或は懸詞に、或は頭韻法に、或は脚韻法に、又對句法に、あらゆる修辭的方法を巧みに用ひてある。

「船路の末も知らぬ火の筑紫は

「あとに擁護の神風や

「方角とてもしら雲の

「神はわが身にいすゞ川

「譽は異國・本朝に踏跨げたる鞍鐙

これらは七五調あり、懸詞あり、重義法あり、文に妙趣

を含めてある。

「千波萬波を押切つて Sempa Bampa 脚韻法。

「故郷へ歸る唐錦 Kokyo e Kaeru Karanishiki——頭韻法。

「二十四孝の楊香は孝行の德に因つて……脚韻法。

「揉むや揉まずに無理無體。……。 Momu Ya Momazuni Muri Mutai——頭韻法。

「噫々、村雨々々。 Kusame Murasame——脚韻法。

◪尙、本文に於て特に注意すべき修辭は美化法である。蓋し美化法は、邦文特有の修辭で、直接に露骨に表現せず、これを美化して讀者に柔い感じを與へ、春の夜に朧月を眺めるが如き感を起さしめる特徴がある。一例をあげれば、

「かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の惠に長ずる如く、天地の父母の助にや……。

かくて人生無上の悲しみも柔かくひゞいて讀者の胸にやんわりと迫り、自然にホロリとさせる。この他本文中にはげしい戰の敍述があるが、凡て美化法によつてこれを朧化した手腕、流石に巢林子の文である。

「やあ〳〵、うぬはいづくの風來人……しやくわん〳〵李蹈天とやら、石花菜とやら……。

あゝ、申し御勘忍、御免々々……。

噫々、村雨々々。

ちやぐちう左衞門……占城次郎・ちやるなん四郎・ほるなん五郎・うんすん六郎・すん吉郎・もうる左衞門・ぢやが太郎兵衞……。

これらは何れもユウモア（諧謔）の上乘なものである。

7　設問

1　この文の中で「日本」といふ語がどういふ場合に用ひられてゐるか。

2　日本精神がどういふ點で發揮されてゐるか。

3　最も痛快な點はどこにあるか。

4　最も滑稽な點は。

5　最も情味のあらはれた點は。

6　語句の調子のなめらかなところは。

1　次の語句の意味を問ふ。

かひ〳〵し。浩々たり。相伴。勢子の者。凄じなんどもおろかなり。ひるむ。しをらし。ほざく。數鎗。向後。供廻り。

8　釋義

【船路の末も知らぬ火の筑紫】船路の末を知らぬといふことを筑紫の枕詞なる「知らぬ火」にかけて文をなしたのである。さて「知らぬ火」を筑紫にかけていふことは、昔景行天皇が筑紫（今の肥前・肥後の地方）におはして、海の上に何とも知れぬ火の燃えてゐるのを見そなはし、火の國と名づけ給うたことから起つたといふ。今も筑紫潟卽ち有明沖のあたりで、夏の暗夜に見える燐光を俗に千燈籠といふ。

萬葉集卷五に「しらぬひ　つくしのくにに　なくこなす　したひ來まして。」

【あとに擁護（オウゴ）の神風や】あとにあふ（逢ふ）を擁護（オウゴ）の擁（オウ）にいひかけたのである。和藤內（鄭成功）は皇妹栴檀皇女を妻小睦に託してこの土（肥前の平戸）に留らしめ、父母（父鄭芝龍及び母田川氏）と道をかへて、明國に赴いたので、神明の加護によつて再會を得ることを賴みとし、おのれらを擁護せんために神の吹かせたまふ順風に乘じ、千波萬波を凌いで、父子の船がそれ〳〵唐土に到着したといふのである。

【唐土】モロコシ。我が國で支那を指していふ。これをモロコシとよむことは、「諸越の地」の字を文字讀にしたのであらうともいひ、或は「諸物が海を越す」意かともいふ。

「鄭芝龍一官」テイシリヨウイックヮン。和藤內の父。淨瑠璃では、芝龍は明帝を諫めて用ひられず、日本に亡命して名を老一官と改めたとしてある。次の「和藤內」の條參照。

【故郷に歸る唐錦】錦を着て故郷に歸ること。立身出世して故山に歸ること。

南史の劉慶遠傳に「遠爲雍州刺史、帝餞于新亭、謂曰、「卿衣錦還鄉、朕無西顧之憂矣。」

南史の劉之遴傳に「遴除南郡太守。武帝謂曰、令卿衣錦歸鄉、盡榮養之理。」

史記の項羽本紀に「富貴不レ還二故郷一、如二衣レ繡夜行一、誰知レ之者。」

白樂天の詩に「君不レ見、買臣衣レ錦還二故郷一。五十身榮未レ爲レ晚。」

【裝束ひきかへ】 裝束をあらためること。服裝をかへること。こゝは旅裝束にきかへたことをいふのであらう。

「裝束」（シャウゾク、サウゾク）は、(一)盛裝すること。衣冠をつけること。(二)身仕度すること。いでたち。(三)衣服。着物。こゝは(三)の意。

【妻子】 妻田川氏及び子和藤內。次の「和藤內」參照。

【わが本國】 わが生國。自分の生れそだつた國。

【時移り代變り】 時勢がうつりかはること。

陳鴻の長恨歌傳に「時移事去、樂盡悲來。」

徒然草に「飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時移り事去り云々。」

【李蹈天】 リタウテン。「國性爺合戰」中の假作人物。明國の大臣で、右將軍であつた。ひそかに韃靼王と結んで明國を顚覆せんことを謀り、遂に帝（思宗烈皇帝）及び皇后（華清夫人）を弑し、皇族・忠臣などを滅して、自から國王となつた。後、國性爺のために捕へられて酷刑に處せられた。

【引き入れ】 誘惑といふ程の意であらう。

【韃靼夷】 ダッタンエビス。元が滅びた後、その宗族が漠北に走り、遂に元の國號を去つて韃靼と稱した。可汗本雅失里は明及び瓦剌に攻められて大いに衰へたが、瓦剌の也先の死後達延汗が立つに及んで、國運が復興つて、後大いに明を苦しめた。その孫俺答の時益〻明の北邊を攻掠したが、清が興るに及んで、その諸部は皆これに降附した。

【司馬將軍】 司馬は戎馬の事を司る官。

周禮の大司馬の註に「司馬總二武事一官。」

尙書に「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二邦國一。」

【吳三桂】 ゴサンケイ。次の「和藤內」參照。

【ありか】 在處。あるところ。所在。

古今集、雜下に「風の上にありかさだめぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり。」

【義兵】 正義の爲に起す兵。

史記の酈食其傳に「聚レ徒合二義兵一、誅二無道秦一。」

【去んぬる天啓五年】 「天啓」は明の熹宗皇帝の年號で、その五年は實に我が後水尾天皇の寛永二年（一六二八年）に當る。

【二歲になりし娘の子】 いはゆる錦祥女。次の「和藤內」の項參看。

【當座に】 タウザに。すぐその座で。卽座に。

狂言、雙六僧に「相手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。」

【八重の汐路の中絕えて】 遠く八重の汐路を隔てて、娘と相見る機會のないことをいふ。

「八重の汐路」は、遙なる潮路。たいそう長くて遠い海路。やしほぢ。

後拾遺集、春上に「はるゞゝと八重の汐路におく網をたなびくものはかすみなりけり」

【草木の雨露の惠に長ずるごとく云々】

このあたりは、謠曲、熊野（ユヤ）の「草木は雨露の惠み、養ひ得ては花の父母たり。」などの句をおもひあはせて文を綴つたものであらう。

【天地の父母】 萬物を生々仕育せしむる天地（大自然）を父母になぞらへてかやうにいつたのである。

書經の泰誓に「天地萬物父母。」

【成人する】 セイジンする。幼年者が成長すること。おひたつこと。

狂言、比丘貞に「某伜を一人持つてござるが、殊の外成人いたしてござれど。」

【吳將軍甘輝】 錦祥女の夫。次の「和藤內」參照。

【和藤內】 戲曲「國性爺合戰」中の人物。「和藤內」は蓋し「和でも唐でもない。」といふ義から取つたのであらう。父は唐土、母は日本の生れだから。母は肥前國松浦郡平戶の漁夫の女田川氏、父は明の忠臣大師大爺鄭芝龍。

芝龍は明帝を諫めて容れられず、去つて日本に來り、名を老一官と改め、平戶の漁夫の女田川氏を娶つて和藤內を生んだ。明國が亂れ、皇妹梅檀皇女が日本に遁れて來つたので、その言に依つて明國は逆臣のために韃靼夷の侵すところとなつたことがわかり、和藤內は梅檀皇女を妻小睦に託し、父と途をかへて明

に赴いた。吳將軍甘輝は異母妹なる錦祥女の聟である。乃ちその獅子城に達せんと欲し、途で逆臣李蹈天の虎將の一隊に會つた。和藤内は虎と戰つてこれを威服せしめ、遂に一隊の將士を降して引率し、獅子城に到つた。そこで錦祥女に明を恢復するの志を告げ、母を質として甘輝に謀らしめた。錦祥女は和藤内に約束して、「事が成立したら白粉を解いて城外の濠中に流さう。成立しなかつたら、紅を流さう。」といつた。甘輝は錦祥女及び母の言を聞いて、心素より大義に歸してはゐれど、妻の緣に引かれて武道を捨てるといふ譏を惧れ、錦祥女を殺して和藤内に與しようとする。母は驚いてこれをとゞめる。甘輝は已むを得ずしてその請を斥け、母を城外に出して、和藤内に還した。錦祥女はこの間に、心既に決し、忽ち匕首を胸に貫いて斃れた。その血が流れて彼の濠中に浮んだ。和藤内は之を見て事の成らざるを知り、急ぎ城中に入つて甘輝に面し、その親緣を無視するを責めた。甘錦は頑として心を變へない。錦祥女始めて死を告げ、義に依つて甘輝を說き落した。甘輝は遂に意を定めて和藤内に從つた。和藤内はこれより大將軍となり、諸侯王に準へて延平王國性爺といひ、鄭成功と號した。母は大いに喜び、直に匕首をとつて自ら咽喉を刺し、死を以てこれを勵ました。甘輝・國性爺は奮然として起ち、韃靼王をば母と妻との仇敵と目さしてこれを攻め、進んで石頭城を拔いた。

尋いで、雲門關を越ゆるに當つて、楊貴妃の廟太眞殿の建立を名とし、辨慶の故事に依つて勸進帳を讀んだが、關の守將左龍虎・右龍虎は國性爺と知つて應じないのみか、却つてこれを執へようとした。國性爺は乃ち勇鬪して關門を破り、頻に數城を陷れて北州長樂城に入つた。時に天下の五十餘城は皆國性爺の威に服し、明の王化は漸く四方に及んだ。

こゝに於て明の遺臣吳三桂は、太子を奉じて九仙山より出で、小睦は皇女を擁護して平戸よりやつて來た。たま〳〵父一官は南京城に過り、逆臣李蹈天を殺さうとして却つて擒となつた。國性爺はこの報を得て大いに驚き、甘輝・吳三桂と共に走つてその城に達し、勢を盡くして攻めたてた。城が陷らうとするとき、韃靼王竝に李蹈天は父一官を縛して國性爺の眼前に出し、「汝が屠腹するか、或は日本に還るかしなければ、汝の父は速に斬つて了ふぞ。」と呼ばはつた。國性爺はこれに逡巡してよう前まぬ。父は大義の係る所を以てこれを勵ました。國性爺が決然として直に前まうとすれば、李蹈天が劍を父にさしつけるので、又進まれない。甘輝・吳三桂は、こゝ一大事と見てとつて、韃靼王に歎き告げ、「我等が運命は窮まつた、願はくば我等の命だけ助けられよ。速に國性爺の首をさしあげよう」と曰つた。王が心亂んで欣然たる所に、二人は遽に起ち、王を蹴倒してこれを縛した。國性爺もまた急に立つて父の縛を解き、李蹈天を捕へて酷刑に處し、王を笞うつて本國の獄に囚へた。こゝにおいて太子は位に即き、永曆皇帝と稱した。

【參考實傳】鄭芝龍　字は飛黃、泉州府南縣の人である。父を紹祖といふ。長じて穎悟、膽略が人に超えてゐた。萬曆の末海に航して日本に來り、又しば〳〵海上を往來し、後海賊の羣に投じた。崇禎元年明の國内が大いに亂れた時、福建の左布政司熊文燦の招に應じて黨を以て歸順し、兵を施して清兵に抗し、轉戰して屢〻これに克ち、飛虹將軍と號した。後太祖の遺裔華劍を奉じて南方に據り、平國公に封ぜられた。既にして勢が稍〻衰へ、永曆七年遂に清に降り、同十五年柴市に斬られた。（一二三二一）

鄭成功　初名は森、字は福松。芝龍が日本に來て平戸に寓し、田川氏を娶つて生んだ子である。風儀整秀、頗る威容があつた。崇禎十一年明に詣つて大學に入つた。王觀光がこれを一見して芝龍にむかひ、「この兒は英物で汝の及ぶ所ではない。」と言つた。隆武元年、芝龍は、太祖の遠孫唐王を立てて恢復を謀つた。唐王は成功を拜して防禦中軍都督となし、忠孝伯に封じ、朱姓を賜うた。因つて國性爺と號した。二年、芝龍は清に降り、唐王は殺された。成功は泣哭して儒服を焚き、永明王を奉じて明祚を繼ぎ、猶清に抗した。清は芝龍をして書を爲つて成功を招かしめたが、成功は之を却けて從はなかつた。永明十二年延平王に封ぜられ、招討大將軍に拜せられた。やがて大舉して南京を襲つたが、不幸にして敗北した。そこで南して海に浮び、臺灣に據り、猶明の正朔を改めなかつた。時に明の朱舜水も亦亡命して日本に來り、水戸侯に仕へてゐた。成功は舜水と謀り、兵を日本に借りて明室の恢復を計らうとしたが、事ならず。十六年（清の康熙元年）病歿した。年三十九。（二二八四—二三二一）

吳三桂　明將。初め明のために出でて清軍を拒いだが、叛賊李自成が北京を陷れるに及んで、清に降り、清の兵力を藉りて李自成を破つた。後、清の爲に南方を平げ、功を以て雲南に封ぜられた。降つて清の聖祖の時耿精忠等と共に清に叛し、自ら天下都招討兵馬大元帥と稱し、四川・貴州を侵した。後漸く强大となつたが、康熙十年病歿した。（——二三三八）

【承引】　ショウイン。うけひくこと。うけがふこと。承知。承諾。

魏書の刑罰志に「或拷不承引」

保元物語、內府異見の條に「御承引もなければ、重ねて申すに及ばず。」

【母を具し】　母をともなつて。母をつれて。

「具す」は、ともなふこと。つれだつこと。

夫木抄卷八に「澤水にほたるのかげの數そふは、わがたましひやゆきてぐすらむ」

【頓智】　トンチ。臨機に出る智慧。早速の智慧。機智。

曾我五人兄弟卷一に「さても頓智の重忠やと、各〻どつとほめたまふ。」

【千里が竹】 假設の地名。次のやうな俚諺・俚歌などより思ひついたのであらう。

虎は千里の藪に棲む。(俚諺)

虎は千里の藪さへ越すに障子ひとへがまゝならぬ（俚歌）

えらべたゞ千里をかへる寅の時（松永貞徳の附句）

支那にはこれに類する俗説はないらしい。

【潯陽の江】 ジンヤウのカウ。今は九江といふ。支那江西省の開港場で、鄱陽湖の長江に注ぐ所。水陸運輸の便に富み、商業が盛で、漢口・福州と相竝んで支那の三大市場と稱せられてゐる。この地は白樂天が琵琶行の名詩を殘したかどで、夙く世に知られてゐる。

【猩々】 シャウジヤウ。支那でいふ想像の獸の名。よく物を言ひ又酒を好むといふ。謠曲「猩々」には、潯陽の江のほとりに於て、海中に棲む猩々が出て酒を飲む場面を描いてある。

別にスマトラ・ボルネオ等の地に棲息する猿猴の類をもしかいふ。全面に長い毛が粗生し、耳は小さく、口は圓く突出し、尾及び臀に無毛の厚皮部がなく、性質が緩漫である。

【赤壁】 セキヘキ。支那湖北省黃州府黃岡縣の附近にある地。蘇東坡の前後赤壁賦によつて名高い。

赤壁の地名は、黃州府の外に、凡そ四ケ所ある。卽ち漢陽・漢川・江夏・嘉魚の赤壁がこれである。周瑜が曹操を困しめた赤壁は湖北省武昌府嘉魚縣の東北に在る。

東坡は神宗の朝、王安石と爭つて罪を得、黃州に配流された。東坡はこゝに配流中、元豐七年壬戌七月十六日の夜、赤壁に遊び、同年十月十五日夜、再遊した。竹添井々の棧雲峽雨日記に「坡遊二赤壁一、實在二北岸一。小岡臨レ江如レ劍。賦中所レ謂斷岸千尺、要不レ過二文士虛誇一耳。」とある。

【東坡】 トウバ。蘇東坡。名は軾、字は子瞻、東坡はその號。蘇洵の長子。仁宗嘉祐の進士。宋朝の文學者。博く經史に通じ、文を屬する日に數千言、所謂唐宋八大家の一人である。英宗の朝大理評事簽書に除せられた。神宗の朝、王安石と合はず、作るところの詩が忌諱に觸れ、黃州團練副使に貶せられた。哲宗の朝召還せられ、累官して翰林學士・兵部尚書となつた。徽宗の建中靖國元年（一七六一）卒。年六十。後大師を贈り、文忠と謚された。著す所に東坡集といふがある。

【配所】 ハイシヨ。配流せられたところ。流罪に處せられたところ。謫所。

北史に「元坦、配二北州營一、死二配所一。」

續日本紀卷九、神龜元年三月庚辛の條に「定二諸流配處遠近之程一。」

【獅子が城】 この城は甘輝の守つた城となつてゐるが、恐らくは假作の名であらう。「千里が竹」の虎に對して、獅子を持つ來てこれを對せしめたものとおもはれる。

【示しあはす】 互に相圖をして知らせあふこと。

天神記卷一に「示しあはせて、思ふまゝに本望を遂げさせ申すべし。」

【方角とても白雲の云々】 方角とても知らぬの「しら」を白雲の「白」にいひかけたのである。

「白雲の日影」は、白雲に照りはえてゐる日影（日光）といふほどの意味であらう。

【かひ〳〵しく】 「甲斐甲斐しく」の字をあてる。いさましく。けなげに。いきほひよく。

源氏物語の早蕨の卷に「人の御上にてさへ袖もしぼるばかりになりて、かひ〳〵しくぞあひしらひきこえ給ふめる。」

【たづきも知らぬ岩巖石】 取りつくすべも知らぬほどの大きな岩。

「たづき」は、手着の義か。取りつくべき方。たより。よるべ。よすが。

萬葉集卷十二に「あづさゆみ末のたづきは知らねども心は君によりにしものを」

「巖石」（ガンジャク）は、いはを。これをガンセキとよま

せないで、わざ〳〵ガンジャクとよませたのは、語調をつよめるためであらう。一語・一句・一言をも苟くもしない大近松の心づかひを生徒に知らせたいものである。

【根さし】根のさし出ること。又、その根。

源氏物語の明石の卷に「岩に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。」

【瀧つ波】タギツナミ。沸き上る波、逆卷く浪、などの意。「たぎつ」は「たぎる」といふ意。タキと清んで讀むのは後世の轉訛である。

萬葉集卷九に「落ちたぎち　流るゝ水の磐に觸り　澱める澱に月の影見ゆ」

【大明國】ダイミンコク。こゝは領土のひろい明の國の義で、明國を敬つていつたのでないことは勿論である。

「明」(ミン)は支那の國號。太祖朱元璋が金陵(南京)に據つて群雄を破り、皇紀二〇二八年帝位に即き、尋いで元を滅して天下を一統したに始まる。成祖の時都を北京(今の北平)に遷し、國威が甚だ盛であつたが、中頃以後、内には宦官が跋扈して黨爭が劇しく、外には北虜南倭の患があつて、國勢が大いに衰へ、遂に流賊が蜂起し、二三〇四年、毅宗の世に至つて闖賊李白成の爲に滅された。以後鄭成功をはじめ明室の恢復を圖つたものもあつたが、成功しなかつた。世を受くること十七代、二百七十七年。

【人里】ヒトザト。人の住んでゐる村里。

太平記卷五、大塔宮熊野落の條に「その道の程三十餘里の間には絶えて人里もなかりければ。」

【浩々】カウ〳〵。ひろ〳〵としてゐるさま。水などのひろびろとみちたゝへてゐるさま。

書經の堯典に「浩々滔天。」

【ほうど我をぬかし】「ほうど」は、ほと〳〵、全く、非常に、などの意。「我」は我意の略。茫然として拍子抜けのしたさまをいふ。

【母ぢやひと】おのれの母を呼ぶ詞。封建時代武士の間に行はれた語。文語で「母なる人」といふのを、口語にくづしたものらしい。

壽門松、上に「許して下され母ぢや人。」

【この脚骨(スネボネ)に覺えたり】この脚骨のつかれぐあひで、わかりました。

「脚骨」は、脹(スネ)の骨。

島原蛙合戰、二に「冥加知らず、罰當り、このすねぼを戴け。」

【魅(バカ)さば魅せ】だまさうとおもふならだませ。

「魅す」とは、人の精神を迷はしぼけしめること。たぶらかすこと。だますこと。

狂言、狐塚に「狐塚の狐が出てばかすといふほどに、ばかされぬやうにして番をせい。」

【小豆の飯の相伴】古から狐を稲荷明神の使とし、これに小豆飯及び油揚などを供へることがあるから、かやうに言つたのである。「狐がもし俺を化(バカ)すなら化せ。そのかはり、きさまの所へ行きつき次第、小豆飯の相伴(シヤウバン)にあづかるぞ。」といふのである。「相伴」は陪食・伴食の意。

【根笹】禾本科、山竹(メダケ)屬の竹類。桿の高さは數寸に過ぎず、葉は帶白綠色で質が薄い。各地の庭園に栽培し、觀賞用に供せられる。根がよく蔓延して繁茂するから根笹の名を得るに至つたといふ。千里竹。

【攻鼓・鼓太鼓】セメツヅミ・セメダイコ。敵軍に攻めかゝる時相圖にならす大形の鼓や太鼓。

平家物語卷十一、遠矢の條に「平家みかた勝ちぬとて、頻に攻鼓を打つてをめきさけんで攻め戰ふ。」

蘆名家記に「攻太鼓を打つて摺上原に打つて出づ。」

【ちやるめら】哨吶。葡萄牙語。樂器の一種。喇叭に似て孔が七つある。頭尾は銅、管は木で造る。唐人笛。太平簫。(和漢三才圖會參看)

二代男卷八に「喇叭・ちやるめら萬の物の音までもゆたかに。」

【高音(タカネ)をそらし】「そらす」は、「逸」の字の義に近い。高音を發して遠方に達せしめる意。

【惘然】バウゼン。あきれるさま。

江淹の詩に「酒至情蕭瑟、憑レ尊還惘然。」

太平記卷五、相模入道田樂を弄ぶ條に「惘然として更

に知る所なし。」

【ちつとを臆せず】少しもおそれひるまず。少しもおそれたじろかず。

【讀めたり〳〵】わかつた〳〵。合點がいつた〳〵。

【異國】イコク。とつくに。外國。

李陵の答二蘇武一書に「遠托二異國一、昔人所レ悲。」

平家物語卷五に「異國の軍をしづめさせ給ひて。」

【鉦】カネ。たゝきがねの略。又、ふせがね・ひらがね、ともいふ。地に伏せ、撞木(シュモク)を用ひてたゝきならすもの。

枕草子卷六に「すきやうの鉦の音、われなめりと聞けば、たのもしくきこゆ。」

源氏物語の夕霧の卷に「不斷の經よむ時、かはりてかねうちならすに。」

【勢子】セコ。責子の意かといふ。又、かりこ。獵の時に鳥獸を驅り出す夫卒。列卒。

新六帖卷二に「明けわたるもと山遠くせこたてて夜ごめの鹿の行く方ぞなき」

【虎嘯けば風起る】古樂府に「虎嘯谷風起、龍興景雲浮。」

淮南子に「虎嘯而谷風至、龍興而景雲屬。」

易經の文言傳に「雲從レ龍　風從レ虎。」

【二十四孝】元の郭居業の選といふ二十四人の孝子。大舜・漢文帝・曾參・閔損・仲由・董永・剡子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒・丁蘭・孟宗・黃山谷の二十四人。この二十四人の選定の當を得てゐないことは公論である。

【楊香】ヤウキャウ。晉の人。年十四の時父と共に田にゆき、粟を穫つた。父は虎の爲に曳き去られた。時に楊香は手に寸鐵も帶びてゐなかつたが、たゞ父あるを知つて身あるを知らず、勇躍して向ひ前み、虎の頸をひきしめた。虎はくな〳〵として死んでしまつた。父はこれが爲に害を免れた。

【勇力】ユウリ・ク。いさましい力量。つよい力。

周禮の夏官司右に「國之勇力之士、能用二五兵一者屬焉。」

日本後紀卷二十一、弘仁二年五月丙辰の條に「田村麿、赤面黃鬚、勇力過レ人。」

【神力ます〳〵日本力】神の通力がます〳〵加はつて、和藤內の日本力がます〳〵その威を發揮したといふ意。

「神力」(シンリ・ク・シンリキ)は神の通力。神の威力。

源平盛衰記卷四十二、興一扇を射る條に「挾みて立てたる扇なり、神力既に指し副ひたり。」

【大人氣なし】おとならしからぬこと。こどもつぽいこと。

砂石集卷六に「おとなげなく彼を打たんとして、倒れて侍るねたさにこそ申し候ひつれ。」

【虎はおろか】虎は申すもおろか。虎はいふまでもなく。

【一挫ぎ】ヒトヒシぎ。一度にひしぐこと。むざふさにひしぐこと。

日本振袖奴卷四に「一挫ぎに取つて伏せ。」

【尻ひつからげ】「尻ひきからげ」の音便。衣服の裾をからげること。

【身繕ひ】ミヅクロひ。身じたくをすること。

源平盛衰記卷十五、宇治川合戰の條に「水の上にて身繕ひすな。」

【母をかこつて】「母を圍ひて」の音便。その身を以て母を蔽うて。

【西天の獅子王】サイテンのシ、ワウ。「西天」は印度を指す。獅子は百獸の王者とされてゐるから、獅子王といつたのである。

无量壽經に「如二師子王一、无レ所レ畏故。」

智度論に「又如二師子四足獸中獨歩无畏能伏二一切一。佛亦如レ此。於二九十六種外道中一、一切降伏。故名二人師子一。」

【畏れつべうぞ見えてける】獅子王は何物をも畏れぬが、たゞこの和藤內だけには畏れたやうに見えた。

「べうぞ」は「べくぞ」の音便。

【案に違はず】推量に違はず。おもつたとほり。あんのじやう。果して。

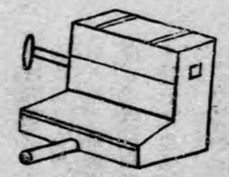
古今著聞集卷二十に「湯を穴の中に汲み入れたりける程に、案にたがはず、蛇出でて。」

【節根】フシネ。むすぼれてふしのやうになつてゐる樹木の根。わだかまつてゐる根。盤根。

【頬】ツラ。顏の兩傍、卽ち目の下の部分。ほゝ。

【いがみかゝる】怒つてかみつくこと。
「いがむ」は、「唖む」の字をあてる。
倭訓栞に、「犬猫などの怒り嗔るをいへり。法華經の唖喋をよめり。虚堂錄にも『千猿唖レ實』と見えたり。童蒙頌韻に『狺』をよめり。いがみづらなどもいへり。」とある。
【弓手】ユンデ。ユミテの撥音便。弓を持つ方の手。左手。又、左方。
保元物語、新院の御所各門々固の條に「ゆんでの肘めでに四寸のびて。」
【馬手】メテ。馬の手綱を持つ方の手。右手。又、右方。
保元物語、親治等生捕の條に「伊藤・齋藤、弓手・馬手より馳せよつて。」
【もちつてかゝれば】虎がからだをねちつてとびかゝつてくれば。
「もぢる」は、「捩」の字をあてる。ねぢりもとらすこと。すぢること。よぢること。
宇治拾遺物語卷一に「すぢり、もぢり、えい聲を出して。」
【身をかはし】身をひるがへして相手を避けること。
【撓めば】タワめば。こゝは虎がそのからだをまげゆがめるといふほどの意で、前の「よぢつてかゝれば」に對する語である。
【命競べ根競べ】命と根氣とのくらべあひ。(和藤内と虎とが)。
【えい〳〵〳〵】力を入れるとき發するこゑ。「えい」を重ねていつたもの。
狂言、どぶかつちりに「つぶてを打つて見よ……えい。えいやつとな。」
【怒り毛】獸類などの怒つて逆だつ毛をいふ。
太平記卷二十八、漢楚合戰の條にてる「獅子の怒り毛の如く卷きて。」
【大童】オホワラハ。髪の結びが解けて亂れ垂れたもの。
古は童は髪を結ばなかつたから、小兒を「わらは」といふ。わらく・はらくなど、皆散亂の意で、同源の語である。亂髪。がつそう。
【毟られ】むしられ。つかんで引き抜かれること。

宇治拾遺物語卷四に「雉子……いけながら毛をむしらせければ。」
【小首を投げ】少しく首をうなだれて。
「小首」は、くび。かしら。かうべ。
古今著聞集卷十に「手合はせして、長居、畠山が小首を強く打ちて、袴の前腰を取らんとしけるを。」
【鞴】フイガウ。「フキカハ」(吹革)の音便。鍛冶が火をおこすに用ひる具。押しつ、ふくらしつして空氣を驅り、これを孔から吹出させて火をおこす。



【神國】神のつくらせられた國の義。我が國人が自國を誇稱する語。
北畠親房の神皇正統記に「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へたまふ。我が國のみこの事あり、異朝にはそのたぐひなし。故に神國といふなり。」
【神より受けし身體髮膚】神さまからさづかつたこのからだや、頭髪や、はだへ。前に「神國に生れて」といひ出したから「神より受けし」といひつゞけたのである。「身體髮膚云々」については、
孝經の開宗明義章に「身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也。立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也。」
とある。
【畜類】チクルヰ。(一)家に畜ふけもの。家畜。(二)畜生のたぐひ。獸類。こゝは(二)の意。
源平盛衰記卷八、法皇三井灌頂の條に「天魔……聊か通力を得たる畜類なり。」
【力立て】力のあることを見せかけること。力自慢。
日本振袖初卷二に「力だてする天稚彦が細首ひきぬき、手足をもぎ。」
【怪我するな】正しくは「怪我すな」とあるべきだが、原文を尊重して、そのまゝにしておいた。
「怪我」(ケガ)は、(一)あやまち。過失。そさう。(二)過失によつて負傷すること。又、その負傷。こゝは(二)の意。

釋迦如來誕生會卷一に「早速參る筈なれども、膳をちとげが致し。」

【神はわが身にいすゞ川】 神はわがみにいますの「い」を伊勢皇大神宮の鎭座地を流れるいすゞ川にいひかけたのである。

「いすゞ川」(五十鈴川)は三重縣度會(ワタラヒ)郡にある川。一に御裳濯(ミモスソ)川・宇治川。俗には大川ともいふ。水源は二つ、一は逢坂山から出て皇大神宮の南を繞り、一は神路山(カミヂヤマ)から出て諸溪流を合はせ、神宮の南西に至る。二流はこゝで相會し、再び相分れて伊勢灘(二見が浦)に注ぐ。伊勢內宮の神域を流れてゐるので、特に名高い。參詣者は多くこの川で手を淨める。流域三里二十町。

【大神宮の御祓】 伊勢大神宮で受けた災難よけの御守札。

【納受などか無からんや】 どうしておうけいれがなからうか、あるにきまつてゐる。(反語)

「納受」(ナフジュ)はうけいれること。聞き入れること。

漢書の王尊傳に「上初納受章言。」

源平盛衰記卷十一、小松殿の夢に「この社に參りて、千夜通夜して祈り申す旨ありき、その御納受にや。」

【肌の護符】 ハダのマモリ。はだにつけるまもりふだ。

太平記卷三、赤坂の城軍の條に「觀音經を入れたりける膚のまもりに矢あたつて。」

【神國神祕のその不思議】 神國の神祕といふほどの意。句調をよくするために、更に「不思議」といふ文字を加へた。不思議にも直に神の感應があつたことをいふ。

【岩洞】 ガンドウ。岩のほらあな。

謠曲、龍虎に「竹林の岩洞は虎のすみかにて候。」

【尾筒】 ヲヅツ。尾の上の圓くふくれたところ。

曾我物語卷八、新田、猪に乘る條に「をづつを手綱に取り。」

井筒業平河內通卷一に「のら犬めと尾筒を取つて引き戻し。」

【ひるむ】 なえたわむ。くじけてちゞむ。萎縮。

【天の斑駒素戔男尊の神力】 素戔男尊が、天の斑駒を捕へて、その皮をお剝ぎなされた故事を採り來つて、和藤內が虎をひしいだ事に比したのである。

「斑駒」(フチコマ)とは、さし毛のある馬をいふ。上古の音には濁音がないから「フチコマ」と讀むのが正しい。

今は多く「ブチゴマ」とよみならはしてゐる。

【天照らす神の威德】 かく容易に虎をひしいだのは、人間業でなく、偏に天照大神の御威德であると、神恩の高きに感佩した義である。

「威德」(ヰトク)とは、威光と靈德。又、威光があつて德の高いこと。

謠曲、西王母に「今この御代に至り花咲くこと、たゞこの君の御威德なれば。」

この一段は次の如く語を補つて見るといゝ。「虎を打ち伏せ打ち伏せ、そのひるむ所をつけこみて、これに乘りかかり、足下にしつかとふまへしは、神代の昔、天の斑駒を逆剝にしたまひし素戔男尊の神力にも劣らず。げに我が身を守りたまふ天照大神の御威德ぞありがたき。

【うぬ】 きさま。相手を卑しめていふことば。「おのれ」の約轉。

【風來人】 フウライジン。何地よりとも知られず、風に吹きよせられたやうに來た人。漂到の人。浮浪の人。

【高名】 カウミャウ。(一)名高いこと。評判の高いこと。(二)武功。戰場で敵の首を取ること。

平家物語卷九、一二のかけの條に「保元・平治二箇度の軍に先懸けて高名したる武藏國の住人平山の武者所季重と名乘つて。」

【異議に及ばば】 異存をとなへるならば。

「異議」(イギ)は他に異なつた議論。異論。

後漢書の耿弇傳に「每レ有二四方異議一、輒召入問二籌策一。」

【しやぐわん〳〵】 意味がよくわからぬ。頭註にあるやうに、上官の詞で、將士などの意であらうか。

「なには土產」には「射官なるべし。火砲弓箭を射る役なり。」とある。すれば「射官よ、直にうち殺せ。」とでもいふことか。

【笑壺に入り】 エツボにイり。深く笑み興ずること。

保元物語に「龍顏頗る笑壺に入りておはします。」

【餓鬼も人數】 つまらぬ者でも多數といふ點で役に立つといふ意。「枯木も山の賑ひ」などいふと同類の諺。

故事要言に「これは物の數にも成らぬものといへども、時あつては便となる事ありといふ心なり。」

後撰夷曲集巻九に「お召しには餓鬼も人數と聞くからに、腰折れながら集を望めり。」

「餓鬼」は(一)餓鬼道に住する亡者。飲食物に乏しくて皮肉が枯槁し、常に饑渇に苦しむといふもの。(二)餓鬼道の略。(三)子供の賤稱。こゝは(一)の意。

【しをらしい事ほざいたり】 殊勝なことをぬかしたな。

「しをらし」とは、行爲の賞すべきこと。可憐なこと。殊勝なこと。

狂言、笠の下に「あゝそれはしをらしい事かな。」

「ほざく」は、べちゃ〳〵としやべり立て、又は情をかくさずしてものいふをいやしめていふ語。辯舌よくいろ〳〵にいひなすことをいやしめていふ語。

平家女護島卷四に「口あるまゝにほざいたり。」

【身が生國】 ミガシャウコク。自分の生れた國。

薩摩歌卷上に「わつちが生國は陸奥の國。」

【舌長し】 漢語の長舌から出た語で、言ひすぎすものを罵倒するに用ひる語。

詩經の大雅、瞻卬篇に「婦有二長舌一維厲之階。」

【石花菜】 トコロテン。トコロテングサで製し、おもに夏季に用ひる。食するにあたり、トコロテンツキと稱する一寸許の方柱狀の器に容れ、突棒で突くと、器の先端にある金網のために、トコロテンは細き饂飩狀のものとなる。これに醬油・酢などをかけて食ふ。この語は、「蹈天」と國音が相近いから、「李蹈天」を賤めていふに用ひ、且つ次の語の「つき出し」をきかせたのである。

原料は普通「天草」と稱する。天草は紅色藻類に屬し、磯濱或は海底の岩礁に產出する。靜岡・和歌山の二縣が第一、其の他長崎・青森・大分・宮崎・高知・德島・愛媛・島根・千葉・三重の諸縣竝に北海道・臺灣等より產する。種々あるが、オホブカ・キヌセグサ・ヒラモグサ・オンモグサなどがおもなるものである。これを漂白して釜などで煮、濾して滓を去り、液の冷えぬ中に槽に移して放冷すれば、透明無

色、海月の體に似たものが出來る。これを一定の形に切り、冷やしておき、食するときに前文の如くする。

【詫言】 ワビゴト。謝罪の挨拶。わびのことば。

大藏流狂言、武惡に「幾重にも御詫言を申し上げまする。」

【いかなこと】 「いかなることありとも。」の略。どんな事があらうとも。斷然。

【ねめつくる】 睨み付ける。強く睨む。疾視する。

【ものないはせそ】 「ものをいはせるな」といふ意味をつよくいつたもの。

「だまれ」などいふと同意。

【太刀差翳し】 タチサシカザし。太刀を高く頭上にふりあげて。

「差」は接頭語。「翳(カザ)すとは、頭上におほふこと。頭上におくこと。

【八方無盡に】 縱横無盡に。自由自在に。

【撫でまくる】 撫でぎりにしようとして斬りまくること。まくし立てて撫でぎりにすること。

【安大人】 アンタイジン。捕卒の頭。「大人」は彼の土で呼ぶ敬稱。

【官人引具し】 役人たちをひきつれて。

【老耄(オイボレ)餘さじと】 おいぼれどもをうちもらしはしまいぞと。

「老耄」とは、年が老いて、心のにぶくなること。又、そのもの。こゝは和藤內などをいやしめていふ。

禮記の曲禮に「八十九十曰二耄一。」註に「耄惛忘也。」

【一文字に】 こゝは「わきめもふらずに」といふほどの意。

【神明擁護の驗(シルシ)】 神さまがおまもり下さる効驗があらはれること。

「神明」は、神。神祇。

易經の繫辭に「始作二八卦一、以通二神明之德一。」

我が國では、特に天照大神を敬つて申す。こゝもその意。

【かり鉾】 よくわからぬ。雁股鉾(カリマタホコ)の略語でもあらうか。それとも、獵(カリ)に用ひる鉾といふ義か。

【數鎗】 カズヤリ。「數槍」とも書く。足輕などに數多持た

せる鎗の汎稱。
日本武尊吾妻鑑巻二に「二つ道具の行列に、毛槍、數槍、大鳥毛。」

【自在】ジザイ。物事の束縛なく、さはりなく、おもひのまゝなること。自由。
漢書の王嘉傳に「大臣舉錯、恣レ心自在。」
源平盛衰記巻十一、梶原逆櫓の條に「船に逆櫓と申すものを立て候て、軍の自在を得る樣にし候はばや。」

【宙】チウ。空。虚空。空中。
源氏十二段長生島臺巻二に「如何なる天魔・鬼神なりとも、宙につかんで微塵になし。」

【微塵】ミヂン。こまかきちり。轉じてきはめて微細なもの。
太平記巻三、笠置軍の條に「楯の板を微塵にうちくだかるゝのみに非ず。」

【打物】ウチモノ。打ちきたへたもの。刀・槍等の總稱。
保元物語、白河殿夜討の條に「恐らくは、弓矢とつても、打物とつても、われこそあらめ。」

【色めき立つて】敗れ崩れるきざしがあらはれて。潰亂の徴候が見えて。
太平記巻八、摩耶合戰の條に「寄手少し射しらまかされて、……色めきける氣色を見て。」

【どつこい】相手をおさへるときなどに發する聲。

【素首】ソックビ。「そくび」の撥音便。頭を罵つていふ語。
「そ」は發語ともいひ、又、「其」の意ともいふ。

【熟柿】ジュクシ。木になつたまゝよく熟した柿の實。よくうんだ柿の實。きざはし。
狂言、成上物に「澁柿が熟柿になりあがります。」

【五體】(一)筋・脈・肉・骨・毛皮の稱。又、頭・首・胸・手・足の稱。又、頭と兩手・兩足との稱。(二)總身。全身。
こゝは(二)の意。
保元物語、法皇熊野御參詣の條に「巫も五體を地に投げ、肝膽をくだきければ。」

【仁王立】ニワウダチ。仁王の如く勇猛に立つたさま。
「仁王」とは佛教守護の二神の稱。左輔を密迹金剛といひ、右弼を那羅延金剛といふ。共に勇猛獰惡の相をして

ゐる。通例、寺門の左右に安置する。

【手並】テナミ。うでまへ。わざまへ。てぎは。技倆。手腕。
保元物語、白河殿夜討の條に「手なみのほどを見せたれども。」

【我こそ……老一官が悴】この下に「にして」の三字を加へて見よ。

【音に聞えたる】うはさにきこえてゐる。
「音」は、うはさ。おとさた。風聞、などの意。
萬葉集巻五に「おとにきゝ目にはいまだ見ずさよひめのひれふりしとふ君まつら山。」

【悴】セガレ。我が子の賤稱。又、子が自ら謙つていふ稱。
谷川士清の錦屑譚に「今俗、我が子を稱してセガレといふは瘦枯の略なり。……憔悴(ショウスガレ)をいへり。廣韻に憔悴は瘦也といへり。又西人わが女をも稱して、憔悴といふ。共に自ら讓る辭なり。」とある。或は倅(副也、遊倅、倅之未レ仕者(ナリ))の訛かといふ。

【平戸】ヒラド。長崎縣北松浦郡平戸町。平戸島の北東端に位し、平戸瀬戸に臨む。中世以後松浦氏居住の地で、常に日支外交の衝に當つてゐた。天文以後は、ポルトガル人・オランダ人・英人等相次いで來航し、寛永年間まで對外貿易の中心として繁昌した。

【梅檀皇女】センダンクヮウヂョ。戲曲「國性爺」の筋によれば、大明の第十七代思宗烈皇帝の皇妹。逆臣李蹈天はこれを獲て妻にしようとしたが、吳三桂はこれを遮り止めた。後李蹈天は皇帝を弑した。吳三桂の妻柳歌君は亂離の中に皇女を舟にのせ、何處ともなく流しやつた。この舟が九州の平戸に漂着した。鄭芝龍はこゝに偶然皇女と邂逅して故國の亂を聞き、妻田川氏と共に藤津の浦より明國に渡つた。和藤内も亦別路を取つて、明國に渡つた。皇女は和藤内の妻小睦がこれを預つたといふことになつてゐる。

【三世の恩】サンゼのオン。前世・現世・來世の三世にわたつて緣のある主從の恩をいふ。
佛說によれば、親子は一世、夫婦は二世、主從は三世の緣があるといふ。

【否か應か】 いやか、承知か。
狂言、針立雷に「いやでもおうでも、今取らねばなりませぬぞ。」

【詰懸くる】 ツメカくる。近く迫り寄る。つめよる。
唐船噺今國性爺卷下に「互に柄に手はかけながら、……詰めかけ〳〵。」

【のう】 人を呼びかけるに用ひることば。通例「喃」の字をあてる。

【向後】 キャウコウ。キャウゴともよむ。この後。今後。

【お情頼み奉る】 おなさけをおかけ下さるやう、おたのみ申します。

【でかした〳〵】 こゝは勢子のものどもが和藤内に降服したのをほめていつた語。「よく降參した〳〵」といふほどの意。
「でかす」とは、効果を奏すること。しとげること。しおほせること。成功すること。
狂言、あかがりに「おゝ一段でかした。」

【月代】 サカヤキ。(一)冠の下髪を半月形に剃ること。月代(ツキシロ)ともいふ。(二)應仁の亂頃より武士は日常冑を用ひたから、額より頂にかけて髪を廣く剃つたが、後には土民上下の髪風となつた。こゝは後者の意。

【差添】 サシゾへ。刀にそへて佩く短い刀。わきざし。
太閤記卷十二、小田原御進發の條に「御太刀、さしぞへなど、こと〳〵しく若やかにものしたまひしよそほひなれば。」

【元服】 男子が始めて頭首に冠を加へ、大人の服を着け、成人となる禮。概ね男子が十五六歳に達する時これを行ふ。加冠者を烏帽子親といふ。鎌倉時代には六七歳でも行つた。後世男子の額髪を剃り、女子の眉を落し齒を染めるをもいふことになつた。
字義に就いては二説ある。(一)元は頭首、服は冠を着せしめる意。依つて又元服を始冠(ウヒカブリ)・冠禮・首服・首飾・初冠等ともいふ。又加冠した人を冠者といふ。(二)貞丈雜記に「元はハジメ、服はキモノとよみ、幼き者成長して始めておとなの衣服を着るをいふ。」とある。前説の方がよからう。

【鉢】 頭蓋骨を俗に「ハチ」といふ。但しこゝこの「鉢」は頭蓋骨と實の鉢、即ち月代を剃るに際し、髪を揉むに要する水を入れた水鉢とを兼ねていつたのである。

【こぼつ】 これまた前の鉢といふ字にかけて看るがよい。頭髪を剃るのみでなく、頭を傷つけこぼつのである。

【絲鬢】 イトビン。徳川時代の中頃に行はれた男子の髪の結ひ方。月代を大きくし、額より鬢にかけて剃り落し、鬢の髪を細くして結つた髪の風。
好色一代男に「世の風俗も絲鬢にして。」

【厚鬢】 鬢の髪を剃りおとさずに、頭の中央部より額にかけて狹く剃り落し、鬢の髪を廣くして結つた髪の風。
嬉遊笑覽卷一下に、箕山が大鑑を引きて、「髪の厚きは賤しからねど、初心めきたり。絲鬢に剃り下げたるは健かに見ゆれども、凡卑なり。細くして手先の上りたる猶賤し。鬢はたゞ厚からず、細からずして直なるがよし。」とある。

【二櫛半のばらけ髪】 髪を結ふに十分にすくことをせず、粗略に手早くするを「二櫛半」といつたのであらう。隨つて鬢附油を用ひて髪を固めることもなく、ばらけ亂れたまゝである。

【冷つく】 ヒヤつく。ひや〳〵する。

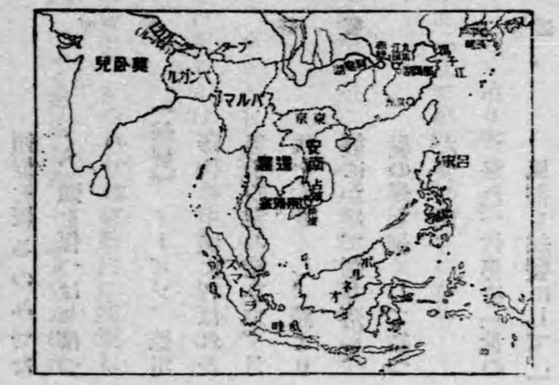
【噎々村雨々々】 クッサメ〳〵ムラサメ〳〵。クサメは鼻神經と呼吸神經との交感により、急に呼吸を起すもの。この時、吸氣は口腔から入り、呼氣は突然鼻孔から出る。急に寒氣を催す時、或は鼻粘膜を刺戟すべきものを吸入した時にこの作用がある。クッサメクッサメ村雨村雨と、噎の後に「村雨々々」と呼ぶのは、何故かわからぬ。恐らくは、たゞ尾韻をあはせる作者の手段であらう。邦

俗、迷信家は、嘘を以て、陰言をいふものがあるから起つたとしてゐる。倭訓栞に、「枕草子には、はなひて誦文する人と見え、徒然草には、くさめ〳〵とまじなふと見えたり。休息命の訛言也。（案ずるに、こは休息命よりクサメの語出でたりとするが如し）拾芥抄に、嚏の時の頌に「休息萬命急急如律令といへる是也。」と見えてゐる。

【供廻り】供人の群れ。供勢。

大織冠卷一に「御供廻りかろ〳〵と、わさと忍びの町乗物。」

【面々】おの〳〵。めい〳〵。各自。



延暦本平家物語卷一、成親卿の北方、備前へ使を遣はさるゝ條に「若宮・姫君も面々に父の許への御ことづてとて。」

【國所】クニドコロ。くに。くにさと。郷國。

【頭字】カシラジ。文章又は字句のはじめにある文字。かしらもじ。おやもじ。

【おつたてろ】さあ行け〳〵と逐ひ立てよ。

忠臣蔵に「逐ひ遣つて仕舞つた。」といふことを「ぼつたててしまつた。」とある。

【お先手の手振の業】おサキテのテフリのシウ。先陣をうけたまはつた供人の業。

「先手」は先陣。

鎌倉大雙紙に「成氏方の先手小山・結城の兵、一戰にうち負け。」

「手振」は、ともびと。従者。

宇津保物語の祭使の卷に「御馬どもひきたて、手ふりどち立ちなみたり。」

【ちやぐちう】不明。このころチンチウ（Chinchieo）といふは泉州で、厦門附近をいつたらしい。チャグチウの音は聊かこれに近い。

【東蒲寨】カボチヤ。（Cambodja）。「甘孛智」「眞臘」等の漢字をもあてる。印度支那半島の王國で、今はフランスの保護國（一八六三年）。

【呂宋】ルスン。ルゾン。（Luzon）。比律賓群島中最大の島。首府はマニラ。今は米領（一八九六年）。

【東京】トンキン。（Tongking）。印度支那最東北の平野を占める王國。首府をハノイといふ。古の交趾の地。今はフランスの保護國（一八八三年）。

【暹羅】シアム。（Siam）。印度支那の一王國。今は東西から佛・英に壓せられ、疆域が次第に減じた。

【占城（チヤンパ）】チヤンパ。（Champa）。今の佛領印度支那交趾の首府サイゴン附近の地を指す。

小鷄のチヤボは、この地の產である。

【ちやるなん】不明。印度の剎兀兒（チヤウル）國か。茶字縞の名はこれからおこつた。

【ほるなん】不明。ホルトガルのホルを取つたのか。

【うんすん】不明。昔、外國から渡つたカルタに、ウンスンガルタといふのがあつた。葡萄牙語では一をウンといふ。スンは不明。ウンスンガルタといふも、カルタの用法などから名づけたものらしい。それを地名としてこゝに用ひたのであらう。

【すん吉郎】不明。これはウンスンにつれて、口拍子にまかせ、出たらめにいつたのではなからうか。

【もうる】モゴル・モンゴル・ムグリ。（Monghol また Monghul）。古は「莫臥兒」の漢字をあてた。英人の手に歸せない前の印度帝國をいふ。

和漢三才圖會に「按、莫臥兒、南天竺之內最大國也。人物似暹羅、而色稍黑。四季同二干暹羅。」

【ちやが】ジャバ。（Java）。普通に爪哇と書く。マライ諸島の一で、和蘭領。その首都バタビヤの舊名をジャガタラ（Jacatra）といふより同地方をジャガタラといひ、そこを經て傳はつた馬鈴薯をジャガタラ芋（略してジャガ芋）などといふ。

【さんとめ】「聖多默」と書いたのもある。

和漢三才圖會に「佐牟止女、即南天竺莫臥爾之近國。人品亦同ニ于莫臥爾一。未レ來ニ於日本一。其土產、暹羅及中華人往々交易來ニ于日本一。」

又同書に「佐牟止女國土產、鮫・木綿綬・織物・鹿革。」

言海に「サントメジマ、棧留縞、初め印度東境の地聖多默（San Thomas）より來りしが故に名とす。」

【今參】　イママヰリ。新參。奉公人の新しきうちの名。

俚諺に「今參三十日。」

枕草卷子二に「今參のさしこえて、物知り顏に教へやうなることをいひ。」

【引馬】　ヒキウマ。古昔、貴人の儀從に鞍覆をかけて引きゆく馬。

東鑑卷四、元曆二年五月十七日の條に「能盛引馬、昭二基清之所從一。」

【虎斑】　トラフ。虎の背上の毛のやうに黃赤色で太い黑線の斑文あるもの。虎毛。

【日取る】　こゝは、引馬や虎斑の駒の緣語として言ひ出でたもので、別に意味のある語ではない。たゞ筆のすゝむまゝに書きつけて、文の調子をとゝのへたまでであると見てよからう。

【本朝】　ホンテウ。我が國の朝廷。轉じて、我が國。

砂石集卷一上に「當社は本朝の諸神の父母にて。」

【鞍鐙】　クラアブミ。馬の鞍と鐙。

「鞍」は、馬具の名。馬の背に置いて人又は荷物をのせる具。くらぼね。

「鐙」は、足蹈（アシフミ）の略。馬具の名。鞍の兩わきに垂れて、乘る人の足をふみかける具。

【威勢】　キセイ。たけきいきほひ。

管子の明法解に「人主之所ニ以制一臣下一者威勢也。」

9　挿圖

和藤內　鳥居清滿筆

和藤內が千里が竹で猛虎をひしいでゐるところ。

本文の中にある「虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ見づくろひ、母をかこうて立つたるは云々」の狀を描いたものである。

うしろに立つて大神宮の護符を捧げてゐるのは、いふまでもなく和藤內の母田川氏である。

筆者「鳥居清滿」（トリヰキヨミツ）は鳥居派第三世の畫家。通稱は半三。清倍（キヨマス）の子。家風を守つて畫をよくした。江戸歌舞伎の繪看板及び一枚摺の江戸繪、草雙紙の版下等を描いて名聲を馳せた。天明五年（一四四五）四月三日歿。年五十一。

「鳥居派」は浮世繪の一派。鳥居清元を始祖とし、その子清信によつて大成された。よつて、普通に清信をこの派の初世とする。その畫風は始め勇健粗剛であつたが、清長に至つて大いに柔和清緻となつた。この派は專ら芝居の繪看板を畫いた。

その系譜は次の通り。

一四　おのが物まなび

1　解題

本居宣長著「玉かつま」の巻二、「おのが物まなびの有しやう」の章を採つたものである。底本として「増補本居宣長全集」巻八を用ひた（五七頁―五九頁）。原本の假名を漢字に、或は漢字を假名に改めた部分もある。

「玉かつま」は宣長が備忘錄風に書きためておいた隨筆を、刊行のために自ら整理したもので、その殘後、文化七年に刊行を完了した。その内容は研究・考證・論文・感想等多方面にわたり、宣長の半面を窺ふに足るべき書である。

全十四巻、千百箇條、外に目錄一巻より成る。

2　作者

本居宣長　モトヲリ　ノリナガ。

享保十五年、伊勢國松阪に生れた。通稱は中衛。かつて書齋に三十六の鈴を懸け、時々鳴らして樂を散じたので、鈴屋と號した。はじめ京都に出て堀景山に儒學を聽き、武川幸順に小兒科の術を學んだが、二十八歳の時歸鄕して醫を業とし、傍ら研究につとめた。在京中契冲の著述を讀んで國學に志したが、眞淵の冠辭考を繙くに及んで、終に心を古學に潛めるに到つた。寶曆十一年、三十二歳の時、賀茂眞淵の來遊を要して對面し、古事記研究の示唆を受け、その門弟となり、古事記研究・古道闡明を終生の事業とした。古事記傳は三十五歳にして稿を起し、六十九歳にして成つた。又弟子を敎へ、その數五百の多きに上つた。

その著述は國語學・國文學・神道・歷史等多方面にわたり、その業績は永く學界に幾多の貢獻をなした。今悉く收めて本居宣長全集中に在る。

享和元年（一四六一）薨。年七十二。明治十六年正四位を贈られ、同三十八年さらに從三位を贈られた。

3　編纂の用意

江戸時代の擬古文讀解の練習に充て併せて文課の說明の具體例に供したものである。擬古文は近年高等專門學校の入學試驗問題として最も多く課せられる傾向にあるので、中學上級生の國語科に於ける最も強い關心の懸けら

れるものである。本課はかゝる要求の一端を充たすものとして讀解練習にあてると共に、所謂受驗準備的勉強法によつてゆがめられてゐる擬古文の解釋に適當なる指導を與へようとするものである。

4 要旨

本居宣長が、學に志してからの學問研究の經過を顧みたもので、初學當時の事情、和歌研究の經過、古道研究の經過等を追懐して述べたものである。

5 概說

第一節（九五頁——九六頁八行）初學當時の學問の仕方——師にも就かず、方針も定めず、たゞ手當り次第に和漢の書を讀んだこと。又十七八からは、これも自己流に歌を詠じたこと。

第二節（九六頁九行——九七頁一行）二十何歳の時、學問をするために京に上つた事情。

第三節（九七頁二行——九八頁七行）契沖の著書に啓發されて歌の良否の區別もわかるやうになつたこと。當代の人の歌にあきたらなかつたこと。

第四節（九八頁八行——九九頁八行）後に賀茂眞淵の著を得て、次第に眞の上古の精神と言葉を領得した。

第五節（九九頁九行——終）古道研究の經過。

6 取扱上の用意

▲文章の解釋の上には、如何なる文章についても同樣であるが、擬古文の場合には特に、一語一句をも忽にしないで、嚴密なる意味づけをして行かねばならぬ。殊に助動詞や助詞に十分注意し、形容詞・副詞・動詞に適確な解釋をあてることに氣をつけねばならぬ。

▲擬古文の教材に於ては、入學試驗準備の指導に備へる所があつてほしい。坊間行はるゝ參考書又は講說に特殊の解釋法や考へ方があるかの如き所論を發見するが、それらにのみよつて奇勝を博せんとするのは邪道であつて、克明な、正確な、平素からの讀解練習が最も確實有力なる準備法であることをよく心得させておきたい。

7 設問

1　全文を口語譯せよ。

2　「さるは」の意味を問ふ。

3　「を」といふ助詞の意味を言へ。

4　この課の中の係結を抽出して檢せよ。

5　「出で來つゝ」の如き「つゝ」を何と譯してよきか。

8 釋義

【いときなかりしほどより】幼少の時から、「いときなし」は「いとけなし」に同じ。

宇津保物語に「いとなきともがら……もみぢの露を乳ぶさとなめつゝありけるに」

【さるは】(一)さうあるのは。それは。さあるは。(二)さうではあるが。ではあるが。だが。

枕草子に「十とせばかりさぶらひて聞きしにまことに更に昔もせざりき。さるは、竹も近く、紅梅もいとよくかよひぬべきたよりなりかし。」

【はか〳〵しく】きはだつ。しつかりとしてゐる。たしかである。

【なにと心ざすこともなく】何を研究しようと目的を立てることもなく。

【そのすぢと定めたるかたもなくて】その方面の事と定めたこともなくて。

「すぢ」は、こゝでは、それに關した事。その方面等の意。

源氏物語に「たゞそのすぢをぞ枕ごとにせさせ給ふ」

【古き近きをもいはず】古い書物、新しい書物を論せず。

【なにくれと】何や彼やと。

【詠みはじめけるを】この場合の「を」は所謂逆接の「を」で、「であるが、然るに……」の意。

古今集に「白露の色は一つをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらん」

【それはた】それもまた。

【集】シフ。歌集。

【かたのごとく今の世の詠みざまなりき】世間普通のきまり通り、當世流の歌風に從つたのである。

【はたちあまり】二十幾歳。

國語の數の唱へ方は、二十一は「はたちあまりひとつ」二十二は「はたちあまりふたつ」といふやうに數へるの

である。

【さるは十一のとし】　こゝの「さるは」は「それは」の意。

【父に後れしにあはせて】　「父が死んだし、その上に」の意。

【江戸にありし家のなりはひをさへに失ひしほどにて】　江戸の大傳馬町にあつた木綿問屋の生計までが立たなくなつた頃のことで。

伊勢の松阪には古來豪商が多くて、何れも江戸店といふものを持つてゐたが、宣長の家（小津氏）はその中でもすぐれた中に數へられてゐたことが、「家の昔物語」に記してある。宣長の父小津三郎右衛門定利は、享保の初家を嗣ぎ、「元文五年庚申三月江戸に下り、その年閏七月病して、二十三日の夜戌の刻ばかりに、」大傳馬町一丁目の店で、四十六歳で歿した。妻のお勝（宣長の母）は時に三十六歳。宣長は十一歳であつた。

【おもむけ】　仕向け。そのやうにさせること。

源氏物語に「たゞ大殿の御おもむけのことなるにこそあなれ」

【よのつねの】　世間並みの。普通一般の。

【百人一首の改觀抄】　ヒャクニンイッシュのカイカンショウ。五卷。百人一首の歌を解するに、一種の見解を以てして、古註に拘泥しなかつた。考證は最も精しく、悉く古書に徵證してある。

自序中に、「下河邊長流、嘗て百人一首を註す。稿を綴り未だ脫せずして卒す。予素より古を好むの癖あり、長流と同病相憐む。生が志業終らざることを悲しみ、これが釋をつぎて、改觀と名づく。」とある。契沖の歿後、樋口宗武が堀景山と謀り、校訂添削して延享四年（一七四〇）序を附し、翌年出版した。

【契沖】　ケイチュウ。大阪、高津の圓珠庵の住職。俗姓は下川氏。名は空心。高野山の快賢や河内國、延命寺の覺彥に從つて學んだ。尤も國學に精しく、德川光圀の爲に、萬葉集代匠記を著した。その他和字正濫抄・古今餘材抄・勢語臆斷・漫吟集等の著がある。元祿元年（一六八八）正月二十五日入寂。年六十二。明治二十四年正四位を追贈せられた。

【餘材抄】　ヨザイセウ。古今餘材抄。二十卷。古今和歌集を詳解したもの。著者は嘗て萬葉集代匠記を著し、數多の珍書を集め、廣く參考したので、尙その材料の餘つたのを利用して本書を成し、工匠が家を造つて餘材のあるのにたとへて、かく書名を附けたものである。

【勢語臆斷】　セイゴオクダン。五卷。伊勢物語を註釋したものである。和漢古今の諸書を引證して、最も詳細に註してある。伴蒿蹊・田山敬儀等の序がある。

【けぢめ】　區別。わかち。わかれめ。

伊勢物語に「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、此の人は思ふをも思はぬをも、けぢめ見せぬ心なんありける。」

【やうやう】　(一)次第を追うて。だん〳〵。次第に。

枕草子に「春は曙。やう〳〵しろくなりゆく山際」

(二)辛うして。やつと。どうにかして。

狂言記に「やう〳〵の事して渡つたよ」

こゝは(一)の意。

【さるまゝに】　さういふ次第であつたから。

【今の世の歌よみの思へるむね】　現代の歌人の考へてゐる歌の主張。

【おのがたてて詠むふり】　自分が主義として詠む歌風。

「たてて」は、主義として標榜する意。

【冠辭考】　クワンジカウ。十卷。賀茂眞淵著。古事記・日本書紀・催馬樂、その他國史、格式等から、我が國語の枕詞を集め、五十音順に排列して、註釋を施し、說明を試みたもの。

【見せたるにぞ】　見せたのによつて。

【縣居の大人】　アガタヰのウシ。賀茂眞淵の敬稱。眞淵は遠江國岡部郷の人。通稱は岡部衞士。初め三四郎と稱した。明和元年、江戸の濱町に住し（以前は八丁堀に居た）庭を野邊や畑のさまに作り、「所もいさゝか傍なれば」として縣居と名づけたのである。

「大人」は一處の領主、又は貴人の尊稱に用ひる語。轉じて師又は學者の尊稱にいふ。

【事遠く】　事のかけはなれてゐること。耳馴れないこと。

【なほあるやうあるべし】　それでもどこか子細（理由）のある事であらう。

【立ちかへり】　事を繰返してすること。重ねて。

【げにさもやとおぼゆるふしぶし】　なるほどさうもあるかも知れないと思はれる箇條々々。

【いよ〳〵げにと覺ゆること多くなりて】「いよ〳〵」は「多くなる」に係けて見るべきである。「げに」の下には「然らん」などあるべき所である。

【契沖が萬葉の說】　契沖の著した「萬葉集代匠記」の中に見えてゐる說。

萬葉集代匠記は、三十一卷ある。契沖が、その師匠下河邊長流の稿を繼いで完成した萬葉集の註釋書である。

【歌まなびのありしやう】　歌の研究の經過。

【道のまなび】　神代ながらの道卽ち古道の研究をいふ。

【神書】　シンショ。神祇に關したことを記した書。

【志は進みぬるを】　希望は大いに盛になつたのであつたが。

【神道者】　シンダウシャ。神道を說く人。神道とは、天祖天神の示敎に基き、神祇を敬ひ、祭祀を重んずる我が國固有の敎義。後世、佛敎、儒敎等の影響で、一種の宗敎組織となり、多くの敎派に分れた。

【皆いたく達へりと早くさとりぬれば】　此の句は、「師と賴むべき人もなかりしほどに」といふ副詞的挿入句を隔てて、「われいかで古のまことのむねを考へ出でむ云々」に續く。

【田安の殿】　タヤスのトノ。德川宗武。吉宗の第三子。田安殿と稱し、十萬石を領した。賀茂眞淵に從つて國學を修め、國歌八論餘言、樂曲考及び字集等を殘した。明和八年(一二四三一)卒。年五十七。

【かへるさまにも】　歸りしなにも。歸る時も。

古今集に「慕はれて來にし心の身にしあれば、かへるさまには道も知られず」

【名簿】　ミャウブ。古昔、他に歸服し、又は師として入門する時など、證として送るもの。官位・姓名・年月等を認める。なづき。

9　挿圖

古今集詠村抄

著者契沖自筆本の卷末の一葉である。

山室山神社

三重縣松阪市の公園下大手にある。祭神は本居宣長で、もと同縣飯南郡花岡村山室山の丘嶺にある本居宣長の墓畔に明治八年社殿を營んだのを、後現地に移した。今縣社で、本居神社と稱する。

10　通釋

自分は幼少の頃から、書物を讀むことを、他の何事よりもおもしろく思つて、讀んだ。然るに特に師に就いて、わざ〳〵に學問をするといふでもなく、何を勉强しようと目ざすものもなく、またその方面ときめた事もなくて、たゞ和漢の種々の書物を、あるまゝに、手に入るまゝに、昔のもの今のものを論ぜず、何やかと讀んでゐた。さうするうちに、十七八になつた頃から歌をよみたいと思ふ心も起つて、詠みはじめた。しかしそれも亦師匠に就いて學んだのでもなく、作つた歌を人に見せることなどもせず、たゞ獨り作りだすのみであつた。歌集なども、昔のもの新しいものあれこれと見て、形式通りの當時の歌風によつてゐたのである。かやうにして二十幾歲になつた頃、學問をするためとて京都へ上つた。それは十一歲の時父に死別した上に、江戸に在つた家の職業をさへなくした頃で、母の取計らひで、醫業を習ひ、またそのために、普通世間並みの儒學を修めようといふ理由からであつた。

さて京にゐた間に百人一首改觀抄を人から借りて見て、はじめて契沖の說を知り、その大層傑出してゐることをも知つて、この人の著した書物を、餘材抄・勢語臆斷などをはじめ、その他のものもつぎ〳〵に手に入れて讀んでゐたうちに、すべて歌學の善惡の區別も次第に領得したのである。さうしてゐるうちに、今の世の歌人の考へてゐる主張は概して氣に入らず、その歌の風も面白くなく感じたけれど、その當時は同じ意見の友がゐなかつたので、たゞ世の人なみに、こゝの會そこの會などにも出席して交際して、歌を詠んで歩いた。さて人の詠む歌風は、自分の心には合はなかつたけれでも、自分の主義として立てた歌風は、今の世の風にも反してゐながら、人は咎めなかつた。それはさうあるべき道理である。別に話すことにしよう。

さて後、國に歸つてゐた頃、江戸から上京した人が、近頃出版されたと言つて、冠辭考といふものを見せたので、縣居の先生の御名をも始めて知つた。かくてその書をはじめに一遍見た時には、一向に自分が思ひもかけなかつたことばかりで、あまりに耳馴れない不思議なことに思はれて、一向信ずる心はなかつたが、それでもどこか子細があるのであらうと思つて、重ねて今一度見ると、たまには、誠にさうでもあらうと思はれる箇條も出來たので、また繰返して見ると、益々なるほどと思はれることが多くなつて、

見るたびに信ずる心が出て來て、さうして、つひには上古の風の精神と言葉がまことにそのやうなものであることを知つたのである。かやうにして、後になつてから比較して考へて見ると、あの契沖の萬葉代匠記の說は、まだ未熟なことばかりが多くあるのである。自分の歌の研究の經過は大體以上の如きものであつた。

さてまた古道の研究は、まづ最初から神に關した書物といふ方面のものを、古代のもの近世のものと、あれやこれや讀んでゐたが、二十歲餘の頃から、特に志はあつたが、取り立ててわざ〳〵研究することはなかつた。ところが、京に上つてからは、わざ〳〵でも研究しようと志は進んで來たが、しかしかの契沖の代匠記の說を標準にして、我が國の古の精神を考へて見ると、世間の神道者といふものの說いてゐる趣旨は皆非常に違つてゐると早く氣がついたから、師匠として頼るべき人もなかつたので、自分はどうかして古の眞の趣旨を考へ出さうと思ふ志が深かつた上に、かの冠辭考を得て繰返し讀み味つてゐるうちに、いよ〳〵志は深くなつて、この縣居の大人を慕ふ心は日毎に切實になつて來た。さうしてゐるうちに、或年、この大人は田安殿の仰をお受けになつて、この伊勢國から大和・山城などこゝかしこを訪ねて廻られたことのあつた折、この松阪にも二三日逗留になりました。然るにその事を少しも知らないで、後で聞いて大變殘念であつたが、しかし歸途にもまた一夜松阪で御逗留になりました。それを氣をつけて待つて居て、大變嬉しく思ひ、急いで御旅館に行つて、はじめてお目にかゝつたのであつた。さうしてつひに名簿をさし上げて弟子入りをし、敎を承ることになつたのであつた。

一五　江戸時代の文學

1　解題

嚴密な意味の文學史としては、今日各時代それ〳〵專門史家の著述も刊行されてゐるのであるが、本課以下、本敎科書各卷に配置された各時代の文學史的敎材は、何れもその卷、その學年の生徒に適するやうに編者が執筆したものである。故に作品の取捨や項目の立て方、又その敍述說明の繁簡の如きも、純然たる或文學史の縮約と見らるべきではなく、どこまでも敎科用として按排考慮したものである。しかし各時代の概觀や各作品の評論等も、概ね專門家の間に定說となつてゐる所に從ひ、敢へて異を立てた點はない。その最も負ふところが多いのは、藤岡作太郎博士の「國文學史講話」と藤村作博士の「國文學史總說」との所說である。

「江戸時代の文學」に限らず、すべて時代の思想的概觀を序說とし、以下は文學の各種類によつて項目を別にして敍述する方針に從つてゐるが、本課では敎科としての性質上、小說・脚本等の項に於て、特に思ひきつて省筆せざるを得なかつたことをここに記しておく。

2　編纂上の用意

德川時代の文學作品として本卷までに揭げられてゐるものは左の諸篇である。

卷一　二八　八幡太郎（原漢文、日本外史）　賴山陽
　　六　力行（梅園叢書）　三浦梅園
卷二　八　阿閉掃部（駿臺雜話）　室鳩巢
　　一四　秀吉封册を退く（原漢文、日本外史）　賴山陽
　　二〇　心の洗濯（鳩翁道話）　柴田鳩翁
　　二一　近江聖人（東西遊記）　橘南谿
　　二四　山田長政（原漢文）　齋藤拙堂
卷三　一〇　蒲の花がたみ（兎園小說）　瀧澤馬琴
　　二六　本多重次（藩翰譜）　新井白石
卷四　三　三日月（和歌）　湯淺常山
　　一二　板倉重宗

一八　進學（駿臺雜話）　室鳩巣
二〇　柳生宗矩　新井白石
卷五　四　殘る御影（菅笠日記）　本居宣長
九　早蕨（狂歌）
卷六　一〇　案山子（川柳）　三浦梅園
一八　誠（梅園叢書）　瀧澤馬琴
二〇　芳流閣（八犬傳）
卷七　三　隨時樓の記（[illegible]）　村田春海
四　みよや春（書翰華山全集）　渡邊華山
九　靑葉（俳句）　松尾芭蕉
一〇　奥の細道（奥の細道）　萩原廣道
一二　水蓼（竹柏漫筆）　近松門左衞門
一三　千里が竹（國性爺合戰）　本居宣長
一四　おのが物まなび（玉勝間）

本課はこれらの諸作家及び諸作品を通じて、江戸時代に於ける文學の一斑を知らしめんが爲めに外ならぬ。

3 要旨

江戸時代の文學は、特殊階級の手から庶民階級の手に引きおろされたところに特色がある。俳諧も淨瑠璃も小說も皆庶民の文學である。固よりこれらの文藝思想を支配してゐる精神は儒教が主であり、又、社會的には四民の階級が嚴であつた爲に、一種の傾向に妨げられ、全くの自由を得てゐない點もあるが、それでも漸次經濟的地歩を獲得して武家に肉薄して行つた町人の爵勃たる意氣と、階級の力の及ばない精神生活、乃至或世界に於ける一般民衆の自由な氣分とは略〻遺憾なく文學の上に反映してゐる。一方で古學復興の精神が堂上家の學風を覆さうとしたのも、やはり庶民が自己の力を認識した精神と相通ずるものがあつて、然らしめたのである。かくの如き行き方で發達した江戸文學について大體を考察させたいものである。

4 概說

序說（一〇一頁——一〇三頁）　江戸時代は文學の領域が著しく擴張せられたこと、及びその原因に言及し、更に、その文藝界を指導した精神について主として記した。

一、古學復興と歌道　この兩者の關係を說き、又、兩者の

それ〴〵について、學者と作者との業績を述べた。

二、俳諧文學　俳諧史の大略を述べ、川柳と狂歌とについても一言した。俳人としては芭蕉と蕪村との外に、宗因をやゝ重く見てゐる。

三、小說　當時代の小說を概觀しようとしたのであるが、實は元祿期の浮世草子と江戸後期の讀本との紹介が主となつてゐる。

四、淨瑠璃　近松と義太夫との事を中心として、淨瑠璃の發達とその本質とを概說し、終に演劇の脚本について附言した。

5 取扱上の注意

◪文學の思想の流は、文學の形態や種類の境界に遮られるものではないことは勿論である。隨つてその思想の發達や展開を如實に迹づけて記して行くのが本當の文學史であるべきことも亦勿論である。けれども、本課では「解題」に述べたやうな理由で、敢て文學形態によつて分類記載した。それも各作品の內容思想を通觀して評論するといふ暇もなく、纔かに書目の解說や作者の紹介に終つたやうな點もあつて、決して理想的な說き方ではないが、初步の者には、抽象的に思想を說くよりは却つてこれがよいと考へられる。

◪たゞその分類排列の記載順序が、直にその文學の發達順序であると誤解せしめないやうに注意ありたい。各項それ自體は史的順序で述べてあるが、各項目間の先後は互に交錯してゐること言ふまでもない。例へば俳諧と同時に小說も淨瑠璃も共にそれ〴〵の方面に於て事實發達しつゝあつたのである。

◪江戸文學として文學史的に評論的に學ぶのは本課が初めてであるが、實際の作品にはこれまで幾程か接してゐるのであるから、先づそれら既習の課についての記憶を喚び起してかゝることが教授上便宜である。

6 設問

1　江戸文學の特質を說明せよ。
2　江戸文學を支配してゐた精神の主なものは何か。
3　古學研究の大家の名をあげよ。
4　江戸文學の種類をあげよ。

5　俳諧文學の上に名高い人々をあげよ。

6　小說界に名高い人々をあげよ。

7　淨瑠璃の發達に特に功績のあつた人は誰々か。

8　次の人々を大體年代順に並べよ。

一茶。竹本義太夫。賀茂眞淵。瀧澤馬琴。鶴屋南北。蕪村。西山宗因。近松門左衞門。河竹默阿彌。荷田東滿。釋契沖。大隈言道。本居宣長。上田秋成。芭蕉。也有。西鶴。守武。村田春海。等々。

7　釋義

【江戸時代】　近世期・德川時代ともいふ。この時代の區劃は子細にいふと學者間に異說があるが、慶長八年（一二六三）家康が征夷大將軍となつてから、慶應三年（一二五二七）慶喜の還政辭職までをいふのが普通である。大數ではこれを三百年といひ、二百六十年といひ、二百五十年ともいふ。但しこの時代を前後二期にわけて、前期を「上方時代」又は「京阪時代」といふに對して、後期を「江戸時代」または「江戸期」とも稱することがあるので、これと紛れないやうにしたい。

【題材】　文學の題目となり、材料となるもの。例へば源義經・豐太閤・遊女・船頭などと言ふのは、題目ともなり、或は材料ともなる。

【形態】　文學として仕上げられる形式。例へば和歌とか、俳句とか、小說とか、戲曲とかをいふ。

【品類】　例へば小說の中にも、その精神によつて、その內容によつて、或はその取材によつていろ〳〵品わけが出來る。歷史小說とか滑稽小說とかいふ例がそれである。戲曲でも世話物とか時代物とかといふ。

【佛敎を骨子とせるもの】　佛敎思想を中心として作られてゐる文學。例へば、因果應報の理を說いた「因果物語」（鈴木正三作、寬文元年刊）や、法華經の功德を專ら說かうとした「紀物語」（日心作、承應三年刊）や、無常厭世の思想を濃厚に表した「二人比丘尼」（鈴木正三作、寬文三年刊）などの假名草子類をいふ。

【儒佛二敎の感化を受けたるもの】　儒敎的の處世訓と佛敎的の談義とを內容とした文學。「爲愚痴物語」（曾我休自作、寬文二年刊）や、「草萊物語」（作者不詳、慶安元年刊）その他がこの例に屬する。

【陽に三敎一致を說けるもの】　三敎とは儒敎・佛敎・道敎をいひ、又は神道と儒佛二敎をもいふ。その三敎の理は一致するものだといふ思想を說いた文學である。例へば「八町記」（如儡子作、寬文四年刊）は儒・佛・道の三敎を說いたもので、一敎に一理（一里三十六町）をあて、三敎を合せて百八町になるといふ意味を題名に持たせたものである。「陽に」と言つたのは、かくの如く書名にまでその意を示したものもある故である。「大佛物語」（作者不詳、寬永十九年作）は、神・儒・佛の三敎の理や世道を說いたものである。

【陰に心學の思想に據れるもの】　心學とは前項に揭げた三敎の後者の方、卽ち神・儒・佛の三敎の理を俗耳に入りやすく說いたものの稱である。「心學」の名はこの時代の初から見えて、書目にも「心學五倫書」「心學敎訓書」その他があげられ、決して後の石田梅巖や柴田鳩翁などにのみ說かれたものではない。かくて以上の如く明らかに心學と銘を打つた敎訓書もあるが、文學としては、「陰に」卽ちそれとなく心學の思想敎訓を取入れて作られたものがあるのである。例へば、寬永年間に出た「長者敎」（作者未詳）に對して「大福新長者敎」と又の名を稱した西鶴の「日本永代藏」（貞享五年刊）の中の敎訓は、卽ち心學から來てゐると見られる。その外通俗の敎訓を含んでゐる文學書で、特に儒・佛などの一方に偏してゐないものは、大抵この心學の思想に支配されてゐるとも見られる。

【主情主義】　感情を主とした文學の傾向をいふ。卽ち情念を偏重し、情趣とか「物のあはれ」とかいふものを描き出すのが平安文學の特色であつた。

【神祕的・宗敎的】　知性で思議することが出來ない、言葉で說明することがかなはぬものを神祕的なものといふ。室町期の文學のうち、例へば謠曲に於ける精靈能といふのは、死して迷つてゐる魂魄を出現せしめて主要な役割を勤めさせてゐるが、そこにはいかにも神祕的な氣分が漂ふ。その演出の技巧上にも謠ひ方にも、口で說くことの出來ぬ妙處があるといはれるのは、やはり神祕的であ

る故である。更にその精靈を僧侶が出て來て弔ひ之を成佛させるのは、即ち宗教的であるといふ例にもなる。又、鎌倉期の平家物語の中には無常厭世の佛教思想が濃厚に出てゐるので、これ宗教的であると謂はれる。

【因襲的】古い、あり來りのことになづんてゐることの形容。何事も舊のまゝを受けついで改めないさま。

【堂上】地下の庶民に對して、公卿の家をいふ。歌道では二條家とか、冷泉家とかを指す。

【國學】主として支那の學問即ち漢學に對して、日本の事についての學問即ち皇國の學といふ義に用ひられた。當時の國學は、時代的に言へば古代の國民精神、古代の文化を研究することであつた故に、その點から「古學」とも呼ばれた。書物について言へば、古典の學問の謂であつて、神道・歌道・歴史・律令等の研究をすべてかく稱した。

【戸田茂睡】トダモスヰ。本姓は渡邊、名は恭光（ユキミツ）、通稱は茂左衞門。梨本庵、また寒露軒と號した。駿府の人。伯父戸田氏に養はれ、後、本姓に復した。本多忠國に仕へ、梨本集を著して舊來の歌學の病弊を指摘した。（梨本集）の條參照。著作「戸田茂睡全集」十八卷は國書刊行會本一冊となつてゐる。なほ佐々木信綱博士著の歌學論叢に「戸田茂睡論」がある。寶永三年（一三六六）歿。年七十八。

【下河邊長流】シモカウベ、チャウリウ。長流は長龍とも記す。だからナガルとは讀むべきでない。萬葉集管見・萬葉集鈔を初め、歌道の著が多い。今、長流全集二卷に收められて、契沖全集に附卷として刊行されてゐる。貞享三年（一三四六）卒。年六十四。

大正四年十一月贈正五位。

【梨本集】ナシモトシフ。五卷。元祿十一年成り、同十三年刊。歌論の書であつて、その論旨は、堂上家殊に二條家の歌學で唱へて來た所の制詞・禁詞などが歌にあるべき筈なく、「歌は大和こと葉なれば、人のいふといふ程の詞を、歌によまずといふことなし。」と主張したところに特色が存する。この書は、同じ著者の「百人一首雜談」・「僻言調」等と共に近世歌論の初期のものとして最

も注目すべきものである。

【造詣】ザウケイ。何れもイタルと訓む。學問などの研究。また、その研究の深いこと。

【莫逆の友】バクゲキのトモ。（又はバクギャクのトモ）。互に心に逆ふことなく、意氣の相投合してゐる友。

莊子に「四人相視而笑、莫逆二于心一遂相與友。」

【萬葉代匠記】マンエフダイシャウキ。二十卷。萬葉集の註釋書である。「代匠」といふは、「師匠に代る」義。長流と著者の契沖とは友達關係と見られるが、契沖としては長流に師事してゐた心から、長流の果さなかつたことを師に代つて成就したといふ義を含めたものと思はれる。初稿本と精撰本となつて、今共に契沖全集に收められてゐる。その註は詳細であり、卓拔な見に富んでゐて、實に斯界の名著・大著と稱されてゐる。

【國語學上の業績】例へば「和字正濫抄」（元祿六年成る）の如き著述によつて歴史的假名遣を正した功は偉大なものである。

【復古神道】外來の儒佛二教に影響せられない、古來の姿に復つた神道。神道は元來、神ながらの道を骨子とした日本國民の生活原理であり、政治の道でもあつたが、儒佛二教が入り來つて、それ〴〵の感化を受け、大部不純なものになつてゐたのを、荷田春滿は古學復興の精神によつて、儒佛二教の影響を排して、古來の「神ながらの道」なる神道を唱道したのである。

【創學校啓】國學校を創設して戴きたいといふ幕府への建白書。「啓」はマヲスと訓む。名詞としては、上書・上申書の義。初に「謹謂下蒙二鴻慈一創中造國學校上啓」と題して、「誠惶誠恐頓首頓首、謹聞。伏惟、神君勃二興山東一覇功一成、平三章天下一。草上之風、孰越二君子之志一。云々」と本文に入り、先づ將軍家の德風を稱へ、儒佛二教の盛況を述べ、轉じて「國家之學」の日に衰へて行くことを歎じ、伏此請望、或京師、伏陽之中、或東山、西郊之間、幸賜二頃之閑地一、斯開二皇國之學校一。云々、悲哉、先儒之無レ識、無レ及二皇國之學一。痛哉、後學之鹵莽、誰能歎二古道之潰一。云々、古語不レ通則古義不レ明焉。古義不レ明則古學不レ復焉。先王之風拂レ迹、前賢之意近レ荒、一由レ不レ講二

語學。是所二以臣終身精力用一盡古語一也。伏以、斯文之興之興レ廢、固在二此擧之取之與捨一。願閣下留レ意幸察。臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言」（續々群書類從第十、教育部に所收の文による）といふのである。時に年は六十歳であつた。

【國史・律令を究む】　國史や律令を研究したことは、神代卷荷田氏抄・日本書紀訓釋等の著書、及び令義解劄記・令集解劄記・令問答等の著書によつて知られる。

【萬葉調の雄健なる歌】　例へば

百くまの荒き箱根路こえ來ればこよろぎの磯に波のよる見ゆ

鳴鳥のかつしかわせの新しぼりのみつゝをれば月かたぶきぬ

信濃なる蒼の荒野を飛ぶ鷲の姿もたわに吹くあらしかな

播磨がた追門の入日のすゑはれて空より歸る沖のつり舟

【多士濟々】　タシセイセイ。多くの賢才が盛に出てゐるさま。濟々多士ともいふ（詩經）。

「濟々」は衆くして盛な貌。

詩經に「濟々有レ衆。」

【加藤千蔭・村田春海】　カトウ　チカゲ。ムラタ　ハルミ。二人とも、當時のいはゆる江戸派の歌人。千蔭には歌文集に「うけらが花」等があるが、その外に「萬葉集略解」の著が名高い。春海には歌文集として「琴後集」（ことじりじふ）が最も名高く、他にも「五十音辨誤」「假字大意抄」等の語學書や又歌學書もある。

【古事記傳の大著】　「傳」は註釋・講義の義。古事記の註釋書たる古事記傳は、全部で四十八卷、四十八冊。明和元年（著者三十五歳の時）から著手、三十五年の後、寛政十年（著者六十九歳の時）に至つて業を了へた。古事記に關する研究としては空前絶後の大著であり、名著である。

【萬葉集・源氏物の註釋】　前者の例には「萬葉集玉の小琴」「萬葉集問聞抄」、後者の例には「源氏物語玉の小櫛」がある。

【國語學上の諸著作】　例へば「てにをは紐鏡」「詞の玉緒」「御國詞活用抄」「字音假字用格」・「漢字三音考」その他がある。

【神ながらの道】　太古の神々が示された道。建國の大本、政治の軌範、敬神崇祖の念、忠君愛國の心、尚武の精神などは、皆この「神ながらの道」に含まれてゐる。

【物のあはれ】　漢語にすると「情趣」といふやうなことになる。宣長は「源氏物語」の中心をなすものとしてこれを說いたが、これはまた歌の理想をなすものとも解されてゐる。今、その內容を主として言へば、壯美よりは優美を重んじ、力强さよりは物和かい美を尊重したものである。その形式との關係を言へば、すべて形式を尊重するが、それが單に技巧や形式だけでなくて、眞情を伴なふ技巧で、そこには完全な調和といふことが必要だとされた。情の高まる時、それを技巧的に表現するやうになるのは自然であり、また情の高まる時、それを人に傳へたくなるのも自然である、その爲に技巧的にもなるのだと解される。

【古道の講說】　篤胤の古道講說の書としては「古道大意」（文化六年講、文政七年刊）が最も名高い。

【堂上家に學び】　はじめ冷泉爲村の門人となつたのでいふ。

【清新獨得の境】　この境地を示す例歌を次にあげる。

爛漫と咲きぬる見てぞ霜にまだしぼめる老も春を知りぬれ

小鳥追ふ鳴子の繩に手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る

里の犬の聲のみ空の月によみて人は靜まる宇治の山かげ

古へは大根（おほね）はじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ

【上田秋成】　その「歌文集」には「藤簍冊子」（つゞらぶみ）が名高く、「學者として」の著作には「冠辭考續貂」「靈語通假字篇」その他があり、「創作家」としての著には「雨月物語」「世間妄形氣」「癇癖談」その他なほ多い。文化六年（一四六九）歿。年七十八。

【香川景樹】　カガハカゲキ。もとの名は純德。鳥取池田の藩士林善太兵衞の二男。後、京都に出て、香川景柄の門に入り、歌才を認められて香川家の養子となり、景樹と改名した。桂園・梅月堂その他の號がある。門下の歌人としては木下幸文・熊谷直好・八田知紀等が名高い。天保十四年（二五〇三）卒。年七十六。

明治四十年十月、贈正五位。

【古今集を宗とし云々】　古今和歌集を大本とし、模範とし、歌道の第一の書として尊重して、「しらべ」（調）を主として說を立て、歌は歌のために存在するもので、他の用のためではないとした。歌詞としては、現代語を使用すべきを論じ、しかも、歌品を重んじ、姿態調和のために洗煉といふことを必要とした。かくて桂園派の歌風は、明治の新派が起るに及んでも、なほ一方に行はれた。例歌、

埋火の外に心はなけれども對へば見ゆる白雪の山（題しらず）

大井川かへらぬ水にかげ見えて今年もさける山櫻かな

【井手曙覽】　キデアケミ。その歌風は下にいはゆる「雄健」を一特色とする。例へば、

國を思ひねられざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな

羽鳴らす蜂あたゝかに見なさるゝ窓を埋めてさく薔薇かな

【釋良寛】　その歌風は下にいはゆる「純眞」を一特色とする。例へば、

風は清し月はさやけしいさ共にをどり明かさむ老の名殘に

歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ

【大隈言道】　オホクマコトミチ。その歌風は下にいはゆる自由を一特色とする。例へば

傘させるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雪のはれがた

ゆく人を田舍童の見るばかり立ち並びたるつくづくしかな

【古風俳諧】　或は「古俳諧」といふ。廣くは芭蕉が新生面を開いたといふ正風俳諧に對して、それ以前の俳諧を呼ぶが、特に松永貞德を中心とする一派の作をいふ。俗語を用ひながらも種々の法式に捉はれ、多くはその趣味が幼稚低劣な遊戲氣分に安住してゐる。例へば、俳諧では、

ふもと田のわせもおくてもよう伸びて　貞德

思ふやうにぞ雨もふりける　〃

十五夜の月にはさはる雲もなし　〃

きつかりきかりわたる雁がね　〃

といふ如く俗言が入り、俳句では、

鳳凰も出でよのどけき酉の歲　貞德

うましとて口をもたゝく若葉かな　同

の如く洒落を言つてゐる。

【談林派】　「談林」とは、もと佛敎でいふ「談義の林」の義で、僧徒の學場を稱した語である。寺院の尊稱を壇林ともいふ所から轉じた語であらうといふ。江戸の田代松意の「談林十百韵」の序に「この席をば我等ごときの俳諧談林とこそ申すべけれなどたはぶるゝよりおこりて、皆人談林と言ひならはす。」とあり、又、同書卷頭の宗因の發句に、「されば こゝに談林の木あり梅の花」ともある。「談林風」・「談林俳諧」などいふも、類語である。

【近世文學の各分野】　俳諧のみならず、淨瑠璃にも、小說類にも、談林俳諧の影響があつたのでいふ。

【近世的なるもの】　平民的で、破格的で、自由で、滑稽で、愉快で、現世的で、自然よりも人事的興味に富んだといふやうなところに特色があるものをいふ。

【遊戲的氣分を脫せざりし】　例へば宗因の「西翁十百韵」にしても、

世の中のうさ八幡ぞ花に風

彦の山〳〵くれ〳〵の春

大天狗かすみの衣ぬぎ捨てて

礫ふりさけあくるしののめ

いづくより追出され行く時鳥

短慮にめぐる村雨の空

といふやうな程度で、洒落てふざけてゐる。

【談林より出でて】　芭蕉もその蕉風を開拓する以前、例へば延寶三年宗因が江戸下りの折には、宗因一座の百韻

興行に加はつてをり、談林風の俳諧を吟じたものである。

【藝術的法悦】　藝術を味はふことによつて得るところの高尚にして俗ばなれのした悦楽。「法悦」は元來佛教の法によつて得る悦であるが、それにも似た貴い精神生活上の愉快をこゝでは意味してゐる。

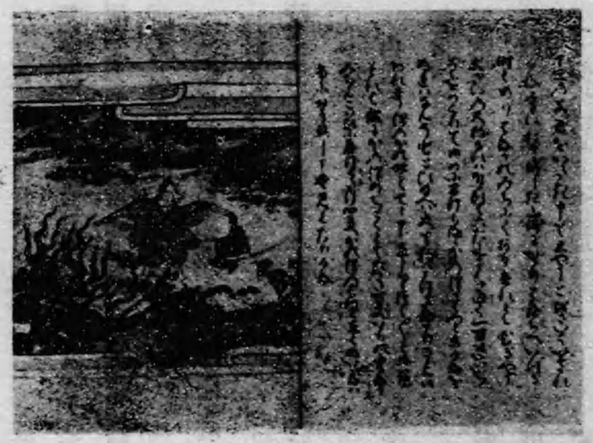
【甲子吟行】　「野さらし紀行」ともいふ。芭蕉が貞享元年八月から、門人千里を伴なつて、翌年の四月まで九ケ月に亘つて、試みた、歸省をかねての旅の紀行文である。第八課參照。

【七部集】　委しくは「芭蕉七部集」と呼ぶ。冬の日集・春の日集・曠野集・ひさご集・猿蓑集・炭俵集・續猿蓑集をいふ。

【鶉衣】　ウヅラゴロモ。横井也有の俳文集。十二冊。前篇に天明五年の跋があり、續篇に文政六年の序がある外、刊年未詳。天保十二年に四冊本として再版された。今日では更に新しい單行本もあり、俳諧文庫や、俳文學大系や、有朋堂文庫その他の叢書にも收めてある。

【假名草子】　主として假名で書いてある草子(本)。それを眞字本や漢文書に對して呼ぶ名である。しかし、江戸時代文學の一種、殊に小說の一種として考へる時は、當代初期、即ち「浮世草子」の出現に先立つて現はれた文學的書物で、當時の書目では一般に「假名書」とも言つた。內容は物語・小說に當るものが多いが、說話集や隨筆風の作その他を含む。今、教科書本文に擧げた題目・內容によつて例示すると、歴史的事件を題材としたものに「信長記」や「太閤記」

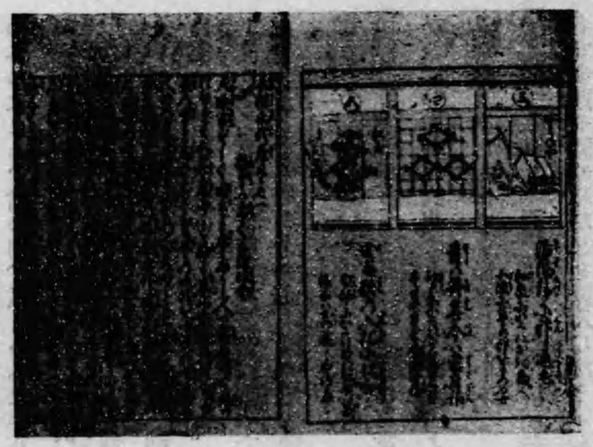
地理書的のものに「竹齋」や「東海道名所記」、古文學に擬したものに「尤の草紙」や「犬徒然草」、佛書を俗譯したものに「戒殺物語」や「繪入往生要集」、漢籍に據つたものに「智惠鑑」や「大和爲善錄」、などがある。



【お伽草子】　一種の短篇小說。主として室町期に出たものに用ひる稱呼であるが、その起原は明らかでない。「鉢かづき」・「物臭太郎」・「一寸法師」など、皆これに屬する。

【啓蒙的】　ケイマウテキ。稚蒙なものを教へ導いて行くといふ態度で作られてゐるといふ形容。

【浮世草子】　或は「浮世本」とも謂はれた。假名草子が前述のやうに、とかく現世を離れて傳統的な古いものに取材してゐるのに對して、「浮世」即ち當世の實際的事件を題材とし、その執筆態度も啓蒙的・教訓的よりも寫實的・文學的になり、藝術的趣味を濃厚に描き出すに至つたものである。



【逸足】　イツソク。とびはなれてすぐれたところがある弟

興行に加はつてをり、談林風の俳諧を吟じたものである。

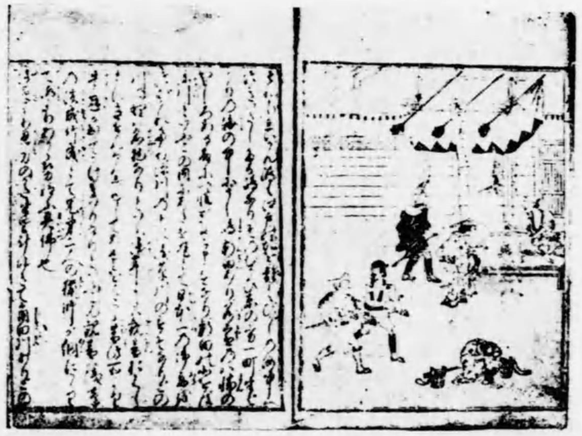
【藝術的法悦】　藝術を味はふことによつて得るところの高尚にして俗ばなれのした悦樂。「法悦」は元來佛教の法によつて得る悦であるが、それにも似た貴い精神生活上の愉快をこゝでは意味してゐる。

【甲子吟行】「野ざらし紀行」ともいふ。芭蕉が貞享元年八月から、門人千里を伴なつて、翌年の四月まで九ケ月に亘つて、試みた、歸省をかねての旅の紀行文である。第八課參照。

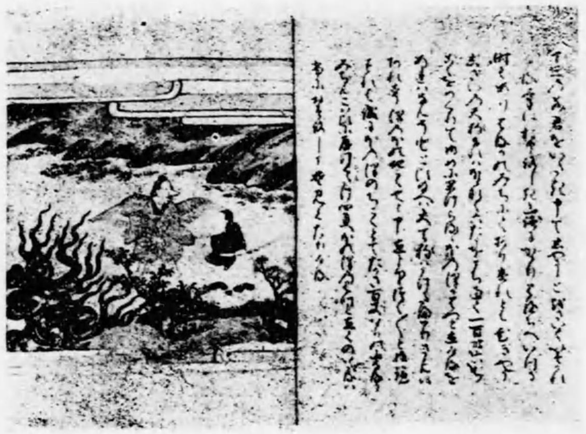
【七部集】　委しくは「芭蕉七部集」と呼ぶ。冬の日集・春の日集・曠野集・ひさご集・猿蓑集・炭俵集・續猿蓑集をいふ。

【鶉衣】　ウヅラゴロモ。横井也有の俳文集。十二冊。前篇に天明五年の跋があり、續篇に文政六年の序がある外、刊年未詳。天保十二年に四冊本として再版された。今日では更に新しい單行本もあり、俳諧文庫や、俳文學大系や、有朋堂文庫その他の叢書にも收めてある。

【假名草子】　主として假名で書いてある草子(本)。それを眞字本や漢文書に對して呼ぶ名である。しかし、江戸時代文學の一種、殊に小說の一種として考へる時は、當代初期、卽ち「浮世草子」の出現に先立つて現はれた文學的書物で、當時の書目では一般に「假名書」とも言つた。內容は物語・小說に當るものが多いが、說話集や隨筆風の作その他を含む。今、教科書本文に擧げた題目・內容によつて例示すると、歷史的事件を題材としたものに「信長記」や「太閤記」



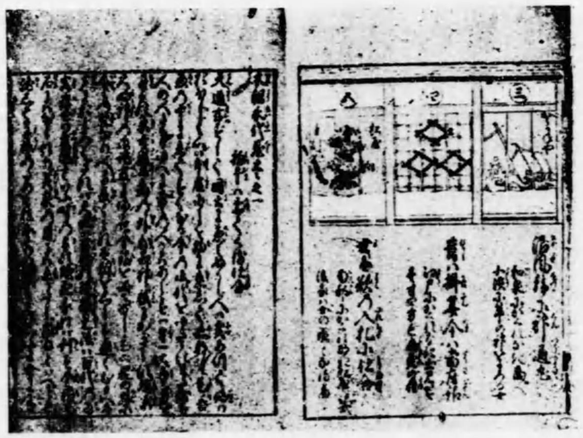
地理書的のものに「竹齋」や「東海道名所記」、古文學に擬したものに「尤の草紙」や「犬徒然草」、佛書を俗譯したものに「戒殺物語」や「繪入往生要集」、漢籍に據つたものに「智惠鑑」や「大和爲善錄」などがある。



【お伽草子】　一種の短篇小說。主として室町期に出たものに用ひる稱呼であるが、その起原は明らかでない。「鉢かづき」・「物臭太郎」・「一寸法師」など、皆これに屬する。

【啓蒙的】　ケイマウテキ。稚蒙なものを教へ導いて行くといふ態度で作られてゐるといふ形容。

【浮世草子】　或は「浮世本」とも謂はれた。假名草子が前述のやうに、とかく現世を離れて傳統的な古いものに取材してゐるのに對して、「浮世」卽ち當世の實際的事件を題材とし、その執筆態度も啓蒙的・教訓的よりも寫實的・文學的になり、藝術的趣味を濃厚に描き出すに至つたものである。



【逸足】　イツソク。とびはなれてすぐれたところがある弟

子といふほどの意。

【類型的】どれもこれも同じ型にはまつたといふ形容。

【犀利】サイリ。もと武器の鋭い形容。轉じて文章、文は眼光のするどいことにいふ。

漢書に「羌戎弓矛之兵耳、器不二犀利一」

犀は獸の名。又、兵器堅しと說かれてゐる。

【時勢粧】ジセイサウ。國語では今樣姿(イマヤウスガタ)といふ。今の世のありさま。

白氏文集卷四に「時世粧(イマヤウスガタ)」、名義抄、米部に「時勢粧、イマヤウスガタ」(大言海)

【一種道義の念】西鶴の作品の中に、儒教的精神に基づいた教訓的語句或は心學的な訓誡など見出されることをいふ。例へば「武家義理論語」の如く、武士の義理を骨子とした物語は言ふまでもなく、「日本永代藏」の如きに於ても、「世の仁義を本として神佛に祭るべし」(一卷一章)とか、「內證は人知らねばとて、天の咎もあるべし」(三十卷二章)とかいふ言葉は到る處に挿入されてゐる。

【一脈無常の感】これも例へば「日本永代藏」の卷頭に「浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。」といひ、又「世は無常なり、この男五十八の冬のはじめ、霜の朝、風といふばかりにむなしくなりぬ」といふ如き言葉は、各作品の中に決して珍しくない。

【八文字屋本】浮世草子の一種。もと京都麩屋町八文字屋といふ書肆の發行にかゝる浮世草子の稱。後には同時代同種の他書肆出版のものを含めて呼ぶ。作者には江島屋其磧・八文字屋自笑・同其笑等が代表的である。

「傾城色三味線」・「風流曲三味線」「傾城禁短氣」などが名高い。

【浪漫的】英語(Romantic)の譯語。寫實的であるのと異なつて、作者の空想によつて、實人生よりも誇張した世界を描き出した作者を形容していふ。

【讀本】ヨミホン。「讀む本」の義。繪を主にして、僅に假名で會話や話の筋などを記入したといふ程度に過ぎない本、即ち、繪を見る本(草雙紙の或もの)が當時に行はれてゐたが、それに對して、繪もあるが、讀むことを主にして、多くは歷史などに取材し、その文章の程度も高めた一種の小說をいふ。これにも初期讀本と後期讀本とがある。「雨月物語」は初期の一例であるが、讀本として最も價値高く、且つ最もよく行はれたのは後期のものである。精神的內容は儒教的、道德的であつて、馬琴の如き武士道的教訓を甚しく高調し、その點から見て、いはゆる傾向小說として著しい色彩を見せてゐる。

【雨月物語】ウゲツモノガタリ。正しくは「近古奇談雨月物語」といふ。自序によると、「明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜」に脫稿したので名づけたといふ。「近古奇談」とある如く、一種の怪談小說であり、「白峯」・「菊花の契」・「淺茅が宿」・「夢應の鯉魚」「佛法僧」その他すべて九篇より成るが、何れもその構想に神祕的なところがあり、一種凄愴の氣が漲つてゐる。

(參考、新註雨月物語詳釋　鈴木敏也著)

【山東京傳】京傳の小說は多方面に亙つてゐるが、讀本としては、「忠臣水滸傳」「昔話稻妻表紙」「善知鳥安方忠義傳」「櫻姫全傳曙草紙」その他がある。

【椿說弓張月】チンセツユミハリヅキ。源爲朝を題材にした作で、「里見八犬傳」よりは文學的價値が高いとも謂はれる。

【その他傑作多し】例へば

新編水滸畫傳・石堂丸刈萱物語・松浦佐用媛石魂錄・賴豪阿闍梨怪鼠傳・三七全傳南柯夢・雲妙間雨夜月・夢想兵衛胡蝶物語・皿皿鄕談・近世美少年錄・開卷奇觀俠客傳等々。

【滑稽本】一九の「東海道中膝栗毛」、三馬の「浮世風呂」「浮世床」、瀧亭鯉丈の「花暦八笑人」等等、すべて滑稽や笑を中心

對象とした文學作品をいふ。製本上からは「中本」と稱する。半紙本と小本（半紙半截判）との中間にある大いさの本の義。

【草雙紙】　クサザウシ　廣義に於てはその表紙の色によつていふ赤本・黑本・黃表紙などや、又、合卷と稱するものを總稱するが、狹義では最後の全卷のことをいふ。毎頁に必ず挿繪があるので、しかもその繪が文よりも鑑賞の主對象となるので「繪草紙」とも呼ばれる。「雙紙」は冊子の音便から來た當字であり、「草」は雜多とか猥雜とかの意を有する「くさ」の當字である。

【柳亭種彦】　草雙紙の作者として、殊に「偐紫田舍源氏」を出したので名高い。

【淨瑠璃十二段草子】　或はこれを「お伽草子」の一種とも見る。淨瑠璃姫と牛若丸との情事を題材としたもの。內容を十二段に分けたのでこの名を生じたといふ。作者は未詳、小野お通作とするは信じがたい。

【金平淨瑠璃】　淨瑠璃の一派。坂田金平の武勇談を主題としたものが盛に行はれたので、その種の總稱となつた。語り手は和泉太夫が代表者であつたので、「和泉太夫節」ともいひ、その詞章の書いてある本（正本）をば「金平本」といふ。內容が武勇談である上に、その語り口が非常に强く豪快なものであつたといふ。

【時代物・世話物】　時代物は歷史的材料によつたもの、世話物は當時の出來事を題材として仕立てたもの。兩者の中間を行つた例もあるが、大體この二者に分けて考へられる。近松の世話物は「曾根崎心中」をはじめ二十數篇あるが、他の百餘篇はすべて時代物である。

【虛實皮膜の藝術論】　虛と實との間を行くものが藝術であるとの論。なほ「淨瑠璃文句評註」の書として名高い。「なにはみやげ」（穗積以貫著）の序（發端）に、近松の言葉であると引いてある所を次に記す。

藝といふは實と虛との皮膜の間にあるもの也。成程今の世實事によくうつすを好む故に、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとは雖も、さらばとて眞の大名の家老などが立役の如く顏に紅脂白粉をぬる事ありや。又眞の家老は顏をかざらぬとて立役がむしや〳〵と髯は生なり、あたまは禿なりに舞臺へ出て藝をせば、慰みになるべきや、皮膜の間といふが此也。虛にして虛にあらず、實にして實にあらず、この間に慰みが有るもの也。云々（圈點は編者が施す）

【紀海音】　キノカイオン。その作は

時代物――鎌倉三代記・義經新高館・齊仁親王嵯峨錦・東山殿室町合戰・傾城無間鐘、等。

世話物――椀久末松山・お染久松袂の白しぼり・心中二つ腹帶・八百屋お七、等。

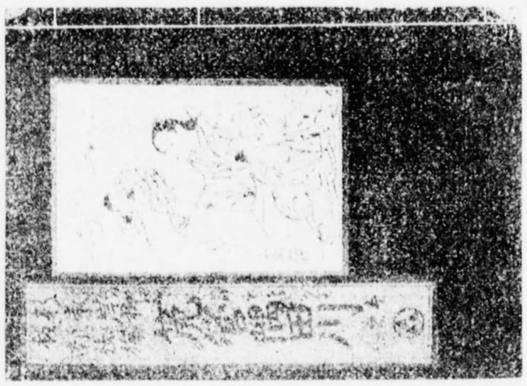
すべて五十篇に達してゐる。

【脚本は近松にその作多けれども】　演劇に用ひたる役者と詞と科（しぐさ）とを書いた本。「狂言本」とも「劇」とも「戲曲」ともいふ。近松の作例には、

大名なぐさみ曾我・夕霧七年忌・一心二河白道・傾城佛の原・姫藏大黑柱　等々

これら二十數篇は、高野辰之博士校訂「近松歌舞伎狂言集」に收めてある。

【化政度】　文化から文政にかけての年度。



【鶴屋南北】　ツルヤナンボク。「南北」と稱する脚本作者には幾人かあるが、その内、四代と五代とが殊に名高い。本文のは頭註のやうに四代南北である。その作の、現在世に行はれてゐるものは百數十篇に及ぶ。今、「大南北全集」十七卷が刊行されてゐる。例へば

東海道四谷怪談・櫻姫東文章・彩入御伽草子・勝相撲浮名花觸、等々。

【河竹默阿彌】　カハタケ・モクアミ。古河默阿彌ともいふ。生前は「河竹默阿彌」とは言はなかつたといふ。前名は勝諺藏・柴晉輔・二代河竹新七などいふ。代表作としては

雪駄直し・文彌殺し・鼠小僧・小猿七之助・黑手組助六・十六夜清心・三人吉三・縮屋新助・因果小僧・村井長庵・腕の喜三郎

等が數へられる。その作長短すべて三百六十種に達する。今「默阿彌全集」二十七卷が刊行されてゐる。

一六　光頼卿の參内

1　解題

平治物語卷一、「光頼卿參内の事並許由の事」の條から、末段だけを省いて採錄したものである。

公卿會議の催によつて參内した光頼が、甥信頼を威壓し、弟惟方を叱責し、宮中の有樣を見て慨歎して引揚げる大第を敍したもので、平治物語の中では、「待賢門の軍」と共に名高い文である。

「平治物語」（イヂモノガタリ）は全三卷。平治元年十二月に於ける戰亂を主とし、その前後の事情をのべたもの。その文章は簡潔遒勁、しかも情趣に富んでゐる。

作者は「保元物語」と同一人であらうといはれてゐるが、その何人たるかは詳かでない。（但し叡山に關係あるものと推定される。）又、その成立年代もよくわからぬ。平家物語より前か後かの問題も疑問とされてゐるが、今日では、平家より後に出來たものであらうとの說が有力である。

水戸德川光圀の命によつて今井弘濟の校訂した「參考平治物語（彰考館本）」は五異本と對校し、三十九種の參考資料を照合して出來た善本である。圖書刊行會第四期本として刊行されたのはこれである。

註釋には左の諸書がある。

内藤馹雄、平井顯吉　參訂平治物語講義
今泉定介　平治物語講義

2　編纂の用意

我が國民道德の眞髓たる臣道の權化とも見られる藤原光頼卿の言動に關する平治物語の一篇を味讀せしめ、次課「人臣の道」と相俟つて、臣道並に國體に關する觀念を涵養し、併せて戰記物語の讀解に關する正確なる知識を與へたい。これ本課をこゝに採錄した所以である。

3　要旨

光頼卿の徹底的覺悟から出た嚴肅公明な態度、動作及びその言語によつて、その人物の毅然たる眞面目を窺ひ、

更にこれによつて、大義名分の念を高め、忠誠の至情に共感せしめたい。又、記事と挿圖と相俟つて、舊御所・服飾等に關する一斑の知識を會得させたい。尚、文章そのものから見れば、光頼の動作・態度に關する敍事或は記事の巧、並にそれらと光頼の詞との間の連絡の妙によつて表された光頼對他の人物との對照のおもしろさなど、殊に玩味に價する。

4 概說

第一節（一一六頁——一一七頁六行）光頼卿束帶を繕ひ、覺悟をきめて、從者を連れて參内する。いよ〳〵公卿會議の座に臨み、信頼の上座に着く。

第二節（一一七頁七行——一一九頁）着座後の光頼卿の態度と發問。これによつて、一座は沈默してしまつたので、光頼卿は座を起つ。庭上に充ち滿ちた兵どもが、この光頼卿の言動に驚嘆して私語する。

第三節（一二〇頁——一二四頁）光頼卿は惟方を招きて參内の次第を語り、且、少納言入道の首實檢に關する不都合を叱責する。惟方の一言の返答に對して更に堂々と意見を述べ、進んで朝家の安穩なるべきやう注意すべしと警戒し、最後に、主上のおはす所から順次に御所の樣を問ふ。遂に信頼の住む所を聞くに至つて、慨嘆は極點に達し、果ては朝家の爲に悲愁の念を抱いて退出する。

5 取扱上の注意

◪文勢に變化があり、記述の形式の一律ならぬところが、內容と相待つてこの文の生命を躍動させてゐる。幾度繰返しても、敎へごたへ、讀みごたへのする文の一例として推奬してよからう。

◪元來平治の亂は、區々たる小人の手によつて釀された。清盛の留守にこそ〳〵と姑息的にやつてゐる。そこへ洞察あり、覇氣あり、主義あり、しかも剛膽な光頼が威風堂々と參內し、こそ〳〵の密議のなかに臨むところは、如何にも痛快である。作者の精神は、力あつて正常なものと、力のないくせに、まがつてゐるものとの痛快なる面接にあらう。しかも時は事前にして、正に暗雲低迷、いつ戰雲をまき起すともしれない。この過飽和のなかに一

の光頼を投げ出したことは、うまく捕へてゐるところであり、よく利いてゐて、正に晴天の霹靂である。思想及び技巧の上でいへば、前には、光頼の威風はあたりをはらつて信頼を壓し、その餘威は、弟惟方の上にあふれてゐる。後には、主上の御いたはしきさまをきいて、落涙數行、實に鬼神を泣かしむるの概がある。

◪信頼卿の上にむずと着き給ふ（二七頁）

惡しう參つて候ひけりとてしづ〳〵と歩み出でられけり。（二八頁）

前代未聞の不思議かなと、のろ〳〵しげに憚る所なくくどきたまへば。（一二三頁）

動作を修飾する副詞の用語に特別の注意を拂つた點を看取させたい。

◪「さて主上は何處におはしますぞ」以下の所は、以上、滔滔と流るゝが如き辯舌を承けて、かくぼつり〳〵と問答に入つてゐるので非常な妙味があることを知らせたい。

◪本課の文の後に續く原文のうち、こゝに關係のある部分だけを左に拔萃しておく。この條の全文は更に出典にあたつて見られたい。

誠に漢朝の許由は、富貴の事を聞きてだに心に厭ひ思ふが故に、惡しき事を聞きたりとて耳を洗ひき。いかに況やこの光頼卿は、朝家の諫臣として惡逆無道の振舞を見聞き給ひて、耳目をも洗ひぬべく思ひ給ふぞ理なる。（下略）

6 設問

1 光頼卿の豪膽な態度は、何が然らしめたのであらうか。

2 光頼卿といふ人物は、一言でいへば何と評したらよいであらうか。

3 文章として見るとき、どういふ點がよく出來てゐると思ふか。

4 この文の中から副詞を拾ひ出して見よ。

5 次の語句の意義を問ふ。

イ さき高らかに追はせて入りたまふ。

ロ 惡しう參つて候ひけり。

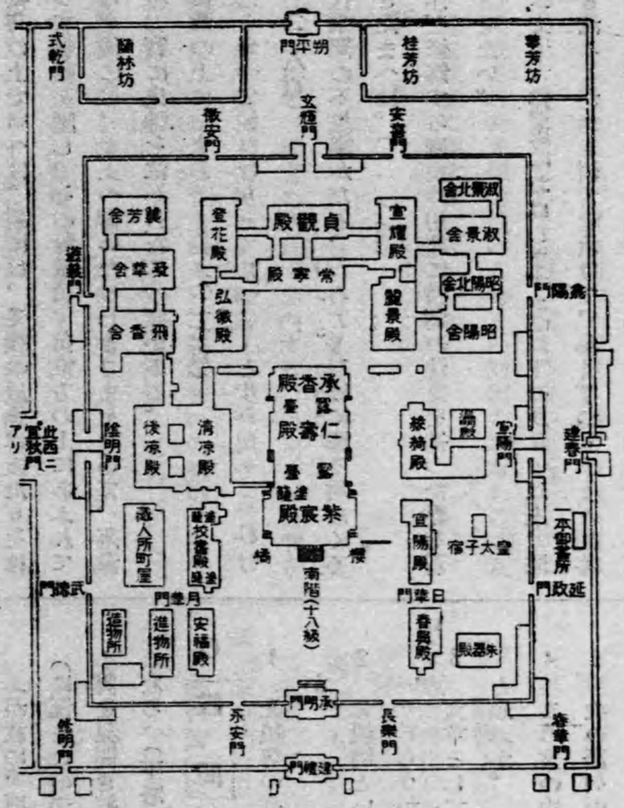
ハ 壁に耳、天に口といふことあり、恐し恐し。聞か

じ。

ニ　傳へ承るごときは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。

ホ　今はかくごさんなれ。

ヘ　英雄。さしもどく。王道。先驅。宿業。



大内裏の圖

7　釋義

【光頼】　ミツヨリ。藤原光頼。權中納言顯頼の長子。大治五年修理亮に、長承中、藏人に拜せられ、後その頭となつた。保元中參議に陞り、正三位に敍せられ、權中納言となり、左衛門督を兼ね、平治元年更に檢非違使別當を兼ねた。時に甥信頼が兵を擧げて大内に據つた。この時の進退宜しきを得たことは、本文に詳記されてある。永暦元年權大納言に轉じ、應保の初正二位に進んだ。寛長二年致仕して剃髪し、名を光然と改め、桂の里に住み、承安三年（一八三三）薨じた。年五十。世に桂大納言と稱し、又葉室大納言とも稱した。亞紀・月中記等の著作がある。本文は光頼卿三十六歳の時のことである。

左にその略系圖を示す。

- 顯長
  - 長方
    - 時長
- 顯頼
  - 光頼
  - 惟方
  - 女（忠隆妻）
    - 信頼
      - 信俊

【参内】　サンダイ。内裏にまゐること。朝廷に出仕すること。

源平盛衰記卷二十二、朝敵追討の條に「大將軍先づ參内して節刀を賜はる。」

【さる程に】　前を受けて後をおこす語。

平家物語には、本課の前に「六波羅より早馬を紀州に立てらるゝ事」の一篇がある。平治元年、藤原信頼源義朝が叛亂を企てた當時、平清盛はその子重盛等と共に紀州熊野參詣の途上にあつた。信頼等はその虚に乘じて兵を擧げたのである。六波羅なる清盛の留守宅より、急使が紀州に飛び、清盛一行は途中から引きかへして、こゝに待賢門の戰が始まり、戰亂は愈ゝクライマックスに達するのである。

本課は、清盛一行がまだ京都へかへりつかぬ前の出來事なのである。（なほ平治物語の原文を參看せられたい。）

【同じき十九日】　信頼が二條殿を襲うて御所を燒き拂ひ、少納言入道信西の邸をも燒き拂つたのは平治元年（一八一九）十二月九日の夜である。本文はそれをうけていつたのである。

【公卿僉議】　クギャウセンギ。大臣以下公卿が參内して會議すること。「僉」は皆・悉くの意。

【催（モヨホ）されたり】　會議をとりおこなはせられた。

「催す」は、設けおこすこと。設け行ふこと。企てること。とり行ふこと。

【勸修寺】　クヮンジュジ。藤原高藤より出た一家の稱。勸修寺は、もと寺の名、山城國宇治郡醍醐村大字勸修寺に在る。この地はもと宇治郡の大領宮道彌益の邑であつた。高藤はその女を娶り、生む所の女胤子は宇多天皇の妃となつて醍醐天皇を生み奉つた。昌泰三年太后胤子の御願

により、承俊律師に勅して、伽藍を創立し、勸修寺と號した。

【左衛門督】サヱモンノカミ。左衛門府の長官。衛門府は宮城の外門を守る職で、諸將の禁衛出入を管し、時を以て所部を巡檢して不法の徒を戒め、禮儀並に隼人・門籍・門榜の事を掌る。嵯峨天皇の弘仁二年十一月、左右衛士府を左右衛門府と改めた。

【信頼】ノブヨリ。藤原信頼。忠隆の第三子。庸愚で何の才もなかつたけれども、、後白河上皇の嬖幸を蒙り、累進して保元三年參議に任じ、右衛門督を兼ね、正三位權中納言に進み、檢非違使別當となり、寵を恃んで驕恣、藤原通憲（少納言入道信西）と權勢を爭うた。時に信頼は大將たらんことを望んだ。通憲は上皇を諫めてこれを止めた。信頼は大いにこれを怨み、常に病と稱して朝せず、中納言源滿仲と相結び、通憲に報いようと謀つた。時に通憲は、平清盛と婚を通じて、勢力が甚だ熾んであつた。

會、義朝は孤立して援なく、平氏の勢に及ばぬのを不滿に思つてゐた。信頼はこれを察し、引いて與黨とし、平治元年（一八一九）清盛が熊野に赴いた不在に乘じて兵を擧げ、三條殿を燒き、後白河上皇並に二條天皇を幽し奉り、通憲を殺したが、遂に清盛に敗られ、軍を棄てて遁れ、仁和寺に入つて上皇に哀訴した。上皇はこれを憫み給うて、死一等を宥さうと思召したが、天皇は聽きたまはず、清盛に命じて六條河原に斬らしめ給うた。時に年二十七。

【振舞】フルマヒ。しわざ。おこなひ。擧動。

萬葉集卷三に「つねなりしゑまひふるまひいや日けにかはらふ見ればかなしきろかも。」

【過分】クワブン。分限に過ぎること。その身の分際にこえること。身分不相應なること。

平治物語、信頼信西不快の條に「過分なりしかども、なほ不足して、家に絶えて久しき大臣大將の望みをかけて。」

【不參】フサン。まゐらぬこと。こゝは公卿會議の席に出ぬことをいふ。

【束帶】ソクタイ。朝服をいふ。天皇以下百官、朝廷公事の時に着用する。下に赤大口袴を穿き、次に表袴（クハウハカマ）・單・袙・下襲（シタガサネ）・半臂・袍と次第に重ね、石帶をつけ、帶劍・平緒を用ひ、冠・靴を着け、笏を持つ。石帶を束ねるゆゑに、束帶といふのださうである。

【引裾ひ】ヒキツクロひ。きちんととゝのへたゞして。修め整へて。

源氏物語の初音の卷に「心ことにひきつくろひ、けさうじ給ふ。」

【蒔繪の細太刀】裝束のときに佩びる儀刀の鞘に蒔繪を施したもの。たゞ威儀の爲に用ひ、刀を細く作つてあるから細太刀といふ。往々螺鈿を施したのもある。

「蒔繪」とは漆で圖畫を畫き、これに金銀その他の金屬粉又は顔料を蒔いて、みがいたもの。次の三種類がある。

一、平蒔繪　粉蒔をなし、摺漆してみがいたもの。

二、研出蒔繪　粉蒔をなし、漆を塗り、とぎ出してみがいたもの。

三、高蒔繪　模樣を高く盛りあげ、その上に粉蒔をして、みがいたもの。

【おとなしやかに】おとならしいさまに。おちついたさまに。いかにもおとなしく、すなほに。

【めのと子】「乳母（めのと）の子」の意。乳母の子、卽ち乳兄弟の關係にあるもの。

【桂右馬允範能】カツラウマノジヨウノリヨシ。傳未明。「右馬允」は右馬寮の判官。大允左右各〻一人正七位下、少允左右各〻一人從七位上。後世は六位の侍が多くこれに任じた。瀧口に官を賜ふ時、允に任ずる例である。

【腹卷】ハラマキ。鎧の一種。背で合はせる。障子板・鳩尾板・梅檀板・弦走などがなく、袖のないのが本式で、袖付の緒もない。但し後世は袖を付けることもある。（綿かみの革に結び付ける）草摺は前後左右合はせて七板あつて、小札・毛引等は

鎧のやうである。

なほ背で合はせる様に作つてあるから、押付の板はあるが、逆板と上巻とはない。但し後世この合はせめの隙を塞ぐために背板を用ひ、それに上巻の總を付けたのもあるが、古圖には更に見えぬ。腹巻の直垂・狩衣の下に着けた装を下腹巻、上に著けた装を上腹巻といふ。また鎧の下にも着けた。

腹巻は平安朝の末に起つた。

【雜色】　ザフシキ。またザッシキ。有位の者は相當の服色があるが、無位のものは定まつた色がない。故に位がなくて雜役に從ふものを雜色といふ。但し、伊勢貞丈は、「色は服色の義にあらず、人品の義なり、雜役をつとむる人品をいふ。」といつてゐる。

【出でたゝせ】　身づくろひをさせて。身仕度をさせて。

「出でたつ」とは、よそほふこと。みじたくすること。

狂言、菊花に「都女郎と見えて、花やかに出でたちて。」

【自然の事】　事の成行きから自然に發生する豫期せぬ事をいふ。萬一のこと。

こゝでは光頼の身が危殆に瀕する事をさす。

【召具して】　メシグして　めしつれて。ともなつて。

俄歌加留多に「七月まうでの乘物に、供人少々召具して。」

【大軍陣を張りて】　いかめしい陣立をして。

「軍陣」とは、戰爭の陣だて。

史記の李將軍傳に「與レ人居、則畫レ地爲ニ軍陣一。」

源平盛衰記卷二十二、衣笠合戰の條に「軍陣に酒を送るは禮なり。」

【さき高らかに追はせて】　聲高々と先ばらひをさせて。「さきを追ふ」は、さきばらひすること。

源氏物語の榊の卷に　「大將の御さきをしのびやかに追へば。」

【弓を平め矢をそばめ】　「平め」は、立てたものを横にすること。「そばめ」は、物を傍へよせること。

弓矢を伏せ、身に近く寄せて、小さくなり、恐れ入つた様をなすにいふ。

【紫宸殿】　シシンデン。又シシイデン。内裏の正殿。前殿・南殿・正寢などとも申す。朝賀・即位等の公事を行はせられるところ。承明門の内、仁壽殿の南にあつて南面し、南廂（ビサシ）には十八級の際（キザハシ）がある。母舍（モヤ）後面には支那賢聖の像を畫がいた「賢聖の障子」を立て、中央稍〻北に偏して玉座を設け、南面額の間に紫宸殿の額をかゝげ、階前の左には櫻、右には橘が植ゑてある。現在の紫宸殿は安政二年（一二五、五）の御造營にかゝるものである。皇室典範には、御即位の大禮及び大嘗會は必ず京都御所で行はれる事と定まり、隨つて御即位の禮は紫宸殿に於て行はれることになつてゐる。

【殿上】　テンジャウ。殿上間の略。清凉殿の南庇に在つて、公卿・殿上人の祗候する處。（挿圖參看）

【一座して】　第一座を占めて。上座して。

【上臈】　ジャウラフ。身分の貴いものをいふ。もと「臈」は臘とも書き、僧家で法臘・僧臘・戒臘などいふより出た。佛語解釋に「出家して受戒し、一夏（イチゲ）（夏朝三ケ月の行（ギャウ））を經るを一の臘とし、二夏を經るを二の臘とす。より

で僧の年を數ふるに生年をいふときは世壽といひ、出家後の年をいふときは法臘といふ。又僧中の座次は、必ずこの臘の多少によりて高下するが定りなれば、これを臘次（ラフジ）といふ。さてこの僧中の名が朝廷に移り、上臈・下臈・極臈などいふ目を用ふるに至れるなるべし。」

【右衛門督】　ウエモンノカミ。信頼はこの九日、勝手に除目を行つて大臣大將となつた。されどこれは兼官で、本官は矢張右衛門督である。

【左大辨】　サダイベン。左辨官の長官。辨官は太政官の判官。辨は令聞書に、「治むる義にて、宮中の事を治むる故の名なり。」とあるが、說文には「判也」とあるから、宮内の事を判糺するより名づけたのであらう。八省を分掌し、庶事を承つて天下に達し、太政官内を判糺し、文案を署し、稽失を勾へ、被管の諸司の宿直を監する。

これに左右の別がある。左（左辨官局）は中務・式部・治部・民部の四省、右（右辨官局）は兵部・刑部・大藏・宮内の四省を管する。少納言局と合せて太政官の三局といふ。大辨は左右各〻一人、從四位上、太政官中の重職であるから、名家譜代の輩より選任した。又華族中才名ある人は參議を以てこれを兼ねた。

【宰相】 参議の異名(唐名ではない)。参議は令外官であるが、禁中に在つて諸政を參議し、國治を觀察する故に宰相(大臣の唐名)ともいつた。その定位八人、故に八座ともいふ。参議は正四位下、後には多く三位となつた。諸官の中、四位以上その才ある人を選任する。大臣・納言についでの重職であるから、藏人頭・左右大辨・近衛中將・左中辨・式部大輔・三位及び五箇國の國守を無事に歷任したものを七道より任ずる。その中近衛中將は多年の勞、式部大輔は天皇の侍讀に限る。

【長方】 ナガカタ。藤原長方。顯長の長子。かつて平清盛に直言して、後白河法皇の幽閉をとき奉らせ、關白基房を備前より還らせた。

清盛が、遷都の可否を問ふや、長方は獨り新都の不便を極言した。源義仲が京師に入り、法皇を擁して將に西海に走らうとするや、長方は出でて義仲に接し、これを諭した。義仲はために期を延ばし、ついで戰死した。これも長方の功である。

源頼朝が總追捕使たらんと請ふに當り、長方は固くその不可を陳べたが、法皇は從ひ給はず、その請を御許しになつた。程なく長方は剃髪して、名を中印と改めた。右大臣兼實は嘆息して「朝廷の臣を失ふは、公家の巨損、誠に惜しむべし。」といつた。建久二年(或は三年)薨去。年五十三。世に梅小路中納言と稱した。一七八九―一八五一?)

【末座の宰相】 宰相八座中の末席をいふ。(前項「宰相」參看)

参考平治物語に「按二公卿補任一、平治元年長方(カタ)五位藏人兼丹波權守。至二安元二年一任二参議一。長方父顯長時爲二参議一。左大辨班列最下者藤顯時也。然未レ可レ知レ誰、可レ疑耳。」とある。しばらく疑を存しておく。

【今日の御座席こそ云々】 「今日の御座席は、こととのほかにだらしがないやうに見える。」との意。

「よに」は、世の中にとりわけて。ことのほかに。

枕草子卷三に「よにいみじうをかし。」

「しどけなし」とは、亂雜で、紀律のないこと。しまりのないこと。しだらないこと。

枕草子卷三に「いみじうしどけなう、……直衣・狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせむ。」

源氏物語の末摘花の卷に「御びんつきのしどけなきをつくろひたまふ。」

【色代】 シキタイ。色體・式體などともかく。會釋。揖禮。顏色を改めて禮する意かといふ。

東鑑卷三十四、仁治二年十一月二十七日の條に「前武州不レ可レ然之旨有二御色代一之故也。」

【むずと】 音便で「むんずと」ともいふ。(一)急に力をこめて。いきほひつよく。(二)はゞからずおしきつてするさま。こゝは、(二)の意。

【大力の剛の人】 力のたいそうつよい人。

「大力」は、物語文では多くダイヂカラとよむ。

剛の人(ガウのヒト)は、つよくたけき人。

【居懸けられて】 すわりかけられて。

【伏目になりて】 うつむいて。下をむいて。

「伏目」(フシメ)は、うつむいて見ること。轉じて、うつむくこと。

源氏物語の若紫の卷に「をさな心ちにも、さすがにうちまもりてふしめになりてうつぶしたるに。」

【着座の公卿】 チャクザのクギャウ。その座席についてゐた公卿たち。

「公卿」とは、朝廷の顯官。「公」は攝政・關白及び大臣。「卿」は大中納言・參議及び散一位並に三位以上。月卿。卿相。

【あなあさまし】 さて〳〵あさましいことだ。

「あさまし」は、(一)淺はかなこと。(二)意外のことに驚くこと。肝のつぶれること。(三)あきれかへること。興のさめること。けしからぬこと。(四)いやしいこと。さもしいこと。卑劣なこと。こゝは、(三)の意。

源氏物語の帚木の卷に「君たち、あさましと思ひて、そらごととて笑ひたまふ。」

【下襲】 シタガサネ。束帶の時、袍の下着にする衣の名。小袖の上に着る。その背後のすそを裾(キョ)といふ。長くのばして袍の下に出し、引いた儘で練り歩くもの。後世は裾

を別に製して用ひ、下襲を略するやうになつた。こゝに「尻」といふのは卽ち裾である。

【衣紋繕ひ】　エモンツクロひ。衿（エリ）をきちんとたゞして、「衣紋」とは、衿を胸にあはせたところをいふ。

【笏】　シャク。古昔我が國で、束帶のとき右手に持つた木又は象牙などの板。長さ一尺二寸、幅二寸ばかり。位によつて差がある。木の笏は多く一位（イチヰ）又は櫻・柊（ヒ、ラギ）でつくる。もとは事をしるしおいて備忘に供するためのものであつたが、後世は全く儀式用のものとなつた。

笏の本音は「コツ」であるけれど、骨（コツ）と音の通じるのを忌み、又笏はもと長さ一尺であつたところから、假りていふに至つたといふ。

和名抄卷十四に、「笏音骨、俗云レ尺。」

枕草子卷一に、「うしろをまかせて、しやくとりて、御前のかたにむかひたてるを。」

【氣色して】　キショクして。色を正して。面を正して。「氣色」は、心持をそのかほいろにあらはすこと。又、その樣子。

源平盛衰記卷三十六、景高城に入る條に「敵の頭を取るものは、氣色して城戸に出づ。主親を討たせたるものは、涙を流して引退く。」

【衞府督】　エフノカミ。近衞・兵衞・衞門を概稱して衞府といふ。こゝでは右衞門督信頼をいふ。

【御諚】　ゴヂャウ。御仰せに同じ。貴人の命令をいふ敬語。おことば。御命令。尊命。「諚」は「定言」の合字。

源平盛衰記卷四十八、法皇大原入御の條に「一院の御諚とて、大勢にて寄すると申ししかば。」

【沙汰】　サタ。こゝでは、官府の指令・指圖などをいふ語。

御成敗式條に「若及二大破一令レ言二上子細一者、隨二其左右一、可レ有二其沙汰一矣。」

【つい立ちて】　つと立ちあがつて。

「つい」は、「つき」の方便。動詞にかむらせて、この語意

をつよめ、又、ちよつと、そのまゝ、或は突然なる意をあらはす接頭語。

【惡しう參つて候ひけり】　わるい所へまゐつた。參朝したのは惡かつた。參る所ではなかつた。

【庭上】　清涼殿の殿上の間の南なる「殿上の小庭」のことであらう。

【大剛の人】　ダイガウのヒト。すぐれてつよい人。

謠曲、籠太鼓に「彼は大剛の者にてある間、番のことかたく仕り候へ。」

【去んぬる十日】　除目の翌日。

【出仕】　シュッシ。（一）出でて官に仕へること。仕官。（二）つとめに出ること。出勤。こゝは（二）の意。

古今著聞集卷三に「小野宮殿・九條殿、御同車にて出仕せさせ給ひける時。」

【しいだしたることよ】　思ひきつた擧動を評したことば。よくやつたものだな。しでかしたな。

「しいだす」とは、一事を成しとげること。しでかすこと。

太平記卷七に「誠に志の程はたけけれど、唯しいだしたる事もなくて、若干討たれにければ。」

【臆したる體】　オクしたるテイ。おぢおそれたやうす。きおくれしたありさま。

「臆す」とは、きおくれすること。おそれること。おぢけること。

枕草子卷一に「などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みて、思ひみだるゝや。」

【頼光】　ヨリミツ。源滿仲の長子。圓融・華山・一條・三條・後一條の五朝に歷事して、攝津・伊豫・美濃等の國守に歷任し、內藏頭を兼ね、左馬權頭に遷り、內昇殿を聽され、正四位下に至つた。長保・永延の際、東宮大進に拜せられた。人となり英武にして驍勇、射を善くし、將略があつた。部下の士源綱・平貞道・平季武・坂田公時はいづれも勇武を以て知られた。世にこれを頼光の四天王といふ。彼の鬼同丸を斬殺した話や、大江山に酒顚童子を退治した話の如きは、何れもその武勇を稱した傳說である。治安元年（一六八一）卒した。

【頼信】　ヨリノブ。源滿仲の子。頼光の弟。剛果明決、兄

頼光と名を齊しうした。一條・三條・後一條・後朱雀の四朝に仕へ、治部權少輔、左馬權頭、伊勢・陸奥・甲斐等の國守を經て上野介となり、鎭守府將軍に拜し、從四位上に至つた。長元二年平忠常の亂を平げた。源氏が武名を東國に揚げたのはこれを以て始めとする。功を以て丹波守となり、尋いで美濃守に任ぜられた。永承三年（一七〇八）卒した。年八十一。

【臆病】　オクビャウ。わづかなる事におそれること。又、その人。おちけ。きおくれ。

大鏡卷上に「われをくびるとよむなりけりとおぼしけるおくびやうに、やがて絶え入りたまへば。」

【壁に耳、天に口】　「壁に耳あり、天に口あり。」の略。

文德實錄に「天無口、假人口。」

平家物語卷一、清水炎上に「天に口なし、人を以ていはせよと申す。」

などとあるが、つまるところ同意である。

主從心得草に、「あしきこと人は知らぬと思へども、天に口あり、壁に耳あり。」

詩經の小雅、小弁に「君子無易由言。耳屬于垣。」管子に「古者有言、墻有耳、伏寇在側。」

博聞錄に「壁有耳、墻有縫。」

事物類聚に「室本無暗。垣亦有耳。」

【忍び笑】　シノびワラヒ。しのびやかに笑ふこと。そつと笑ふこと。

【殿上の小蔀】　清涼殿の上の戸の方、石灰壇の南壁の上に在る小さい窓をいふ。格子がかけてある。天皇が殿上を覽給ふ爲に設けたものであるといふ。

禁秘抄に「上戸有小蔀、主上覽殿所也。御物忌時下之。」

建武年中行事には、半蔀と書いてある。

【見參板】　ゲザンノイタ。又、鳴板ともいふ。これを踏鳴らして謁見及び退出などを知らせる用とした。（挿圖參看）

建暦御記に「清涼殿弘廂南切妻板、不打釘、是號鳴板、又號見參板。」

【荒海の障子】　アラウミのシャウジ。清涼殿の弘廂の北のはし、南面の御襖。表は荒海のふちに手長（山海經に見えてゐる長臂國）・足長（同長股國）の居るさまをかき、裏は宇治川に網代をかけて氷魚をとらうとする繪をかき、右上方の色紙に「もみぢ葉の波のよせくる宇治川や、あじろの床も錦さらせり。」といふ歌を書いてある。

【萩戸】　ハギノト。夜御殿の北、弘徽殿上御局の西にある。障子に萩を書いてあるからかく名づけた。主上の常の御殿である。荒海障子の西南に當る。

本文「北」とあるはいかが。荒海障子の北、北階の東面なる戸を脇戸といふから、一本に脇戸とあるのが正しいか。鳴板よりは脇戸の邊は見えるが、萩戸は見えまいといふ。

【別當惟方】　藤原惟方。顯頼の第二子、光頼の弟。永治・平治の間、累進して檢非違使別當となり、從三位に進んだ。甥藤原信頼が、その弟信俊の爲に惟方の女を娶つたので親密である。信頼は事を擧げたとき、深く惟方と結託した。既にして信頼は、二條天皇及び後白河上皇を幽し奉るに及び、惟方等に命じて二宮の擧動を窺はせた。而して機務は皆惟方と謀つた。會〻兄光頼がその不義を詰問したので悔悟し、（本文參照）藤原經宗と謀を合はせ、夜に乘じて乘輿を奉じて大内を出で、平清盛の六波羅邸に幸せしめ奉つた。

亂の平いだ後、その母が天皇の乳母であつた關係で親任を蒙り、漸く政事に參與し、藤原經宗と共に稍〻朝權を弄した。時に天皇は、上皇が院政を行はせられるのを見て業み給はず、兩宮の間が頗る不和であつた。惟方は天皇に昵近して上皇に反抗し奉り、「庶事宜しく聖旨を取るべし、上皇に知らしめ給ふべからず。」と申し上げた。上皇はこれを聞しめして大いに怒り給ひ「天皇なほ幼弱なれば、慮此に至らず、これ必ず惟方・經宗等吾が父子を離間するが故なり。」と仰せられて、清盛に勅して二人を捕へさせ、死に處しようとなされたが、藤原忠通の諫によつて中止し給ひ、惟方を長門に、經宗を阿波にお流

しなされた。惟方は薙髪して配所に赴いた。仁治元年赦されて京都に歸つた。歿年未詳。

「檢非違使別當」は檢非違使廳の長官。檢非違使廳はふるく左右衛門府の内にあつたが、寛平七年に左右檢非違使廳を定め、天暦元年から右廳を廢して左廳のみとなされた。その長官を別當といひ、その下に佐・尉・志・火長・看督長・案主長・放免等の職員を置いた。

「檢非違使」は、古昔京中の非違の檢察を掌つた職。祭祀・法會などの場に臨み、或は道路・橋梁を巡視し、又糺彈・追捕・斷罪、聽訟等の事をも掌つた。

【承り定めたる事もなし】　君命を承つた事もなく、又何一つ相談してとりきめた事もない。

【誠やらん…人數にてあなる】　「自分も死罪に行はれる人數のうちに加はつてゐるとやらいふが、ほんたうの事かしら。」といふほどの意。

「誠やらん」は「誠にやあらん」の約。「あなる」は「あるなる」の約。「あなる」の下に「は」を加へ、これを上の「誠にやあらん」につけて文を解すべきである。即ち左の通り。

光頼も死罪に行はるべき人數にてあ(る)なる(は)、誠(に)やあらん。

【傳へ承るごときは】　死罪に行はれたると言ひ傳へられて、わが耳に承つてゐる人たちのごときは。

【當時の有職】　現代に於て、學問もあり、識見もある人々。「有職」(イウショク、又、イウソク)は、ものしりの學者。元來有識と書くべきを、後世誤つて有職と書き、專ら故實典例に通ずることをいふに至つた。

宇津保物語に「父こそ下人なれ、子はいうそくにて。」

徒然草に「いうそくのふるまひ、かへすがへす、感ぜさせ給ひける。」

【然るべき人々】　立派な人々。歴々の人たち。身分・家柄などの高い人々。

【面目】　メンボク。世人に對する名譽。ほまれ。めいぼく。めぼく。

枕草子卷四に「かばかりめんぼくあることなかりき。」

【先日】　この月十四日。「同じき十四日に、別當惟方と(信頼卿が)同車して光保の宿所神樂岡に行き向つて、この首を實檢す。」と、平治物語「信西の首實檢の事」の條に出てゐる。

【車の尻】　車の後方。

「尻」は、あと。うしろ。後方。

枕草子卷九に「男車……たゞの人もしりのすだれあげて。」

【少納言入道】　藤原通憲。入道して圓空と號し、後信西と改めた。實兼の子。高階經敏の養子となつた。鳥羽・崇德・近衛の三朝に歴仕し、正五位下、日向守に任ぜられた。宏才博覽、典故に練達し、兼ねて經學・天文・算道・佛教に通じ、詩歌・管絃にも堪能であつたが、その家が南家の儒流であるために榮達の望がなかつたので、快々として樂しまず、又自ら劍がその首を貫く相あることを知り、遂に意を決して僧とならうとした。しかし日向入道と稱せられるのがいやさに、屢〻鳥羽法皇に請うて少納言に任ぜられ、程なく薙髪した。

その後、妻が白河天皇の乳母であつた關係で、天皇の親任を蒙つた。保元の亂に策を獻じて用ひられた。爾來天下の事與り聞かざるはなく、權勢が日に隆んであつた。二條天皇受禪の後も、政は上皇に出で、通憲の權威は益〻振つた。時に權中納言藤原信頼も亦上皇に親昵せられた。しかし、通憲は信頼と仲が悪しく、信頼の近衛大將たらん事を望むや、上皇を諫めてその不可を陳じ、唐の安祿山の事實二卷を圖してこれを諷した。信頼は聞いてこれを銜み、つひに通憲を除かうと圖つた。平治元年(一八一九)信頼が兵を擧ぐるや、通憲は俄に大和の田原に奔つた。信頼はさりとは知らず、通憲の宅を燒き、多く婢妾を殺した。通憲は田原に赴き、穴を穿つてその内に隱れたが、やがて義朝の將源光泰に捕へられた。信頼は命じてその首を斬り、これを獄門に梟した。

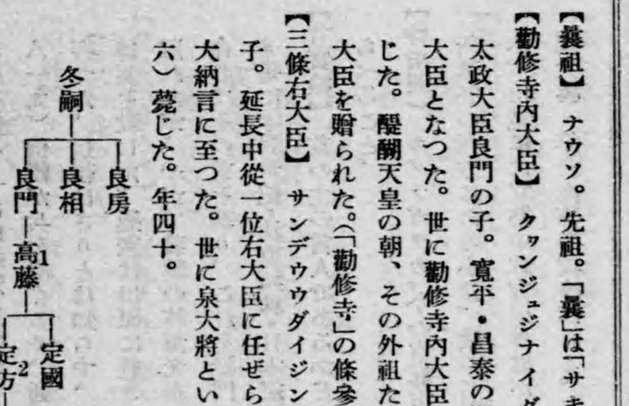
著書に本朝世紀・法曹類林・日本紀註等がある。

【首實檢】　首の主の當人であるかどうかを實際についてしらべること。

【神樂岡】　カグラガヲカ。今の京都市上京區吉田町の東方、新黒谷の西方にある小丘。歌の名所。俗に吉田山といふ。山麓には官幣中社吉田神社があり、附近には京都帝國大學・第三高等學校等がある。

【以ての外】思ひの外なること。意外。案外。想像外。
保元物語、官軍方々手分の條に「以ての外の狼藉。」
【重職】チュウショク。重責を負ふべき職務。おもいやくめ。大役。
山濤の文に「河南尹、京輦重職。」
王獻の文に「中書重職、掌詔命。」
【先蹤】センショウ。既往の事蹟。先例。前例。
保元物語、新院御所各門々固の條に「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬこととなれば。」
【穩便】ヲンビン。事の便宜にしたがつておだやかなこと。おだやかでかどだたぬこと。
保元物語、新院御所各門々固の條に「大勢にてまかりのぼらんこと、上聞穩便ならず。」
【天氣】テンキ。天皇の御氣色。天皇の御意旨。天機。勅諚。
平治物語、信頼・信西不快の條に「君はなほげにもとおぼしめしたる御事もなく、天氣他に異なり。」
【一議】一意見。一言。異論。

【曩祖】ナウソ。先祖。「曩」は「サキ」(先)の意。
【勸修寺內大臣】クヮンジュジナイダイジン。藤原高藤。太政大臣良門の子。寛平・昌泰の間、累進して正二位內大臣となつた。世に勸修寺內大臣といふ。年六十三で薨じた。醍醐天皇の朝、その外祖たる故を以て正一位太政大臣を贈られた。(「勸修寺」の條參看)
【三條右大臣】サンデウウダイジン。藤原定方。高藤の子。延長中從一位右大臣に任ぜられ、右近衛大將を兼ね、大納言に至つた。世に泉大將といふ。延喜六年(一五六六)薨じた。年四十。



【延喜の聖代】醍醐天皇の御代。延喜は同天皇の御代の年號。(一五六一―一五八三)
醍醐天皇は、第六十代の天皇。御諱は敦仁(アツヒト)。世に小野帝又は延喜の帝とも申す。宇多天皇の長子。仁和元年御降誕。寛平九年御即位。藤原時平と菅原道眞とが左右大臣として輔佐し奉つたが、道眞が太宰權帥に左遷された後は、時平が專ら政務に當つた。御治世の間に、三代實錄・延喜格式並に最初の勅撰たる古今集が撰進された。延長八年(一五九〇)崩。壽四十六。
天皇は勵精治を圖りたまひ、百姓をあはれみたまうた、嘗て寒夜に御衣を脱して民の凍餒をしのばせたまうた御仁德は今なほ人口に膾炙してゐる。
「聖代」とは、聖天子の天下を治めたまふ御代。ひじりのみよ。聖世。
陸雲の文に「熙三光聖代。」
保元物語、後白河院御即位の條に「忠あるものを賞しおはしますこと、聖代、聖主の先規にたがはず。」
【君既に十九代】醍醐・朱雀・村上・冷泉・圓融・花山・一條・三條・後一條・後朱雀・後冷泉・後三條・白河・堀河・鳥羽・崇德・近衛・後白河・二條の十九代。
【臣又十一代】前の「三條右大臣」の條參看。
【德政】恩德を下民に施す政治。善政。
左傳の隱公十一年に「既無德政、又無威刑。」
源平盛衰記卷十一、靜憲と入道との問答に「通三の主、明一の君、いかでか御德政に私を存じおはすべきなれども。」
【させる】さしたる。これぞとさしていふべきほどの。
和泉式部集卷上に「われもさぞ思ひやりつる夜もすがら、させるつきなき宿はいかにと」
【英雄】公卿の家格の名。又、清華ともいふ。
攝籙につぐ家柄で、三公及び太政大臣に任ぜられ、又大將とはなれるが、攝政・關白を兼ねることは出來ぬ。はじめは轉法輪・三條・菊亭・德大寺・西園寺(以上閑院家)・花山院・大炊御門(以上花山院家)及び久我(久我家)の三流七家で、之を七清華・英雄三家・清華三家等と號したが、のち醍醐・廣幡の二家を加へて九家となつた。
【有道の臣】イウダウのシン。正しい道を行ふ臣。

「有道」は道義のあること。又、その人。正しい道にかなつてゐること。又、その人。「無道」の對。
書經の武成に「惟有道曾孫周王發、將レ有三大正二于商一。」
禮記の禮器に「昔先王尚二有德一、尊二有道一、任二有能一。」

【讒佞の輩】　ザンネイのトモガラ。佞辯を弄して他を讒言するともがら。人を讒言して長上にへつらふともがら。
論衡に「讒以レ口害レ人、佞以レ事危レ人。」
後漢書の傳變傳に「速行二讒佞放殛之誅一。」

【さしも・こがる】　非難せられること。「さし」は接頭語。

【御邊】　ゴヘン。同輩に用ひる對稱の代名詞。そこもと。そなた。貴殿。貴所。尊公。
平家物語卷一、鵜川合戰の條に「今度御邊をば一方の大將にたのむなり。」

【暴惡の臣】　バウアクのシン。無理非道の事を行ふ臣。ことは藤原信頼をさしていふ。

【累家】　ルキカ・ルキケ。父祖代々つゞいてゐる舊家。歴代の舊家。

【佳名】　カメイ。よい評判。令名。美名。嘉名。

謠曲、八島に「弓矢を取つて私なし。然れども佳名は未だ半ばならず。」

【大貳清盛は云々】　十二月四日、太宰大貳平清盛は、宿願があるとて、子重盛を具して熊野參詣に出かけた。十日の夜、紀州切目の宿で六波羅の早馬が清盛に追ひ附き、九日の夜の三條殿燒討の事を注進した。清盛は重盛の勸に從ひ、直に都へ引き返した。

【熊野參詣】　クマノサンケイ。紀州の熊野三山におまゐりすること。
「熊野三山」とは、和歌山縣（紀伊國）東牟婁（ムロ）郡に鎭座する熊野坐（クマノニマス）神社・熊野速玉（ハヤタマ）神社・熊野夫須美（フスミ）神社即ち那智神社の總稱。古來熊野三所權現・熊野三社・三熊野などと稱せられた。そのうち熊野坐神社と熊野速玉神社とは共に官幣大社で、熊野夫須美神社は官幣中社である。而して熊野坐神社即ち謂はゆる熊野本宮は、家津御子（ケツミコ）神即ち素戔嗚命を奉祀した式内社で、崇神天皇の御代の創始にかゝり、古來屬〻上皇・女院等の御幸があり、大臣以下庶民に至るまで、參詣するものが引きもきらなかつた。大祭は四月十五日。攝社や末社も頗る多い。これらを總稱して九十九王子といふ。中でも、素の祭神の祠が最も名高い。

【切目の宿】　キリベのシュク。今の和歌山縣日高郡切目（キリベ）村。こゝに、熊野參詣九十九所王子の一なる切目王子の社がある。

【家人】　ケニン。武家の臣下をいふ。家の子。家臣。
始めは一族の人を單に家人、又は家子と稱したのが、後には一般にその家に仕へる人を稱するやうになり、家臣・家士をも、しかとなへるに至つた。

【そこばくならじ】　いくらもあるまい。
「そこばく」は、數量を明らかに指し示さないでいふ語。いくらか。いくつか。そくばく。若干。
伊勢物語に「そこばくのさゝげものを木の枝につけて。」

【平家大勢にて攻めんに】　この下に「信頼卿の滅されんこと」などの句が省略されてゐることに注意させたい。

【時刻をやめぐらすべき】　多くの時間がかゝらうか（反語）たちまちにうちほろぼされるであらう。

【安穩】　アンヲン。普通アンノンと發音する。やすくおだやかなこと。無事。無難。安泰。
晉書の顧愷之傳に「行人安穩、布帆無レ恙。」
古今著聞集卷十二に「われその用途を取らんと思はば、汝一人あんをんにあらせてむや。」

【灰燼の地】　クヮイジンのチ。燒けて灰や燼（モエサシ）のちらばつてゐる地。燒野原。
「灰燼」は、はひともえさし。はひぼこり。
平治物語、三條殿發向の條に「烈しき風に吹立てられて、灰燼地に迸りければ。」

【朝家】　テウケ。朝廷。皇室。
保元物語、新院御謀叛思召立の條に「朝家の重臣、攝籙の器量なり。」

【自然の事もあらば】　自然意外の椿事でもあつたら。

【天下の珍事】　天下の一大事。
「珍事」は、「椿事」とも書く。思ひがけなき出來事。變事。一大事。
保元物語、白河殿義朝夜討の條に「先陣を爭ひて既に珍事に及ばんとす。」

【王道】　ワウダウ。仁義をもととして國を治めること。王

者の民を治める正道。「覇道」の對。
書經の洪範に「無レ偏無レ黨、王道蕩々。無レ黨無レ偏、王道平々。」

【相構へて相構へて】必ず〳〵。
「構へて」は、必ず。きつと。決して。
生玉心中に「構へて人の名をいふな。」

【玉體】帝王又は貴人の身體の敬稱。
漢書の王吉傳に「以二奥弱之玉體一、犯二勤勞之煩勞一。」
保元物語、後白河院御卽位の條に「玉體も恙なくおはしませども。」

【思案せらるべし】考慮せられよ。
「思案」とは、考へをめぐらすこと。かんがへ。思考。分別。考慮。
陸士衡の文に「思二按之一愈深。」（「按」は「案」に通じる。）
保元物語、爲朝鬼島渡の條に「最期の矢を手淺く射たらんも無念なりと思案したまふ。」

【主上】シュジャウ。天皇の尊稱。かみ。うへ。至尊。

保元物語、三條殿行幸の條に「主上は御引直衣にて、腰輿に召さる。」
こゝは二條天皇を申す。
「二條天皇」は第七十八代の天皇。御名は守仁。後白河天皇の皇長子。康治二年（一八〇三）御降誕。久壽二年立皇太子。保元三年卽位。永壽元年（一八二五）御位を六條天皇にゆづらせられて、二條の宮に崩御。壽二十三。その大御代を通じて、父上皇が院政をお執りになつてゐた。

【黑戸御所】クロトノゴショ。清涼殿の北、黑戸上御局ともいふ。（挿圖參看）
徒然草に「黑戸は小松帝（光孝）位につかせ給ひて、昔ただ人にておはしましし時、まさなごとせさせ給ひしを忘れ給はで、つねに營ませ給ひける間なり。御かま木にすすけたれば黑戸といふとぞ。」

【上皇】ジャウクワウ。天皇のその位を讓らせられた後の御稱。おりゐのみかど。太上天皇。太上皇。
こゝは後白河上皇を申す
後白河上皇は第七十七代の天皇。御名は雅仁。鳥羽天皇の第四皇子。卽位の翌年保元の亂が起つた。在位二年にして御位を皇子二條天皇に讓つて院政を聽きたまひ、後、入道して法皇とならせられた。その御院政は後鳥羽天皇の御代まで、五朝三十餘年に及んだ。
延應元年（一八五二）崩。壽六十三。

【一本御書所】イッポンノゴショドコロ。內裏の東門建春門を入つて南、侍從所・御書所の次にある。
大內裏圖考證六に「大內抄云一本御書所（在侍從所南）。……異本拾芥抄曰、御書所、建春門內、在二侍從所南一。」
普通行はれてゐる書一本を別に寫して、天皇に進めまつる書を納め置く所であるから、かやうに名づけた。

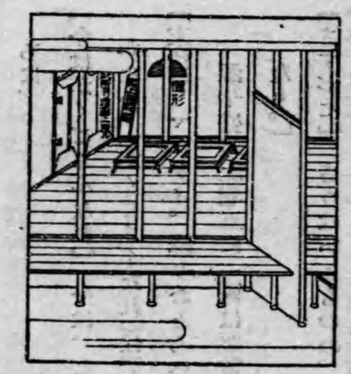
【內侍所】ナイシドコロ。こゝでは神鏡を指す。これを內侍所といふは、その奉安の殿名による。朝廷の溫明殿內に天照大神の御靈代として模造の神鏡を齋き祭つた所がある。そこは畏敬すべき所であるから賢所（恐所・尊所・畏所）といひ、又、內侍がこれを守護するから內侍所とも稱する。今は皇居に別殿を設けて奉安せられ、舊賢所は橿原新宮の神殿となされた。

【溫明殿】ウンメイデン。舊內裏の東側、綾綺殿と相並び、馬道を以て母屋に二分してある。その南部は卽ち內侍所である。

【劍璽】ケンジ。三種の神器の一なる天叢雲劍（草薙劍）と八尺瓊曲玉。

【夜の御殿】ヨルのオトド。又、ヨンのオトド。又、夜御所・塗籠・塗藏・夜大臣・夜御殿とも書く。天皇の御寢所。清涼殿內の御間で、朝餉間の東、二間の西に在る。（挿圖參看）
源氏物語の桐壺の卷に「よるのおとどに入らせたまひても、まどろませたまふことなし。」

【朝餉】アサガレヒ。「朝餉の間」の略。朝夕主上に御食事を奉る間。朝干飯間とも書き、御裝物所ともいふ。清涼殿の西隅に在る。禁祕抄に「朝餉御膳（朝夕夜共）」とあるから、「朝」は朝夕の意でなく、朝廷の朝で「みかど」の意であらう。
枕草子卷一に「あさがれひのまに、うへはおはします。」



【櫛形の穴】古製の櫛の

背の形をした穴。實御座と鬼の間との間にある。女房などが殿上の事をのぞき見るために設けた穴である。(挿圖參看)

徒然草に「閑院殿の櫛形の穴は丸く、ふちもなくてありし。」

【その方樣】そのおかたたち。

「方樣」は、人を敬つて呼ぶ稱。おかた。

【女房】ニョウバウ。(一)禁中・院中などで、一房を賜はつて住む官女の稱。(二)貴人の家に仕へる女の稱。(三)妻の稱。(四)轉じて婦人の稱。こゝは(二)の意。

枕草子卷一に「粥の木ひきかくして、家のごたち、女房などのうかゞふを。」

【かげろひ候ふらん】ちらついてゐるのでございませう。

「かげろふ」は、「影」をはたらかせた語。ちらつくこと。ほのかに見えること。

保元物語、義朝幼少の弟悉く失はるゝ條に「只今の御姿まぼろしにかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。」

【聞きもあへず】聞きもをはらず。まだ聞きもをはらぬうちに。

【今はかくごさんなれ】今は、このやうになつてしまつたかなあ。「かくごさんなれ」は「かくこそあるなれ」の約。

【末代】マツダイ。降りおとろへた時代。末世。

源平盛衰紀卷五に「國は衆散邊土なり、時は濁世末代なり。」

【さすがに】さうはいふものの。さはさりながら。

【正八幡宮】安齋隨筆、武藏鐙卷に「古き軍談の冊子等に、武士の誓詞に正八幡宮も照覽あれといふ。八幡の本地は阿彌陀なりとて八幡大菩薩と號するに依つて、神と佛入り交り紛はしき故、本地を除き去り、正體の八幡大神宮といふ意なるべし。觀音は三十三身に變化すといふに依つて、變化せざるときの正體を正觀音と號するに同じ。」

八幡宮の祭神。栗田寬博士は「神祇拾遺、神書鈔に正八幡神は卽ち彦火々出見尊、比賣神はその妃豐玉姫也とあるが正說なるべし。」といつた。八幡神を應神天皇としたのは宇佐八幡の社家大神比義の假說に出で、宇佐託宣集に

見えてゐる。平安朝の初期までは朝廷ではこれを認められなかつたが、貞觀年中、大安寺の僧行教が、武内宿禰の裔たる故を以て八幡神を石清水に奉遷し、公然祖先武内の仕へ奉つて應神天皇を祭つたのであると言つてから、その說が朝野に傳播するに至つた。しかし、朝廷では、なほ應神天皇とはせられなかつた。

されど、世人は之より八幡神を以て應神天皇となすに至り、莊園や御厨を獻ずるものが漸くその數を加へ、鄕土に八幡宮を勸請奉祀するやうになつた。これに加ふるに、淸和源氏の諸將が弓矢の神として厚くこれを尊崇したので、終に日本全國に八幡宮が多く奉祀されるやうになつた。

【王法】ワウボフ。佛敎に於て佛法に對する語。帝王の執り行はせたまふべき正法。國王の施したまふ政治、法令。

平家物語卷一、殿下乘合の條に「世末になりて、王法の盡きぬる故なり。」

【前代未聞(ミモン)の不思議かな】前代にまだ聞いたことがないほど奇怪千萬なことかな。

【のろ〳〵しげに】忌々しげに。人を呪詛するやうにいまいましくいふ義。

榮華物語、花山の卷に「久しからぬものなりなど、聞きにくく、のろ〳〵しき事ども多かり。」

【人もや聞くらんと】自分が兄光頼にのゝしられてゐることを、はたの人が聞いてゐるであらうとおもつて。

【よにすさまじけにて立たれども】惟方は大いに面目を失つて、實に不興げに立たれたけれども。この句の下に、「人に聞こえて惟方が面白を失することなど頓著なく」といふ程の意を加へ見るがよい。

【かつは悲しくて】(一方には腹だたしく)一方には又悲しくて。

「かつは」は、この事とかの事と二つにわたつたときにいふ語。

萬葉集卷三に「世の中し常かくのみとかつは知れどいたき心はしぬびかねつも」

【宿業】シュクゴフ。前世に犯した惡事。宿世の因業。

保元物語、新院御遷幸の條に「十善の君、萬乘の主、

先世の宿業を遁れ給はず。」

【許由】支那堯時代の高士。史記の伯夷列傳に「堯讓二天下一於許由。許由不レ受、恥レ之逃隱。」

註に「正義曰、皇甫謐高士傳云、許由字武仲、堯聞下致二天下一而讓上焉、乃退而遁二於中嶽潁水之陽、箕山之下一隱。堯又召爲二九州長一。由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於花水濱一。時有二巢父一、牽レ犢欲レ飲レ之。見二由洗一耳問二其故一。對曰、堯欲二召レ我爲二九州長一。惡レ聞二其聲一、是故洗レ耳。巢父曰、子若處二高岸深谷一、人道不レ通、誰能見レ子。子故浮游、欲レ聞二求其名譽一。汚二吾犢口一。牽二犢上流一飲レ之。」

【上の衣】ウヘのキヌ。束帶用の上着。袍。（挿圖參看）

和名抄卷十二に「袍、宇倍乃岐沼。」

宇津保物語の吹上の卷下に「御供の人、例のうへのきぬ、櫻の下襲など着たり。」

【さしも】あれほど。これほど。

平治物語、義朝六波羅に寄せらるゝ事の條に「さしもの兵を、敵に首を取らすな。」

【ゆゝし】いみじくめでたいこと。けなげなこと。をゝしいこと。あつぱれなること。

古今著聞集卷十八に「誠にゆゝしかりける上手なり。」

砂石集卷六上に「器量ゆゝしく見えければ。」

【打萎れてぞ云々】しを〳〵として出てゆかれた。

「しをる」とは、氣がくじけはゞむこと。いきほひがおとろへよわること。

源氏物語の椎本の卷に「泣きしをれておはするも。」

8 挿圖

光頼卿の參内

平治物語圖會所載による。清涼殿上に於ける公卿僉議の場面。右下に儼然として立ち、威容あたりを拂つて見えるのは、いふまでもなく光頼卿、上段に坐してゐるのは、信頼である。諸公卿が惶惑の狀、庭上に充滿ちた兵どもが驚嘆のさま、さながら目睹の思がある。

清涼殿

内裏圖所載の清涼殿の平面圖である。本文を讀ましむるに當つて參考とさせられたい。

一七　人臣の道

1 解題

北畠親房著「神皇正統記」からその一節を採つた。

「神皇正統記」は全六卷。北畠親房が延元四年常陸の關城で筆を執り、興國四年更にこれに加筆したものである。神代から後村上天皇踐祚までの神系・皇統の由來を敍して史實を評し、吉野朝が正統である所以を明らかにし、神器の所在を論じたものである。なほ卷五、「秋霧」の備考を參看せられたい。

2 作者

北畠親房　キタバタケ　チカフサ。

吉野朝の忠臣。伏見天皇から後村上天皇に至る六朝に歷仕し、最も後醍醐天皇に信任せられた。その子顯家陸奥守將軍顯家及び顯信を輔けて東北を經營し、又常陸の小田城・關城に在つて能く大敵に抗し、弧軍奮鬪、朝威の恢復を圖つた。正平九年（一三〇一四）大和の賀名生に薨じた。年六十三。

左に大日本百科辭典から引用して、稍〻詳細な傳記を示さう。

「北畠親房は村上天皇の皇子具平親王の後、權大納言師重の子なり。正應五年に生れ、從五位下より累進して、延慶三年正三位に敍せられ、參議に任じ、同四年十二月權中納言に轉じ、檢非違使別當、左兵衛督を兼ね、正和四年從二位に、同五年正二位に進む。後醍醐天皇御即位の後、その德望を以て深く信任せられ、吉田定房・萬里小路宣房と共に三房と稱せらる。元亨三年權大納言となり、淳和・奬學兩院の別當を兼ぬ。同四年後醍醐天皇の第二皇子世良親王の傅となる。然るに元德二年世良親王薨じ給ふ。親房慟哭の餘り、髮を剃り、官を罷めて宗玄と號す。時に天皇北條氏に快からず、竊に幕府を倒して王政を恢復せんとの志あり。親房亦この議に與りしなるべきも、史闕けて詳ならず。尋いで元弘の變となり、天皇笠置に行幸あり。それより隱岐に遷され給ひしかど、諸國の官軍起りて、元弘三年車駕再び京都に還り給ふ。親房また出仕し、從一位に敍せられ、大臣に准ぜらる。子顯家陸奥守に任ぜられ、義良親王を奉じ、出でて陸奥・出羽を鎭す。これ蓋し親房の策略にして、東方を經營しその根據を固めんとの計畫に外ならず。足利尊氏の叛するや、新田義貞これを擊ちて利あらず、西走せしが、尊氏追擊して京に上る。天皇乃ち比叡山に幸す。親房・顯家共に義良親王を奉じて尊氏の軍に抗す。爾來義貞・正成等と共に奮策これ努む。天皇が吉野に行幸し給ひ、南北兩朝の分立を

見るに至りたるは、親房等の竊に計畫せしところにして、その根據地を伊勢・紀伊の間に據る、吉野朝廷を擁護し、以て足利氏に對抗せしものなり。爾來親房伊勢に在りて、京都恢復の計策を廻らし、顯家の陸奥に在るを促して上京せしむ。顯家、足利氏の軍と戰ひ、遂に和泉の石津浦に戰歿す。親房憂愁の間になほ遠大の策を畫し、伊勢大湊を中心として、力を水軍に致し、伊勢・紀伊の船主をして、北軍を牽制せしめたり。やがて義貞も戰死し、南軍愈〻振はざるにより、自ら出でて東國の將士を糾合し、大いに北軍を惱まさんとし、懐良親王を九州に、宗良親王を東海道に、義良親王を東國に率じ、自ら義良親王に從ひ、子顯信と共にこれに赴かんとす。偶〻途上颶風に遭ひ、船四散し、義良親王は伊勢に着し給ひ、やがて皇太子に立たせられ、親房の船は常陸に着したり。常陸の南軍小田治久・關宗祐・下妻政泰等これを迎へ、小田城に入る。その後小田氏叛きしかば、關・下妻兩氏に依りて關・大實の二城に入る。高師冬來り攻む。親房東奥に赴かんとするも、師冬これを遮圍せるを以て、通じ難し。時に結城宗廣の子親朝、奥州の白河城に在り。親房忠孝の二道を以てこれを諭し、官職を與へてこれを招くも、應ぜず、却つて足利氏に款を納れたり。興國四年十一月兩城遂に陷り、關・下妻等戰死し、親房遁れて海路吉野に還る。親房吉野に在りて、後村上天皇を輔け、或は九州に懐良親王に通じ、或は楠木正行を立たしめ、或は瀬戸内海の海賊を用ひて水軍を編成し、種々の畫を策したるが如し。正平五年足利直義、師直と隙あり、吉野に降順を乞ふ。親房假に和すべきを主張す。爾來專ら兩專の操縱につとめ、京都の恢復を圖る。勅して三后に准じ、鑾車宮入るを聽さる。七年天皇男山に幸し、足利義詮を擊ちて之を走らしめ、親房及び子顯能をして、まづ京都に入りて諸事を決せしむ。九年四月十七日賀名生に歿ず。年六十三。親房和漢の學に精しく、又佛典に通ず。小田在城中職原抄を著はして、官職の由來を解說し、關在城中神皇正統記を草して、皇統の正閏を明らかにし、神器の歸するところを辨じ、以て勤王の軍を鼓舞せり。その史眼の卓拔なる、その文章の謹嚴なる、その評論の公平なる、後世史家の定論たり。その他古今集註等の著あり。元元集・東家祕傳の如きも亦親房の著なりと稱せらる。吉野朝が六十年の久しきを保ち、克く足利氏に抗するを得しは、實に親房の功にして、一世の盡忠苦心は他に比類なしといふべし。

3　編纂の用意

前課（光賴卿の參內）は日本臣道の眞髓的史實であり、本課はこれが理論的敍說である。しかも臣民の典型たる親房卿の血と涙とを以て綴られたる靈筆である。宜しくこれを熟讀翫味せして、日本臣道の眞髓を十二分に了得せしむべきである。

4　要　旨

作者が抱懷する大義名分の大精神から、特に人臣たる者

のその分を自覺すべきことを切言した。即ちその分とは、こゝには忠節を盡くすは、人臣の道であり、分であるのに、その分に對して行賞を希望する如きは、臣下として假初にもあるべからざる義なることを大體の道理の上から、又、歷史の上の善惡方面の側から諄々反復して論じたのである。就中、言語が君子の樞機なることに留意し、世の中の衰ふるといふ事實が、人心の微妙なる動きの裡に釀されつゝあることを警めてゐるのは、最も重要視すべき點である。

5　概　說

本課は、人臣としての本分を論じ、隨つて人臣としての謹愼、行賞の際に於ける態度のあるべきやうをのべたものであるが、次の三節から成つてゐる。

第一節（一二四頁——一二五頁五行）忠君は人臣の當然の道である。故に功名に誇り豪强を望むやうなことはなすべきではない。

第二節（一二五頁六行——一二七頁一行）人臣として愼みの忘れてはならぬこと。殊に功にほこり、行賞について輕々しい言語を發すべからざることをいふ。

第三節（一二七頁二行——一二九頁）論功行賞の際に於ける古人の愼みの例をあげ、今の世を嘆じ、後來を憂へた。

6　取扱上の注意

◎吉野朝時代の戰亂の渦中にあり、しかも正統の天皇に仕へてゐた親房卿が、親しく眺めた當時の武士の態度について、我が國體の基底の上に立つて、人臣としてのあるべきやうを批判したもので、その所論の正當なことはいふまでもなく、その烈々として燃えるところの、正義を顯し邪惡を破るの念をもつて、憚る所なく論斷して行つた忠君の熱情の紙面に溢れてゐる文である。我が文學の一系列に「試論」の文學を立てることが出來るが、その系列中また特に「嚴肅崇高な試論」の一體がある。その中ではこの神皇正統記の如きものが最も顯著なもので、かやうな文學的見地からも見逃してならない作品である。

またこの論斷は我が國體を擁護し、國民精神を振起せしめるもので、國家的國民的文學として有する使命につい

ては今更贅言を要しないであらう。それらの特色を十分理解するやうに導かれたいものである。

【本文には作者の筆癖といふべきか、文法的に一種の特徴が認められる。例へば

　爭ひ申すべきにはあらぬにや。

　あしくなり行くを末世とはいへるにや。

　この世はよく衰へぬるにや。

　賞をも行はしめんがためにや。

これらの「や」は疑問の助詞である。疑問で結んだといふことは、讀者に對して省察を要求したのである。問題を提供して批判を促してゐるのである。隨つて文勢は頗る重く、また作者が特に力を入れてゐるところである。これ等を見逃さぬやう吟味させたい。

　あるべからぬことにこそ。

　賢かりけるをのこにこそ。

これらは、その末に「あれ」などの語のあるべきを省略したのである。この省略も亦文勢を強めるためのものである。

その他

「けむ」「なむ」「らむ」等の推量を用ひて批判を促し、「けり」を用ひて詠嘆とし、

「ぞ」「かし」「こそ」を用ひて語勢を強める等、その烈々たる氣魄が、文の形によく見えてゐる點に注意させねばならぬ。

7　設問

1　この文では「思ふ」ことと「言ふ」こととの關係がどんな風に考へられてゐるか。

2　「堅き氷は霜を履む」の故事を、今日、文章の上でも口語の上でも用ひられた例を知つてゐるか。

3　この作者の物事を洞察する力はどこで窺はれるか。

4　次の語について、今日とどんなに意義が變つてゐるかを言へ。

　有りがたし。諺。賜はる。をかし。

8　釋義

【王土】　ワウド。王者の統治する領土。

詩經の小雅に「溥天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一。」

こゝでは、特に萬世一系の天皇によつて治められてゐる我が國を呼んだのである。

【忠を致し命を捨つ】　忠をその君に致し、一命を捨てて奉公の誠をつくす。

「忠」は、君に事へてその誠をつくすこと。

　書經に「爲レ下克忠。」

　孝經に「君子之事レ上也、進思レ盡レ忠、退思レ補レ過、將二順其美一、匡二救其惡一。」

【必ずこれを身の高名と思ふべからず云々】　忠君のために死を致すは、人臣としての當然の道であるから、これを身の高名であると思ふべきではない。併しその當然のつとめに對して、君の御政としては、後人を勵まし、また高名のあつた者の子孫をあはれみ給ふ思召しから賞を行はれるのである。だから、臣下としては、忠君の行爲に對する行賞を張合うて、不足など言ふべきことではないであらう。

【後の人】　後世の臣民たち。

【その跡】　人臣たる道をつくした人々の子孫。

【きほひ爭ふ】　互にはりあつて、行賞を求めること。

「きほふ」は、互にはりあつて勇み立つこと。互にまけまいとはりあふこと。きそふこと。

　宇津保物語の梅花笠の卷に「風にきほひて、ちゞの物の音まじりてきこゆ。」

【あらぬにや】　この下に「あらむ」などの語を補つて見よ。

【させる功（イサヲ）】　さしたるてがら。これぞとさしていふべきほどの功績。

【過分の望をいたす】　身分不相應の望をかける。わが功に過ぎた賞を希望する。

【自ら危むるはし】　われとわが身を危うするはじめ。

「はし」は、はじめ。端緒。

【前車の轍を見ることは云々】　前を行く車が顚覆したその轍（ワダチ）を見て、後から行く車がそれに鑒み、顚覆をまぬかれるやう注意することは、誠になし難い事であらう。即ち先人の失敗を見て後輩がこれを再びせぬやう

に自らいましめることは、餘程困難なことであると見えると言つたのである。

「前車の轍云々」は、史記の「前車覆、後車戒。」より取つた句である。これと同意の語は左の諸書にも見えてゐる。

晏子春秋に「諺曰、前車覆、後車戒也。」

賈誼の新書五に「前車覆而後車戒。」

文選卷十六に「瞻二前軌之既覆一、知二此路之良難一。」

【有りがたき習】は「あることがむづかしい世のならひ。」といふ意味の「有りがたき」で、「辱い」といふ意味の「有りがたき」ではない。

【中古】歴史上の時代區分の一。上古と近古との間の時代。我國では、孝德天皇の大化の改新から源頼朝が幕府を鎌倉に開くまでをいふ。

【さのみ】そのやうにむやみと。さうばかり。

古今集の俳諧歌に「ねぎごとをさのみ聞きけむやしろこそはてはなげきの森となるらめ」

【豪强】ガウキャウ。たけくつよいこと。剛强。

【理】コトワリ。すぢみち。道理。

堀河百首、雜に「山がつの蘆の八重垣八重むぐらことわりなれや人のわけこぬ」

【鳥羽天皇】トバテンワウ。第七十四代の天皇。御諱は宗仁。堀河天皇の第一皇子。康和五年正月十六日御降誕。嘉承二年七月踐祚。保安四年正月崇德天皇に御讓位。同年二月太上天皇の尊號を受けさせられた。在位十六年。爾後院中で政を聽き給ひ、御落飾（法諱空覺）の後、保元元年（一八一六）七月二日崩御。御壽五十四。

【制符】セイフ。禁制の旨を記した公文書。

侍所沙汰篇に「右博戲之科、禁制惟重、而近年非二啻背二制符一、剩以二田地一爲レ賭之由有レ其聞一、自今以後可レ被二停止一。」

元來「符」とは、唐の制から出たもので、主務省又は監督官廳からその被管の下級官廳へ下す公文書をいふ。我が國では、（一）太政官から八省又は諸國に下す太政官符（略して官符といふ）と、（二）八省又は彈正臺等から諸國へ下す省符と、（三）國から郡などの被管へ下す國符との三種がある。

【宣旨】センジ。勅旨を宣べ傳へること。又、天皇の口勅を宣べ傳へる公文書。內侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人がこれを上卿に告げ、上卿が外記に命じてその旨を記させて宣下するのが常である。

【召具す】召しつれること。つれてゆくこと。

俄歌加留多卷五に「七日まうでの乘物に、供人少々召具して。」

【肩を入るゝ族（ヤカラ）】こゝでは、源平二家への肩をもつものども、卽ち源平二家をひいきする兵士どもをいふ。

一本には「語らはるゝ族」とある。これによれば、「宣旨を受けて兵を召すといふやうな手續によらず、直接に源平二家に誘ひこまれてその部下につくやうな兵士ども」といふ意となる。

【いふかひなきこと】言つても甲斐のないやうな、あさましいこと。

源氏物語の夕顏の卷に「心のうちにいふかひなく悲しきことをおぼすに。」

【諺】コトワザ。こゝは、いひぐさ、慣用語、常套語などの意。

【軍にかけあひ】軍におもむいて、敵とたゝかつて。

「かけあふ」とは、駈けて行つて、敵と出合つてたゝかふこと。對手となつて戰ふこと。

保元物語、白河殿攻落の條に「片桐小八郎大夫に、手取の與次ぞかけあひける。」

【家子】イヘノコ。私家の奴。家僮。

當流小栗判官卷三に「譜代の家の子鬼王を招き。」

【郎從】ラウジュウ。家臣。家來。從者。郎等。郎黨。

保元物語、白河殿攻落の條に「一家の郎從。」

古今著聞集卷十五に「源の有治が郎從なりけり」

【節に死ぬる類（タグヒ）】忠節のために一命を捨てたやうなものども。

「節」はみさを。忠節・節操・節義・貞節などと熟する。

左傳の成公十五年に「前志有レ之、曰、聖達レ節、次守レ節、次失レ節。」

史記の吳世家に「君子曰、能守レ節矣。」

【わが功におきては】　わが功に對しては。

【もしは】「もしくは」に同じ。或は。又は。

源氏物語の明石の巻に「つれ〴〵なる夕ぐれ、もしはものあはれなるあけぼの。」

【足るべからず】「足るべくもあらず」の約。「足りさうにもない」といふ意で、「不足でござる」といふことを強くいつたのである。

【誠にさまで思ふことはあらじなれど】　本心からそれほどまでに思ふことはないであらうけれど。

【これより亂るゝはしともなり】　臣民どものかやうな態度（恩賞をきほひ爭ふ態度）が、やがて世のみだれるいとぐちともなり。

【朝威】　テウヰ。朝廷の御威光。朝廷の御威力。

保元物語、主上三條殿行幸の條に「朝威を輕しめ奉るもの、豈天命に背かざらんや。」

【言語は男子の樞機なり】　言語は男子にとつては最も肝要大切なものである。

易の繫辭上傳に「言行者君子之樞機。樞機之發、榮辱之主也。言行君子所以動天地也、可不慎乎。」註に「樞謂戸樞、機謂弩牙。」

樞は「戸のくるゝ」で、戸の開閉を掌り、機は「弩（イシユミ）のかけがね」で、張弛を掌るもの。轉じて、一般に物事の肝要なところをいふ。かなめ。要點。樞要。

【あからさま】　かりそめ。ついちよつと。

古今著聞集卷五に「あからさまと思ひけるに、その年も空しく暮れにければ。」

【君をないがしろにし】　君をかろんじあなどり奉つて。

「ないがしろ」は、あれどもなきが如くすること。かろんじあなどること。蔑如。侮蔑。輕蔑。

宇津保物語の藏開の巻、中に「たび〳〵文やりなどするは、いとないがしろにはあらぬなめり。」

【あるべからぬことにこそ】　あるべからざることである。あるべきことではない。

「こそ」の下に「あれ」などいふ語が省かれてゐる。

【堅き氷は云々】　厚く堅い氷は突然に出來るものではない。先づ霜のおりる寒さを經て、次第々々に嚴寒に到つて、はじめて氷も厚く堅くなるのである。物事が漸次に進行して遂にその極に達することを譬へて言ふ。

易經の上經に「初六、履霜堅氷至。」

【亂臣賊子】　國を亂す臣、親をそこなふ子。不忠不孝の人をいふ。

孟子の滕文公下に「孔子成春秋、而亂臣賊子懼。」

【末世】　マッセ。末代或は末法の世・末法時などといふ。

もと佛教の語で、釋迦の滅後を三つの法時に分ける。佛滅後五百年は佛弟子たちも生存し、教の正しく行はれる正法時である。

次の千年は、佛弟子は既にないが、未だ佛の教は盛に行はれる象法時である。

次の萬年は佛の教が漸く行はれず。諸惡事の充滿する末法時である。

末法時を末世・末の世・末代などと呼ぶ。

源平盛衰記卷三十九、重衡請法然坊條に「末代末世の重罪のともがらも、唱へば必ず來迎に預るべし。」

【許由・巢父】　キヨイウ・サウフ。共に支那太古の隱逸。

帝堯は許由の賢を慕うて帝位を讓らうとしたが、もとより名利の念が無いので、穢らはしい事を聞いたとて、潁川で耳を洗つた。巢父は牛を牽いてその川に來て水を飲ませようとして、許由が耳を洗つたことを聞いて、汚れたものとしてゐたが、牛にも飲ませなかつたといふ。

【帝堯】　テイゲウ。支那太古の王。五帝の一。名は放勳。

帝嚳の子。陶唐氏と號した。帝嚳に繼いで位に卽き、山西の平陽に都した。人格が極めて高く、世に聖人と稱せられた。

その治世と次の舜の治世とは、天下泰平、萬民鼓腹、世に理想的治世として仰がれてゐる。

【潁川】　エイセン。今の河南省許州府臨潁縣治。

【五臟六腑】　ゴザウロップ。漢方醫の語。五臟とは、心臟・肝臟・肺臟・腎臟・脾臟をいひ、六腑とは、大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱をいふ。

漢書の藝文志に「五臟六腑之病方、凡三家。」

淀鯉出世瀧徳卷上に「おためにならうと存ずる一念、

五臟六腑にしみこんで。」

【能く思ひならはせる故にこそあらめ】よく〳〵思慮をめぐらして、なるほどと合點したからであらう。

「思ひならはす」とは、思ひ得ること。思ひさとること。

伊勢物語に「君によりおもひならひぬ世の中の人はこれをやこひといふらむ」

【百姓】ヒャクセイ。天下の人民。衆民。

詩經、小雅に「群黎百姓、偏爲二爾德一。」

【六十六人にて塞がりなむ】昔の日本は六十六國二島に分たれてゐたから、かやうにいつたのである。

【五百九十四郡】延喜の民部省式には五百九十郡、和名抄には五百九十三郡、拾芥抄には六百三郡とある。

【日本の半ばを志し】日本國の半分をわが領地にしたいと志し。

【みながら望まば】日本全部をわが手に入れたいと望んだならば。

「みながら」は、みなながらの意。殘らず。悉く。悉皆。

古今集、雜上に「むらさきのひともとゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」

【帝王は何處を知らせ給ふべきにか】天子は、いつたい、どこを御統治あそばさるべきであらうか。

「知らす」は、治めたまふこと。領したまふこと。統治したまふこと。

萬葉集卷十八に「神のみことのみよかさね、天の日つぎとしらしくる君のみよ〳〵。」

【謀反】ムホン。君國を危うすることをはかること。君主にそむいて兵を起すこと。

史記の高祖本紀に「人有上上變事一告楚王信謀反上」

源平盛衰記卷十九、文覺頼朝に對面する條に「疾く疾く謀反をおこし、平家を討ちほろぼして父の恥をも雪ぎ、又國の主ともなりたまへ。」

【將門】マサカド。平氏。上總介平高望の孫。鎭守府將軍良將の第三子。嘗て京都に出て攝政藤原忠平に仕へ、檢非違使たらんことを請うたが、顧みられなかつたので、下總に歸つて暴動をおこし、承平五年(一五九五)伯父常陸大掾平國香を攻めてこれを殺し、又、事を以て相怨める平良兼と戰つてこれを破り、近隣の諸國を略した。天慶二年(一五九九)武藏權守興世王と謀つて僞官を下總の猿島に建て、百官を設けて自ら新皇と號した。翌三年朝廷では藤原忠文を征夷大將軍に拜してこれ討たしめたが、その到らざるさきに、國香の子貞盛及び下野の押領使藤原秀郷に攻められて誅に伏した。

【比叡山】ヒエイザン。京都府(山城)と滋賀縣(近江)とに跨る名山。略して叡山ともいふ。山路は概ね古生層より成り、京都市東面の諸山中最も人目を惹く。山上に著名な延曆寺がある。近年京都方面からも坂本方面からも鋼索鐵道が設けられて登山が容易となつた。山上には空中ケーブルカーもある。この山は小禽類の蕃殖地として名高く、天然記念物に指定されてゐる。

【大内】オホウチ。又ダイダイ。大内裏。皇居。禁中。禁闕。

千載集、賀に「二條院の御時、大内におはしまして、はじめて花有二喜色一といへる心をよませたまひける、に。」

【漢の高祖】カンのカウソ。支那前漢の第一世。姓は劉、名は邦、字は季。沛の人。秦末の騷亂に乘じて兵を擧げ、咸陽を陷れて秦を滅し、楚の項羽から漢王に封ぜられたが、次いで項羽と天下を爭ひ、蕭何・張良・韓信の三傑の力によつて項羽を破り、帝位に卽いて國を漢と號した。在位八年。

【蕭何】セウカ。支那前漢開國の功臣。沛の人。高祖起るに及んでこれに從つた。やがて高祖の咸陽に入るや、秦の圖籍を收めて天下の險夷、戶口の多少等を知り、高祖の漢王となるや、丞相に拜せられ、韓信を薦めて大將に拜した。高祖が楚の項羽と戰ふや、常に關中を守つて、その民を安んじ、兵員・糧食を高祖に送り給して後顧の憂なからしめた。天下平定するや、論功第一を以て酇侯に封ぜられた。景帝の二年卒。漢の律令は多くその制定に係るといふ。

【張良】字は子房。父祖以來韓の五世の相であつたが。韓が秦に亡された後、良は私財を投じて客を招き、力士滄海君を得、百二十斤の鐵椎を作り、始皇帝の東遊の時、

博浪沙でこれを狙撃したが、中らなかつた。始皇帝は大いに怒つてその犯人を嚴重に搜索した。そこで、良は姓名を變じて下邳に匿れた。その際、偶然にも黄石公から太公の兵法を傳へ得た。後十年を經て陳勝等が叛するや、良は少年百餘人を集めて楚の假王の景駒に從はうとしたが、途中留の地で沛公に會してこれに屬し、屢〻太公の兵法を以てこれを說いて用ひられた。沛公が項梁と相談して楚の懷王を擁立した時、良は梁に說いて韓の公子成を立てて韓王となし、自らその申徒となり、韓の故城を攻略し、又沛公にも從つて秦の地を略し、遂に咸陽に入つた。漢の元年沛公が漢王となるや、良をして項伯を介して項籍に漢中の地を得んことを請はしめた。項籍がこれを許したので、漢王は直に漢中に都した。良はこれを機會に韓に歸らうとして、王の許を辭した。辭去の際良は王に告げ、王をして蜀の棧道を燒かしめ、東して天下を爭ふ心の無いことを示し、以て項王の意を安んぜしめた。ついで項王が韓王を殺したので、良は間行して再び漢王に歸した。漢王は三秦の地を定めた時、良を封じて成信侯とした。ついで王は良の計によつて黥布・彭越を招き、韓信と呼應して楚軍を破つた。やがて漢王は終に籍を垓下に屠つて天下を統一し、帝位に卽いて功臣を封じた。良は直接戰鬪には與らなかつたが、帝は、籌策を帷幄の中に運らして勝を千里の外に決するは子房が功であると言つて、齊の三萬戶を與へようとした。良は之を辭して、留の地に封ぜられたい旨を請うて許された。帝をして雍齒を封じて人心を安んぜしめ、劉敬の言を用ひて洛陽に都させたのも皆良の獻策である。後、帝が太子を廢して戚夫人の所生たる越王如意に代らしめようとした時、良は呂后をして商山の四隱士の東園公・用里先生・綺里季・夏黃公を聘し、太子に扈從せしめて事無きを得た。ついで良は人事を厭ひ、赤松子に從つて遊ばうとしたが、呂后が切にこれを止めたので果さなかつた。孝帝の八年卒。文成侯と謚した。

【韓信】　カンシン。支那前漢三傑の一。淮陰の人。秦の天下が大いに亂れたとき、策を項羽に獻じたが、用ひられなかつたので、これを去つた。後、蕭何の推薦によつて漢の高祖に仕へ、拜せられて大將軍となつた。爾來屢〻戰功を立て、高祖の天下統一に與つて大いに力があつた。はじめ齊王に封ぜられ、次いで楚王に封ぜられた。後讒に逢つて淮陰侯に貶せられ、やがて呂后の爲に誅せられた。少時家貧しくして漂母に食を惠まれ、又屈辱を忍んで少年の胯下をくぐつた逸話は人口に膾炙してゐる。

【三傑】　サンケツ。三人の豪傑。

漢書の高祖紀に、「子房、蕭何、韓信、三者皆人傑也。」

【萬人に勝れたるを傑といふ】

白虎通に「賢二萬人一曰レ傑。」

淮南子、泰族訓に「智過二百人一者、謂二之豪一、千人者謂二之傑一。」

【籌を帷帳の中にめぐらして云々】　幕の中にゐて作戰計畫をめぐらして勝を遠きあなたの戰場に得ること。

「籌」は、音チウ。はかりごと。籌略。籌謀などと熟する。

「帷帳」(キチャウ)は、とばり。まく。たれぎぬ。

急就篇に「自レ上而下裻、謂二之帳一、帳者張也。在レ旁蔽繞、謂二之帷一、帷者圍也。」

史記の高祖本紀に「夫運二籌帷幄之中一、決二勝千里之外一、吾不レ如二子房一。」

【留】　今の河南省開封府陳留縣治。

【あらゆる功臣云々】　韓信をはじめ、漢の高祖の功臣中、晩節を全うしないで、滅亡したものが甚だ多かつたことをいふ。

【賴朝】　源氏。鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂のとき年十三。父兄に從つて頗る戰功があつた。軍終に敗れて平宗淸に捕へられたが、池ノ禪尼によつて死を免れ、伊豆の蛭ケ島に流された。蟄居實に二十餘年。治承四年（一八四〇）以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略した。やがて石橋山に敗れて安房に逃れ、再び勢を得て間もなく關東を服し、居を鎌倉に構へた。後弟範賴義經をして義仲を滅さしめ、尋いで平氏を一ノ谷・屋島に攻め、遂にこれを長門の壇の浦に滅した。幾もなく弟義經と隙を生じた。乃ちこれを機として諸國に

守護地頭をおき、自ら天下の總追捕使となつた。文治五年（一八四九）奥州に藤原泰衡を討滅して天下を統一した。建久元年入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなくこれを辭して鎌倉に歸つた。同三年征夷大將軍に任ぜられ、正治元年（一八五九）正月薨じた。世に鎌倉殿、又は鎌倉右大將といふ。その墓は鎌倉町法華堂址の背後の丘陵にある。

【文治の頃】ブンヂのコロ。後鳥羽天皇の文治五年（一八四九）

【奥の泰衡】アウのヒデヒラ。みちのく卽ち陸奥の豪族藤原泰衡。

「泰衡は」後鳥羽天皇の御代。陸奥押領使。秀衡の子。文治三年（一八四七）父の卒するや、その後をうけて陸奥押領使となり、兼ねて出羽を管した。當時義經は泰衡のもとにゐた。源頼朝は屢〻泰衡に命じて義經を害しようとした。泰衡は父秀衡の遺命によつてこれを躊躇してゐたが、文治五年遂に意を決して義經を衣川に襲ひ、その首を鎌倉に送つた。頼朝はその命を聽くの遲きを辭として

その功を賞しないのみか、却つて兵を進めて陸奥・出羽を攻めた。泰衡は戰ひ敗れ、その叛將河内次郎に殺された。時に年三十五。

【追討】ツヰタウ。賊徒をおつかけてうつこと。討手をさしむけて征伐すること。

後漢書の光武紀に「郡國追討、到則解散、去復屯結。」

保元物語の三條殿行幸の條に「早く凶徒を追討して、逆鱗を休め奉らば。」

【平重忠】畠山次郎重忠。本姓は平氏。故に平重忠といふ。鎌倉時代初世に於ける幕府の武臣。武藏の人。父は重能。始め源頼朝の擧兵に應ぜず、三浦氏を衣笠城に攻めたが、後頼朝に降り、義經に從つて木曾義仲及び平氏を攻めた。又奥州征伐には頼朝の先鋒となつて功を樹てた。資性忠亮、頼朝に信任せられ、頼家を輔佐すべき遺命を受けた。たま〳〵その子重保は、事を以て平賀朝雅と爭つた。朝雅はこれを妻の母牧の方（北條時政の後妻）に訴へた。これが爲に重忠は遂に重保と共に北條氏の毒手に斃れた。時に年四十二。

【先陣】センヂン。（一）本陣の前にある隊伍。先鋒。さきぞなへ。さきて。（二）さきがけ。先登。

保元物語、義朝白河殿夜討の條に「官軍すでに寄せ候と申しもはてねば、先陣すでに馳せ來る。」

源平盛衰記卷十五、宇治川合戰の條に「唯今宇治川の先陣渡せるは、昔朱雀院の御宇承平に將門を討ち、勸賞に預りし下野國の住人俵藤太秀郷が五代の苗裔、足利太郎俊綱が子に又太郎忠綱、生年十七歳。」

【五十四郡】陸奥國五十四郡。

【長岡の郡】吾妻鑑には葛岡郡とある。

今の宮城縣（陸前國）玉造郡葛岡。

【直實】ナホザネ。熊谷直實。通稱二郎。平貞盛の裔。武藏の熊谷に住し、よつて氏としたといふ。源頼朝の擧兵に際し、大庭景親に從つてこれと石橋山に戰つたが、後頼朝に降つた。壽永三年（一八四四）源義經に從つて宇治川に木曾義仲と戰つた。又、一の谷に平氏と戰ひ、平敦盛の首を斬つた。戰後頼朝にふくむところあり、遂に意を決して京都黑谷の源空のもとに走つてその弟子となり、名を蓮生と改めた。承元二年（一八六八）寂。

【下文】クダシブミ。中古以來、宣旨の樣式を倣うて、院・宮・權門・寺社・幕府の政廳、又は檢非違使廳・雜訴決斷所などから、その被管又は被攝の官衙・土地・人民等に下した公文書。

【剛の者】ガウのモノ。すぐれてつよいもの。剛勇な武士。

保元物語、白河殿夜討に「又なき剛の者。」

【奏聞】ソウモン。天子にきこえあげること。天皇に奏上すること。

太平記卷三十、吉野殿、相公羽林と和睦の條に「聖主萬歳の寶祚を仰せ奉るべしと、頻に奏聞をぞ經られける。」

【いみじき事と】「いかにも感心な事だと」などの意。

「いみじ」は、はなはだし、すぐれたり、いちじるし、などの意。善惡に通じていふ。

中古文には、この語のみ用ひて、下にあるべきはずの「うれし」「かなし」などいふ語を省き、前後の文のいき

ほひによつてこれを知らせる場合が多い。本文も亦その例である。

【いかに心得てほめけむといとをかし】「どういふ考でほめたのであらうかと、本人どもの心のそこをはかりかねて、たいそうをかしい。」との意。本人どもが本氣でほめてゐるのか、それとも口さきばかりほめてゐるのか、そのへんがわからぬので、かやうに書いたものとおもはれる。

【これまでの心こそなからめ云々】重忠や直實ほどの心は無からうとも、それに近い人が今の世に居たなら誠によいのであるが、さうでは無くて、機會があれば君を陷れ奉り、身の榮えを思ふやうな輩ばかりが多くなつた。

【ありし世】前あつたとき。昔。往時。

續後撰集、雜下に「照る月の雲居の影はよそながらありし世をのみこひわたるかな」

【東國の風儀】トウゴクのフウギ　關東地方の淳朴な風儀。

「東國」とは、關東地方。あづま。

宇津保物語の俊蔭の卷に「東國より都に、かたきある人むくいせんとおもひて。」

「風儀」は、ならひ、ならはし、行儀、作法。

【公家(クゲ)のふるき姿もなし】在京の公卿たちも、昔のけだかい氣風を失つてしまつた。

「公家」は、(一)おほやけ。朝廷。朝家。(二)公家衆(武家出仕の人々に對して、直に公家に仕へる人々の稱。)の略。堂上家。

こゝは(二)の意。

保元物語、官軍召集の條に「公家には關白殿下、內大臣實能。」

【いかになりぬる世にかと云々】世の中は、この末どう成りゆくのであらうかと、たいそうなげいてゐた連中もあると聞いてゐたが。

【中一年ばかり】北條氏が滅びてから、足利尊氏の謀叛にいたるまでの約一年間。この間政令は朝廷から出た。所謂建武中興である。

【一統】イットウ。一つにすべ治めること。統一。

史記の始皇本紀に「今海內賴ニ陛下神靈一皆一統爲二郡縣一。」

謠曲、調伏曾我に「ことさら當時一統の、道もすぐなる文武の二つ。」

【天の下擧り集りて】天下の萬民が悉く都に集つて。

「擧(コゾ)る」とは、ことゞく集ること。のこらずそろふこと。

保元物語、新院御所各門々固の條に「音に聞ゆる爲朝見んとて擧りたまふ。」

【都の中はえゞしくこそ侍りけれ】都の中が、光りかゞやいてゐた。都の中に生氣が滿ちてにぎやかであつたことをいふ。

「はえゞし」とは、たいそう映えて見えるさま。まことに光りかゞやいて見えるさま。

榮華物語、松下枝に「例の內わたりにも、墨染にて、はえゞしきこともなし。」

9　挿圖

北畠親房卷頭

先進繪像、玉石雜誌所載のものを寫した。

北畠親房卷頭

七夕同詠ニ七夕契ヒ久和歌

雲のうへに年のあきをかぞふれば契もひさしほしあひの空

七月七日、七夕祭の日、他の人々と同じく「七夕久しきを契る」といふ題でよんだ歌。

一首の意は、「そのむかし牛星と織女星とが、遠い雲居の空で千年の契を結んだその秋を指折り數へて見れば、その契も、もはや隨分と長く久しいことであるだらう。」

一八　俚諺論

1　解題

「大西博士全集」中の俚諺論の一部を採つたものである。この「俚諺論」はもと二篇あつて、（其一）が明治三十年一月の「太陽」に、（其二）が同年二月の「太陽」に載せられたが、後には併せて「大西博士全集」第七卷「論文及歌集」に收められた。本課に採つたところは、（其二）の後半のみで、しかも、そのうち處處が省略されてある。こゝでは即ち俚諺の內容を研究すれば、その國民の歷史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等が知れるといふことを實例を擧げて說いたものである。（原文では、更に廣く俚諺についての問題が取扱はれてゐる。）

「大西博士全集」は大西祝博士の遺稿を、早稻田哲學會員である金子馬治外數氏の編纂したもので、第一卷論理學、第二卷倫理學、第三・四卷西洋哲學史、第五卷良心起源論及論集、第六卷思潮評論、第七卷論文及歌集の七卷にわかれてゐる。明治三十七年十二月、警醒社發行。

2　作者

大西祝　オホニシ　ハジメ。

哲學者。文學博士。元治元年（一八六四）備前國岡山に生れた。操山と號したのは、蓋しその鄉里なる操山（ミサヲ）の名に取つたのである。始め京都同志社に學び、後帝國大學文科大學に入り、哲學を專攻した。卒業後東京專門學校（今の早稻田大學）講師となり、專ら哲學・倫理・論理等を敎授して令名を馳せ、門下に材をなすものが多かつた。

後高等師範學校敎授となつた。三十一年獨逸に留學し、病を獲て歸つた。ついで京都帝國大學敎授に任ぜられ、三十二年七月文學博士の學位を受けた。同年十一月卒した。行年僅に三十六。

氏は實に頭腦の明晰と、學殖の富贍と、人格の高潔とを以て推され、學界の重鎭、論壇の雄將として一世に重んぜられてゐた人である。

3　編纂の用意

古來人口に膾炙してゐる俚諺の內容に關する諸般の知識を與へ、兼ねて各自の反省修養の資たらしめたいとおも

ふ。

4 **要旨**

俚諺は民衆の哲學であり、詩である。しかも所謂哲人・詩人の思索的所產と異なつて、多くは民衆の體驗を基とし、その表現は、又永く廣く一般民庶の口にされ、洗煉されて來たものである。その國民の性情、理想、日常生活上のいろ〳〵の事がらの機微を穿つてゐるものがあるのは全くこれが爲である。又時には古聖賢の語にも劣らぬ眞理と教訓とを含むものがあるのも亦これが爲である。本課は冒頭に於て、その俚諺の內容的價値を提言し、順次實例についてその提言を立證してゐる。その實例によつては、直に一々の俚諺の價値・本質を考察せしめ、延いては、一般に俚諺に對する意識を覺まし、これに對する研究的興味を深めるやうにすべきであり、又文章そのものについては、その論旨を透徹せしめる爲に自在に俚諺を引證しながら、しかも一種の典雅と流暢とを保たしめてゐるところに、學術的論文としての長所を認めさせたいものである。

5 **概說**

第一節（一三〇頁——一三二頁二行）　歷史上の事實・社會制度及び家族制度・宗教思想及び因果思想などを伺ふに足りる俚諺について。

第二節（一三二頁三行——末行）　親子の關係をいつた俚諺について。

第三節（一三三頁一行——一一行）　自利の念を表した俚諺——一般に俚諺に於ける教訓について。

第四節（一三三頁末行——一三四頁八行）　俚諺はよく物事を兩面から見ていふものである。これが俚諺の警句と諷刺とに富む所以である。

第五節（一三四頁九行——）　俚諺研究に關する作者の希望について。

6 **取扱上の注意**

◆藤井乙男博士には「俚諺論」といふ一冊の書があり、又「諺語大辭典」の著もある。しかし、それらは、よほど後に出されたもので、この論文のものされたのは、「解題」にも記したやうに明治三十年であつたことを先づ注意せねばならぬ。勿論、この論も「トレンチの小冊子」(Trench, Proverbs and Their Lesson) から刺激されてものされたものであることは、作者自らの口吻でも知られるが、それにしても、作者が學者として常に我が文化の進展の爲にいろ〳〵の問題を提供して、自ら卓見を示されたことには敬意を表さねばならぬ。

◆俚諺そのものについての外に、尙、この文章から學ばしめることは具體的個々の事がらから、一般的抽象的斷言を導き出すといふ論理の作用についてである。といつても、論理學を授けることではない。つまり、具體的のことに抽象的の眞理の存在することを洞察させたいのである。個々の事實のうちに、一般的の思想の含まれてゐることを發見させたいのである。本文の作者は、その獨得の哲學的頭腦を以て、いかに屢〻、又いかに自由にその抽象作用、歸納作用を試みて、われらの前に示して呉れたことか。さういふ頭の働きがあればこそ、かういふ論文が書けるのである。一言半句の俚諺にも、無限の興趣が働くのは實にその哲學的洞察があるからである。さういふ點に特に着眼させて見たいものである。

7 **設問**

1　こゝに擧げられたより外に各自が知つてゐる諺をあげよ。

イ、武士に關しては、

ロ、家庭に關しては、親子に關しては、

ハ、利害に關して言つたものでは、

ニ、すべて極端な言ひ方によつた例は、

2　次の諺の意義を問ふ。

イ、鬼に鐵棒。

ロ、瓜の蔓に茄子はならぬ。

ハ、腐つても鯛は鯛。

ニ、馬子にも衣裳。

ホ、地獄で佛。

ヘ、虻蜂取らず。等々。

8 **釋義**

【俚諺】　リゲン。普通にいふ「ことわざ」である。「ことわざ」は「言業」の義であるといふ。普通一般に用ひられる比較的短い警句・秀句の類をいふ。俚諺は世界各國到る處に存在し、多くは通俗の訓戒又は俗間の格言として使用せられる。その起源についてラッセル（John Russell）は「もと或人の頓才によつて起り、一般に眞理として認められ、遂に傳播するに至るもの」といひ、ジェローム（Saint Jerome）は「必要の德義を作るために起つたもの」と述べてゐる。現今俚諺の最も多いのはイスパニヤで、その數は三萬を超えるといはれる。

我が國の俚諺の發生は頗る古く、「雉子の頓使（ひたつかひ）」の如きは既に古事記に見え、「一切創に鹽」「重荷に小づけ」の如きは萬葉集に見え、「一升瓶に二升は入らぬ」といふは枕草子に、「死にし子みめよし」「飯粒して鯛釣る」の如きは土佐日記に見えてゐる。平安朝の貴族は俚諺を賤しみ、漢土の俚諺を轉用したが、鎌倉時代より室町時代に及んで大いに俚諺の數を增し、佛經・漢籍中のものを國語に譯出したものも多く出來た。江戸時代に至つて、我が國固有の世事俗談を基とし、種々の俚諺を生じた。明治維新後は更に西洋の俚諺を入れ、又世態に基く新俚諺も多く生じた。（百科大辭典に據る）

【聖賢】　聖人や賢人。「聖人」とは、智德が最もすぐれて萬事に長じた人。萬世の師表とあふぐべき智德のある人。孔子・釋迦・クリスト・ソクラテスは世界の四聖と稱せられてゐる。

「賢人」とは、かしこき人。特に聖人に次ぐ德のある人。顏淵や孟子の如きは支那の賢人と稱せられてゐる。

易經の下經に「大亨、以養二聖賢一。」

左傳の文公二年に「躋二聖賢一明也。」

【大詩人】　すぐれた詩人。

「詩人」とは、詩歌にたくみな人。

宋玉の九辯に「竊慕二詩人之遺風一兮。」

太平記卷一、三位殿御局の條に「關雎は樂しんで淫せず、哀しんで傷らず、詩人採つて后妃の德とす。」

【アリストートル】　Aristotle. 又アリストテレス（Aristoteles）といふ。ギリシャの大哲學者。マケドニヤの小邑スタギラに生れた。父ニコマクスは有名な醫師である。幼時から父の教をうけ、十七歲の時プラトンの門に入り、親しく指導を仰いだ。

後、マケドニヤ王フイリッポに聘せられ、その世子アレキサンドルの師傅となつた。隨つて研究上にも便宜を得、汎く當時の學說を涉獵し、終に廣大なる哲學系統を組織することが出來た。アレキサンドルの東征後、アテネに歸り、徒を集めて學を講じたが、大王の歿後、彼に快からざる徒輩に逐はれてアテネを去り、流浪中エウボイア島のカルチスに客死した。年六十三。

【希臘】　ギリシャ。（Greece）バルカン半島南部の半島國。西はイオニヤ海、東はエーゲ海に面し、沿岸は出入に富んでゐる。もと歐洲最古の文明國で、實に歐洲文明の搖籃地である。

【ソロモンの箴言】　ソロモン王の作にかゝるいましめのことば。舊約全書の中にある。勿論ソロモン王自身の作もあらうが、その多くはイスラエル民間の俚諺であらうといはれてゐる。

「ソロモン」（Solomon）はヘブライ第三代の王。ダヴィッテ王の子。その治世は約西紀前九七〇年にはじまり、九三〇年に至る。非常な智者として知られ、「ソロモンの智慧」といふ語は今なほ傳はつてゐる。王は又諸國と通商して富を集め、文化を輸入し、頗る豪奢な生活を營んだので、「ソロモンの榮華」といふ諺が、今に殘つてゐる。王は又敬神の念に富み、イエルサレムに壯麗な神殿を築いた。南アラビヤのシエバ（Sheba）の女王がその盛名を聞いておとづれて來たことは、有名な話である。

「箴言」（シンゲン）は、訓誡となるべき金言。教訓となるべき格言。

【往古】　ワウコ。いにしへ。むかし。上古。

漢書の武帝紀に「稽二諸往古制一宜二于今一。」

【イスラエル人民】　太古パレスチナ（Palestine）地方に榮えたセム（Shem）族の一派。もとバビロニア地方に住んだが、西紀前二〇〇〇年頃酋長アブラハムに從つてカナ

アン（Canaan）即ちパレスチナの地方に移住した。創世紀の傳說によれば、アブラハムの孫なるイスラエル即ちヤコブに十二人の子があつて、この民族が十二派に分れたといふ。その一派をユダヤといつたので、又この民族をユダヤ人とも呼んだ。

この民族は西紀前一五五〇年一たびエジプトに移住したが、同一三二〇年頃モーセ（Moses）に從つてその地を去り、久しく漂泊した後、カナアンの故鄕に歸つた。ダヴィッテ及びソロモンの相ついで王となつた頃、一時國勢は大いに榮えた。西紀前九五三年、十族はイスラエル王國を建設し、他の二族はユダヤ王國を創めた。後アッシリヤ及びエジプトの侵略を被り、西紀前七二二年、首都サマリヤは陷落した。かくて、イスラエル王國は遂にアッシリヤの屬州となり、二萬餘人の住民は悉くアッシリヤに幽囚の憂目を見るに至つた。

【蒐む】　アツむ。蒐は音シウ。集める義。「蒐集」などと熟する。

【內容】　ナイヨウ。內部に包含せられ又は存在してゐる實質。なかみ。

【氣質】　天賦の性情。氣性。きだて。心だて。

【人情】　ニンジャウ。(一)人類の本能としてそなへてゐる情愛。なさけ。いつくしみ。(二)人心自然の情狀。こゝは(一)の意。

禮記の奔喪に「思慕之心、孝子之心也、人情之實也。」

【學術】　學問と藝術。又、學問。

唐書の杜暹傳に「其爲人少學術。」

【宗教】　シュウケウ。人間が無限者、絕對者、永久なるもの、神的なるものに對して取る態度。かくの如き超絕的實在に歸依し、これを自己のうちに體驗する生活を宗教といふ。而してこの超越者を如何に解釋するかによつて種々の現實的宗教が生ずる。世界におけるおもな宗教は、佛教（信仰者一億五千萬）・基督教（信仰者六億八千二百萬）・ムハメッド教（信仰者二億九百萬）・ユダヤ教（信仰者一千五百萬）・印度教（信仰者二億三千萬）・儒教及び道教（信仰者三億五千萬）・神道（信仰者二千五百萬）等である。（「ワールドオルマナック」に據る。）

【社會制度】　社會の階級又は財產に關する制度。

「社會」は英語（Society）の譯語。形式的には意思による人類の結合をいふ。この定義に從へば、一般社會の外、學生社會・役人社會等、特殊な社會を含めることが出來る。社會學では、普通に人類の協力關係であると說明される。即ち共同生活をなす人類の團體及び組織の謂である。

近思錄に「鄕民爲二社會一、爲立二科條一、旌二別善惡一、使二有レ勸有レ恥。」

【生活の理想】　生活の最高目標。

「理想」は、英語（Ideal）の譯語。意志が努力して到達すべき最高目標をいふ。眞・善・美等は即ち是である。理想は意志に從つて行爲により實現さるべきものであるが、その完全な實現は人間には許されない。但し普通にはより具體的に解せられ、具象的模範の意に用ひられる。

【花は櫻木人は武士】　又「花は櫻に人は武士」ともいふ。花の中では櫻が一ばんめでたく、人の中では武士が一ばん立派だといふ意の諺。

一休の狂歌に「人は武士柱は檜の木魚は鯛小袖は紅梅花はみよしの。」

假名手本忠臣藏に「花は櫻木、人は武士と申せども。」

【武士は食はねど高楊枝】　武士は衣食に窮しても、なほ高尙に構へてゐるといふ意の諺。その氣品の高きをいふ。和訓栞に「『たかやうじ』は鷹楊枝の義。手一束にして水を吹く時に用ふといへり。世諺に『くはねどたかやうじ』といふこれなり。『鷹は飢ゑても穗を啄まず』といふに同じ意なり。」とあるが、意味がよくわからぬ。

普通には高く楊枝をつかふ意に用ひてゐる。

和歌民のかまどに「さむらひ食はずと高楊枝。」

孟子の滕文公上に「無二恆產一而有二恆心一者、惟士爲レ能。」

水滸傳、第一回に「大蟲不レ喫二腐肉一。」

【武士は相見互】　ブシはアヒミタガヒ。武士は相互に同情の念を有せよとの意。

弓勢智勇湊に「あゝこれ氣の短い、いかさま武士は相互、さやうならばとさし出す背中。」

「相見互」とは、互にたすけあふこと。

心中天網島、卷中に「女は相見互の事。」

【大光彩】　ダイクヮウサイ。大きな光彩。大きなひかり。「光彩」は、うるはしい光。きらびやかな光。光輝。

【階級】　カイキフ。地位の高下。しな。くらゐ。等級。舊幕時代、我が國民は士・農・工・商の四つの階級に分れてゐた。そして、士はその階級の最上位を占めてゐた。

【泣く子と地頭には勝たれぬ】　我儘横暴な者には敵しがたいといふ意。往時地頭の歴制我儘と、嬰兒の泣き號ぶこととは、いかにともし難きより起つた諺。

「地頭」は、土地の頭領の意。後、鎌倉幕府の職名となり、莊園を管領して租稅を徵收し、守護の指揮に從ひて軍役をつとめ、兼ねて兇徒・盜賊等を追捕して守護に交付することを掌つたもの。源頼朝平氏を滅すや、平氏の例に倣ひ、文治元年（一八四五）奏請して全國各地この職を置き、一族並に武勇ある家人を選んでこれに補した。承久の亂後、新補地頭の名稱が起り、之に對して以前のものを本領地頭と稱した。なほ數人で分領したところの地頭を總轄するものを總領地頭といひ、土地分領の割合によつて半分地頭・三分一地頭・一分地頭等の名稱が生じた。應仁の亂以後は多くこの所領を失つて、守護の家人となり、幾部時代以後は僅に鄕村の主たるに止つた。

【歴史的敍述】　レキシテキジ・ジュツ。次第を追うて歴史をのべいふこと。こゝは地頭の勢力の強盛であつたことを、歴史にもとづいてのべたてることをいふ。

【察知】　サッチ。おしはかり知ること。推察して知ること。

【女に家なし】　「女に定まる家なし。」「女は三界に家なし。」など、いづれも同工異曲の諺。これは支那の儒教思想や印度の佛教思想から出てゐるらしい。

禮記の儀禮に「婦人有三三從之義一、無二專一之道一。故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從二長子一。故父者子之天也、夫者妻之天也。」

超日明三昧經に「不レ可下以二女身一得ち成二佛道一所以者何。女人有三三事隔、五事礙。三事者、少制二父母一、嫁制レ夫不二自由一。長大難レ子。五礙者、一曰、不レ得レ作二天帝釋一、二不レ得レ作二梵天一、三不レ得レ作二魔天一、四不レ得レ作二轉輪聖王一、五不レ得レ作レ佛。」

【貞女は兩夫に見えず】　貞節のある女は二人の夫をもたぬとの意。

說苑に、「王歇曰、忠臣不レ事二二君一、貞女不レ見二二夫一。」

義經記に「貞女兩夫に見えずといふ語にもはづれ、又世の謗をも思はれけれども、只三人の子を助けんため云々。」

【固有】　コイウ。もとより有ること。

孟子の告子上に「仁義禮智、非二由レ外鑠一我也。我固二有之一也。」

【嫁が姑になる】　今までいぢめられたものが、今度はいぢめる者となる意。

一休和尚の水鏡に「世の中の嫁が姑にはやなれば人も佛になるは程なし。」

狂言、成上りに「まづ嫁が古うなると姑になると申しました。」

尤の雙紙に「よめが姑になるぞ程なき。」

學範の古詩に「人命百年能幾何。從來新婦今爲レ婆。」

【老いては子に從へ】　年取つてからは、子のいふことを聞いて行動せよとの意。

心中二つ腹帶に「これ半兵衛、夜の短いに八つ立、くたびれもつゞいた。くつろいでお寢やれ。はあ、これは勿體ない。若い時の辛勞は買うてもせいと申します。御老體の養ひが大事、まづお休みなされませ、ほう、老いては子に從へとは得手勝手の諺、しからばいつて寢る程に、おつつけまどろみめされい。」

大智度論卷九十九に「一切女身、無所繫屬則受二惡名一。女人之體、幼則從二父母一、少則從レ夫、老則從レ子。」

なほ、前の「女に家なし」の項なる「禮記の儀禮」の文を見よ。

【家族制度】　國家の組織の單位として家族を認め、個人は家の構成分子として認められるに過ぎない制度。この制度を主張する立場を家族主義といふ。我が國は折衷主義で、家は法人でなく、隨つて權利義務の主體となることなく、自然人たる戸主が家の權利義務を代表する。

【さはらぬ神に祟なし】　餘計なる事にみだりに手出しするな。つとめて係累を避けよとの意。こゝの神は、その氣に障れば祟があるなどいふ荒ぶる神をさす。

土佐では「さはらぬ神に罰あたらぬ。」といふ。

夏山雜談に「さはらぬ神に祟なしといふ諺は、鬼神を敬して遠ざくるといへるによりしなるべし。」

説苑に「非所言即勿言、而以避其患、非所爲即勿爲、而以避其危。」

【棄てる神あれば助ける神あり】　一方で捨てられゝば、一方で助けられる意。

「棄てる神あれば拾ふ神あり。」「棄てる神あれば引きあぐる神あり。」など、皆同類の諺である。

【神は正直の頭に宿る】「正直の頭には神宿る。」ともいふ。「誠實なるものは天佑をうける」「神は正直なるものを守護する」などの意。

謠曲、吉野靜に「人は讒し申すとも、神は正直の頭に宿り給ふなれば、靜が舞の袖に暫らくうつりおはしまし、わが君を守り給へ。」

義經記に「神は正直の頭に宿り給ふなれば、かくて空しからんことも恐あり。」

倭姫世紀に「神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本。日月雖照六合、須照正直頭。」

詩經の小雅、小明篇に「好是正直、神之聽之、介爾景福。」

菅原道眞の歌といふに「心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神や守らむ。」

【苦しい時の神だのみ】「せつない時の神たゝき」ともいふ。平素は神を神とも思はぬものも、一朝苦難がその身にふりかゝると、俄に神をたのみだす、こんな連中は世にいくらもある。

續松の葉に「萬屋助六道行、いとしかはいの餘りには、叶はぬ時の神たゝき、そもまあわしが氏神は、どうしたぐわちな神さまぞ。」

傳家寶に「忙時抱佛脚、閑時便拋却。」

中山詩話に「王丞相嗜諧謔、一日論沙門道、因曰、投老欲依僧。客遽對曰、急則抱佛脚。王曰、投老欲依僧是古詩一句。客曰、急則抱佛脚、是俗諺全語。上去投、下去脚、豈不的對也。王大笑。」

西諺に Some are atheists only in fair weather.

【袖ふり合ふも他生の縁】「袖のふりあはせも他生の縁。」

ともいふ。人の途中往來で袖と袖とすれ合ふも、前世からの因縁なりとの義。「他生」は現世でない世、即ち前世をいふ。

吾吟我集に「野べにたつ尾花の袖のふりあはせこれも草かる百姓のえん」

蛤の草紙に「袖の振り合はせも他生の縁と聞くぞかしたとへば鳥類などだにも、縁ある枝に羽をやすむるぞかし。」

狂言、松ゆづり葉に「袖振り合ふも他生の縁といふが、このやうな事であらう。」

竹齋物語に「道ゆきぶりの袖のふりあはせも五百生の機縁とかや。」

【因果思想】　原因結果の理法をいふ。因は原因、果は果報。

法華經の方便品に「如是因、如是緣、如是果、如是報。」

華嚴經に「擧果知因、譬如蓮花、方其吐花、果具蘂中。」

因果經に「欲知過去因者、見其現在果、欲知未來果者、見其現在因。」

【歐洲諸國】　オウシウシヨコク。ヨーロッパ（歐羅巴）の國々。

ヨーロッパは世界六大洲の一。東半球の北東部にあつて、北は北極海、西は大西洋に臨み、南は地中海を隔ててアフリカ洲に對し、東はウラル山脈・カスピヤ海・黑海等でアジヤ洲に接してゐる。面積はアフリカ洲の三分の一に過ぎない。本洲に國を成してゐるのは、イギリス・フランス・イタリヤ・ドイツ・ソヴィエト聯邦・ベルギー・オランダ・デンマルク・スウィス・スウェーデン・ノルウェー・フィンランド・ポーランド・オーストリヤホンガリヤ・チェコスロヴァキヤ・ユーゴスラヴィヤ・ブルガリヤ・ルーマニヤ・ギリシヤ・イスパニヤ・ポルトガル等の三十餘國。

【寧ろ】　彼よりは此をえらぶ意にいふ語。いつそのこと。かへつて。

【親の心子知らず】　親の深い愛情をさとらないで、却つて親を怨む不孝な子が往々にしてあるといふ意。

住吉物語に「親の思ふばかり、子の思はぬぞ心うき。」

義經記卷七に「これは秀衡が知行の所にて候へば、定めてこれも祇候の者にてや候はむ。何か苦しく候はん、知らせさせ候へと申しければ、辨慶聞きて、あはれや

殿、親の子を子知らずとて、人の心は知りがたし。」
大塔宮曦鎧に「御身代りと思ひこむ、親の心を子は知らず、手ふり神ふり踊りぶり。」

【子を知るもの親に如くはなし】 親ほどその子の人となりをよく知つてゐるものはないとの意。
韓非子に「知レ臣莫レ若レ君、知レ子莫レ若レ父。」
管子の大棄篇に「知レ子莫レ若レ父、知レ臣莫レ若レ君。」
左傳の昭公十一年の條に「申無宇曰、擇レ子莫レ如レ父、擇レ臣莫レ如レ君。」
史記の李斯傳に「吾聞之、明君知レ臣、明父知レ子。」
續日本紀卷三十六に「辛卯詔、古人有レ言、知レ子者親止云止奈毛聞食。」

【子ゆゑの闇に迷ふ】 子の愛にひかされて、親の心の道理にくらくなることをいふ諺。
後撰集、雜一、藤原兼輔の歌に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」
心中萬年草卷中に「生死二つの門口を明けて出てゆく先も闇、跡も子ゆゑの闇の夜に迷ふ親こそ悲しけれ。」
毛吹草に「闇に迷ふ獵師は鹿の子ゆゑかな」
大學に「諺有之、曰、人莫レ知レ其子之惡。」

【孝行をしたい時分に親はなし】 父母の奉養を全うしなかつたことをくやむ意をのべた諺。
孔子家語に「樹欲レ靜而風不レ止、子欲レ養而親不レ在。」
韓詩外傳に「與レ椎牛而祭墓、不レ如レ雞豚逮二親存一。」
弘聖全書に「曾子毎レ讀二喪禮一、泣下沾レ襟曰、往而不レ可レ還者親也、子欲レ養而親不レ待、是椎牛而祭、不レ如レ雞豚之逮二親存一也。初吾爲二利祿一不レ及レ釜、尙欣然而喜者、非二以爲レ多也、樂二其逮レ親也。既歿之後、吾嘗南遊二於楚一、得二尊官一焉。猶北面而涕泣者、非レ爲レ賤也、悲レ不レ逮二吾親一也。」

【可愛い子には旅をさせよ】 「いとしき子には旅をさせよ」ともいふ。最愛の子には世の辛酸をなめさせよとの意。
諺草に「人の子たるもの、家にのみ在りて、父母の愛育を恃んで、世間の人情の險惡なることを知らざれば、身を立つること難し。故に愛寵深き子ほど旅に出でして、鋭氣を挫けといふ諺なり。尤も故ある諺なり。」
北條氏直時分諺留に「かはいゝ子には旅させよ。」
犬子集に「いとほしき子も旅させよ秋の鳥。」
東海道名所記に「いとほしき子には旅をさせよといふ事あり、萬事思ひ知ることは旅にまさる事なし。」
漢譯伊蘇普譚に「憐レ兒多與レ棒、憎レ兒多與レ食。」

【子は三界の首枷】 コはサンガイのクビカセ。親が子の愛にひかされて自由に行動し得ぬたとへにいふ諺。
「三界」は、こゝでは過去・現在・未來の三世の意。「首枷」は又クビカシともいふ。一種の刑具。鐵・木などで作り、首にはめて自由を束縛するもの。隨つて、子は過・現・未の三世にわたつて親の煩惱の種となり、その恩愛の絆の脱し難いことをあらはす。
謠曲、水無瀨に「緣子は三界の首枷につながれて、娑婆にもゆかれず、冥土にも歸りかねて、悲しやな。」
謠曲、天鼓に「親子は三界の首枷と聞けば、誠に老公……。」
一の谷嫩軍記に「やい、忰、ぎり〳〵暇の狀を書け。子は三界の首枷とは、今身の上に知られたと。」
幸若舞曲、鎌田に「子は三界の首枷と今こそ思ひ知られたれ。」

【子が思ふよりは親は百倍も思ふ】 親のその子を思ふ念の厚く切なるをいふ。

【親の慈】 オヤのジ。親のいつくしみ。親の慈愛。

【子よりも孫はかはいゝ】 子の愛よりも、孫の愛の更に深いことをいふ。
松風村雨束帶鑑に「子よりも孫がかはいいとほしければ、なほそのひこの孫までも、次第々々にかはいさが、いやまさるぞや。」

【稱(タヽ)ふるものから】 ほめはやすけれども。
「稱ふ」は、十分に褒め言ふこと。稱讃すること。
「ものから」は、ものながら、ものなれど、などの意。
古今集に「こめやとはおもふものから蜩の鳴く夕暮はたちまたれつゝ。」

【子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし】
困窮しては最愛の子をも棄てるけれども、自分の身は棄

て難いとの意。

金葉集、雜下に「大路に子を棄ててはべりけるおしくくみにかきつけて侍りける歌

身にまさるものなかりけり緣子はやらむかたなくかなしけれども」

浮世風呂卷二の下に「子を棄てる藪はあるが、身を棄てる藪はねえとやらで、たつた一人の女の子を人にくれて。」

御前義經記に「十年切で宮仕にやりたまへといさめけるに、折柄ならぬ貧しさ、子をすつる藪はあれど身はすて難くして、手形の印に金子五兩請取り奉公にやりぬ。」

耳談續纂に「膚爛之救、吾先、兒後。」

【主我心】 シュガシン。何事も自己の利害より打算して他人の利害如何を顧みない心、卽ち利己心。Egoistic 又はSelfish などの意。

【言穿つ】 遺憾なく言ひつくすこと。

「穿つ」は、(一)穴をあける。(二)つきぬく。(三)道理をさぐりきはめる。(四)妙所を發く。

こゝは(四)の意。

【自制の念】 他人の力を借らず、自ら抑制する心。われとわが欲望をおさへ制する心。

【損得の念】 自分に取つて、損になるとか、得になるとかいふかんがへ。利害の念。

甲陽軍鑑卷十の下に「この助兵衞は損得の考へよくして。」

【下さるものは夏もお小袖】 貰ふものは夏も小袖。

貪慾にして何ものをも辭せざるたとへ。夏は小袖は不用であるけれど、與へるとあれば、有り難く、「お」の字までつけいたざくとの意。

「小袖」とは、絹布の綿入をいふ。

狂言、秀句大名に「この上下、小袖もぬいでやつて。」

【かたきの家にても口をぬらせ】 利のあることは、いかなる所でも見のがすなとの意。「渴すれども盜泉の水を飲ます」の正反對を巧に言穿つたもの。

說苑の說叢篇に「邑名二勝母一、曾子不レ入、水名二盜泉一、

泉一、孔子不レ飲、醜二其聲一也。」

文選の陸機の猛虎行に「渴不レ飲二盜泉之水一、熱不レ息二惡木之蔭一。」

【ころんでも唯は起きぬ】 吝嗇强慾なるものをそしつていふ諺。

「轉んでも土をつかむ。」「こけても砂。」など、皆同類の諺である。

南總里見八犬傳第、八輯の四に「ころびても只は起きずといふ世の鄙語に似たりける。」

浮世風呂卷二の下に「ころんでもたゞ起きねえとは、おめえの事だの。」

今昔物語卷十二に「受領はたふるゝ所に土をつかめとこそいへと、したり顏にいふ。」

史記の貨殖傳に「魯人性儉嗇、而曹邴氏尤甚。以二鐵冶一起、富至二巨萬一。然家自二父子兄弟一、約束俛有レ拾、仰有レ取。」

【泣く子も目を見る】 「泣く子も目をあけ」ともいふ。幼い子も周圍の形勢を見て後に泣くとの意。辨へのないものも場合を見て氣をきかすことに喩へていふ。

源氏烏帖子折卷四に「ちよつと話さん、聞けといふ。監物少し腹をたて、泣く子も目あけ、話しどころか、そちがやうなひまではなし。重ねて聞かんと逃げてゆく。」

萬屋助六二代帶に「一文やつて下はりませ、外に願ひますものはござりませぬと、手をさし出せば、助右衞門、あゝ、つくな〳〵、泣く子も目あいて泣けといふに、こちには取込んだ事があると、すりのけば。」

【油斷】 ユダン。氣をゆるすこと。不注意。懈怠。

延慶本平家物語卷三、俱利迦羅谷大死の條に「夜軍はよもあらじ、夜あけて後ぞ軍はあらんずらんとて油斷したりけるところに。」

涅槃經卷二十二に「王勅二一臣一、持二油鉢一、經二申中一過、莫レ令二傾覆一。若弃二一滴一、當レ斷二汝命一。」

【油斷大敵】 油斷は何よりも身をそこなふ大敵であるとの意。

駿臺雜話に「世話に油斷大敵といふこと、定めて御覺

あるべし。」

說苑の敬愼篇に「患生二于所一レ忽、禍起二于細微一。」

荀子に「百事之成也、必在レ敬レ之、其敗也、必有レ慢レ之。」

丹書に「敬勝レ怠者吉、怠勝レ敬者滅、義勝レ欲者從、欲勝レ義者凶。」

耳談續纂に「慣熟之斧、乃傷二厥斚一。」

【小を棄てて大に就け】事の大小輕重を比較し、その小なるものをすてて大なるものを取れとの意。

徒然草に「一日のうち、一時のうちにも、數多の事の來らむ中に、少しも益のまさらむことを營みて、その外をばうちすてて大事を急ぐべきなり。いづ方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小を捨て大に就くがごとし。」

孟子の梁惠王上に「以レ小易レ大、彼惡知レ之。」

【長いものには卷かれよ】「長きには卷かれよ」ともいふ。

「權勢あるものには屈服し、そのいふがまゝになれ」「力抗すべからざるものには服從するがよい。」などの意。

老人雜話卷上に「汝家康へ禮にゆきて間をよくすべし。長いものには卷かれよといふことあり。」

神靈矢口渡に「大きなものには呑まれ、長いものには卷かれるといふ諺の通り、たとへいかほど働いても、その威勢にて取りかこめば、行くさき〳〵が皆敵。」

鷹筑波集に「長きものに月はまかれた雲の帶　定侍」

西諺に、Kings have Long arms.

【曲らねば世に立たれず】「曲らねば世が渡られぬ。」ともいふ。あまりに正直では世に立てぬ。それゆゑ、我が身を曲げて世に從ひ、俗にそむかぬやうにせよとの意。

可笑記卷四に「げらふの詞に、曲らねば世が渡られぬといふ、げにも〳〵、番匠の持ちぬるかねといふものは、一まがり曲りてこそ萬の物をまつすぐにする德用はあれ。」

藤原家隆の歌に「しかりとて直き心も世にたゝず、まがる蓬のあさましき世や」

老子に「曲則全。」

世說に「王光祿如二屏風屈曲一、從レ世能蔽二風露一。」

山居四要に「直如レ弦死二道邊一、曲如レ鉤得二封侯一。」

【知らざるを知らずとせよ】孔子の語。知らないことは知らないとせよ、知らないことを知つたやうに見せかけるのは大恥をかくもとだとの意。

論語の爲政篇に「子曰、由、誨二女知一之乎、知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知、是知也。」

【知つて知らざれ】知つてゐても、知らぬふりをして、空とぼけてゐようとの意。

老子に「知不レ知上、不レ知知病。」

【鷹は死しても穗をつまず】義を守る士はたとひ飢渴に迫つても不義の祿を受けぬことにたとへていふ。

假名手本忠臣藏に「鷹は死しても穗をつまずと、譬にもれず入る日や。」

李白の詩に「鳳飢不レ啄レ粟、所食唯琅玕、焉能與二群雞一、刺蹙爭二一飡一。」

耳談續纂に「雖二則乞丐一、猶然恥レ拜。」

【氣概】キガイ。「氣槩」とも書く。氣象のすぐれてゐること。意氣の强いこと。いきばり。いきぢ。氣骨。

宋史の蕭貫傳に「貫、俊邁能レ文、尙二氣槩一。」

「氣慨」とあやまり書かぬやう。

【稱揚】シ゛ウヤウ。ほめたゝへること。ほめそやすこと。

漢書の黃覇傳に「下レ詔稱揚。」

太平記卷二、南都・北嶺行幸の條に「稱揚讃佛のみぎりには、鷲峯の花薰をゆづり、歌唄・頌德の所には、魚山の嵐響を添ふ。」

【教訓】ケウクン。をしへさとすこと。訓戒を加へること。教戒。

左傳の僖公十五年に「知二其人心一、安二其教訓一。」

平家物語卷一、妓王の條に「母とじこれを聞くに、悲しくて、泣く〳〵教訓しけるは。」

【誇張】コチャウ。實際よりもおほげさに言ひたてること。

列子の天瑞篇に「誇二張於世一。」

【躊躇】チウチ゛。進退に心の定まらぬこと。まよつて決行しかねること。ためらふこと。たゆたふこと。

博雅に「躊躇猶豫也。」

漢書の李夫人傳に「裴回以躊躇。」註に「師古曰、躊躇止レ足也。」

楚辭の九辯に「蹇、淹留而躊躇。」註に、「躊躇進退貌。」

【世態】　セタイ。世間の狀態。世のありさま。

戴叔倫の詩に「却是梅花無二世態一。隔レ墻分送一枝春。」

【實相】　ジッサウ。實際のありさま。實情。眞相。

【好きこそ物の上手なれ】　好けば必ず上手の境にいたるとの意。

古歌に「上根と器用と好きの三つの中好きこそ物の上手なりけれ」

菅原傳授手習鑑に「上根と稽古とすきの三つの中、すきこそ物の上手とは、藝術修行教への金言。」

紀逸の雜話抄に「器用を地盤として、すきを第一とすべし。器用さと稽古とすきの三つの內、すきこそ物の上手なりけれ。」

【下手の横ずき】　へたでありながら、却つてこれを好むこと。

俳人氣質に「私も下手の横ずきとやら申しまして、少少會にも出てみましたが。」

諺草に「下手・上手といふ詞は、碁より出でたる字なり。碁に限つていふ詞なれども、今日諸藝に通じていふ。良醫を國手といふが如し。」

【親に似ぬ子は鬼子】　父母に似ないのは人の子ではないとの意。

大藏流狂言、二千石に「昔から親に似ぬ子は鬼子ぢやといふが、似たも道理よな。」

浮世風呂に「親に似ねえ子は鬼子とやらで、とつさまが曲つた事の嫌えな人だのに、あんな子を持ちましたら、世間の人樣に私が面目次第もねえ。」

毛吹草に「親に似ぬ聲は鬼子か時鳥　政昭」

【形は生めど心は生まぬ】　親は肉體を生み與へるけれども、心までは生み與へぬ。隨つて、子の賢愚は父母の賢愚にはよらぬとの意。

初音草咄大全に「形は生めど心は生まぬ習ひ、さる有德なる者の總領、二十ばかりなれど、ぬく太郎の名を取りしが。」

【世相】　セサウ。世の中の實相。世の狀態。世態。

【內祕】　ナイヒ。內部に祕（ヒ）められてゐることども。內面の祕密。

【警戒】　ケイカイ。儆戒ともかく。注意していましめまもること。又、注意を加へていましめまもらしめること。

書經の大禹謨に「吁戒哉、儆二戒無レ虞、罔レ失二法度一。」

【諷刺】　フウシ。「風刺」とも書く。あらはにそれと言はないで、遠まはしにそしること。あてこすること。

詩經の關雎の序に「詩有二六義一焉、一曰レ風、上以風二化下一、下以風二刺上一。」

【訐く】　アバく。人の祕密などをさぐり出して世に言ひあらはすこと。

【巧に罵倒し了す】　タクミにバタウしレウす。うまくのゝしつてしまふこと。

「罵倒」は、はげしくのゝしること。ひどく惡口すること。

「了」は、完了、終了などの「了」で、をはる意。

【價値】　カチ。物事のねうち。あたひ。

【切望】　セツバウ。切に希望すること。たつてのぞむこと。しきりに願ふこと。

9　挿圖

大西博士説

大西博士全集所載の寫眞に據る。

10　參考

本課に採擇した俚諺論の前半は、主として俚諺をその形式の上から論じたものである。今參考の爲その大要を次に紹介しよう。

羅馬の一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、「蜂あり、蜜あり、軀は小さし。」と言へるはすべての俚諺にとはいひがたきも、その最も妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五七又は七五がその自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に從へるもの甚だ多し。「燕子も鳴かずばうたれまい。」「心の鬼が身を責める。」といふが如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」「おもふ念力、岩でもとほす。」「身を捨ててこそ浮む瀨もあれ。」などは七々の

調子をなして、語拍子よし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」といふも、その語に律あり。右と同じき理由により、同語又は同韻を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かはれば品かはる。」「藥九層倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭韻を合はすに於ては、既に詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具象的に言ひ做して感動の强からんことを求め、又これが爲に屢〻誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふには、その數又は量を定めていふを好む。「七たびさがして人を疑へ。」「人の噂も七十五日。」「預り物は半分の主。」などの類は數ふるに遑あらず。數の中にても最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目。」「三年たてば三つになる。」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。」「三人よれば文殊の智慧。」「三人よれば人中。」「朝起きは三文の德。」その他多くあるべし。「用心は聽病にせよ。」「黑犬にくはれて灰汁の和淖に怖れる。」などは、誇張していふによりてその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ言句を用ふるを喜ぶ。この種の諺に、深く味はふべきもの少からず。「急がば廻れ。」「言はぬは言ふに勝る。」「逢ふは別れの始め。」「兄弟は他人の始まり。」「論語讀みの論語知らず。」「人を使ふは使はれる。」など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずるところあるを發見するは、深遠なる智慧の一特徴なり。反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲け。」「聞いて極樂、見て地獄。」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」「長者の萬燈より貧者の一燈。」などはその例なり。

反對を置くのみならず、總じて二種の事柄を相並べて、そを比照するは俚諺の一大特色なり。これ、俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多くこの類にあり。今思ひ出づるに從つて、その三四の例を掲げんか。「馬には乘りて見よ、人には添うて見よ。」「旅は道づれ、世はなさけ。」といふごときは、幾たび唱するもその趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」これ我が國民の以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて開け。」風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ。如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

かく二つの事を並べ出でて相比照せるものよりも、唯比喩を掲げてその意味を匂はせたるものは、その數遙かに多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る。」「目くそ鼻くそを嗤ふ。」といふ如きはこの例なり。又巧に隱喩を用ひたるも多し。例へば「商賣は牛のよだれ。」「得手に帆をあげる。」といふが如し。云々。

（大西博士全集）

一九　四時のあはれ

1　解題

「徒然草」の第十九段を採つた。しかも同書中最も名高い文の一つである。まづ、折節のうつりかはるあはれから筆を起して、春秋の優劣を敍し、それから順次春夏秋冬それ〴〵の見どころを寫して年の暮に及び、最後に年の明けゆく空、大路に松立てたさまをまで描いてゐる。

「徒然草」は兼好法師の作でその題名は開卷第一の「つれ〴〵なるまゝに」の語によつてつけられたものである。

三光院實澄の崑玉集によれば、兼好の歿後今川了俊と兼好の近侍命松丸とが遺稿や反古などを整理して二卷に編次したものであるといふ。

兼好の隨感・見聞・評論等であつて、子細にその所說を檢討すれば、老・佛の厭世的・虛無的思想や、孔孟の儒教思想その他のものを見出すことも出來るが、兼好が特にこれ等の思想を闡明しようとして書いたものではなく、要するに趣味の隨筆であると見做してよいであらう。

主な註釋書は

野　槿（十三卷）林道春
徒然草抄（十二卷）加藤盤齋
徒然草文段抄（八卷）北村季吟
徒然草諸抄大成（二十卷）淺香山井
徒然草大全（十三卷）高田宗賢
徒然草講話（一冊）沼波瓊音
徒然草詳解（一冊）內海月杖

その執筆の時代について藤岡作太郎氏の研究したところのものを次に示しておく。